

魔法科高校の劣等生に転生したら生まれた時から詰んでいた件について(仮)

カボチャ自動販売機

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんで死んだのかも分からない、でも気がついたら『魔法科高校の劣等生』の世界に転生していた元男子高校生。そんな彼はどうやら生まれ時から特大の爆弾を抱えているようで…。

転生した元男子高校生が劣等生の世界で頑張る話。

※（仮）もタイトルの一部です。

新作、『美月転生。くお兄様からは逃げられない』（<http://novel.syosetu.org/54904>）始めました。

目次

家族編

第1話 転生 1

第2話 名前と複雑な家庭 3

第3話 母親 5

第4話 父親 7

第5話 事件 10

USNA編

第6話 シールズ家での生活 13

第7話 初めての原作キャラ 16

戦略級魔法師と約束 19

別れと帰還 22

再会と新居と隠された真実 25

悪魔の義兄妹 28

師匠 31

入学編

そして春は来る 34

初登校 37

結婚 42

車椅子と七草 45

車椅子と約束 48

吉田幹比古の憂鬱 52

九校戦編（上）

九校戦 57

婚約 60

懇親会と深紅の王子

64

九校戦開幕

68

九校戦二日目①

71

司波達也二人目の妹

74

九校戦二日目②

76

九校戦三日目

78

九校戦編〈中〉

九校戦四日目①

82

九校戦四日目②

85

九校戦四日目③

87

九校戦四日目④

91

九校戦四日目⑤

95

九校戦五日目①

100

九校戦五日目②

104

九校戦六日目①

108

九校戦六日目②

111

九校戦編〈新人戦モノリス・コード〉

こうして彼は舞台上がる①

115

九校戦七日目 こうして彼は舞台上がる①〈裏〉

119

こうして彼は舞台上がる②

122

砕かれた希望

127

明かされた真実

131

九校戦八日目① VS 八校

135

九校戦八日目② VS 二校

139

九校戦八日目③ 三校VS 八校

143

魔王との交渉	233
戦いの準備	230
ヨルとヤミ	225
改変の代償	220
幻の古葉と生徒会室	215
会長選挙編	
これからの事と知らなかった事	211
夏の二人旅④	206
夏の二人旅③+その頃、彼は	201
夏の二人旅②	197
夏の二人旅①	193
夏の休日③	190
その頃、彼女は	187
夏の休日②	182
夏の休日①	177
夏休み編	
九校戦十日目	171
九校戦九日目②	168
九校戦九日目①	164
九校戦編〈下〉	
九校戦八日目⑧	160
九校戦八日目⑦	157
九校戦八日目⑥	154
九校戦八日目⑤	151
九校戦八日目④	147

新生徒会長と聖遺物

237

横浜騒乱編

解放される殺意

240

冷たい笑顔

244

心の闇

247

世界が変わった日

251

服部刑部少丞範蔵の苦難

256

決意を胸に

261

その恋の理由

265

十三束鋼は見た

268

変装

271

毒舌メイドと脱走と

276

ハロウインのはじまり

279

桜井穂波

283

白虎

287

幻想眼

291

赤虎と三校

295

脱出

298

メイド雪花と仲直り

303

セツカ・イン・ワンダーランド①

308

セツカ・イン・ワンダーランド②

312

セツカ・イン・ワンダーランド③

316

セツカ・イン・ワンダーランド④

320

セツカ・イン・ワンダーランド⑤

324

メイド・イン・スクール

328

来訪者編

アンジー・シリウスの特別任務

アンジー・シリウスの潜入初日

雪花逃亡中

アンジー・シリウスの敗北

謎の乱入者

アンジー・シリウスのネガティブ思考

アンジー・シリウスとパラサイト

雪花思考中①

雪花思考中②

雪花思考中③

アンジー・シリウスと白い悪夢

アンジー・シリウスとチョコレート

番外編 司波深雪の弟①

番外編 司波深雪の弟②

番外編 司波深雪の弟③

アンジー・シリウスとメイド

雪花暴走中

雪花説教中

四葉真夜の目的と第三の可能性

バレンタインデーとC組

アンジー・シリウスとバレンタインデー

苦味と甘味と妹の思惑

疑惑と幻覚と作戦と

アンジェリーナ・クドウ・シールズと雪花

428

424

420

415

411

406

402

398

393

389

386

383

379

375

372

367

362

358

354

350

346

340

337

332

司波達也の見解	433
幼馴染みと妹と婚約者と雪花①	436
幼馴染みと妹と婚約者と雪花②	440
幼馴染みと妹と婚約者と雪花…と母	443
幼馴染みと妹と婚約者と雪花…と母…と姉	446
番外編 司波深雪の弟④	450
ピクシー①	455
ピクシー②	458
ピクシー③	464
アンジー・シリウスの葛藤	468
アンジー・シリウスVS司波達也	472
芽生える怒り	476
番外編 シールズ家の日常①	479
ピクシー④	483
教えてピクシー①	486
教えてピクシー②	490
作戦開始	496
忠告	500
ピクシーの意思	504
呼び出し	510
悪魔の誘い	514
奥の奥の言葉	517
誘拐	522
アンジェリーナ・クドウ・シールズの恋心	526
婚約と当主	530

崩壊	535
赤子と二人	540
二人の夜とため息	545
精神世界	549
ダブルスノー編	
雪花の中身はお母様？①	554
雪花の中身はお母様？②	559
雪花の中身はお母様？③	563
監視	567
あずさと達也①	571
あずさと達也②	576
押し付け	582
お母様学校へ①	589
お母様学校へ②	594
お母様学校へ③	599
雪花帰還①	605
雪花帰還②	609
雪花帰還③	614
予期せぬ訪問者	620
悪魔との取引	628

家族編

第1話 転生

魔法科高校の劣等生。

魔法というものが存在する世界でシスコンブラコン兄妹が無双するという物語である。いや実際にはもつと暗躍とか、テロとか、暗い感じのシリアスも沢山ある深い物語なのだが、ぼくの場合八巻までを流し読みというかアニメが始まる直前に急いで読んだ感じだから細かいところは読み飛ばしているのだ。だって解説的な多いんだもん。

さて、なぜぼくがそんな適当な感じで読んだラノベについて語っているかと言うと――

「まびばびぶ（マジヤバス）」

――転生したからだ。魔法科高校の劣等生の世界に。

そして今は原作の一卷、つまりこの物語の主人公たる司波 達也とその妹たる司波 深雪が国立魔法大学付属第一高校に入学する約15年前だ。ちなみにぼくはたぶん、生まれたてホヤホヤの0歳児。

目は良く見えないが、耳はしっかり聞こえるようで「魔法の適性」やら「サイオン量」やらのワードが飛び交っているのが分かりここが魔法科高校の劣等生であると思いつたわけだ。

しかしこのテロが横行する世界観が全然ライトじゃないライトノベルでは当然のように人が死ぬわけで。ぼくの知っている原作イベントで言えば『沖縄のやつ』とか『横浜のやつ』とかヤバそうである。他にも何かと事件の多そうなの世界で確実に生き残るためにはどうすればいいのか？ぼくは考えた。結果、司波兄妹と同じ高校に入学すれば良いんじゃないか？という結論に至った。なぜなら原作において第一高校の生徒は誰も死んでいないからである。主人公のパワーが働いているのか知らないがなんやかんやで死人は出ていない第一高

校。原作開始後下手に動き回るより主人公達の近くで知っている未来を過ごす方が安全に決まっている。

とはいえ第一高校に入学できるのはエリートだけという話であつたしそう都合良く入学出来るかは分からない。なんせ一学年たったの二百人だ。一科生ブルームでなくても良いむしろ主人公に近い二科生ウイードで良いのだがそれでも難易度はルナティックだ。物語の主人公たる司波達也が原作一巻で「良く受かったものだ」と自分でも驚いている」的なことを言っていたし。

うーんとりあえずの方針として行けそうなら一校それが無理そうなら他の魔法科高校、それも無理なら諦めて魔法関連には関わらない。そうだなく、前世でなりたかった薬剤師にでもなろう。あつ職業の名前忘れたけど古い本を直す人もいいかも知れない。ぼく本好きだし楽しそうだ。

よし、そうと決まれば寝よう。いやだつて疲れたし眠いし。ぼく0歳児だし。明日から本気出すし。

というわけでおやすみー。

第2話 名前と複雑な家庭

ぼくはなぜ死んだのか。最後に覚えている前世の記憶は学校帰りに本屋で行き立ち読みをしている所だ。恐らくそこで何らかの事故に巻き込まれたのだ。正直本屋で死ぬような事故って何だよと思わないでもないがトラックが突っ込んできたとかそういうやつだろ。えっ読んでた本？ジャンプだよ言わせんな恥ずかしい。あっちなみにぼくは享年16歳、高校一年生でした。

さてぼくが転生して早一年。大体今の自分の状況というものも分かってきた。魔法科高校の劣等生の日本には数字付きナンバーズなるものが存在し名字に数字が入っている奴は魔法師関連の者である可能性が高い。特に一〇十の数字の入った奴の内選ばれた十家が十師族といってヤバく四葉と七草は中でもさらにヤバイ連中で特に四葉は主人公の所属する一族であるため何かとヤバそう。とさつきからヤバイしか言っていないが何が言いたいかというとうれしいことにぼくは数字付きナンバーズではなかったということだ。

古葉コバ 雪花セツカ。

それがぼくの名前である。

そして名前以外にも分かったことがある。それはぼくの家は所謂複雑な家庭というやつらしいということだ。まず父親がいない。この一年一度も見ていないし第一母の指には結婚指輪がないのだ。つまりぼくの母は未婚の母というやつなのだ。複雑な理由がないわけがない。とはいえ母はしっかり育児をしてくれるし家政婦さんもついている。今のところさほど問題はない。えっ？家政婦さんとはなんだって？いや実はうちの母さん中々でかい企業の上役みたいでかなりの高給取りらしく家政婦さんを雇っているのだ。母さんの金持ちっぷりは少し部屋を見渡せばすぐに分かる。魔法科高校の劣等生の舞台は歴史の分岐した近未来なため技術の進歩が目覚ましく機械関連については何も言うことはできないが家具の類いは別だ。前世では触ったこともないような高級っぽい家具が並べられている。そ

れにどうやらこの家は都心の高層マンションの一室らしいのだ。しかもかなり広い。前世のぼくの家の一階より広いのではないだろうか。そんな部屋に住んでいる母さんはいつも忙しそうで家にいる間もこの時代のパソコンらしきものをカタカタやったり電話でどこぞに連絡したりしている。それにスーツ姿を良く見かけるしね。これはもうバリバリ働いているキャリアウーマンという可能性しかないね。そりや家政婦さんを雇うわ。

とまあこの一年で分かったのはこんなところ。自分の名前と母が未婚で高給取りのキャリアウーマンであるということ。いや仕方ないじゃん。ほとんど部屋から出して貰えなかったし。これだけ情報を集めるのも苦労したものだ。なんせあんまり動けないし言葉が話せない。一歳児がまともに話すのはおかしいだろうから言葉を発するのは控えている。まともな子供は何歳から普通に話せるようになるのだろうか。うーんとりあえず3歳までは待つことにしよう。それまでは今まで通り聞き耳をたてての情報収集だ。

よし明日から本気だぞ！

第3話 母親

ぼくが生まれて二年が経った。相変わらずの生活で部屋から出してもらえないし母さんは忙しそうだし特に変わり映えもないが新たに分かったことがある。それもうれしいお知らせだ。

なんとぼくには魔法の適性があるらしい。それにサイオン量も凄いらしいのだ。母は魔法師ではないだろうから父親が魔法師だったのだろう。考えたくはないが数字付きナンバーズかも知れない。それなら結婚していないのも納得だ。原作を読む限り魔法師って血を大切にすらしいし。もしかしたらぼくは隠し子というやつなのかもしれない。だから未だに部屋からだしてもらえないと考えると辻褄が合うし。隠し子：なんか背徳の匂いがするね！



さらに一年が過ぎてぼくは三歳になった。

当初の予定通り徐々に言葉を話して見ようと思う。これによって情報収集能力は格段に上がるだろう。折角この歳から高校生の頭脳があるんだ。今から魔法について勉強して一校入学を目指そう。

やってしまった。

言葉が話せるようになり調子に乗ったぼくは母に尋ねたのだ。「ぼくのお父さんは？」と。すると母さんはぼくの頭を撫でながら「ごめんなさいね、あなたのお父さんには会えないのよ」と言う。ぼくを抱き締め泣き出してしまった。何を焦っていたんだぼくは。母と父の間に何か特殊な事情があるのは分かっていたことだろう。なのに簡単に踏み込んで母親を泣かせて。転生して魔法の適性があると分かかってなんでも思い通りになるような気になっていたんだ。全部上手いくと勝手に思っていた。でも人生って人ってそんな簡単なものじゃないってぼくは知ってたはずなんだ。前世での15年間色々

あつた人生だっただけど人には色々抱えているものがあつて踏み込んでほしくない部分があつてそして突然終わるものなんだつて一番良く分かつてたはずなんだ。だからぼくは一緒に泣いた。母さんの胸の中で一緒に。悲しい時誰かと一緒に泣くとなんとなくスツキリする。ぼくらは家政婦さんがあわあわとしながら部屋に入ってくるまで泣き続けた。何となく親子の絆つてやつが見えた気がした。

それからというものの母さんは前よりもぼくに構うようになった気がする。なんだかスキンシップが激しい。それはまあ親からの愛だと思ふのだが女装させるのは止めて頂きたい。三歳だから女装もくそもないと言われればそれまでではあるがぼくの精神年齢は前世一五歳+今世三歳で十八歳なのだ。多少の気恥ずかしさというか後ろめたさというかそういうのがある。最近家政婦さんまでノリノリなので止めようがない。最初は止めてくれたのに懐柔されやがつて。笑顔でフリフリのメイド服を着せようとしてくるのは本能的にネタのつもりなのだろうか。それなら笑えないので是非止めて頂きたい。

まあ何はともあれもうすぐ四歳。

ぼくは今日から本気だす。

第4話 父親

椎原辰郎しいばらたつろう。それがぼくの父親の名前らしい。なんでも母の勤める会社の開発本部長で学生の時から付き合っていたらしい。もうお前ら結婚しろよというくらいにイチャつき具合で見てるこつちが恥ずかしくなる。いやそのイチャつきのおかげでぼくが生まれたんですけどね。



ぼくの四歳の誕生日。突然現れた父を名乗る男、椎原辰郎。彼はちよつとイケメンめちや良い声のいかにも仕事の出来そうな男で母さんが惚れ込むのも分かるというものだ。父の方も母さんのことを本当に愛しているのが分かる。本当になんで結婚してないんだろう。疑問には思う。だがぼくは同じ過ちは繰り返さないのだ。相手が話してくれるのを待つ受け身の姿勢。基本姿勢はこれでいく。

「雪花には魔法の適性があるらしいな。私のサイオン量も受け継いでいるようだし」

「ええ、けど魔法師にはさせないわ」

「そうだな、魔法関連からはなるべく遠ざけるべきだろう」

衝撃の事実。ぼくの人生の第一目標である第一高校への入学が早くも頓挫しかけている。えっなんで？魔法師になれば将来安定とちやうの？親としては嬉しいのとちやうの？分からない。分からないが何か事情があるのはたしかだ。もしかしてぼくの両親魔法師排斥派ってやつなのか？いやでも魔法適性やらサイオン量やらから父は魔法師であるもしくはあった可能性が高いわけだし。聞くか？いや待てまた同じ過ちを繰り返すのか？けどこのまま放置しておいて良い問題じゃない。次にいつこの父親と会えるか分からないんだ今しかない。聞くなら今だ。

「なんでまほうしになつてはいけないの？ぼくまほうつかつてみたい！」

言った。言つてしまった。子供らしい口調を意識してなるべくそれに何かのつぴきならない事情があると気がついていることを気取られないようにして。それでも核心をつく質問を。

「…雪花が大人になれば分かることさ」

父は言葉を濁した。母は黙つて目を伏せた。ぼくは――

「分かつた。ぼくまほうしにはならない」

「そうか、ならお前は科学者になるといい。父さんも母さんも開発：物を発明するお仕事をしているんだ。お前もきつと良い科学者になれる」

「うん、ぼくかがくしゃになるよ！それでまほうよりすごい物を作るよ！」

「お前ならやれるさ」

――ぼくは魔法師を諦めた。父の顔に母の顔に苦しみが見えたからだ。ぼくという人間を確かに愛してくれていてけどその将来の選択肢の中から魔法師という道を閉ざしてしまう原因が自分達にあることを苦しんでいるのが何となく分かつた。いいさ。別に魔法師になるというのは適当に0歳の時に決めたことだ。こつそり勉強はしてたし魔法を使つてみたいという気持ちはあるけれど両親の制止を振り切つてまでなりたいわけでもない。第一前世では薬剤師になりたかつたのだ。薬剤師も広い範囲では科学者に入るんじゃないかな（震え声）！というわけでぼくは父のすすめもあり科学者になることに決めた。

今世で初めて会う父の愛に触れ人生の新たなる指針が見つかった
そんな四歳の誕生日だった。

第5話 事件

あと二週間足らずで五歳の誕生日だという日。四歳の誕生日以来一月に一回程度のペースでぼくに会いにくるようになった父が慌てた様子で家に来た。

「奴等に勘づかれた！雪花が魔法師の才を持っていることもバレてる！」

そこからは大変だった。長年お世話になっている家政婦さんに連れられて空港へ。そしてあれよあれよという間に気がついたら――

「わーこれが自由の女神かー大きいなー」

―アメリカに来ていた。

へ？？どういうこと？



北アメリカ大陸合衆国。

前世にはなかった国でカナダやらメキシコやらの国を取り込んだアメリカということらしい。大統領もいて日本に大使館もあるとのことだが家の外へ出してもらえず部屋に閉じこもっていたぼくは自分の国にすら疎いのだ。海外のことなんて良く分かっていない。まあニュースやら本やらでへーアメリカってこっちの世界はこんななんだと思っただけ程度だ。科学者になるため勉強漬けの毎日だったが歴史やら地理やらは一切手をつけていなかったのが仇になった形だ。とはいえ科学者になれば必要になると思い英語は勉強していた。まだ日常会話が出来るというレベルではないがゼロよりマシだろう。なんせ今日からぼくはここに住むのだから。

「日本からわざわざご苦勞様。疲れただろう。ゆっくり休みなさい今日からここは君の家になるのだから」

流暢な日本語でそう優しく声をかけてくれたのは弾・シールズ。

物腰の柔らかい優しそうな人で黒い髪に青い瞳のイケメンさんだ。ハーフとかではない純粋なアメリカ人みただけど、祖父が日本を大好きな人だったとかで名前も日本人のように漢字、その影響を受けて日本好きになった弾さんは髪を黒に染めているということらしい。

「ほらアンジー、挨拶しなさい」

「アンジェリーナ・シールズよ、よろしくね」

アンジェリーナ・シールズ。弾さんの娘。ぼくと同い年で長い金髪をツインテールにしている弾さんと同じ青色の瞳を爛々と輝かせている。

「雪花君、大変だとは思いますが私もアンジーも君の家族だ。何か困ったことがあるれば言ってくれていいからね。若い頃君のお父さんにはとてもお世話になったんだ」

「ありがとうございます、弾さん。お父さんのお話を聞きたいところなんです。今日はもう疲れてしまってます」

「そうだね今後のことで何かと不安かも知れないけどゆっくり休んで疲れをとらなくちゃ。部屋は用意してあるから沙世さんに案内してもらってね」

「はい、ありがとうございます」

ぼくはこの時、今後への不安とか枕変わって寝れるかなとかそんなことより驚いていることがあった。

あの家政婦さんの名前って沙世さんだったのか。

約五年目の真実だった。



さて何故ぼくがアメリカに住むことになったのか。それはぼくがマンションの部屋から出してもらえないことと関係があった。どうやら父と母は愛人関係という奴だったらしい。父は母を愛していたが権力に屈し政略結婚をした。けどやっぱり母のことを愛していたので結婚したあとズルズルと恋人関係を続けていた。そしてそれを政略結婚をした妻もその実家も黙認していたのだ。要は父の優秀な遺伝子が欲しかっただけだから子供さえ作ってくれば好きにしていいよということだ。衝撃の事実だが父にはぼく以外にも結婚している妻との間に二人の子供がいるのだ。うん、ぼくが部屋から出してもらえない理由も父と中々会えない事情も分かった。

ではなぜぼくがアメリカにいるのか。それは父の妻の実家がぼくに目をつけたからだ。どうやらぼくの魔法師としての才能はかなりのものらしく妻の実家が寄越せと言ってきているらしいのだ。随分とバイオレンスな家のように実力行使も厭わないという一触即発の状況に追い込まれた。そこで父は信頼する友人の元へぼくを逃がすことにしたのだ。妻の実家の権力ちからの及ばない海外、つまりアメリカへ。

そしてぼくのアメリカでの生活が始まったというわけだ。

どうやら今世の人生、中々にハードらしい。

USNA編

第6話 シールズ家での生活

アメリカに来て早三年。ぼくは八歳になった。父の妻の実家はアメリカであろうとも情報を入手できるほどの情報収集能力を有しているらしくぼくは学校にもいかずに相変わらずの引きこもり生活を強いられていた。とはいえここはマンションの一室ではなくシールズの豪邸。庭も広くジョギングやサッカーのリフティングなどのできたので運動不足になることはなかった。

「セツカはまた勉強？英語をマスターしたあと直ぐにドイツ語をマスターして今度はフランス語かなにか？」

「いやそれはもう終わったよ。今は言語とは別。CADの勉強をしているんだよ」

「あなた化物ね」

「酷い言われようだな！」

たしかに今世のぼくはハイスペックもとい廃スペックであるが化物は酷い。魔法師の才能にとあるライトノベルの図書館系空気ヒロイン並みの記憶力、ほぼ引きこもりなのに並外れた身体能力：あれチートや。いやでも化物と言われる程ではないね！べつ別に開き直ってなんかないんだからね！

「じゃあ言わせてもらおうけどリーナだつて事魔法に関しては大概じゃないか。普段はポンコツだけど」

「ポンコツじゃない！何よ私のどこがポンコツなのよ！」

「例えばほらツイントールの長さが不揃いだよ」

「なっ！ たったまたまよ！」

「…リボンも左右で違うものだよ」

「はう」

「はは、リーナたんポンコツ可愛い」
「笑うなー！」

アンジェリーナ・シールズ。彼女から積極的に声をかけてきてくれたり英語を教わったりして彼女とはすぐに仲良くなれた。アンジェリーナの愛称はアンジーらしいけどリーナの方が可愛いのでそう呼んでいる。

彼女は優しく明るい子で一緒にいると元気を貰える。あとポンコツ可愛い。

「もうーそのうちポンコツなんて言えないようになってやるから！」
「はいはい分かったからとりあえずこっちおいで。ツインテールそのままじゃカツコ悪いだろ」
「うっ…お願い」

しゅしゅと言った具合でぼくの近くに寄ってきてぺたんこ座る。ぼくはリーナのツインテールをほどき長い金髪を櫛で解かし縛り直す。リーナのツインテールは何故かクルクルのクロワッサンみたいになる。美容院で何かしているのかもしれないが普通のツインテールも見てみたい。そしてツンデレなセリフを言ってもらうのだ。おっとぼくのささやかな野望が漏れてしまった。

「はい完成」
「ありがとう」

臍が曲がり気味でも素直にお礼を言うリーナ。良い娘や。

「じゃあ私はレッスンがあるから」
「ああ、がんばってね」

レッスンというのは魔法の修行のことである。どういうことをし

ているのかは知らないがリーナの魔法は8歳にして既にプロのそれを越えているらしいのだ。優秀なコーチがついているのだろう。そういえば来年リーナのために凄い魔法師が来るらしい。なんでも弾さんの義父さんのお兄さんで日本では知らぬものはいないという程の魔法師なんだとか。

ぼくも密かに楽しみにしている。

第7話 初めての原作キャラ

九島烈。つい最近まで世界最強の魔法師の一人と目されていた大物中の大物。おまけに十師族だ。「最高にして最巧」と謳われ『トリック・スター』なる二つ名持ち。正に生ける伝説。

その九島烈がいた。

リーナのためにわざわざアメリカまで来たのだ。なんでも九島家の秘伝らしいのでぼくは見る事ができないのだが弾さん曰く変装の魔法らしい。

いやーそれにしてもまさか弾さんとリーナが十師族のそれも原作キャラの身内だったとは。弾さんは九島の血縁者ではないらしいが、二人とも本名は弾・クドウ・シールズ、アンジェリーナ・クドウ・シールズと言うそう。正直予想外だ。ぼくが原作キャラに関わることで未来が変わる可能性は今より格段に上がってしまう。ただでさえぼくという異分子イレギュラーの影響が怖いってのに。しばらくの間は大人しくしているのが良いかもしれない。九島烈だって暇じゃないだろうしそんなに長い時間滞在することもないだろう。部屋から出さず引きこもり彼との接触を避ける。こちとら引きこもり歴8年のベテランだぜ。余裕だ。



そう思っていた時期がぼくにもありました。

「ふむたしかに素晴らしい才の持ち主だ。あやつらが欲しがるのも分かる」

引きこもり作戦は初日に頓挫した。トントンという可愛らしいノックと共に「セツカ開けてー」というリーナの声が聞こえぼくはあっさりドアを開けた。開けてしまった。

「やあ古葉雪花君。九島烈、ただの老いぼれだよ」

圧倒的存在感。総白髪をきれいに撫でつけスリー・ピーススーツを隙無く着こなした腰なんて曲がっておらず姿勢良く立つその男からは今までに感じたことがないほどのそれを感じた。

かくして凶らずもリーナの謀略により原作キャラ九島烈と対面することになった。とりあえずリーナは後でお仕置きするとしてこの状況どう切り抜けるべきか。

既に彼はこの部屋に入った時点でぼくに何らかの才を見いだしたらしく、一言目には誉め言葉。そこで彼は父さんの妻の実家をあやつらと言った。もしかして父さんの妻の実家と九島家は仲が悪いのか？ いやそう考えれば辻褄が合う。九島家は十師族、簡単な話魔法業界ではトップに近い権力を持っているのだ。ましてやここはアメリカ、ならばいかに父さんの妻の実家といえどそうやすやすと手出しは出来ない。だから父さんは弾さんにぼくを預けた。信頼する友人であり九島である弾さんに。

「そう緊張せんでもいい。ただ顔を見にきただけだ」

なら早く帰ってください。とは言えないので黙って聞く。ぼくは空気を読む子なのだ。

「君は魔工師になりたいのかな？ 見たところCAD関連の資料のようだが」

「少し興味があつたので今はハマっているというだけです。将来は科学者になります」

「ハハハハ！ 君は面白いな。そうかCADは少し興味があつただけか。フッフ、君の将来に期待しているよ」

ひとしきり笑ったあと彼はぼくの肩にぼんと手を置くと部屋を出ていった。

体感とは別として時間にすれば本当に短い対談だった。交わした言葉も一言二言、何か原作に大きな変化が出るようなことはなかったと思う。とりあえず乗り切ったということの良いだろう。

さてリーナにお仕置きしに行くか。

戦略級魔法師と約束

ぼくもリーナも12歳になったある日。

リーナが戦略級魔法師に選ばれた。

ヘビイ・メタル・バースト。それがリーナの戦略級魔法だ。爆心地から全方位にプラズマ放射する系統魔法で重金属を高エネルギープラズマに変化させ、気体化を経てプラズマ化する際の圧力上昇を更に増幅して広範囲にプラズマを散撒くという原理である。

発表されている戦略級魔法師と比べ最強の威力を誇る戦略級魔法らしい。

正直いくら九島とはいえリーナがそんなに凄い奴だったとは思わなかった。いつものポンコツ具合を見るにそう思えるはずもなかった。だってあのツインテール未だにぼくがやってるんだぜ？ううあの小さかったリーナちゃんが今では立派な戦略級魔法師に…という心境である。

さてそのリーナはといえばぼくの膝の上に座っていた。

いやなんか小さい頃からの習慣？なのか落ち込んだり嫌なことがあったり不安なことがあったりするところとして膝の上に座る。リーナもう12歳だし体鍛えてるしちよつと重…いやなんでもないです。

「…セツカはさ私のことどう思う？」

「どうって…妹？」

「違うそういうことじゃなくて…その私が戦略級魔法師だったことについてよ。というか私の方がお姉さんだから」

そういえば誕生日的にリーナの方がお姉さんだったのか。あまりのポンコツ振りに忘れてたよ。でそのポンコツが戦略級魔法師だと。そして悩んでいると。やっぱリーナはポンコツだな。

「戦略級魔法師。凄いよ。なんせ発表されている中では世界に十二人しかない。でもリーナが言いたいのはそういうことじゃない。

きつと…自分が化物だと思ってる」

「だってそうじゃない！魔法一つで何百人という人を殺せる！そんな人間じゃないよ！」

リーナの涙を見たのは初めてだった。今世の人生で涙を見たのは二回目だった。

「人間だよ。リーナは人間だ。アンジェリーナ・クドウ・シールズ。ぼくの友達。ぼくの家族」

そう君は優しく明るくてちよつとポンコツで頑張り屋で照れ屋なアンジェリーナ・クドウ・シールズだ。それはいつだって変わらない。いい。

「人を何百人も殺せるっただけで人は化物にはならないんだ。そうして涙を流して心に傷を負うのは君が人間だからだ。優しくて明るいリーナだからだ」

リーナは嗚咽を漏らしながら涙でグシャグシャになった顔をぼくの胸から顔を上げると言う。

「じゃあセツカはずっと私のそばに居てくれる？」

弱く脆い言葉だった。すぎるような言葉。

「それは無理だよ。でもリーナがどうしても辛くなってもう涙が溢れそうになったときぼくを呼んで。ぼくは必ず君に会いに行くよ。そしてこうして抱き締めてまた優しく明るいリーナに戻ってもらおう」

ぼくの言葉にリーナは笑った。そしてゆっくり自分の右手の小指を出してくる。

「約束だよ」

いつの日かぼくが教えた指切りだ。

「ああ約束だ」

躊躇い無く小指を結んだ。

彼女との別れは一年後。十三歳の時だった。

別れと帰還

13歳になり半年が経とういうある日の夜。ぼくの父、椎原辰郎から電話があった。テレビ電話であるためその表情を知ることが出来るがどうやら悪い話ではなさそうだ。

「雪花、父さんやつと本当にお前の父親になれたよ」

言葉の意味を理解するのに数秒フリーズした。

詳しく話を聞いてみるとなんとぼくの母と正式に結婚をしたらしい。長い恋が実つたのだ。父さんの妻、いや元妻が昨年亡くなったという話を聞いて遅かれ早かれこうなるのではと思つてはいたがこんなに早いとは思わなかった。しかしそうなると思は

「堂々と日本に戻つてくれるぞ、家も用意したんだ一緒に住もう」

約八年振りに日本へと帰還することになりそしてシールズ家とのお別れとなるのだ。



思えば日本のマンションで過ごした期間よりもアメリカのシールズ家で過ごした時間の方が長い。思い出もたくさんある。

弾さんは良い人だった。ぼくを本当の家族のように扱ってくれた。リーナは可愛かった。ちよつとポンコツだけど頑張り屋でぼくの知る限り誰より優しい。

リーナのお母さん、弾さんの妻には数度しか会う機会がなかった。ぼくが引きこもっていたのもあるがそもそもこの人あまり家に帰つてこない。

そして家政婦の沙世さん。実は一番付き合いが長いのはこの人だ。なんせ生まれたときから十三年の付き合いだ。実は特殊な訓練を受

けた魔法師だと知ったのはいつだっただろうか。もうすぐ三十代だろうに未婚なのがぼくのせいだとしたら申し訳ない。さすがに責任取ってお嫁にもらうというには年の差がありすぎるし、なによりぼくにとつて沙世さんは第二のお母さんという感じなのだ。本人にこれを言うのと怒られるのだが。

「セツカ…本当に行っちゃうの?」

涙を一杯に溜めてぼくに抱きつきそう言ってくるリーナ。やめて帰れなくなっちゃう。あと弾さん、沙世さん。こっち見てニヤニヤするの止めて。

「行くよ、両親とはもう何年も会ってないしね。もちろんリーナ達も家族だと思っているけど母さんと父さんと日本で暮らしてみたいんだ。家族三人の暮らしを」

「うう…セツカ」

「あー泣かない泣かない。ぼくももうそう簡単に海外であるアメリカへは来れないだろうけど電話とかメールとかあるんだしさ。それに今生の別れってわけじゃないだろう?」

未だ離れないリーナに苦笑いを漏らしつつ弾さんに別れを告げる。

「長い間お世話になりました。こんなぼくを家族として迎えてくれてとても感謝しています」

「ぼくの方こそありがとう。君がいたこの八年。とても楽しかった。それに君はもうぼくの息子だ。何か困ったことがあったらいつでも頼ってくれ」

「はい弾さん」

さてこの張り付いてる娘どうしよう。とりあえず無理矢理引きはが…ちよつ力強い。あつれー?モヤシつ子なのを気にしてそこそ

こ鍛えてるんだけどなー。いや筋肉全然付かないんだけど握力とか結構あるんだよ？でもおかしいな。びくりともしないや。

「リーナ、もう飛行機の間なんだから行かないと」

「ううでもおー」

あかん、幼児退行しとる。

「リーナ、僕らにはこれがあるだろ」

すつと小指を出した。一年前の約束。リーナもおずおずと小指を出しぼくの小指と自分の小指を結ぶ。

「落ち着いた？」

「……うん、セツカ、私頑張るよ今度会ったとき凄くなってセツカに褒めてもらえるように」

「そっか、じゃあリーナが頑張れるようにぼくからの贈り物だ」

リーナに贈ったのは指輪だ。リーナの小指に合わせてぼくが作った。ぼくらの約束を形作る指輪なのでぼくも同じものを小指にはめる。

「セツカありがとう！大好き！」

「ぼくも大好きだよリーナ」

こうしてぼくは日本へと帰還した。これから始まる家族三人の暮らしに胸を躍らせながら。

沙世さんニヤニヤやめい！

再会と新居と隠された真実

日本に着くと空港には父さんと母さん、そして何人もの黒服が待ち構えていた。

「久しぶりだな雪花。本当に久しぶりだ」

「雪花お帰りなさい」

感動の再開。母さんの涙を見るのは二回目だけど今回は嬉し涙。
「ただいま」

これからはやっと家族で暮らせる。家族で暮らすのは初めてだ。父さんは会いにくるだけで泊まりはしなかったから。

「行こうか私達の家へ」

家族というのはやっぱり暖かい。リーナやっぱり日本へ帰ってきて良かったよ。

だってこんな素敵な二人の笑顔を見るのは初めてだから。



父さん曰く初めは前に住んでいたマンションに住む気だったらしい。とはいえ家族三人と沙世さんと住むには手狭なんじゃないかという話になりこうして家を買ったそう。正直家というより豪邸だ。それもそのはず。父さんはいつの間にか勤めていた企業の株主筆頭になっていたのだ。どうやら元妻から相続したらしいが大企業の株主筆頭なんてどれだけのお金が入ってくるのか想像もつかない。

あつ筆頭株主って社内なら普通は社長だと思われがちだが父は社長ではなく今も開発部長である。開発が肌に合っているから経営は他の専門家に任せているらしい。

「雪花、お前が魔法師になったのは聞いている」

はい、実はぼくちやつかり魔法師になってました。というのも十歳くらいのある日。ぼくの趣味であるCADの開発が上手くいき大興奮。そしたら窓ガラスが割れる物は落ちてくるわの大惨事に。これは原作で司波深雪がちよくちよくやってた魔法の暴走という奴である。このままでは日常生活に支障をきたすかも知れないというわけで魔法の勉強をしリーナと共に少しの間修行もした。で魔法師になったというわけだ。といつてもなんちやつて魔法師ではあるが。だって本業じゃないし。

「そして今、お前の将来は自由だ。魔法師になるというのも選択肢の一つとして考えてくれて構わない」

父さんの話によると父さんと元妻の子供二人が相当に優秀だったらしくぼくを見逃してくれることになったらしい。簡単に言っているが他にも何らかの取引があったのは分かる。だってここまで漕ぎ着けるのに十年かかっているのだ。簡単なわけがない。

思えばぼくは当初主人公と同じ第一高校に入学することを目標としていた。それが頓挫し科学者を目指したわけだが今のぼくはどうだろうか。科学者になるための勉強はしていたが楽しかったのはどんなことだ？そうだ趣味のCAD開発は楽しかった。ソフトの方はあまり手をつけなかったがハードはオリジナルの発想で遊んでみたりとにかくバカでかいものを作ってみたりと色々やって楽しかった。他にも人の役に立つ物を作ろうと車椅子をめっちゃこだわって作ってみたり衝動的に某有名動画サイトに動画を投稿してみたりしたがやっぱり一番はCAD開発だ。

「開発者になるよ、それもCADの」

それに父さんは驚いた顔をしたあと母さんの顔を見て母さんが笑って父さんも笑った。

「実は今までお前には大企業に勤めているとしか教えていなかったが私達はCADの開発しているんだ」

そして父さんは驚きの企業名を挙げる。

『『フォア・リーブス・テクノロジー』でな』

「

この時のぼくの顔はまるで魂が抜けてしまったかのようなだったという。

悪魔の義兄妹

「司波達也だ」

「司波深雪です」

「」

「…私の息子の司波 雪花よ」

目の前にはちよいイケメンの司波 達也。リーナに勝るとも劣らない美少女の司波 深雪。

ついでに言えばこの物語『魔法科高校の劣等生』の主人公とその妹である。



父さんの椎原 辰郎というのはビジネスネームで本名は司波 龍郎。母さんの名前は古葉 小百合で入籍した今の名前は司波 小百合。がつつり原作キャラですね分かります。つまり父さんの元妻の実家というのはあの悪名高き十師族の『四葉家』で元妻というのはあの『四葉 深夜』。そしてこのぼくは主人公『司波達也』とその妹『司波深雪』の腹違いの弟なのである。

オワタ。

「彼は大丈夫なんですか？先程からずっと天井を見てフラフラしています」

「私にも良く分からないの、私と龍郎さんがフォア・リーブス・テクノロジーで働いていることを知ってからずっとこの状態」

あーUSNAに帰りたい。何も知らなかったあの頃に戻りたい。リーナ、あの約束、ぼくにも適用されないかな？今凄く辛いんだが。

「あのそれよりも私気になることが」

「どうした深雪？」

「小百合さんは彼を息子と言いましたがあの私には女の子に見えるのですが」

「これでも一応男よ。昔から女顔ではあったけど成長してこんな美少女になるとは思ってたなかったわ」

「ちやうわー！美少女ちやうわー！」

覚醒した。今まで巧妙に描写せずに避けてきたぼくの容姿がバレてしまったからだ。そうだよ女顔だよ！十歳を越えてからは初見でぼくを男だと分かってくれる人はいなかったよ！でも男の子だよ！

「正直久しぶりに会ったとき性転換でもしたのかと思ってちよつと焦ったわ」

「」

ぼくの顔はきつと言葉では表現できないのっぺりとした無表情になっっていることだろう。

「すまない待たせた、弾に聞いてみたが特にフォア・リーブス・テクノロジーにトラウマは…つと元に戻ったのか」

どうやら弾さんに電話で確認を取っていたらしい父さんが部屋に入ってくる。ちなみにこの場所は司波達也と司波深雪の暮らす家である。十中八九原作にも登場していた家だろう。

「さて雪花も元に戻ったようだし今後の話をしようか」

結局原作通り司波達也と司波深雪とは別に暮らすようだ。それがお互いのためなのだろう。父さんに見れば政略結婚の末に生まれた愛のない妻との子、司波兄妹からしてみれば自分達の母の死後僅

か一年足らずで別の女と結婚した父親というか結婚後ずっと浮気していて同じ年の息子までいる父親だ。お互いに気まずい息の詰まった生活になるのは明白だろう。

「それじゃ私達は仕事があるから今後は別に暮らすとはいえ君たちは血の繋がった兄弟だ。時間になったら沙世さんが迎えにくるからそれまでお互いに絆を深めると良い」

そんなことを言っつて父と母は去っていた。

つまりぼくは一人取り残されたのである。原作において『デーモンライト悪魔の右腕』なんて言われていた自称劣等生の兄と完全無欠の氷の女王な超絶ブラコンの姉のいる家に。

リーナ、ぼくもうダメかしんね！

師匠

日本に帰還してもうすぐ三ヶ月が経つ。

司波兄妹とは直ぐにとはいかなかったが仲良くなれた。正直ぞんざいな扱いを受けるんじゃないかと心配していたので意外だったが司波兄妹としてはぼくの父と母には多少思うところはあつたが生まれてきた半分とはいえ血の繋がった弟にまでその責任を負わせるつもりはないというスタンスらしい。やだカッコいい。

兄の司波達也とはCADのことで思いの他話題があつたので話す機会が多く仲良くなるのは難しくなかった。妹の司波深雪は当初、余所余所しかつたが徐々にそれも無くなっていきとある出来事の後は良好な関係を築けている。今では料理という共通の趣味で意見を交換したりしているくらいだ。えつぼく料理できるよ？前世でかなりやってたし。得意なのはお菓子作りだけだね。リーナには女子力高いとか言われたつけ（遠い目）。けど問題が一つあつて司波深雪のブラコンはぼくにまで発揮されてしまったということだ。しかも弟だからか遠慮がない。過剰なスキンシップ、女装させようとしてくる、お姉ちゃんと呼ばせようとする（結局ぼくが折れて姉さんと呼んでいる）など挙げればキリがない。キャラ崩壊も甚だしい姉さんの暴走をいつも司波達也：兄さんが納めてくれるので助かっている。流石ですお兄様！

さてそんなぼくが今何をしているかと言うとフォア・リーブス・テクノロジーの第三課に來ている。兄さんも一緒だ。えつ姉さん？置いてきたよ？だつているとぼくがひどい目に会うし兄さんも必要以上疲れからね。

「おお御曹司！今日は彼女を連れてきたのか!？」

ヒョロリと背の高い、但しひ弱さは微塵も感じさせない、灰色の作業服に身を包んだ技術者っぽい男が何やら声を挙げると他の職員も「御曹司の彼女!？」「可愛い！さすが御曹司！」などと騒ぎ出す。それ

に頭を抱える兄さん。

彼女って誰の事を言ってるんだ？ここにはぼくと兄さんしか……
ぼくと兄さんしか？

「彼女ってぼくのことか!？」

「しゃべった!」「そりやしやべるだろ」「ボクツ娘だ!」「声も可愛い
!」「さすが御曹司!」などと一言しやべっただけで凄い反応。

「兄さん」

「はあ…分かってる」

兄さんに若干涙目で頼むと一歩前に出て言う。

「彼女じゃないです、俺の弟、司波 雪花ですよ」

第三課が凍った。



「いやー悪い悪い!まさか男だったとは」

そんなふざけた事をいうのは最初に彼女だなんだと騒ぎ始めた灰色の作業服の男、牛山さん。この第三課の主任でなんとトールラスシルバーの片割れ、トールラスだという。原作にも登場してた気がするけどなんか流し読みしてて名前も容姿も知らなかった。

「ミスタートールラス、実は彼に貴方の技術を叩き込んで欲しいんです」
「本気かミスタートールバー?いや他でもない貴方の弟?だ、よしっ俺の技術の全てを叩き込んでやる!」

良い場面で申し訳ないが言わせてくれ。牛山てめえ弟の後にクエスチオンつけやがったな！誰がお前みたいな奴に教えを乞うかよ！

— 一時間後 —

「師匠！どうです!?!」

「ああ完璧だ！しかしすげえな一回見ただけでこなしやがる。しかもこれまで独学だったんだろ?」

「いやー師匠にはまだまだ敵いませんよ」

「よっしゃ！なら今度はこれだ！まずは俺がやって見せてやる!」

「お願いします師匠!」

牛山さんは凄かった。ぼくでは到底真似できないような技術知らなかった技術を沢山持つてる。だからぼくは敬意を称し師匠と呼んでいるのだ。

えっ変わり身が早い?ナンノコトカナー。

ぼくは原作読んでる時から牛山さんはやる奴だと思ってたし? オーラが違うというか? 才能が溢れているというか? 髪形もきまってるし? 見方によつてはイケメンだし?

まあ何が言いたいかというのだ。

人間、勘違いは誰にでもあるよね! っつてこと。

入学編

そして春は来る

四月。それは始まりの季節。というわけで今日は国立魔法大学附属第一高校の入学式である。

「まあ行かないけどね」

えっぼく？自宅の研究室でCAD弄ってますが何か？



「雪花、学校には行かなくていいの？」

「良いんですよ、ぼくにはここでCADを弄ってる方が合ってるんです」

入学式から一週間が経つがぼくは高校には行っていない。第三課に入り浸ってCADを作っている。今はちよつとしたお遊びで武装一体型CAD『聖剣エクスカリバー』を作っていてもうすぐ完成予定。

あつちなみにぼくも一校に入学した。それも一科生だ。ブルームとはいえ不登校を貫くつもりなのであまり意味はないが。当初より不登校になるつもりで入学したので兄さんと姉さんに迷惑をかけないよう古葉 雪花の名前で学校には届けている。入学した理由としては一応だ。後で学校に行きたくなるかもしれないし行く必要が出てくるかもしれないので一応入学しとこうと思ひ入学した。原作に介入した時も便利だし。まあ今のところこれっぽっちも学校に行きたくないが。

「しかし不登校なんてお姫様が良く認めたな」

お姫様というのは姉さんのことである。実にぴったりの呼称だ。

「説得するの大変でしたよ」

遠い目で虚空を見つめれば思い出されるあの屈辱の日。

女装なんて朝飯前。お姉ちゃんと呼ばされ一日着せ替え人形にされ化粧までされ写真を撮られやっと許されたのだ。姉さんはここぞとばかりに暴走した。兄さんは止めなかった。学校に行つた方が良いに決まっているからだ。

「まあでも今更お前が学校に行く必要もないか。なあ二代目トールラス？」

「やめてくださいいよ、自分の力だけでCADを作りたいためにぼくに押し付けたくせに」

そうぼくはつい先日師匠からトールラスを引き継いだ。どうやら師匠にはトールラスシルバーとしてではなく牛山として有名になるという野望があるようだ。

「いやいやお前はもう俺以上の技術を持つてるよ、まさか一年で抜かれるとは思っていなかったがさすがは御曹司の弟と言ったところか」
「アレと一緒にしないでくださいいよ」

あんなチート野郎と一緒にされちゃ困る。ぼくも大概だけどまだあそこまでじゃないんだから。

「誰がアレだ」

「ギクツ」

口から効果音が出るといふ稀有な体験をした。

しかしそれも無理のないことだろう。だっていつの間にか兄さんが後ろに立っていったんだからね！

ちよっ痛い痛い！両手で頭潰すのやめい！

「雪花、深雪からの伝言だ。

『ただの一度も学校に来ないとは…後でどうなるか分かっていますね』だそうだ」

「兄さん…女言葉キモいね！って痛い痛い！潰れる！冗談抜きで潰れるー！」

「安心しろ、人体の構造は把握している。この程度なら問題はない」
「問題しかないよ！ちよっマジでなんか出る！」

姉さんのお怒りも恐いが今はこの状況をなんとかしないと。そう
だ師匠！助けて！

「御曹司、俺ア仕事があるんで」

「ええ、お邪魔してすみません」

「師匠ー！！」

ぼくの頭は犠牲になった。

初登校

姉さんの怒りを買い学校に行かなくてはならなくなったぼくは仕方なしに登校の準備をしていた。家には既に両親はおらず家政婦の沙世さんは買い物に出掛けている。えっ朝から買い物なんて何買いにいったって？残念、今は昼の一時だ。つまり大遅刻である。



電車が一部を除いて使われなくなったこの世界ではキャビネットと呼ばれる、中央管理された二人乗りまたは四人乗りのリニア式小型車両が主流で初めて乗った時はワクワクしたものだ。そのキャビネットに乗り一校の最寄り駅で降り一校までの一本道を歩く。

「しかしこの制服コスプレみたいで恥ずかしいな」

前世では完璧にコスプレだったこの服装で街中を歩くというのは普通に恥ずかしい。

そんな感じで周りの視線を気にしながら歩き一校の門をくぐったところで気がつく。

「ぼくクラス分らないや」

とりあえずなんでも知っている兄に電話をかける。授業中かもしれないが何らかのアクションはあるだろう。

「ほら来た」

30秒もしない内にメールが届く。

『今は無理だ、10分後にこちらからかけ直す』

どうやら授業中だったらしい、とりあえず『了解』と返信をする。

「わー十分間暇だなー」

十分という時間は意外に長い。とりあえず座ろうと辺りを見渡すと今は授業中のはずなのにベンチに座って本を読んでいる生徒が。

「サボりかね?」

「うわわわ!」

男子生徒は驚いてびくりと跳ねるとそのままベンチから転げ落ちる。

「ナイスリアクション」

「褒められても全く嬉しくないよ」

素晴らしいリアクションを見せてくれた彼は制服からして二科生、神経質そうな外見、体格は細身の中背で右目の下に黒子がある。

「あつ今気がついたけど君一年生だよな?先輩だったら謝りますけど」

「残念ながら一年生だ」

良かったよ先輩だったらちよつと気まずかった。

「でー君はなんでサボってたんだい?」

「君に言われたくないよ」

「ぼくはサボりじゃないよ今登校してきたんだ」

「余計質が悪いよ!」

そのとおりだった。他人をサボリ呼ばわりできるような人間ではなかったのだ。ぼくは。だって学校自体をサボリ続けているからね！

「はあ…君変わってるね」

彼はそう言うのと落ちたままの本を拾い上げパタパタと叩くと語り始める。

「なんだか馬鹿らしくなってね、二科生なんて落ちこぼれのまま高校生活を過ごしていくのが。これでも昔は神童とか言われてたんだ。それが落ちこぼれたもんだから家にも居づらいしさ。もうボロボロだよ」

「へー思ってたより重たい理由でぼくちよつと引いてる」

「そっちが聞いてきたのに!？」

ちよつとした暇潰しのつもりで訊いてみたら結構重い理由だった。いやーびつくり。でも聞いちゃったら何とかしてあげたくなっちゃうよね。ぼくも前世で中学受験に失敗した時は家に居づらかったから気持ちは分かるし。ぼくの前世の母はそりやもう教育熱心で金ないくせに色々習わせた。だから受験に失敗した時は大変だった。まあ高校受験はご期待に応えることが出来たのだが。卒業出来ずに死んじやったけどね！

「まあそういう時もあるさ」

「随分適当だね」

「だって君思ってもないこと言ってるんだもん。本当はボロボロなんかじゃないよ。俺ならやれる、必ず見返してやるってそう思っているはずだよ」

「そんなこと…」

彼は言葉を濁す。自分でも自分の心境が分かかっていないんだろう。

ぼくは中学受験に失敗した時次は絶対やってやるって気持ちになるまでかなり時間がかかった。怒るだけしかしなかった母が夜中、ぼくに強く当たってしまうと父に涙を流して語っているのを見て決意したのだ。今世で母の涙に過剰な反応をしたのもそのためだったのかもしれない。それほどその光景は衝撃的だった。

でも彼は自分で立ち上がるうとしている。今はまだ気がついていないけど彼はたしかに自分の足で立とうとしているのだ。ぼくはそれをほんの少し手伝うだけだ。

「それ、魔法関連の本でしょ？古式魔法かな。それが君の心をあらわしてる。君が一生懸命努力している証だよ」

ボロボロの本。今時紙媒体の本なんて珍しいからきつと古式魔法関連じゃないかなと当たりをつけた。何度も読んだのであろうその本には彼の努力が滲み出ていた。

「努力が必ず報われるとは言わないよ。報われない努力もある。でも君は大丈夫だ。このぼくが保証しよう」

ぼくがおどけて言うのと彼は柔らかい笑みを見せてくれた。

「何となく楽になった。体の重りが外れたみたいだよ、ありがとう。これから頑張ってみるよ。頑張って頑張って皆を見返すんだ。まあ君の保証っていうのが不安だけどね」

「酷いなーぼくが保証するなんて滅多にないんだからね。最後に保証したのは二年前、金平糖の美味しさだったかな。」

ではさらばだ！」

それだけ言ってぼくは唐突にその場を離れ学校を去った。なんかクサイ台詞を言いまくって恥ずかしくなったのだ。ぼくが走り去ったとき彼が何やら叫んでいた気がしたが良く聞こえなかった。まあ

同じ学校にはいるのだまた会う時もあるだろう。ぼくが学校に来ることがあればだが。



く雪花が聞き逃した男子生徒の言葉く

「ちよつ君！せめて名前だけでも！僕は吉田幹比古…って行っちゃったよ。彼女とは仲良くなれそうだったのに。クラス…どこなんだろう」



余談だがその日の夜、司波兄妹家に呼び出され兄さんと姉さんに怒られた。学校に登校するのを忘れてたというね！

あつちよ姉さん何ですかそのヒラヒラの服は？兄さん助けて！つて寝てらっしゃる!?あつちよやめて服脱がさな…イヤー！

結婚

沙世さんが結婚する。

どうやら沙世さんはぼくと共に日本へ来て直ぐにその結婚相手と知り合い、それから一ヶ月でお付き合いがスタート。そしてつい一週間前結婚相手にプロポーズをされ見事ゴールインしたということらしい。お相手は一つ年下で中々の名家の者らしい。まあ何にしてもめでたい。ぼくも一つ肩の荷が降りた。



「で何この状況？」

ぼくは今東京都内にある五輪家の別宅に来ていた。十師族のあの五輪家である。

というのも実は沙世さんの結婚相手、奉賀邦仁ほうがくにひとさんは五輪家に従える執事だったらしい。で今日は五輪家の別宅で開かれた二人の婚約記念パーティーに招待されているというわけだ。ここに住んでいる五輪家の人間は二人で姉弟だという。なんでも姉が病弱で二十歳のときから五年間、車椅子生活をしており弟はそれを献身的に支えているらしい。まあ一執事のためにパーティーを開いてくれるくらいだ。良い人達に違いない。

「雪花、あそこにいらっしやるのが五輪濤様とその弟君おとうとぎみである五輪洋史様だ」

五輪濤は長い黒髪を姫カットにした美人さんというかとても二十歳には見えない美少女と表現するにもまだ幼いのではというほどの童顔と体型で柔和な笑みが良く似合う。その弟、五輪洋史は良く言えば優しそう悪く言えば気の弱そうな男だった。

「本日はお招き頂きありがとうございます」

「いえ、そう固くならず。今宵は楽しんでくださいね」

父さんと母さんが五輪姉弟に挨拶をしている傍らでぼくは五輪滯の座る動力付き車椅子を見ていた。うむ実に素晴らしい車椅子だ。前にも少し話したがぼくはUSNAで一時期車椅子作りをしていた。故に分かるこの車椅子の素晴らしさが。シャープなライン、繊細にして大胆なデザイン。それでいて使用する人のことをよく考えている。本当に素晴らしい。

「あの私の車椅子わたくしがどうかしましたか？」

五輪滯が首を傾げながら訊ねてくる。しまったじつと車椅子を見るのは失礼だったかもしれない。

「ああいえ、私は以前車椅子作りに熱中してまして。素晴らしい車椅子でしたのでつい見惚れてしまいました。すいません」

そう言うと五輪滯は大きな瞳を子供のように輝かせながら詰め寄ってきた。

「車椅子お詳しいんですか!？」

「ええ三日三晩語れるくらいには」

そうしてぼくは五輪滯に気に入られた。



パーティーのあった夜。ぼくは自宅の研究室で車椅子の設計図を書いていた。というのも五輪滯：滯さんに気に入られたぼくはパーティー終了後滯さんの私室に招かれ一時間ほど車椅子について語り合った。そこで宣言したのだ。

「滯さんの車椅子より凄いものを作って見せますよ」と。

あの車椅子を一目見た時から思っていたことだ。あの車椅子を越えたい、もっと良いものがぼくには作れると。

「よし、やるか」

とりあえず徹夜が決定した。

車椅子と七草

車椅子製作は意外な程に時間がかかった。徹夜なんて日常茶飯事、しばらくは新婚（籍は入れたが結婚式はまだ）ということでも休みである沙世さんがいなかったため食事を取らないことも多々あった。前までは研究に没頭しても良い感じの時間で沙世さんが食事を持ってきてくれたのだ。沙世さんの有り難みが分かるというものである。ちなみに今後沙世さんは住み込みではなく通いになるらしいのでちよつと寂しく感じているのは内緒だ。

さてそんな感じで多少の無茶をしながらも車椅子の完成を急いだのには訳があるのです。

実はこの車椅子、漣さん26歳の誕生日プレゼントととして贈ろうと思っっているのだ。そして贈るからには妥協はしたくないというわけで最高の車椅子を作った。

そして明日の漣さんの誕生日パーティーでお披露目だ。ふっ今から漣さんの驚く顔が楽しみである。



パーティー当日、車椅子をでっかいプレゼントの箱につめりボンで綺麗に包装し意気揚々と五輪家別宅にお邪魔するとそこには予想外の人物がいた。

七草真由美。

ぼくの関わりたくない十師族ランキングで四葉に次いで二位である七草の長女にして一校の生徒会長。なんでいるんや。

七草真由美は華やかなドレスに身を包み上品な笑みを浮かべながらパーティーをつつがなくこなしている。兄さんと姉さんにはぼくという弟がいることを学校では話さないで欲しいと頼んでるので七草真由美も知らないはずだが相手は七草だ。というか別に七草でなくても司波兄妹に弟がいることは少し調べれば分かることである。

問題は顔が割れているかだ。割れていなければどうとでもなるが割れているとなると絡まれぬ様コソコソと動くことになる。とはいえ顔が割れているかどうかを調べるためにこっちから出向くのでは本末転倒だ。このパーティー中は顔が割れていることを前提にして動くべきだろう。さてそうと決まればこの場を離れよう。今日は父さんと沙世さんと来たのだが父さんは挨拶周り、沙世さんは夫の所というわけで現在ぼっち。ここは大人しく隅っこでじっとしてよう。ぼくはオブジェと化するのだ。そんな馬鹿なことを考えていたからだろう。年下とおぼしき女の子とぶつかってしまふ。女の子はよろめき倒れそうになつたので咄嗟に支える。

「ごめん、大丈夫？」

「いっついえ大丈夫ですわ」

大丈夫とは言うもののぼくに寄りかかったまま離れようとしないう。それになんだか顔が赤い。間違つてお酒でも飲んだのだろうか？

「本当に大丈夫？顔赤いし体調悪いようなら人を呼ぶけど」

「あつ！いえ大丈夫ですわ！ご心配頂きありがとうございます」

「そう、無理はしないようにね」

なんだか心ここにあらずといった感じの彼女にそう声をかけてその場を去る。あつあの隅っこが良い感じだ。



「おーいどうしたの泉美ちゃん？」

「見つけましたわ…私のお姉様」

「へ？お姉ちゃんならあそこにいるじゃん、ってちよつ泉美ちゃんな

んでキスしようとしてくるの!?! 離してよ!

「お姉様〜」

「ちよつやめ…んっ!?!」

「ちよつと貴女達何やってるの!?!」

「助けてお姉ちゃん! 泉美ちゃんが壊れた!」

「お姉様〜」



あれっなんだか寒気がする。風邪引いたかな。

車椅子と約束

隅でパーティーをやり過ぎしぼくは滯さんの私室にいた。

「どうでした？パーティーは楽しめましたか？」

「ええ隅で人間観察をして楽しんでました」

「えっ!?それはパーティーの楽しみ方ではありませんよね!？」

「仕方ないんですよ、一校の生徒会長が来てたんです。ぼく学校全然行ってないし姉さんが生徒会役員なんで絡まれたくなかったんです」
「学校は行っておいた方がいいですよ？学生の頃の思い出は大人になってからの励みになります。私は昔から病弱で学校へはあまり行けてませんでした。が少なからず良い思い出はありますよ？」

滯さんの言葉には何となく重みがある。それは滯さんがぼくのことを本当に考えて言ってくれているからだろう。

「九校戦は観に行こうと思ってます。学校行ってないんで選手には選ばれないでしょうから完全な観客でしょうけど」

「九校戦ですか私も毎年中継で観ているのですが雪花くんもいることですし今年は直接観に行くのもいいですね」

「無理はしないでくださいね」

会話が一区切りした所でぼくは部屋の外から誕生日プレゼントの箱を持ってくる。

「大きいですね、何が入ってるんですか？」

「ふふーんお見せしましょう！ぼくの最高傑作を！」

芝居がかった動きでかつこよくりボンをほどく。すると箱は自然と開き中の車椅子が登場する。決まった。二時間練習した甲斐があったというものだ。

「これは…車椅子…ですよね？」

「ええ、以前お約束したその車椅子を越えるほどの最高傑作です」

漣さんが車椅子であるかどうか疑問に思うのも無理はない。なんせこの車椅子には車輪がないのだから。本来車輪がつけられるべき両サイドには車輪を真つ二つにしたような半円が取り付けられている。

「この車椅子はこれで動かします」

「それはもしかしてCADですか？」

「ご名答」

ブレスレット型のCAD。この車椅子の胆である。

「さて、実際に動かして見せましょう。きっと驚きますよ」

ぼくがCADを操作し車椅子を右へ左へと動かすと漣さんの顔は驚愕に染まった。

何故ならこの車椅子はぼくの兄さん、司波達也いやトーラスシルバーのシルバーが開発した魔法――

「浮いてる…い…まさかこれ――」

――飛行魔法の使用を前提とした世界初の車椅子なのだから。



兄さんが飛行魔法を完成させる時期は大体予測できた。だから飛行魔法を組み込むことを前提に設計し制作、一番重要な飛行魔法の部分は丸投げという手法をとった。で飛行魔法を完成させたという兄さんからの報告を第三課で受けてから飛行魔法を組み込み兄さんと

再調整。何度かの実験をし動作に問題がないことを確認して完成に至った。

「先程は分かりやすくするために高く浮かせましたがデフォルトではもつと低めに設定してあります。実験の結果割り出された最適な高さを常に保つようになってます。漣さんなら連続で25時間は稼働出来るはずですよ。」

「凄いです！飛行魔法が発表されてまだ一週間も…あつそういうえば雪花君のお父様は…」

「まつそういうことです。発表される前から知ってたので割と時間はありました。まあ最終目標としては武装一体型ならぬ車椅子一体型のCADなんですけどね。そっちはちよつと時間が足りませんでした」

漣さんは浮く車椅子に大興奮のようで立ち上がってはしゃいでいる。可愛い。

「CADを調整すればすぐにでも乗れますよ、漣さんのためだけに作ったものなのでそんなに喜んでもらえて嬉しいです」

「素晴らしいプレゼントを本当にありがとうございます雪花君！」

キラキラとした子供ののような笑みを浮かべる漣さんにぼくは…あまり寝ないで作ったので変な機能も沢山つけちゃいましたとは言えなくなっただけであつた。

いや寝てないときの深夜のテンションっておかしくなるじゃん！普段じゃあり得ないこととかしちゃうじゃん！

と内心で言い訳をしながらも表面上はニコニコと笑顔を崩さない。

マジどうしよう。でも今言っておかないとどんだん言いづらくな

るし……よし言うぞ。

ぼくが決意したところで滯さんが相変わらずの笑顔で

「本当に本当に凄いです！これなら九校戦も観に行けますよ！一緒に観ましょうね！九校戦！」

なんて言うもんだからぼくの決意はあっさり折れた。

車椅子77の特殊機能は墓場まで持っていこう。

そう決めたぼくだった。

吉田幹比古の憂鬱

「はあ…」

放課後の教室にて吉田幹比古はある少女のことを思い出したため息を吐いた。

「何よミキ、ため息なんて吐いちやって」

幼馴染みでありクラスメイトである千葉エリカの問いかけに一切の反応を見せずどこか遠くを見るような瞳で虚空を眺めながらまたため息を吐く。

「こりや重症だな、いつもなら突っ掛かるミキ呼びにも反応しねえし」
「そうですね、吉田くんどうしちゃったんでしょうか？」

西条レオンハルトがお手上げとばかりに手を挙げながら言うと柴田美月も頷き賛同する。

「達也くん何か心当たりある？」

「ないな…いや、そういうえば幹比古が珍しく深雪に何かを聞きに来たらしいぞ、わざわざA組までな」

エリカは今だ我関せずとばかりにいる達也にあまり期待せず訊ねるが予想外に得られた有力なもとい面白そうな情報に驚きの表情を見せるとやがてニヤニヤとした人の悪い笑みを浮かべる。

「お兄様お待たせ致しました…エリカ何かあったの？」

そこにちようど良く深雪があらわれエリカは一も二もなく飛び付いた。物理的に。

「エリカ、深雪が混乱している」

「アハハハごめーん」

未だ状況の飲み込めていない様子の深雪に美月は現状を伝える。

「実は吉田くんが朝からちよつとおかしくて。何を聞いても上の空ですすしため息ばかり吐いているんです」

「たしかにちよつとおかしいかもしれないわね」

相変わらずの様子 of 幹比古を見て深雪も心配そうに言う。

「ねえねえ達也くんから聞いたんだけどミキの奴がA組まで深雪になんか訊きに行ったんでしょ？それなんだったの？」

「なんだか良く分からない質問だったのよね。一年生の一科生で一人称が『ぼく』の女子生徒を知らないかって」

「なにそれ？」

不可解な質問に誰もが首を傾げる。

がその中で一人、美月だけが何かに気がついたのか顔を赤くしてモジモジし始めた。

「美月どうかした？」

一番近くにいた深雪が挙動不審な美月に問いかける。すると美月はおずおずと手を挙げて言う。

「あの、もしかして吉田くん……ただの恋煩いなんじゃ」

美月の言葉に残りの全員が顔を見合わせる。そして幹比古の顔を見る。

「…はあ」

幹比古は憂鬱そうに今日何度目か分からないため息を吐いている。

「それだ！」

エリカの声が放課後の教室に響いた。



幹比古がその少女と出会ったのは偶然だった。授業の実習であまり良い結果を出せずつい昔の僕ならと考えてしまい気がつけば古式魔法の本を片手に授業を抜け出していた。

軽く自己嫌悪に陥るものの授業に戻るような気分ではなかった。近くのベンチに腰を下ろし読み慣れた本を読む。もはや何度読み返したかも分からないその本は既にボロボロだった。幹比古にはそれが自分の努力の証のように思え買い換えることもせず何年も使っている。

幹比古は無心でページを捲る。内容なんて入ってはこなかった。ただ自分は努力しているんだとそう言い聞かせるためだけに読み進めていく。

そんな時だった。

「サボりかね?」

「うわわわ!?!」

彼女が現れた。人形のようなだと幹比古は思った。黒い髪は美しく白い肌をより際立たせ整った容姿はそれこそ優秀な人形師が何十年をかけて作り出したかのようにだった。

名も知らぬ彼女との出会いは幹比古を変えた。

「努力が必ず報われるとは言わないよ。報われない努力もある。でも君は大丈夫だ。このぼくが保証しよう」

その言葉は幹比古にとって大きな励みとなった。心のどこかで考えていた努力をしたところで全盛期の神童と呼ばれていた自分には戻れないんじゃないかという諦め。実際努力しても家から見放され一校でも二科生だった。それが彼女に保証されると自分ならできるという気になってきたのだ。それは読み込んでボロボロになった本に努力の証を探し自分を鼓舞するだけでは得ることのできなかつた自信だった。幹比古は彼女と出会い自分を信じられるようになった。

それからというものの幹比古は前にも増して努力した。すると不思議なことに彼を取り巻く環境はすぐに良くなった。まず友人が出来た。一校に入学して数ヶ月、誰一人として出来なかつた友人があまりと四人も増えた。そして一人、また一人と増えていく。幹比古は孤独ではなくなった。

そして家に居場所ができた。家族が幹比古の努力を分かってくれていることに気がついたのだ。今までの落ちぶれた自分を誤魔化すための努力しかしてこなかつた自分には見えていなかったただけだったのだ。自分が見下され輪から外されていると勝手に思い込んでいただけなんだと。

そうして環境が変わると魔法も上達した。微々たるものではあつたし全盛期には及ばないものの努力が形となって現れていることを知った。

本よりも確かな証がそこにはあつた。

幹比古は彼女を探した。一言お礼を言って今の自分を見せたかつた。しかし彼女は見つからなかつた。発言から一年生であり制服か

ら一科生であることが分かっていたためすぐに見つかると思っていた。幹比古は思わぬ搜索の難航に普段であるならば絶対にしない行動に出る。一科生でA組の友人である司波深雪に訊ねに行ったのだ。しかしそこまでして尚彼女は見つからなかった。

まるであの日の出来事は夢か幻であったかのように。

やはり名前を聞いておけば良かった。そう思うとため息を吐かずにはいられない。

もう会えないのではないか？幹比古の脳裏に過るそんなネガティブな言葉とは裏腹に彼はもうすぐ彼女と再会することになる。正確には彼女であると勝手に思い込んでいる人としてであるが。

それは果たして幹比古にとって希望か絶望か。

もはや言うまでもないだろう。

九校戦編 へ上

九校戦

全国魔法科高校親善魔法競技大会、通称『九校戦』は、日本国内に9つある国立魔法大学付属高校の生徒がスポーツ系魔法競技で競い合う全国大会だ。

例年富士演習場南東エリアの会場で10日間開催され、観客は10日間で述べ10万人ほどで映像媒体による中継が行われる程の人気である。

競技は

スピード・シューティング

クラウド・ボール

バトル・ボード

アイス・ピラズ・ブレイク

ミラージュ・バット

モノリス・コード

の6つで一年生のみ新人戦と学年制限のない本戦がある。

そして我らが一校はこの九校戦三連覇が掛かっている優勝候補なのである。



「へえー兄さんエンジニアに選ばれたんだ。正直予想外だけどチートも良いところだね。天下のトールラスシルバ様が直々に高校生の大会に参加するとは」

「なんだその悪意のある言い方は。大体お前もそのトールラスシルバ様だろうが」

「ぼくは参加しないので良いんです。観客席で兄さんのチートっぷりと姉さんの無双っぷりを見て楽しませてもらうから」

第三課にて車椅子製作のせいで製作が止まっていた聖剣エクスカリバーをいじっていると兄さんが来て姉さんが選手に選ばれたこと、兄さんがエンジンアに選ばれたことを話してくれた。正直ぼくが司波兄妹の弟と分かった時点でもう原作崩壊は気にしない方針でやっているがやはり原作通りの方が都合が良い。今のところ大きな変化はないようで少し安心する。ブランシユの時も原作通りに進んだし。ぼくは家で寝てたので具体的な状況は分からないけど。

「そういえば雪花、お前自分のCADはどれなんだ？色々作っているが一度も使っているのを見たことがない」

「んー別に決めてないけど。というか入試以来魔法なんてまともに使っていないし」

「：お前のせいで二科生になった一人が可哀想だな」
「それは仕方ない、この世は弱肉強食なのです」

でも心の中では謝っておく。ぼくが入学したことで二科生になってしまった人並びに試験に落ちてしまった人、申し訳ありません。こんなんが一科生で。

「まあお前の場合特に学校に行く必要もないだろうし俺からはあまり言わないが深雪は怒りが溜まっていくようだよ」

「分かっているよ、だから会わないようにしてるんだ。姉さん怒ると怖くて」

「お前どうやって回避しているんだ？深雪がここを訪ねた時には必ずいないからな」

「企業秘密だよ」

実は受付の人にお金を渡して姉さんが来たら連絡するように言っているのだがそんなことを言えば怒られるのは分かっているのではない。兄さんには絶対口で勝てないからね。いやー正論の力って怖いわー。

「はあ次に深雪に会った時後悔するなよ？何やら服を大量に買ったようだしな、お前に着せるためじゃないか？」

「九校戦行くのやめようかな！」

まあ実際には濡さんとの約束もあるので必ず行かなければならぬのだが。

「九校戦は来た方がいいぞ、来なかったらいよいよ氷漬けにしそうな勢いだ。もちろんお前をな」

さて、富士演習場南東エリアへの行き方でも調べておこうかな！

婚約

九校戦開始二日前だと言うのにぼくは既に会場である富士演習場南東エリアのホテルに来ていた。各校の選手、エンジニア達泊まるためのホテルである。さて選手やエンジニアではないぼくがなぜこんなところにいるかと言うとだ。

「来てくれたようだな、雪花君」

「貴方に呼ばれて来ないわけにはいかないでしょうに：閣下」



九島烈からの招待状。そんなものが届いてしまえば断れるわけもない。後が怖すぎるからだ。

「で、なんでぼくを呼び出したんですか？」

「ついてくれば分かる」

この老人殴りてえー、と思いはするものそんなことをすればどうなるかはさすがのぼくも分かっているので自重する。

「ここだ」

連れてこられたのは恐らくVIPのために用意されているのであろう豪華な部屋だった。九島烈は世界的なVIPであるしこれくらいは当たり前なんだろう。そんなことを考えていたからかそれに気がついたのは部屋に入って少ししてからだった。

「はじめまして貴方が雪花君ね、お話は聞いてるわよ」

あれ、なんかこの人見たことあるような。いやこんな美人一度見たら忘れないはず。

「私は藤林響子、防衛省技術本部兵器開発部所属の技術士官をしているわ」

原作キャラですかそりや見たことありますよね！

電子・電波魔法による高度なハッキングスキルを得意とし、エレクトロン・ソーサリス電子の魔女とかいう二つ名で呼ばれている兄さんと同じ国防陸軍第101旅団に所属する軍人。独立魔装大隊の幹部であり風間玄信の副官をしている。階級はたしか少尉。

「はじめまして司波 雪花です、国立魔法大学付属第一高校の一年生です」

とりあえず自己紹介は済ませたが九島烈は何の意図があつて藤林響子をぼくに紹介したのだろうか。まさか紹介してそれで終わりというわけでは――

「ふむ、自己紹介が済んだのなら早速始めよう。見合いをな」

――へっ？あれ今この人ともないこと言いませんでした？

「じゃあまずは雪花君の趣味から――「ちよつと待つてください！全然理解が追いついて無いんですが！お見合い？誰が!?」――貴方と私よ」「無理ですよ！ぼく十師族とはあんまり関わらないで生きていたいですー！」

只でさえ四葉、五輪とガツツリ関わってしまったのにこれで九島とまでなんて嫌過ぎる。

「最近お主が五輪と懇意だと聞いてな。先に目をつけていたものを横からかつ拐われるのは気に食わん。そこでお前を孫と結婚させることにした」

「HEY！そこにはぼくの意味がないぜ！大体ぼくはまだ15歳なんですから結婚は出来ませんよー」

「婚約だけで良いのだ、五輪の長女と結婚しないという保証があればな」

「滯さんは友人！大体滯さん26歳ですよ！ぼくとじゃ年の差がありすぎて滯さんも嫌に決まっています」

何故か藤林響子が「…年の差」なんて呟きながら落ち込んでいるがここで引き下がるわけにはいかない。

「ふむ、本来であればアンジェリーナが良かったのだがな。アレはU S N Aだからな」

「リーナとは14歳になって少ししてから連絡を取り合ってますよ、なんか軍で偉くなったから国外への連絡が出来なくなるとかで」

リーナか…ちゃんとやっつけていけるんだろうか。心配過ぎるのだが。

「ならばこういうのはどうだ？婚約をしておきお主が結婚したいと思える女性を見つけたならば破棄してくれても構わん。但し十師族以外でだな」

「まあそれなら…でもちゃんと約束してくださいよ！」

「あとできちんとした書類を送ろう」

というわけでなんか藤林響子と婚約しました。強制みたいなもんですけどね！



「良かったんですかあんな約束をしまつて」

「構わんよ、四葉や五輪に持つていかれる可能性を潰せるのならそれ

で充分だ。あやつは九島に恩を感じている。それにアンジエリーナがこちらにいる限りあやつが九島に牙を向けることはない」

「はあ、それだけのために私と婚約させたんですか？ 私が結婚できなかったら相手探してくださいよ？」

「無論だ」

懇親会と深紅の王子

九校戦の懇親会は九校戦関係者以外は参加できないはずなのだがただの観客であるはずのぼくは何故かここにいた。九島烈に半強制的に連れてこられたのだ。なんでも面白いことをやるとのことだがその仕掛けを原作知識により知っているぼくとしてはお祖父ちゃんの手品を見せられる孫の気分だ。実際にお祖父ちゃんになるかもしれないと思うとゾツとするが。

「一校勢には近づかないようにしないと」

ほとんど学生しかないこの場で私服では目立ってしょうがないというわけで数ヶ月振りに袖を通した一校の制服で来たわけだがこの格好で一校の誰かと出会ってしまうと、は？お前誰？なんでここにいの？という状況に追い込まれるため前世から標準装備しており澤さんの誕生日パーティーでも大いに役に立った『隅で大人しくすることで気配を消す』という高等技術を使いやり過ごすことにする。とはいえずつと一ヶ所に留まっても逆に目立つので程よく移動し時には留まり一校生の目を気にしながら立ち回る。もはや魔法師というより忍者だった。まあ、一度だけ見た本物の忍者はハゲだったから絶対なりたくないが。

「ねえ君一人？一校だよね」

「ああ別に情報を聞き出そうとかそういうのじゃないから警戒しないで。ただ折角の懇親会なんだし他校の生徒とも話してみたいだけなんだ」

ぼくが内心でハゲ頭の忍者を想像し自分がスキンヘッドのツルツル頭になっている姿を思い浮かべて、ぼくは絶対忍者にはならないつてばよと決意を新たにしてしているとド派手な赤い制服を着た三校の男子生徒二人に声をかけられる。ちっ油断したか。

「お前ら他校に恥を晒す気か？ここはそういうことをする場ではないぞ」

ぼくがこの状況をどう切り抜けるかと考えていると横から同じくド派手な三校の制服を着た男子生徒が割り込んでくる。

「げっ一条」

「マジになるなよ、ちよつとした冗談じゃないか」

「だったら早く行け、冗談でもこういうことはやるな」

二人の男子生徒が言い訳を口にするもバツサリ一刀両断し追い払うとこちらに謝罪をしてきた。

「すみませんでした、あいつらには後でしつかり言っておきますから」
「ああいや気にしないで、というか見たところ同級生だし敬語使わなくていいよ。君一年生だろ？そっちのがぼくも話しやすい」

会話を続けながらぼくは内心冷や汗ダラダラだった。なんせこの一条と呼ばれた人物は十師族の一角を担う一条家の次期当主にして『クリムゾン・プリンス』の異名を持つ原作キャラ、一条将輝その人なのだから。

「そうか…あつとところで君なんで男子の制服を着ているんだ？」

この場からうまくエスケープする方法を何通りか考えていたにも関わらずそれをすべてぶっ飛ばしにくる一条将輝の質問（さらにいえばその質問から三校の生徒二人の行為がいわゆるナンパであったことに気がつく）にいつもの如く大声で否定しそうになるがこの場では目立ってはいけないんだと自分を理性で押さえ込みつつやんわりと否定する。

「一条の次期当主ともあろうお方に女装の趣味がおありだったとは知らなかったな」

「何故そうなる!?!」

「だって男が男の制服を着ているのに疑問を感じるなんて…そういうことだろ? ああ分かってる。このことは誰にも言わないよ。ぼくの心の中にこっさりしまっておくから安心してくれ」

「誤解だ! というか、えっ? 君男なのか? その顔で? 冗談だろ?」

「さーて飛び切りのスクープでも眩くかなー! 『クリムゾン・プリンス 将来の夢はクリムゾン・プリンセス』っと」

「やめろー! ごめん! 謝るから! 本当にそれは不味い奴だ!」

ぼくが一条将輝の慌てふためく様子に仕返し成功と満足するとタ イミングを見計らったかのように来賓の挨拶が始まった。一条将輝は誤解だからなっ! と小さな声でしかし強く否定すると真剣な眼差しで来賓へと意識を向けた。やがてぼくをこの場に引きずり込んだ九島烈の挨拶がアウンスされると多少のざわつきがあった会場は一気に静まり返った。さすがに「老師」と呼ばれるだけのことはある。とてつもないカリスマだ。

原作通り壇上に現れたのはパーティードレスを纏い髪を金色に染めた、若い女性。そしてその後ろにはニヤリと笑う九島烈。

後は九島烈からの種明かしとお説教、そして激励。その際手品の種に気がついた人数が六人になっていたのには吹き出しそうになった。ぼくもカウントされてるんですねそれ。知ってただけなんですが。

その後、種に気がつけずちよつと落ち込み気味の一条将輝に気がつかれぬようその場を離れ九島烈に用意してもらった部屋に戻り朝方までCADを弄り続けた。

今日のこの濃い一日で溜まったストレスを発散するにはそれだけの時間が必要だったのだ。

翌日目が醒めたのは昼過ぎというには遅すぎる時間、おやつ時間も過ぎ去った午後四時過ぎだった。今日は休養に当てられているた

め特に問題はないのだが不健康であることには変わりないし明日は開会式だ。寝坊しないように今日はちよつとだけCADいじって早く寝よう。

当然、ちよつとで済むはずもなく眠りについたのは午前3時ごろだった。

九校戦開幕

九校戦初日、やはりと言うべきか当然の如く寝坊し眠い目を擦りながら別に開会式は見なくてもいいかなと考えていると突然濡さんから電話がかかってきた。

『すみません、少し体調を崩してしまいました。今はもう大丈夫なのですが弟が安静にしているとうるさくて。最終日には必ず行きますから!』

画面に写し出された濡さんはたしかに体調が悪そうには見えませんが前でグツとガツツポーズまでしている。

「無理はしないでくださいね。洋史さんの言うとおりに安静にしてください。その方がぼくも安心です」

『もう、洋史も雪花君も私を病弱扱いし過ぎです!最近はずっと体調良かったんですから大丈夫ですよ!』

「はは、すみません、ぼくも洋史さんも濡さんが心配なんですよ。では一緒に九校戦を観るの楽しみにしています」

『はい私も楽しみにしていますね!』

かくして一人で九校戦の応援へと向かうことになったぼくは制服を身に纏い鏡で適当におかしなところがないか確認して家を出る。その際男子の制服似合わないなと思ってしまったのは秘密だ。きつと一条将輝に感化されただけだ。

ちなみに開会式にはやつぱり間に合わなかった。



「隣いいかしら?」

「なんているんですか…藤林さん」

「響子でいいわよ？結婚したら私も司波になるわけだし」

今日は開会式と二競技が行われる。スピード・シューティングの決勝までとバトルボードの予選。結果を知っている身としては迫力のある試合を期待したい。

「二校の生徒会長さんが出るみたいよ」

七草真由美。一度だけ見たことがあるが会話を交わしたことはない。七草なんて関わりたくないから今後も警戒が必要な相手だ。結果は分かっているので応援しようにも力が入らないが魔法はちゃんとは見なくて。決勝まで使わなかったような気もするが七草の『魔弾の射手』は絶対に見ておきたい。

「凄いわねパーフェクトよ」

「凄いのはこの歓声ですよ、どこのアイドルですかうちの生徒会長は」

「妖精姫なんて呼ばれてるんじゃないかなかったかしら？あの容姿ですもの当然というべきね」

「響子さんもお綺麗ですよ」

ここで、赤面の一つでもさせてやろうと軽く褒める。

「ありがとう」

ニツコリ笑顔で返された。恥ずかしい。

結局、『魔弾の射手』は見る事が出来なかったものの他に使えそうな魔法をいくつか見ることができた。七草真由美以外にも九校戦に出場するような選手は皆優秀であるし。

「雪花君、バトルボードは観に行くの？」

「んー特に見たい選手もいませんしスピード・シューティングの決勝までホテルで休むことにします」

「なら丁度良かった、一緒にお茶しない？ほらこの前のお見合いもちゃんと出来なかったし」

「拒否権ってあるんですか？」

「あると思う？」

飛び切りの笑みにはそんなものはないと大きくくつきり書いてあった。ぼくはため息を吐きながら立ち上がりホテルへと向かうのであった。

九校戦二日目①

響子さんにお茶会という名の質問責めに午前中一杯付き合わされたあと用事があるという響子さんと別れ疲労困憊の状態ではあったが七草の『魔弾の射手』を見るため一人普通以上に混んでいる観客席にて観戦し一日目は終わった。タイミングを見計らったかのようにかかつてきた「明日は朝、部屋に迎えに行くわね」という響子さんからの電話に勘弁してくださいと言いついそうになるのをどうにか堪えて部屋に戻りそのまま眠りについた。目が覚めると既に朝の5時。昨日もさほど寝ていないから夕方飯も食べずに12時間近くも寝てしまった。二日目に観戦しようと思っっているのは一校の千代田花音の出場するアイス・ピラーズ・ブレイクだ。迫力という意味ではモノリス・コードに次いでありそうであるし何より千代田の『地雷源』は見たい。原作には殆ど描写のなかった男子クラウド・ボールを観戦するというのが面白そうだと思ったものの野郎の試合なんて見ても仕方がないというわけでスルーした。やっぱり応援するなら女の子だよね!

「雪花君未来のお嫁さんがモーニングコールに来たわよーってもう起きてる。随分早いよね」

「随分早いよねはぼくの台詞なんです。というか鍵かかってましたよね? どうやって入ってきたんです?」

「あら、私が何て呼ばれてるか知らない?」

「エレクトロン・ソーサリー電子の魔女…ってえっ? もしかしてハッキングして開けたんですか!? ここ一応は軍の施設なんですが」

「私にかかればこんなものよ」

ドヤ顔の所悪いんですが取りあえず着替えるんで出てっつてくれま
すかね?

「で、なんでこんな朝早くから来たんですか？」

「実は今日ちよつと用事入っちゃって一緒に行けなくなっちゃったの。それ伝えるついでに寝顔でも拝ませてもらおうかなって」

「そんな下らないことでハッキングしないでください」

響子さんとはしばらくおしゃべりをして別れた。ハッキングを見せてもらったりおいしいお茶の入れ方で盛り上がったりした。

その後ぼくは予定通りアイス・ピラース・ブレイクを観戦すべく会場に向かう。少し早過ぎたのか会場にはまだあまり人はおらず席はガラガラだったので最前列に陣取る。それから競技開始の時間まで電子書籍を読み進めることにした。

千代田花音の一回戦は正に瞬殺だった。

試合開始直後に地鳴りが生じ次々と敵の氷柱を倒していき相手選手の妨害をもともせずそのまま全ての氷柱を粉碎し勝利したのだ。地鳴りの正体は千代田家お得意の振動系統・遠隔個体振動魔法その中でも地面を振動させる魔法で材質を問わずとにかく「地面」という概念を有する個体に強い振動を与える。千代田家に与えられた「地雷を作り出す者」という意味を持つ二つ名「地雷源」と同じ名を持つ魔法。その後、試合は進んでいきいよいよ千代田花音の二回戦というところではとある人物を見つけた。それはド派手な赤い制服に身を包んだ――

「クリムゾン・プリンセス！」

「だから誤解だ！話を聞け！」

――一条将輝である。

「なんだ、一人で観戦かい？」

「たまには一人になりたいこともある」

「ぼっちなんですね、分かります」

「ぼっちじゃない！今は一人だけだ！」

イケメン的台詞にも茶々を入れるべく。どうもこの一条将輝という人物、いじりたくなるのだ。

「で、何？可愛い女の子でも見にきたの？」

「可愛い女の子というのは否定しないが俺が見にきたのは千代田の『地雷源』だ」

「うわー彼氏持ちそれも許嫁がいる女もお構い無しかー。さすがは十師族！憧れるなー」

「そろそろ殴って良いかな！」

「静かにしてよ決勝が始まる」

「お前これ終わったら覚えてとけよ」

二回戦。結局『地雷源』のゴリ押しで千代田花音が勝利した。一条将輝？試合が終わった瞬間に全力で逃走したので知りませんが何か？

司波達也二人目の妹

九校戦初日。午後のスピード・シューティング準決勝、決勝を観戦する前に司波達也はホテル内の高級士官客室に向かった。昨晚にした約束を果たすためだ。

そこには彼の所属する国防陸軍第101旅団・独立魔装大隊の幹部達とそれを率いる隊長である風間玄信がルームサービスのティーマットを並べて一服していた。

「来たか。まあ、掛けろ」

達也が居並ぶ幹部連に躊躇いを見せ椅子に座るまでに一悶着あったものの達也を含める全員が腰をおろした後は一転して和やかに会話が展開された。…和やかというのはあくまで雰囲気の問題であって内容には和やかとは言えないものもあつたが。

「達也、もし選手として出場するようなことがあつた場合は」

「分かっていますよ、少佐。『ミスト・デイスパーション雲散霧消』を使わなければならないような状況に追い込まれたら、諦めて負け犬に甘んじます」

『ミスト・デイスパーション雲散霧消』は軍事機密指定の魔法である。

風間の鋼の声に込められた真意を見謝ったりはしなかった達也は多少のユーモアを混ぜながら落ち着いて答える。

「……しかし、自分が選手として出場するような状況は考え難いんですが」

「心掛けの問題だ。分かっているならそれでいい」

お互いに失笑を浮かべながらもその瞳は醒めている。その醒めた目を見交わしながら二人が話題を締めくくるといよいよこの集まりも終わりのムードが漂い始める。

そろそろ会場に向かわなくては、と達也がこの場を退席しようとしたところで風間の副官を勤める女性士官、藤林響子があつと声を上げ

る。

何事かとそちらに意識を向けると藤林は達也が今までに見たこともないようなまるでイタズラを仕掛ける前の子供のような笑みを浮かべながら近づいてくる。

達也が藤林の奇行に混乱している内に達也の横へと移動した藤林が耳元で何やら耳打ちする。それは特大の爆弾だった。

「私、雪花君と婚約したの。だから次からはお兄様とお呼びした方がよろしいかしら」

達也はたっぷり30秒程フリーズした後、どこから出したのか分からない無理矢理絞り出したかのような声で言った。

「……結構です」

高級士官客室はこの日一番の笑いに包まれた。もちろん達也を除いてであるが。

この時達也が内心、歳が一回り近くも上の妹なんて御免だと思っただけの話だ。

達也がそれを口に出すことは終ぞ無かったことであるしもし口に出していたのならば達也はエンジニアとしての仕事を全うすることが出来なくなっていたかもしれない。

その理由は語るまでもないだろう。

九校戦二日目②

アイス・ピラーズ・ブレイクにて千代田家の『地雷源』を見ること
ができさらには一条将輝でストレス解消もでき大満足のぼくは機材
がルームメイトだという兄さんの元を訪れた。

「まさかお前が藤林さんと婚約するとはな」

「ぼくも同じ気持ちだよ」

訪れて早々話題になったのはぼくの婚約話だ。兄さんはぼくに後
ろ暗いことの大概を隠しておりその中には当然自分が戦略級魔法師
であり国防陸軍第101旅団・独立魔装大隊に所属する軍人である、
というのも含まれている。その兄さんが響子さんと知り合いであつ
たということに驚いた振りをしつつ話を進めていく。恐らく今日、兄
さんと響子さんは口裏を合わせたはずだから明日には響子さんが兄
さんの話題を持ち出してくることだろう。

「そもそもお前がああの九島烈閣下と知り合いであつたことに驚きだ。
それも孫娘と婚約させようとするほどにな」

「USNAに居たころに少しだけ魔法を教えてもらったりしたんだ
よ、それで妙に気に入られちゃって」

実はぼくがUSNAに居たころ数度シールズ家を訪れていた九島
烈にはいくらか魔法の手解きを受けている。魔法を教わったという
よりは魔法の工夫を教わったという感じだが。その時にリーナとね
だつて九島家の秘術である仮装行列を一度見ることが出来たのは
ラッキーだった。

「お前はそれがどれだけのことか分かっているのか？」

「いや全然」

「はあ、だろうな」

正直迷惑も良いところだ。こっちは細々とCADを作っていたというのにあのジジイ何かと厄介事を持ち込んできやがって。九島には多大な恩を感じてはいるがあれは例外だ。まあ元々はあいつありきの九島なんだろうけど。

「ところでそれ何？CADみたいだけど」

「これはただのお遊び、お前が来ているのが分かっていたからな牛山さんに依頼メールを今朝送っておいた」

兄さんにはぼくが既に会場入りしていることを懇親会終了後に連絡してあった。姉さんには黙っておいてということも一緒に。

「今朝？相変わらず無茶するね師匠は」

ナックルガード付きのミドルソードのようなこの武装一体型CAD、実は原作において結構役に立つことになるアイテムだ。たしか硬化魔法の固定概念を取っ払い分離した刀身を飛ばすというものだ。正確には『飛ばす』というより『伸ばす』らしいが。

「あつそうだ、ぼくの作ってた武装一体型CADの聖剣エクスカリバーなんだけどもうすぐ完成するから楽しみにしててよ」

「その台詞をずいぶん前にも聞いた記憶があるんだが」

「車椅子作ってて時間無かったんだよ」

「大体あんな無駄な単一機能に特化したCAD、何に使うんだ？」
「良いんだよ、それこそお遊びなんだから」

その後少し会話をしてぼくは兄さんの部屋を出た。あまり長居すると姉さんが来てしまうかもしれないからね。

九校戦三日目

今日は事故が起きるであろうバトル・ボード女子準決勝がある。事故を阻止してあげたいという気持ちはあるが既に仕掛けは施されているだろうしそれをぼくが誰かに伝えることは出来ない。これは本来ぼくが知っているはずのない事実なのだから。それにこの作戦が失敗したことで裏でこの九校戦を賭けの対象としているであろう奴等が別の作戦を実行するのも不味い。そちらをぼくが知ることは出来ないしそれによって一校により大きな被害が出てしまう恐れがあるからだ。

「どうしたの雪花君、凄く落ち込んでるみたいだけど」

バトル・ボードの事故は原作通りに引き起こされた。事故を目撃した後、結局ぼくはただ自分が巻き込まれなくなかっただけなんじゃないかと、そのために言い訳を積み重ねているだけなんじゃないかとそんな自分への嫌悪感で潰れそうになり千代田花音の女子アイス・ピラーズ・ブレイク優勝もろくに見ていなかった。

「いえ、別に。というか響子さんいつの間に来たんですか？気が付きませんでした」

「失礼ね、こんな美人が隣に座ったっていうのに」「すみません」

とりあえず謝ってみると響子さんはため息を一つ吐いて言う。

「何に悩んでるのか知らないけど考えても正解がないことって意外と多いのよ。だから開き直っちゃいなさい。正解が分からないなら正解を作っちゃえばいいの。人間ネガティブに生きてても良いことないわよ?」

響子さんの言葉に即座に納得できるほどぼくは大人ではなかった。

◆
響子さんが用事があると立ち去った後もぼくは観客席で座り込んでいた。既に三日目の競技は全て終了しており残っているお客さんも本当に僅かだ。

「なんだ一人か？」

「たまには一人になりたいこともある」

「ぼっちなのか？」

「…さつきまでは美人と一緒にだったよ」

昨日と似たようなやり取りを違う立ち位置で行うと一条将輝はぼくの隣に腰かけた。

「悩み事か？」

「まあね」

適当に返す。どうせぼくの悩みは打ち明けられることの出来ないものだ。

「正直意外だよ。お前は悩みなんてなさそうだと思っていた」

「悩んでばかりだよ、生まれたときからね」

ぼく以外誰にも分からないであろう転生ジョークを織り込む。まあ当然の如くスルーだが。

「そうか、人間は悩み続ける生き物だからな」

「なにそれ？哲学？」

「…親父の言葉だよ。俺が深く悩んでいた時に聞いた」

一条将輝は片手を天に翳し顔をそちらに向けるがその目は手ではなくどこか遠くを見ているようだった。

「俺は13歳の時沢山の人を殺した。戦争だった。人が死んで当たり前、油断した奴から死んでいく。その場にいたときは必死だった。だから人を殺したんだとそう実感が沸いたのは戦いが終わって数日後、家に戻ってからだった。頭では分かっていた。自分は国のために戦ったなにも疚しいことはない。それでも気持ちは沈んだ。それにいくら洗っても体にまとわりついた血の臭いがとれない気がしたし時おり鏡を覗いた時なんかについてもしない血が見えたりもした。笑えるだろ？クリムゾン・プリンスなんて呼ばれながら当時の俺は血が怖かったんだ」

真剣に語る一条将輝にいつしかぼくは話に引き込まれていた。人を殺すなんて考えたこともなかったことがこの世界では現実としてあり得る話なのだ。魔法師とはそういう存在であるとぼくは分かっている気になっていただけだったのだ。

「そんな日々が暫く続いたある日、見かねた親父が俺に言ってくれたのが『人間は悩み続ける生き物だ』って言葉だ。人は何故生きるのかそれを知っている人間なんていない。どれが悪でどれが善なのかそれを決められる人間なんていない。だから人は悩み続ける。正解なんて最初から用意されていない。悩んで悩んで自分なりの答えを出してそれが正解だと信じて生きていく。だから人間は悩み続ける生き物だって…」

それは響子さんの言葉ともどこか共通したところがあるものだった。正解がないなら作ればいい。正解がないなら出した答えを正解だと信じる。正直今のぼくには出来そうもないことだった。ぼくは弱く臆病で卑怯な人間だ。だから今の今まで原作のイベントには一切関わらないようにしてきた。一校への入学はしたものの学校には行っていないことがそれを顕著に表している。原作イベントには関わりたくないと思いつつも表舞台^{原作}から完全に弾き出されるのを恐れ

こうして一応は一校に席を置いている。今までのぼくは怠慢だった。思い出せこの世に生まれ落ち初めて母の涙を見た時誓ったはずだろ！

「ねえ」

「なんだ？」

「友達になってよ」

「いいぞ」

ぼくは今日から本気だす。

九校戦編〈中〉

九校戦四日目①

一条将輝、いやマツキーと友達になり心を入れかえ本気をだすことにしたぼくは早速寝坊していた。

今日から五日間は一年生のみで新人戦が行われるため兄さんのチートっぷりと姉さんの無双をやっと観ることができるといふのに。兄さんが担当する女子スピード・シューティングは午前だったはずだからもう始まっているだろう。ぼくは急いで制服に着替えて部屋を出る。響子さんは仕事があるらしく今日はいないので一人だ。

昨日、連絡先を交換したマツキーに連絡しようかとも思ったが三校一年のエースが他校の生徒と一緒にいるのはあまり良くないかもと思ひ控える。

結局一人で会場に来たものの試合が始まっているため席は既に殆ど埋まっておりさてどこに座るかと思ひ見渡すと一校の生徒が一人で座っているのを見つけた。見たところ二科生であるし観客として九校戦に来ているのだろう。隣が空いていることだし声をかけることにする。昨日のマツキーとの一件でぼくは友達が少ないということに気がついたのだ。同年代で言えばマツキーが初めての友達である。こういう機会に声をかけ友達を作らなくては学校に行っていないぼくではそうそう友達はできない。

「隣いいかな?」

「…どうぞ」

素っ気ない。実に素っ気ない。早速心が折れそうだ。いや初対面だしそんなもんかなとも思うけどほら同じ一校の生徒だよ? あつだからか。ぼく一科生の制服だし気後れしてるのかな? なんか原作の主要キャラ達って二科生であることをあんまり気にして無さそうだったから失念してた。

「誰かの応援？ああぼくも一年生だから敬語はいらないよ？」

「……姉さん……エンジンアだけど」

答えてくれたよ！よしこのまま次の話題に持つていつて会話を広げよう、とぼくが考えているとあちらから話しかけてくれた。

「ねえ、あなたどうして男子の制服を……」

「おつと言いたいことは分かっている、分かった上で言わせてもらおう！ぼくは男だ！」

「……この世には不思議なことってあるものね」

くつ少々不本意ではあるが会話ができた。このまま次の話題を出し、会話を広げ盛り上げ仲良くなる。

次の話題を……次の話題を……次の……

そこからは無言だった。

何も話題がなかった。というかそもそも隣からの話しかけんなオーラが半端じゃない。下手に空気を読んでしまいそれに耐えられなかったぼくは結局試合の観戦に集中することとなった。

そしていよいよ準々決勝。兄さんがエンジニアを担当している北山雫の試合が始まる。この試合で兄さんはとんでもないもの、ドイツで一年前に発表された新技術を駆し標準補助システムを備えた汎用型CADを披露する。マッキー驚いてるだろうな。そんなことを考えていると隣から物凄い速さで独り言を漏らしているのがきこえてきた。

「嘘……アレ汎用型？でも標準補助システムが付いてる……あれはFLTの車載用汎用型CAD『セントール』シリーズ……ならコネクターでグリップと標準補助装置につないでる？……そんなことが可能なの？」

ぼくはニヤリと笑って隣に声をかけた。

「あれは汎用型だよ、間違いなくね」

隣の女子生徒は小さく「…何故分かる？」と理由を尋ねる。ぼくはそれにとびきりの笑顔でこう言った。

「だってあれ作ったのぼくだから」

女子生徒の瞳が大きく見開かれた。

九校戦四日目②

昨日の夜。明日から新人戦だし遅刻しないようにしようとCADに手をつけることもせず寝ようとしたその時、ノックの音がした。

こんな時間に誰だよ、と思いつつドアを開けるとそこには兄さんがいた。

『これと同等以上のものを作れ、もちろん九校戦のルールに沿ってな』
原作において北山雫が使っていた兄さんお手製の汎用型CADを片手にそんな無茶振りをしに来たのだ。

なぜこんなギリギリに持ってきたんだと文句を言えば『お前は追い込まれた方が力を発揮するからな』という有難い誉め言葉を頂き、まあ適当にやってやるかと作業にかかったところで兄さんの悪魔の口デーモンマウスが発動。

『もし駄目でも責めはしない。まあ深雪に口が滑ることはあるかもしれないがな』

ぼくは全力で作業に取りかかった。

結局完成したのは午前二時。それを兄さんの部屋に持っていき眠りについたのは二時半。そりや寝坊するよ！

これは後から気が付いたのだが今回の件、兄さんには何のデメリットもなかったのだ。仮にぼくが完成させられなくても兄さんが作ったものがあるし完成させられれば御の字程度の考えだったのだろう。そして完成させられなかったら本当に姉さんにチクつたに違いない。
兄さん：恐ろしい子！

と、まあそんな感じでぼくが作ったわけだがそれをそのままぼくが兄さん、司波達也と兄弟であることを簿かしつつ彼女に伝えると彼女はジトーツとした目でこちらを見てきた。疑われてる！完璧に疑われてるよ！

「…嘘くやこ」

「いやいや本当だって！ぼくの目を見て！ほらキラキラ輝いた正直者の目だろ？」

「私、心理学とか分からないし目を見て分かるわけないじゃない」

なんだかちよつと抜けてるよこの娘！今のはちよつとしたユーモアでそんな真面目に返されると普通に恥ずかしい。なんだよキラキラ輝いた正直者の目って。

「じゃあ、にい：司波達也に直接聞いてみよう！スピード・シューティングが終わったあとなら時間が空いているはずだから！」

「別にいいけど：私、司波達也って人ちよつと苦手。なんか怖いし」

「確かに悪魔みたいな人だけど怒らせなければ基本良い人だから大丈夫！」

「悪魔みたいな人は絶対良い人じゃないから駄目だと思う」

「大丈夫だって！行こうよ、ぼくの疑いを晴らすためにもさ！ねっ！ねっ！」

ぼくの必死の説得に心を打たれたのか彼女は少し身を引いて「：別にいいけど」と答えてくれた。なんだか彼女が引いているのは体だけではない気もするが気にしない。

「あつそういえば君、名前は？ぼくは古葉雪花、改めてよろしくね」

「私は平河千秋：一応よろしく」

その名前に少し引つ掛かり考えてみるが答えは出てこず結局、北山雫が華々しく優勝を飾ってもその答えは出なかった。

きつと気のせいだろう。

九校戦四日目③

スピード・シューティング女子決勝が終わり客席も疎らになってきたころ、ぼくは兄さんに電話をかけた。

「もしもし?今どこにいる?」

『第一高校の天幕で昼食を食べているが…どうかしたか?』

「いや友達が出来たから紹介しようと思って」

横からえっ? 私たち友達だったの? という悲しくなる声が聞こえてきたが無視する。

『お前に友達が出来るとは…少し今日の試合が心配だな。ほのかには注意するよう言っておこう』

「普通に酷いよ!ぼくだつて友達作れるよ!昨日も一人友達出来たし?百人も夢じゃないかもね!」

『…そうか、それで昨日もあんなにテンションが高かったのか。まだ六時だというのに寝ようとしてたしな。それでどうする?こっちに来るのか?』

天幕には絶対に行きたくない。原作キャラの巣窟でもあるし兄さん達と兄弟だとバレたら酷いことになるのは目に見えている。

「ちよつと行きたくないな、ホテルに戻ってこれない?出来れば一人で」

『難しいな、雫はともかく深雪は絶対ついてくるぞ?』

どうやら兄さんは姉さんと北山雫と一緒にいるらしい。これは難しい選択である。友達にホラ吹きだと疑われたままでいるか、姉さんと遭遇するか。

「仕方ない、姉さ…司波さんは連れてきて良いよ。でも同じホテルに泊まつてるのは黙っておいてよ。」

『…どんな事情があるか知らないが深雪を怒らせるなよ？俺にまで被害がくるからな』

ぼくが姉さんを司波さんと言い直したことで何かあると察してくれた兄さん。流石ですお兄様！

「分かってるよ、じゃあぼくらまだお昼食べてないし先にホテルに行ってるから」

『了解した』

電話を切り兄さんから了承を得られたことを伝えようと横を見るとまたもジトーツとした目でこちらを見ている平河さん。その目が言っている、私たちはいつから友達になったのかと。

「ぼっぼくは友達になりたいなくって思うんだけど…駄目？」

ぼくがすぐるような瞳で見つめたからか平河さんはため息を吐くと言う。

「…作ったっていうのが本当だったらね」

言うだけ言うどぷいっと顔を背けてどんどん歩いて行ってしまおう平河さんにぼくは走って追い付く。

「友達になったら名前で呼んでいい？」

「別にいいわよ」

そうしてまた歩きだした平河さん、いずれはちーちゃんにぼくは尋ねる。

「ねえ、これどこ向かってるの?」

ちーちゃんは赤面した。



ちーちゃんとホテルにて昼食を取り兄さんと姉さんをエントランスにて待っている時、ぼくはふと気になって尋ねる。

「そういえば平河さんはどこ泊まってるの?それとも、日帰り?」

「10日間全部見るつもりだから泊まり。今日は二駅先で降りて少し歩いたところにあるホテル、明日からはそのホテルからさらに歩いたところにあるビジネスホテルに泊まる予定」

10日間連続では部屋が取れなかったのだろう。おそらくちーちゃんはお姉さんがエンジンニアに選ばれてから部屋を取ったのだろうし。

「不便じゃない?」

「不便だけど、部屋が取れただけマシ。九校戦は人気あるし」

「ふーん、ちよつと待ってて」

ぼくはちーちゃんに断りを入れてその場を離れると響子さんに電話をした。今日は仕事つて言ってたけど昨日、ご心配をお掛けしましたの電話を入れたときお昼頃なら連絡が取れるから相談があれば電話してと言われていたし大丈夫だろう。

「もしもし、響子さん?少し頼みたいことがあるんですが」

『何かしら?私に出来るようなこと?』

「ええ、実は新しく出来た友達をぼくと同じホテルに泊めさせてあげたいんです」

『たぶん大丈夫よ。お祖父様に言えばそれくらい簡単簡単。今日の試

合が全部終わるまでには部屋を空けといてもらうから後で友達紹介してよ?』

「はい、きつと」

そうしてちーちゃんの部屋をコネで勝ち取ったぼくは笑顔でちーちゃんを待たせたエントランスへと赴いたのだが――

「雪花…貴方のお友達って女の子なの?」

――そこには非の打ち所のない、まるで絵画から飛び出してきたかのような美しい笑み（ぼく命名ブリザードスマイル）を浮かべて立つ氷の女王がいた。

何故かぼくの頭に修羅場という言葉が過った。

九校戦四日目④

姉さんの笑顔には人を凍らせる魔力がある。それはまるで吹き荒れるブリザードの如く、故にブリザードスマイル。そのブリザードスマイル（略してブリスマ）を諸にくらってしまったぼくはその場を動くことすら出来ずただ冷や汗をダラダラと流す。ふと姉さんの後ろに立つ兄さんを見るとまるで頭痛を堪えるかのように頭を押さええており言外にお前のせいだと言いたげな顔だった。

「この娘が貴方のお友達なのでしょう?」

ニコツとより笑顔を強める。ぼくの体温は下がる。

「うっうん、平河千秋さん」

当人であるちーちゃんはぼくの様子を不思議そうに見ている。そりや姉さんは表面上まともなことしか言っていないからね!でもこの笑顔はヤバイ時の奴なんだよ!ぼくが学校行かないからと告白した時くらいのヤバさなんだ。

「深雪、とりあえず座ろうか。ほのかの試合までまだ二時間あるんだ、座ってゆっくり話そう」

「そうですねお兄様」

このままではこれからお話尋問が始まるわけですね分かります。ぼくは席についた兄さんにアイコンタクトで話を円滑に進めてくれと頼む。するとそれを分かってくれたのか兄さんはさりげなく話題を提供してくれた。

「で、友達を紹介するというのは建前、いや、ついでなんだろう? 本当の用はなんだ?」

「実は北山さんが使ってた例のCAD、ぼくが作ったって言ったら嘘くさいって言うんだ。だからこうして兄さ：司波くんに証明してもらおうと思って」

危ない。うっかり兄さんと言うところだった。ぼくが兄さんの弟だと知ったら折角仲良くなったのに引かれてしまうかもしれない。兄さんのこと怖いとか言ってたし。

「そうか、ならCADを持ってくれば良かったな(何故兄弟だと隠している?)」

「あーそうだね。気がつかなかったよ(兄さんが怖がられてるからだよ)」

言葉で会話をしつつアイコンタクトでも会話をする。これはぼくらが姉さんに気がつかれぬよう合図を送り合うために考え出したものだ。

「平河さん、こいつの言っていることは本当だよ。俺が昨日作らせたんだ」

「……昨日?..」

ちーちゃんが首を傾げる。あれ?どこがおかしいところあったかな?..

「うん、昨日六時間かけて作ったよ。司波君がギリギリに持ち込むものだから夜中までかかって今日は寝坊したよ」

「あの何故さつきからお兄様のことを司波く…」

「いやーすまなかったな、お前は追い込まれた方が力を発揮するからな、無茶をさせた」

兄さんが姉さんの言葉を遮る。余計なことを言わせないためであ

る。

「たったの六時間であれを作ったの!？」

「司波君が完成品を持ち込んでくれたからだよ、一から作ってたらい日かかった」

「結局化物ね」

「酷い」

まさかの人外扱いである。たしかにちよつと早さには自信があるけどさすがに酷い。

「あの私の話を…」

「そういえば！平河さんはCAD詳しいみたいだけどやっぱり魔工師志望？」

「えっええ、実技はあまり得意じゃないしCADは好きだから」

姉さんの言葉を露骨に遮ったぼくにちーちゃんが困惑の表情を浮かべるが答えてくれる。

そして間を開けずに兄さんが話し始める。

「そうか、なら今度今日使った標準補助システム付きの汎用型CADを見せてあげたらどうだ？何なら今日にでも」

「見たいー!」

その後は話題をCADの結構ディープな話に移していきつつ間を開けずに話すことで姉さんが会話に入ってこられないようにする。まるでいじめである。ごめん姉さん。後で謝るから。

「おつともうこんな時間か。まだ一時間あるが余裕を持っていくべきだな。行こうか深雪」

「え、ええお兄様」

若干涙目の姉さんに罪悪感で胸がいつぱいだ。今すぐ土下座したいくらいである。

しかしそこに兄さんの華麗なフオローが入る。さりげなく姉さんの肩を抱き自らに近づけそのまま歩いていったのだ。姉さんは顔を赤くしてさらにすり寄る。まるで恋人同士の距離である。いつもならぼくがいる前ではやめて欲しい行為だが今はナイスだ。流石ですお兄様！

さてぼくも本題に入らなくては。

「ねえ、これでぼくら今日から友達だよね？」

「…ええ、よろしく」

「こちらこそよろしくねちーちゃん！」

渾身の笑顔で言う。

「名前で呼んでいいとは言ったけどそれは止めなさい」

「なんで？可愛いのに」

「…私もかーくんって呼ぶわよ？」

「良いねそれ！雪花の『か』から取ったんだろ？」

「…もういいわ」

なんでか諦めの表情で歩いていくちーちゃんにぼくは一つ言い忘れていることがあるのを思い出した。

「あつちーちゃん、このホテルの一部屋開けてもらったからここ泊まりなよ」

ちーちゃんの目が再び見開かれた。

九校戦四日目⑤

新人戦女子バトル・ボード、予選六レース。兄さんと姉さんの友人である光井ほのかの試合はスタート直後のフラッシュでも焚いたような発光から始まった。光井ほのかが水面に光学系魔法を仕掛けたのである。

「これ、司波達也が考えた作戦でしょ？」

眩く発光した水面を諸に見てしまったらしく目をパチパチとさせ、その後、若干恨めしそうにちーちゃんが言う。

「なんで？」

「こんな性格の悪い作戦を思い付くのはアイツくらいだからよ」

何も言い返せなかった。



兄さん達と別れた後、ちーちゃんのホテルへ荷物を取りに行きぼくと同じホテルに移動、既に用意されていた一室に放り込んで走り観客席に着いたのはこの試合が開始する十分前だった。

「またお前らはやってくれたな、新人戦女子は一校の独壇場だ」

「正直、悔しいね。水面に干渉しての目眩まし…何故思い付かなかったのか不思議なくらいだよ」

「うちには化物がいるもんで」

そしてぼくの隣には『クリムゾン・プリンス』一条将輝、その隣には『カーディナル・ジョージ』、吉祥寺真紅朗。

「…ねえ、なんでこの二人と普通に話してるの？『クリムゾン・プリンズ』と『カーディナル・シヨージ』、三校だしどちらも有名人よ」
「マツキーは友達なんだよ、吉祥寺くんとは今初めて会ったけど」
「…『一条』をマツキー呼びって」

ぼくらがこそこそと話しているとマツキーがニヤニヤとしながらぼくの肩に手を置く。

「彼女か？」

「残念、友達。今日知り合った」

「正直コイツは男とは思えない」

ひよっこりぼくの横から顔を出してちーちゃんが言う。ちよつと傷ついた。

「ねえ将輝、そろそろ紹介して貰えないかな」

「ああ、そうだな。と言ってもこちらの彼女は初対面なんだが」

マツキーがこつちを見てくるので頷いて自己紹介を始める。

「ぼくは古葉雪花。見ての通り一校で一年生。一応言っておくけど男だよ。で彼女が平河千秋さん。ぼくと同じ一校の一年生」

自己紹介に性別を付け加えなければいけないことに少しばかりの悲しみを感じながらちーちゃんも紹介するとちーちゃんはペコリと頭を下げる。

「僕は吉祥寺真紅朗。将輝と同じ三校の一年。よろしくね」

ぼくらはお互いによろしくと言い合いながら席につき雑談へと移る。

「そういえば雪花、お前はどの競技に出るんだ？俺はアイス・ピラーズ・ブレイクとモノリス・コードだが」

「ぼくは出ないよ？応援だけ」

「いやだってお前懇親会に来てただろ。ということは選手かエンジニアのはずだ」

「無理矢理連れてかれたんだ」

「誰に？」

「九島烈」

「はは、冗談は顔だけにしとけよ」

「さーて、また飛びきりのスクープでも眩くかなー！』一条将輝、吉祥寺真紅朗熱愛発覚！』つと」

「やめろ！」

立ち上がって否定した二人の声がシンクロする。

「将輝のせいで僕にまで被害が！」

「いやだっつて九島烈っつて…え？マジなのか？」

ぼくはゆっくり頷く。

「一時期魔法を教えて貰ってたんだよ」

「…だからホテルの部屋取れたんだ」

ちーちゃんが謎は全て解けた！とでも言うようなスッキリした顔で頷いているのとは逆にマツキーは世の中の理不尽に疲弊したサラリーマンみたいな顔をしている。

「お前何者？実はすごい奴だったりするのかわ？」

「まさか、九島烈とはちよっと知り合いなだけ。なんか目をつけられてるんだ。迷惑な話だよ」

「目をつけられてるって……それが凄いんじゃない」

吉祥寺真紅朗がなにやら呟いているがぼくは本当に大した人間じゃない。四葉に狙われていて九島に目をつけられ五輪と懇意にしトラスシルバーのトラスで兄と姉がチートなだけだ。ほらどこにでもいる普通の高校生だ（涙）。

「しかしそうなるとお前とは戦えないわけか。折角だし戦ってみたかったんだがな」

「勘弁してよ。マツキー」

「人を油性ペンみたいに言うな」

「じゃあイッチー」

「却下、普通に名前で呼べばいいだろ！」

マツキー良いと思うんだけど。まあ本人が嫌がるんだったらやめておこう。

「なんだか二人とも数日前に初めて会ったとは思えないくらい仲が良いいね。相性が良いのかな」

吉祥寺真紅朗がニコニコとしながらそんなことを言うので仲が良いいんですよアピールをするために肩を組もうとするが背が足りなかった。身長って努力ではどうしようもないものの一つだよね…。

「こうしてみると兄妹みたい」

おいこらちーちゃん。そこは兄弟だろ。吉祥寺真紅朗、頷くな！

「勘弁してくれ、妹なら間に合っている」

苦笑い気味に言うマツキー改め将輝にぼくはとりあえず脛を蹴っ

ておく。

痛いよね、脛。

「拗ねた時の対応が将輝の妹とそっくりだ」

吉祥寺真紅朗のそんな何気ない一言にぼくはちよつと落ち込むのであった。

九校戦五日目①

将輝、吉祥寺真紅朗と交流を深めた後、ホテルへと戻りちーちゃんに約束していたぼくお手製のCADを見せてあげたり、CADについて語り合ったりして夜を過ごし少し早めに就寝した。

今日はいよいよ我が姉にして完全無欠の氷の女王、司波深雪の試合がある。いくら試合が午後とはいえ万全を期したいのだ。もし観戦してませんでしたーなんてことになればぼくは氷のオブジェと化すだろうし。

姉さんの試合の前にまずは兄さんの担当した明智英美、北山雫の試合がある。

第一試合の明智英美が何とか勝ち抜き第五試合、北山雫の試合。選手が登場してすぐに将輝が疑問を口にする。

「振袖か、やりにくくないのか？」

「女子ピラーズ・ブレイクはファッション・ショーの様相を呈しているからね。振袖もそれほど珍しくはないようだし」

「ぼくらには分からないもう一つの戦いって奴じゃないかな」

ぼくがこの面子で唯一の女子であるちーちゃんの方を見ているが私には分からないわとのお返事。ファッションに拘りはないようだ。

「やはり凄い干渉力だな。スピード・シユートイング優勝者は伊達じゃないってことか」

「うん、それに今の魔法、『共振破壊』の応用…高度に技巧的な術式だよ」

圧倒的な北山雫の試合を前にして意見を交わす二人。その目は真剣そのものでただ観戦に来ているだけのぼくが馬鹿みたいなので居づらい。

「将輝、ぼくもう一回戦の最終ゲームまで見るのだからお昼食べてくるよ」

「ああ、了解」

ちーちゃんを誘ってみるとついてきてくれるそうなので一緒にお昼を食べることにする。ホテルに入っているレストランでだ。

「あらお友だちって女の子だったの？」

そこに現れたのはぼくの婚約者（仮）である響子さん。特に連絡もしていないのにどうしてここにいることが分かったのか不思議に思うものの良い機会なのでちーちゃんを紹介する。ペコリと頭を下げるちーちゃん。

「はじめまして、藤林響子です」

ふわりとした笑みを浮かべながら自己紹介をされちーちゃんの頬が少し赤く染まる。するとまるでそれを誤魔化すかのようにちーちゃんが口を開いた。

「あの、二人は何のお知り合いなんですか？」

「ああ私、婚約者なの。雪花君の」

ヤバイ、と思ったときにはもう遅かった。響子さんは特大の爆弾を落としそれに被爆したちーちゃんは固まっている。

「なんで言っちゃうんですか、察してくださいよ！」

「良いじゃない本当のことなんだし」

本当のことだから不味いんだよ！

どうすんのこの状況。

「貴方中々やり手だったのね…」

「誤解だよ！半強制的に婚約させられたんだよ！」

「酷い！私のことは遊びだったのね！」

「酷いのはそっちだよ！ぼくで遊ばないで！」

誤解を解くというのはとても難しいことだと知った今日この頃。響子さんのノリによつてちーちゃんの誤解が加速。その誤解を解こうとすればするほど疑いが深まっていくという最悪のスパイラルから抜け出すのに小一時間。浮気した夫の気持ちを味わってしまった。一生知りたくなかった気持ちである。

「充分楽しめたし私帰るわね、仕事もあるし」

散々場を荒らした元凶である響子さんは満足気な顔で料理も食べずに帰っていった。本当に何しに來たんだあの人は。

そしてちーちゃんもきゅもきゅとなんか色んな野菜の入ったサラダを食べている。レストランに来て一時間も経つというのに食べ始めたのはついさつき。姉さんの試合に間に合わなかったらぼく、氷のオブジェになってしまうんですが。

あれっ？手が震えてフォークが持てないや。



もきゅもきゅと食べるちーちゃんを急かしつつ食事を終え二人分のお会計を急いでる時に便利なクレジットカードで支払い走って会場に向か……。おうとしたところでちーちゃんの一言。

「食べてすぐは走れない」

試合には間に合わなかった。

九校戦五日目②

「平河さん、古葉くんどうしちゃったの？なんだか死を前にした死刑囚みたいな顔してるけど」

「そっちこそ、一条くんどうしちゃったの？なんだか魂を抜かれたみたいなの顔してるけど」

姉さんのアイス・ピラーズ・ブレイク一回戦。どんな魔法を使おうという試合展開だったのか。曖昧とはいえ原作知識のあるぼくには分かっている。それをあたかも試合を観戦していましたよ風に語ることは容易いだろう。しかしそれはぼくがそこにいなかったという事実がバレていなかった場合に限る。

普通なら観客席の中から一人の人間がいるかいないかを確認するのは不可能である。しかしぼくの兄さんはその不可能を可能にする力、エレメンタル・サイト精霊の眼を持っている。ぼくがいなかったことは確認されているのだ。

そして兄さんは確実にチクるだろう。

つまりは詰みである。



「雪花、私の試合どうでしたか？」

姉さんの二回戦を含めた新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイク予選全試合を観戦し、部屋に戻るとそこは雪国でした。いやぼくの部屋なんだけどね！何故か雪国の景色が見えるや。猛吹雪のね！

「圧倒的だったよね！流石ですお姉様！そこに痺れる憧れ…」

「私、怒っているのよ？」

「ごめんなさい！」

土下座だった。

条件反射の域に達した最速での土下座だった。

「…まあ二回戦はちゃんと観戦していた様だし許してあげます」

助かった。ぼくはほっとした思いで顔を上げようとする。がまるでそこに見てはいけないものでもあるかのように肉体が顔を上げることを拒否していた。何故なのか。その答えは姉さんの口からすぐに語られた。

「ただし、これを着たらだけど」

恐る恐る顔を上げた先にあつたのは見慣れた服だった。この九校戦中何度目にしたか分からないその服はぼくからしたらコスプレ以外の何物でもなく男物でさえ恥ずかしかつた服。そして今も姉さんが着ている服と同じもの。

つまりは一校の女子制服だった。

「エイミィに貸してもらったの。私のでは少し大きいし」

じりじりと虚ろな目をした姉さんが迫ってくる。逃げないと！退路は!?すぐ後ろにドア！やった！逃げられ…

「悪いな雪花」

ドアを開けた先には兄さんが立っていた。初めから退路は断たれていたのである。そして無情にも閉まるドア。最後に見た兄さんの顔が言っていた。

『お前の自業自得だ』

「さてお着替えの時間ですよ？」

ぼくは投了した。



鏡に映る一校の女子生徒。顔には薄く化粧が施され最近のびてきた髪は何やら飾りのように編み込まれオシャレに。背後に絶世の美少女が立っついていようとも霞むことのない美貌。ただその瞳だけは酷く濁っておりまるで全てに絶望しているかの様。

「似合ってるわよ雪花」

というかぼくだった。女装したぼくだった。

「無理言っ借りてきたかいがあったわね」

「ソウダネー」

なんだこの美少女は。ぼくより可愛い女子っているの？とか一瞬考えてしまった。死にたい。

「写真もいっぱい撮ったしもう着替えていいわよ。エイミーには感謝しない」と

ぼくが着替えて制服を渡すと姉さんは満足気に帰っていった。とりあえず許して貰えたということだろう。

そのために失ったものは大きすぎたが。

ぼくは取り合えずこの何とも言えない喪失感を埋めるべく化粧も落とさず完成間近のCAD、エクスカリバーを完成させることにした。そして作業に取りかかろうとしたところでドアがノックされる。あれっ姉さん忘れ物でもしたのか？とぼくは確認もせずドアを開けてしまう。開けてしまった。

「……やっぱり貴方そっちの趣味があつたのね」

新たな誤解が生まれた。

九校戦六日目①

ちーちゃんの誤解を解くことにかかなりの時間と労力を使い女装趣味を疑われることの辛さを知って将輝を女装ネタで弄るのは止めてあげようと思った今日この頃。全ての元凶たる姉さんは無双していた。というより一校が無双していた。なんと新人戦女子アイス・ピラーズ・ブレイクにおいて一校が決勝リーグを独占したのである。いやぼくは知っていたけどね。だからこそ同一高が決勝リーグを独占するのは初めてらしく観客が騒然となっている中どうにもテンションが上がり切らずに微妙な感じになっているのだ。

「これで決勝リーグは無くなったわね。ポイントは一緒なんだし同率優勝にするのが無難。大会委員会は楽できるし」

「いや〜決勝は行うんじゃないかな」

ぼくがニヤニヤとしながらちーちゃんに返事をしたところで明智英美選手が棄権、司波深雪選手と北山雫選手による決勝が午後一番で行われることがアナウンスされる。

「……この女装野郎」

ちーちゃんが悔しげに呟いた。酷い。



振動系魔法『フォノンメーザー』。

超音波の振動数を上げ、量子化して熱線とする高等魔法。それを北山雫は兄さんの得意技、否特異技である複数CADの同時操作によって放った。これにより今までの三試合、無傷だった姉さんの氷柱から白い蒸気が上がりはじめる。がそれだけだ。そしてそれさえも姉さんの魔法『ニブルヘイム』の冷却によって上書きされていく。北山雫

の氷柱の一面に液体窒素の滴がびっしりと付着しその根本には水溜まりが出来ていた。

そしてそれは姉さんが発動した『氷炎地獄』^{インフェルノ}によって一気に気化する。その熱膨張率は七百倍。轟音を立てて北山雫の氷柱が一斉に倒れた。

「…圧倒的」

終わってみれば姉さんの氷柱は全て残っており北山雫の氷柱は全滅。結局姉さんの圧勝。兄さんが北山雫に授けた奇策でさえも姉さんには届かなかった。

流石です！お姉様！というよりちよつと引いた。強すぎだろ。

「見つけましたわー！」

姉さんの無双に引き気味になっていたからかぼくが彼女の存在に気がついたのは後ろから抱きつかれてからだだった。

「今日はなんて良い日なんでしょう！女神様に会えただけでなくお姉様にも再会できるだなんて」

強引に首を限界まで動かして後ろを確認するとそこには女の子がいた。肩に掛かるストレートボブの髪型にリボン。私服であろう夏らしいワンピースから伸ばされた二本の白い腕はぼくをガツチリとホールドしている。何この状況。というか誰！

「いいい泉美ちゃん!?何してるの!?!」

そして全く状況が分かっていない中新キャラ登場。ぼくに引っ付いている女の子を引っ張っているらしくぼくも一緒にイスから引きずり下ろされる。

「ちーちゃん助けて！」

「無理」

実に冷たい友達に救援要請を断られぼくは為されるがままとなつてしまう。

本当に何なんだこの状況！

「離して香澄ちゃん！」

「離れて泉美ちゃん！」

ぼくの背中を繰り広げられる戦い。ぼくはさながら取り合いされる人形である。

そして戦いはどんどんとエスカレートしていきガツチリとぼくをホールドしていた両手は腰から首へと移動し…。

「痛い痛い！首絞まってるから！ちよつマジでヤバ…。」

あれ、なんだか音が遠ざかってい…く…。

めのまえがまっくらになった！

九校戦六日目②

「本当にごめんなさい！」

「誠に申し訳ございませんでした！」

中学生と思われる女の子二人に土下座されている男子高校生がいた。というかぼくだった。

「いや、うん、取り合えず頭上げて。女の子に土下座させるのは気が引けるしさ」

謎の女の子二人組に首を絞められ気絶させられたぼくは医務室にて目覚めた。すると女の子にいきなり土下座謝罪される。もはやぼくには対処不能な事態である。そもそも原因が分からないのだ。仕方ない。

「えーつと取り合えずなんであんなことしたのか聞いてもいいかな？」

ぼくが尋ねると土下座は止めたものの未だ床に正座している二人の女の子の片割れ、ショートボブの方が何故か目を輝かせはじめる。

「私^{わたくし}、前に一度お会いしたことがあるんです」

……全然覚えてない。二人ともかなりの美少女だし忘れるわけもないと思うんだけど。

「その時から私、理想のお姉様として憧れていました！」

ガシツとぼくの両手を包むように握ると吐息が感じられるほどにまで顔を近づけてくる。

「…(っ)ほんっ」

そこでちーちゃんのわざとらし過ぎる咳払い。自分でも分かっているのかほんのり顔が赤い。そして赤面なんてしていませんが何か？というような顔でビシツとぼくを指差して言う。

「…そいつ男よ」

「改めまして古葉雪花。男です」

クラッと女の子が倒れた。

ちーちゃんを下敷きにして。



「まさかお姉様がお兄様だったとは」

一分ほどで彼女は復活しお互いに改めて自己紹介した時の彼女の一言である。

まさかはぼくの台詞だ。七草の双子だったなんて。原作には登場していなかったが存在自体は知っていた。魔法業界では有名なように耳にする機会があったのだ。

「…まさか七草真由美会長の妹達だったなんてね。どうする？姉さんから会長に伝えてもらおう？」

七草の双子、その妹である七草泉美がぼくが男であったショックにより倒れた時、下敷きにされたことを根に持っているらしいちーちゃんが若干にやけながら言う。小さい。器が小さいぞ、ちーちゃん。

「うゝまた怒られるっ！泉美ちゃんのせいだよ！」

「ごめんなさい香澄ちゃん。私溢れ出る気持ちを抑えられなくて」

しょんぼりとしている様子を見るとなんだか可哀想な気もしてくる。なんか罪悪感あるし。

いやぼくは完全に被害者、女の子に勘違いされ散々な目にあっただけけど。でもぼくは高校生で相手は中学生、これぐらい許してあげるのが大人の対応って奴なんじゃないかと思う。叱る役はちーちゃんやんがやってくれているし。

「いいよ別に。会長には黙っておいてあげようよ。大した怪我もなかったんだし」

ぼくがそう口にすると双子の顔はパアツと明るくなり逆にちーちゃんの顔は残念そうに変わった。おいちーちゃん。

「ありがとうございます！」

七草香澄が涙ながらに感謝を述べる。そんな嫌かお姉さんに怒られるの。ぼくなんかは姉さん怒らせたらゲームオーバーなんだけどね！

「流石ですお姉様、いえ、お兄様！懐が広い！」

ありがとう、でも流石ですお兄様はぼくにはまだ早いかな。

「お兄様は競技にご参加されないのでですか？」

ぼくがお姉さんにチクらないと分かって安心したのかそこから雑談へと移行した。不満気だったちーちゃんはさつきとホテルに戻ってしまったので三人で話していると泉美ちゃん（本人からそう呼ぶようにと頼まれた）にそんなことを聞かれたのだ。

「ぼくは出ないよ、応援だけ」

その時ぼくは特に考えるでもなくそう答えた。ごく自然なことだ。だってぼくは九校戦にエントリーされていないしそもそも一校で完全にぼくの存在を把握している生徒は二人しかいないのだから。

だから考えなかった。知っていたはずの可能性の一つを見落としていた。この九校戦で唯一エントリーされていない生徒が参加することとなる競技を。そしてその競技に参加する人員を決めたのは誰なのかということ。

「雪花、お前には新人戦モノリス・コードに参加してもらおう」

創決められた物語作ぼくの物語ではない現実ぼくの物語が始まろうとしていた。

九校戦編へ新人戦モノリス・コード
こうして彼は舞台に上がる①

「では1―Eの吉田幹比古と、1―Cの古葉雪花を」

新人戦モノリス・コード予選リーグ、第一高校と第四高校の試合。試合開始直後の奇襲で『破城槌』を受け一校の選手三名が重傷を負うという事故が発生し代わりの選手として残りの試合に出場することとなった達也は他のメンバー二名をそう指名した。

「古葉雪花？吉田幹比古が応援メンバーとは別口で、このホテルに泊まっているのは知っていたが」

古葉雪花という名前を疑問に思ったのは部活連の会頭である十文字克人だけではないだろう。この場にいる全員が誰？という顔をしている。

「吉田同様このホテルに泊まっています」

今は少しでも時間が惜しい。達也の言葉に古葉雪花なる人物への疑問は残るものの克人は中条あずさに二人を呼んでくるように伝える。

「……達也くん。その人選の理由を訊いても構わないかね？」

すると渡辺摩利がこの場にいる人間全員の疑問を代弁した。

達也はそれに男子メンバーの試合も練習も殆ど見ておらず得意な魔法も魔法特性も知らないということを理由として挙げた。

「今の二人なら、良く知っているということか？」

「ええ。吉田と古葉のことは良く知っています」

「ふむ……一理ある。調整は他のエンジニアが手伝うとしても、相手のことが分からなければチームプレイは難しいだろうからな。それで、最大でない理由は何かね？」

「実力ですよ」

「ほう？」

達也の自信に満ちた回答に興味深げな視線が集まったところで摩利は真由美をちらりと見る。

「達也くん、吉田幹比古さんと貴方がクラスメイトで友人なのは知っていたわ。校内でも何度か一緒にいるところを見ているしね。でも古葉雪花くんという名前がどうして出てきたのか全く分からないよ。1-Cという一科生だし深雪さんも別のクラス。風紀委員でもないわよね。達也くんとどんな接点があるのか教えてもらうわけにはいかないかしら？」

真由美が疑問に思ったことは全員が疑問に思っていたことである。達也が二人を選んだ理由は「実力があり良く知っているから」。幹比古はクラスメイトで友人、彼のことを良く知っており実力を知る機会があってもおかしくない。ところが古葉雪花なる人物に関しては何の繋がりも見えてこない。そもそも古葉雪花という人間を知っている者がこの場に達也しかいない。一科生で達也も認める程の実力を持ちながら九校戦にエントリーされていない生徒。そんな生徒がいるのかと思うのは自然なことだ。

達也は内心で雪花に少しばかりの謝罪をして口を開いた。

「彼は弟ですから」

一瞬の静寂。そして真由美が達也を睨み付けた。

「達也くん！冗談を言っている場合ではないの！」

「冗談ではありませんよ、正真正銘弟です。彼が古葉つまり母の旧姓を名乗っているだけです」

「リンちゃん！」

「既に調べました。古葉雪花。弟かどうかはさておき確かに一校一年のC組に在席しているようです。…ただ出席率は0%、入学以来一度も登校していません」

「……何それ…そんな生徒がいるの？」

愕然とする真由美。一校のそれも一科生に入学できるのはほんの一握りの優秀な魔法師の卵達。そこに入学するためにはどれだけの努力をしなくてはならないのか真由美は身を持って知っていた。

「…病気が何かなの？」

「病気ですね。引きこもりです」

「私、頭痛くなってきた」

真由美が頭を抱えているとあずさが息を切らしてミーティングルームへ入ってくる。その傍らにはわけがわからないといった感じの幹比古がいる。

「司波くん！教えてもらった部屋に行ったら女の子しかいませんでしたよ！一応確認はしましたが人違いだと言われましたし！」

「恐らくそいつです。そしてもう部屋からは逃亡しているでしょう」

「ええ!?あれが古葉くん!?!」

「先に吉田の方だけ話を通しておきましょう。古葉は深雪に連れてこさせます」



幹比古が突然の出場の申し出に混乱しながらも頷き、一旦部屋へ戻

り状況を整理しているころ。

古葉雪花は電話で呼び出しを受けていた。

『もしもし、雪花。今どこにいるのかしら?..』

「さっさあ?風の赴くままに來ちやっただからなー!」

『そう、では十五分以内に一校のミーティングルームへ來なさい。來なければ一昨日の写真が白日の下にさらされることになるわよ?..』
「五分で行きます」

彼は何年か振りの全力疾走を余儀なくされた。

九校戦七日目 こうして彼は舞台に上がる①〈裏〉

新人戦モノリス・コード予選リーグ、第一高校と第四高校の試合。試合開始直後の奇襲で『破城槌』を受け一校の選手三名が重傷を負う事故が発生した。原作通りだ、ぼくは知っていた。でも止められなかった。止めなかった。それによって別の事故が引き起こされることを恐れたからである。ぼくが何も手を出さなければ九校戦は原作通りに進み一人の死人も出すことはなく一校は優勝し黒幕は兄さんによって掃除される。

だから仕方なかったんだ。…仕方なかった。

七日目の競技が全て終わり部屋に戻ったあと、ぼくはベッドの上に寝転びぼーっと天井を見つめながら思考を巡らせていた。悩んで悩んで正解だと信じることにした回答にまだ悩んでいるのだ。もう終わったことだというのに。

すると部屋がノックされる。ぼくはまた確認もせずドアを開けてしまう。

「すいません、一校一年C組の古葉雪花く…ん？」

中条あずさ。一校の生徒会メンバー。可愛い…ってちやうわ！えっ！なんで!?

ぼくの脳が一生懸命に導き出した結論はモノリス・コードの出場の申し出。吉田幹比古と西城レオンハルトのどちらかの役がぼくに回ってきたのだ。選手を決めたのは兄さんなんだ、ぼくを選ぶ可能性もある。見落としていた。まずい、これは明確な原作崩壊だ。ここでぼくが出場してどんな影響が出るか分からない。混乱しながらもどう対処するか考えているとぼく以上に混乱している人がいることに気がつく。

「あれ!?あれれ!?なんで!?!どうして!?!部屋は間違っていないのに!」

ぼくが古葉雪花だと気がついてない?顔は見せられてないのか!誤魔化せるのか?

あつでもなんで古葉雪花じゃないと思ったんだろう?部屋を教えられてその部屋にいたんだから間違えようもないと思うんだけど。それこそ明らかに高校生じゃなかったり性別が違つ……性別……?。

……………。

かつ皆目検討もつかないな!なんでこの人ぼくが古葉雪花じゃないと思つたんだろうね!おかしな人だな!本当に!

まあラツキーだけど!ラツキーなんだけどね!

…はあ…泣きそう。

「あの!古葉雪花くんですか?一校一年C組の」

脳内はさておき黙つたまま硬直しているぼくに不安でいっぱいになったのかすがるような涙目でそう問いかけてくる中条あずさにはぼくはにっこり微笑んで言った。

「人違いです」

「失礼しました!」

凄いい勢いで頭を下げるとドアを閉めバタバタと立ち去っていく中条あずさ。

ぼくの心の傷を代償に危機は去つたのだ。

さてどこかに逃げるか。

『もしもし、雪花。今どこにいるのかしら?』

危機が去つた?誰だそんな馬鹿なこと言った奴。電話に出なかつたら後で怖いので泣く泣く出てみたら姉さんの冷たい声が聞こえた。

やべー怒ってる。

「さっさあ？風の赴くままに来ちゃったからなー！」

『そう、では十五分以内に一校のミーティングルームへ来なさい。来なければ一昨日の写真が白日の下にさらされることになるわよ？』
「五分で行きます」

ぼくは風になった。

こうして彼は舞台上に上がる②

「雪花、お前には新人戦モノリス・コードに参加してもらおう」

大急ぎで一校のミーティングルームに入ってきた雪花に達也は開口一番でそう言った。

「ちよつと待つて達也くん！彼？が古葉雪花くんなの？」

「そうですか？」

「そうですが？じゃないわよ！どう見ても女の子じゃない！」

「ぐはっ！」

「雪花、自信を持つて。貴方は可愛いわ」

真由美の言葉に膝を抱え「…どうせぼくなんか」と落ち込みはじめた雪花に深雪が慰めという皮を被った追い打ちをかける。この場において彼に味方はいないのだ。

「確認しましたが生徒データには男で登録されています。偽りようもありませんし男であるというのは事実のようです」

「嘘！こんな可愛いのに？」

「あとは弟かどうか、だな」

市原鈴音の言葉に真由美は未だに信じられないようでペタペタと雪花の頬を触る。

「弟であるかどうかはこの際重要ではない。今、確かめるべきは実力だ」

克人の言葉に場の雰囲気は真剣なものへと変わる。

「で、どうなんだ達也くん」

「ご心配なく。本人は隠しているつもりなのですが魔法技能で言えば深雪レベルでしょう。それに座学も俺と同等程度は出来るはずですよ」

達也の言っていることはつまり今年の一年生で魔法技能、学力、共にトップに立てるだけの實力があるということだ。

「…達也くん、シスコンだけでなくブラコンもだったの？」

「…誇張はしていませんよ、あくまで事実ですよ」

全員の視線が雪花に集まる。その雪花はといえば膝を抱えて落ち込んでおり後ろから深雪に頭を撫でられていた。

「あれが…か？達也くんの言うような化物には見えないんだが」

「入学時の成績で言えば取り立てて目立ったものではありません。順位でいえば47位、学力テストの方だけの順位でも43位と一科の平均程度ですよ」

摩利と同じ疑いを持っていたらしい鈴音が雪花の順位を読み上げる。達也が言うほどの實力ではないということをお願いしたいのだろう。「既に二科生の参加を認めているわけですし一科生であるならば良いのでは？チームワークという面でも兄弟であるならば心配はないでしょうし」

発言をしたのが服部形部ということもあり皆は素直に頷くことが出来なかったのか暫くの静寂が訪れる。

最近では改善されてきたものの二科生を卑下するような発言や態度が見られた生徒だからである。とはいえ服部の言っていることが正論であることはたしかだ。単純に二科生よりも一科生の方が実力の上であるというわけではないが一つの基準としては十分なものであるし二科生を出場させるというイレギュラーに比べれば一科生であ

る雪花の方が順当だ。

やがて克人が頷き真由美がそれに答える。

「達也くんの言葉を信じることにしましょう。新人戦モノリス・コードは司波達也くん、吉田幹比古くん、古葉雪花くんの三人に出場してもらいます」

雪花の新人戦モノリス・コード出場が決まったのである。が、ここで雪花が異議を唱える。

「ぼく、出たくないんですけど」

凍りつくミーティングルーム。雰囲気もそして物理的にも冷えきった。

「雪花、何故出たくないのかしら?」

それは笑顔。誰もが魅了される最高の笑顔。雪花にとっては身動き一つ取れなくなるほどの笑顔^{庄カ}。その中で雪花はモノリス・コード出場を回避すべく涙を飲んで言う。

「だって、ぼく…怖い」

全てのプライドを捨て放った渾身の一言。胸の前で祈るように両手を組み顔を少し傾け下から覗きこむように涙目で深雪の顔を見ながら。

「雪花はモノリス・コードには出場しません」

「深雪さん!?!」

陥落した深雪は雪花を胸に抱き守るようにして言う。雪花の顔が

計画通りと言っているのを達也だけが分かった。そこで今度は達也が説得を試みる。

「雪花、何に怯えている？」

達也の質問は自然に思える。怖いから出場したくないという雪花に何が怖いのかと尋ねているのだから。

ただ雪花は不自然なくらい動揺しその瞳には困惑が浮かんでいた。まるで誰も知るはずのなかった真実を突き止められてしまったかのように。

「お前がいつも何かに怯え自らの可能性を狭めていることは分かっていた。が、それはもう終わったと思っていたよ。お前が友達を紹介してくれた時お前の瞳からは得体のしれない怯えが消えていたからな。それが今になって振り返っている。」

雪花、：何に怯えている？いや何を恐れている？」

雪花の恐れる理由と達也の考えているものは違う。達也は四葉に狙われたという経験から実力を見せればまた何者かに狙われるかもしれないと雪花が恐れていると考えていたが実際は違う。原作という筋書き通りに物語が進行しないことを恐れているのだ。そしてそのせいで何らかの不利が生じることに怯えている。

「お前はお前だ」

が達也の言葉は雪花に思い起こさせた。母の涙を見たとき、一条将輝と友人になったとき、何を決意したのかを。

雪花は悩み信じるべき『正解』を変えた。それは『原作』ではなく『今の自分』を信じるということ。

——この世界は原作創作ではない。

「出るよモノリス・コード」

——一人一人がちゃんと生きていてそれぞれの人生があつて物語がある。司波達也主人公だけの物語じゃない。

「で優勝する」

——そしてこれはぼくの物語だ。

こうして彼は舞台原作に上がる。

砕かれた希望

達也が使っているツイン・シングルの部屋に部屋の主である達也は勿論、吉田幹比古、西城レオンハルト、千葉エリカ、柴田美月の所謂いつものメンバーが集まっていた。

「ミキ、チョツとは落ち着いたら？」

「僕の名前は幹比古だ」

エリカとのお約束をこなし幹比古は空いているベッドにどっかり腰を下ろした。

「達也、もう一人って誰なんだい？古葉って名前しか聞いてないんだけど」

「誰それ？達也くんの知り合い？」

「弟だ」

「へー弟ねー…って弟!?達也くん弟もいたの!？」

「ああ、ちなみに深雪の弟でもある」

驚いたのは声をあげたエリカだけではない。達也以外の全員が目を丸くしている。

「でも名字が違うわよね？」

「エリカちゃん！」

きつと何か複雑な家庭の事情で名字が違うのだ、と思っていた美月がエリカを咎める。が実際のところ名字が違うことに大した理由はない。

「美月別にいい。俺も理由は知らないが家庭の事情とかではない」

「なんか古葉くんの気持ち分かるかも。優秀な上がいると下は肩身が狭いしね」

兄と姉に劣等感を抱き司波姓を名乗らなかつたのだと解釈したエリカが優秀な兄達を思い浮かべながら言う。

「あいつは一科生だぞ？」

エリカの想像を理解した上で達也が返す。

「学年首席にして生徒会メンバーな絶世の美少女の姉と二科生ながら入試のペーパーテストで一位、風紀委員に抜擢されこうして急遽九校戦にも出場することになった兄：弟としてこれほど高い壁はそう無いわよ」

「あいつは魔法技能でいえば深雪と同等程度だろうし学力で言うなら俺以上かもしれないんだが」

「達也くん：ブラコンもだったの？」

「……それはもう言われたよ」

達也としてはブラコンもという発言に異を唱えたいところではあつたがエリカに付き合つても疲れるだけだと分かつていたため押し黙る。

「で、なんでいままで紹介してくれなかつたんだ？仲が悪いってわけでもないんだろ？」

「本人から口止めされていたんだ。まあ単に機会がなかつたというものもあるがな。なんせ雪花は一度も学校に登校していない」

「一度も登校していないって…良く退学にならなかつたね」

魔法科高校でなくても一学期を理由もなく丸々休めば退学ということもありえる。

「ブランシュによる襲撃によって学校側も対応に追われていたからな。一人の生徒を気にしている余裕はなかったのだろう」
「そもそもなんで学校来ないんだ？」

レオの当然ともいえる疑問に達也は頭を抱える。先程のミーティングルームでも答えたことであるがこうして改めて考えてみるとやはり自分の弟はおかしいのだと実感させられるからだ。

「ただの引きこもりだ。学校に入学したのも念のためと言っていた」

全員が微妙な顔をした。答えた本人である達也すらもである。

ここにいるメンバーは皆、二科生。本気で試験に挑みそれでも補欠としてやっと入学を許された者たちなのだ。念のため、で一科生になれた雪花に思うところはある。

「…やっぱりあんたらの弟ね」

エリカの呟いた言葉が誉め言葉でないことを理解した達也は顔をしかめた。



四人が雪花について話していた頃、その当人はといえば。

「きゃー！可愛い！小さい！」

「肌すべすべ！赤ちやんみたい！」

「やめて！ちよっ！服脱がそうとしてる人いるでしょ!?助けて姉さん！」

女の子にもみくちやにされていた。

そして女の子の中には二年、三年の先輩も混ざっているため深雪も助けることができずにいた。

「なんか深雪がちっちゃくなつたみたいな感じだね！」

「いひゃい！いひゃい！」

雪花の両頬を伸ばしながら明智英美が言う。

「本当だね、ちよつとこれ着せてみようか？少し大きいかもしれないけどきつと似合うよ」

「それミラージ・バットの衣装だよね!?着ないよ!?止めて！服脱がせようとするなあああ!!」

里美スバルが自らの衣装を片手に雪花に迫る。複数の女の子に両手足を固められている雪花は逃げることも出来ずにジタバタと手足を動かしながら口で抵抗を試みる。が、味方であつたはずの深雪までもがいつの間にか向こうに取り込まれスバルと共に着替えさせようとしていた。身体中に女の子特有の柔らかいものが当たっているがその感触を楽しむ余裕はない。雪花にしてみれば刻一刻と死刑が近づいてきているような気分なのだから。

「話せば分かるよ！ほら考えて！ぼくは男、それは女物！はい解決！ぼくは着ないよ！絶対着ないよ！」

涙目で良く分からないことを言い空しくも最後の抵抗をする雪花に深雪とスバルはにっこり笑顔で言い放つ。

「可愛いに性別は関係ない」

雪花の希望は砕かれた。

明かされた真実

—彼女は見ていてくれるだろうか？

魔法科高校の生徒ともなれば九校戦を見ている可能性は高い。会場にいなくとも映像媒体で見ることができのだから。

幹比古は突如、自分に転がり込んできた幸運に拳を握りしめる。その様子がエリカには落ち着いていないと思われたようであるが実際のところ幹比古の心は静かだった。

—見ていてくれ。君の言葉、証明して見せる。

彼の絶望まで後少し。



雪花が今にも女装させられそうになっていた時、一人の男子生徒が通りかかった。

服部刑部。フルネーム、服部刑部少丞範蔵である。

雪花は最後の希望とばかりに服部に助けを求めた。その結果—

「ううありがとう！本当にありがとう、はんぞーくん！」

「はんぞーくんと呼ぶな！大体俺は先輩だぞ!？」

—女装させられそうになったところを危機一髪で通りかかった服部に助けられた雪花は服部への好感度メーターが振り切る勢いで上昇していた。

「じゃあ、はんぞー先輩！ぼくは兄さんの部屋に行かなくてはならぬので」

「はんぞー呼びを止めろと言っているのだがっ！」

笑顔で手を振りながら小走りで立ち去っていく雪花を思わず呼び止めそうになるが雪花がいなくては達也が困るだろうと思ひ直し踏みとどまる。そのせいで今後、雪花からはんぞー先輩と呼ばれ続けることを知るよしもなく。

雪花は救出された直後に現れた北山雫、光井ほのかを含む女子メンバーに捕まって未だ狂躁の輪の中にいる深雪を放置して達也の部屋を訪れていた。

「どうも、はじめまして。古葉雪花です」

雪花がドアを開けてすぐにそう挨拶すると飛んでくる疑いの目。そしてそれが形となつて現れようとした時、つまりエリカが「いや明らかに女の子じゃない！」と声をあげようとした瞬間、それよりも早く声があがった。

「君！」

吉田幹比古である。彼はベッドから立ち上がりすぐに口を開く。

「君のおかげで僕はこうしてこの場にいられるんだ。あの時君に出会わなかったら僕はきつとあのまま腐つてた。だからありがとう。それがずっと言いたかった」

幹比古はただ溢れる感情を言葉にする。考えるよりも先に口が動いた。周りの人間が唾然と自分を見ていることにも気がつかない。

「そっか、でもぼくがいなくても君はこうしてこの場にいたと思うよ。それも保証する」

雪花はあの日出会ったのが吉田幹比古だとは知らなかった。今、初めて気がついたのだから。

故に雪花があの日言った言葉は未来を知っていたからではなく心から思ったことなのだ。

だからこそ幹比古の心に響いたのだろう。

「さつきから話が全く分からないんだけど、まさかあんたが達也くんの弟の古葉雪花だって言うじゃないでしょうね？」

「えっ？そうだけど。ね、兄さん！」

「ああ、これでも弟の古葉雪花だ」

全員が目が驚愕に見開かれる。雪花は皆が驚愕している理由が分かっている様で不思議そうに首を傾げる。

「きつ君が！達也の弟なのかい!？」

「うん、そうだよ？一緒に頑張ろうねモノリス・コード」

幹比古は雪花が現れるまで腰を下ろしていた達也の使っていないベッドに座り込むとシーツを被り沈黙してしまう。

「ちよつとミキ、どうしたのよ？」

エリカが声をかけるも沈黙が続く。

「おいおいどうしたんだ？ミキ呼びにも反応ねえーし」

「あー」

レオの言葉に声を上げたのは美月。何事かと幹比古を除いた全員が美月を見る。その美月はといえば青い顔をして幹比古を見ていた。

「吉田くんはそつとしておいてあげましょうよ！」

この時美月の脳裏に過ったのは九校戦前、深雪から聞いた言葉。

『なんだか良く分からない質問だったのよね。一年生の一科生で一人称が『ぼく』の女子生徒を知らないかって』

エリカにいくら問いただされようとも答えようとしなかった幹比古の片想いの相手。それについて美月が知っているのは深雪から聞いたこの言葉だけであったが幹比古のただならぬ様子に気がついてしまったのだ。

一年生の一科生で一人称が『ぼく』、その条件に当てはまっている生徒が今、目の前にいることに。そしてその生徒は一見女の子に見えるが男の子で学校には一度も登校していなかった。それなら幹比古がいくら探そうとも見つかるわけがないということに。

美月だけがただ一人、気がついてしまった。

「そうは言うが幹比古がいなくてはモノリス・コードの話が出来ないのだが」

「少しだけ待ってあげてください！選手の状態も大切だと思うんです！」

「それはたしかにそうなんだが…一体なんなんだ…」

—吉田くんが立ち直るまではっ！

美月の孤独な戦いが始まる。

幹比古がどうにか立ち直るまで…あと一時間。

九校戦八日目① VS 八校

モノリス・コードはステージと呼ばれる試合会場で、敵味方各々三名の選手によってモノリスを巡り魔法で争う。勝利条件は相手チーム全員を戦闘続行不可能にするか、敵陣にあるモノリスを指定の魔法で二つに割り隠されたコードを送信すること。

九校戦でもっとも人気があり、白熱する競技でぼくも観るのを楽しみにしていた。観るのをね！

「…なんか目立ってる気がするんだけど」

昨日、何やら様子がおかしかったもののツッキー（柴田美月）と夜遅くまで話していたからか正常に戻ったようだ。そのミッキー（吉田幹比古）がキョロキョロとしながら呟く。

「これが目立つんじゃない？」

ぼくの腰にぶら下がる剣。兄さんの作った武装一体型CAD、『小通連』をさらに改良した『小通連・改』だ。

「いや、それもそうなんだけど」

ミッキーの視線の先にはぼく。正確にはぼくの衣装であるローブにであろう。ぼくは視線に気がついていないフリをしつつフードを深く被り直す。

「だって恥ずかしいじゃん。これ全国に放送されてるんだよ？」

「その格好の方が恥ずかしいと思うけど」

お前も決勝になれば同じような格好になるんだぞ！とは言えないので心の中で罵倒する。決勝で笑ってやる。

「雪花、幹比古、始まるぞ」

とはいえまずは目の前の試合、八校との対戦だ。

ステージは森林。森林、岩場、平原、溪谷、市街地の五つの中から乱数発生プログラムによってランダムに選定されるわけだが八校有利のフィールドだ。とはいえこちらには忍術使いのハゲを師匠に持つ兄さん、古式魔法の使い手ミツキーがおり実際のところそう不利でもなかったりする。

故に、開始五分と経たずにこちらから攻める。

双方のスタート地点、モノリスが置かれた場所の間は直線距離で八百メートル。諸々の装備を着用しCADを携えた状態でこの木々が生い茂った障害物の多いステージを敵に警戒しながら走破するには普通五分ではとても無理だろう。そう普通の人間ならば。

「さて、今頃兄さんはモノリスを開いて離脱したところかな。後はミツキーが『罨』を完成させるのを待つだけ……っておおっ！」

モノリスの前に陣取り作戦のことを考えているとディフェンスの役割を全うする時が来たようだ。木の影からオフエンスと思われる八校の選手が現れる。

CADは特化型。ぼくを倒そうとしているのは明らか。
つまりは全て予想通り。

八校の選手が銃口をぼくに向けるより前に小通連・改を振るう。分離した刃が木立の間を抜けて飛来し八校選手を打ち付け……ない！かわされた！

どうやらぼくはレオ程センスがなかったらしい。格好いいからなんて理由で小通連・改なんて使うんじゃない！

転がるようにかわした八校選手が体勢を整えこちらに銃口を向け

魔法を放つ。

「やっぱり最初からこれでいけば良かったよ！」

懐から取り出したのは兄さんが使っている拳銃型CADと全く同じもの。そして使う魔法も――

「ほら、やっぱり最初からこっちにしとけば良かった」

――同じである。

ぼくは八校選手の魔法を『術式解体』グラム・デモリッションで消し飛ばし啞然としているところを今度こそ小通連の分離した刃で殴打、倒れ伏した八校選手に空中高くに撃ち上げた刃でトドメを刺す。

「……やっぱりアレ使わなきゃ無理かなー」

それからぼくは自軍の勝利を告げるブザーがなるまでブーツと突っ立っていた。



試合終了後のスタンドにて。

吉祥寺真紅朗と一条将輝は先程の試合について話し合いをしていた。

「彼はそれ程、強い魔法を使えないんじゃないかな？ 普段極めて高性能なデバイスを使っている反動で、スペックの低い競技用デバイスだと実力を出せないのかもしれない」

「ありそうなことだな。急な代役だった所為で、スペックの低いデバイスに慣れる暇が無かったという可能性は高い」

「魔法力だけを見れば、『術式解体』以外は警戒する必要もないと思う。」

警戒すべきは彼の駆け引きにはまってしまうことだよ。彼については正面からの撃ち合いなら恐れるに足りないと思う…けど」
「雪花か」

真紅朗の歯切れの悪い言葉の意味を理解して将輝が答える。

「うん、彼も使えるみたいだね 『術式解体』」

「だがまあ、大丈夫だろ」

「そうだね、警戒はしておくべきだけど彼は司波選手程戦闘技術は優れていない、というよりも完全に素人とみるべきだろうね」
「だな」

将輝は出来たばかりの友人の顔を思い浮かべながら拳を握る。

—悪いが優勝は俺たちがもらう。

戦いの時は近づく。

九校戦八日目② VS 二校

次の試合、二校との試合は三十分後に指定されステージが決定されるのを一校選手控え室にて待っているとぼくの携帯が買ったときのままの着信音を鳴らす。

「ありや？携帯ポケットに入れっぱだった」

「壊れても知らんぞ」

兄さんと軽い会話をしつつ誰からの電話なのか確認もせずに出てしまう。

『雪花くん!』

「へっ？濡さん？どうしたんです？」

『どうしたんです？じゃないですよ！試合です試合！なんで出てるんですか!』

「あーなんか怪我した生徒の代役で出ることになりました」

『そういうことは連絡して下さいよ！私、驚いてベッドから落ちそうになりました!』

濡さんに伝えるのを忘れていた。ちーちゃんや響子さんには連絡したのに。

『もうすぐそちらに着くので次の試合は会場で応援しますね!』

「へっ!?体大丈夫なんですか?というかもうすぐ着くって早くないですか?」

『体調は万全です!それに雪花くんの作ってくれた車椅子もありますから。移動は急いでいたのでへりです』

あの人意外に無茶するよね!へりって!自家用があるんだろうけども!

「滯さんが見てるんじゃないやカツコ悪いところは見せられないですね」

『可愛いところを見せてくれれば十分ですよ』

「可愛さは期待しないでください！」

「こういうのが嫌だからフード被っているのに！滯さんは天然で言ってるからなんか反論しづらいし。」

『ふふつでは格好いいところを期待してますよ？頑張ってくださいね？』

「…はい頑張ります」

電話を切ると携帯を兄さんの肩を揉んでいる姉さんに預ける。

「雪花、誰からだったんだ？」

「滯さん」

「いや、誰だか分からないんだが」

「そういえば滯さんのことは話していなかった。とはいえ説明している時間はなさそうだ。」

「…何だか酷く非難されているというか、蔑まれている気がするんですけど？」

「気の所為よ」

キャンパスの仕切りをめぐって、七草真由美と中条あずさが入ってきたからである。彼女たちがわざわざ来たのはステージがどこになったのかを伝えるためだろう。

「それより次の試合のステージが決まったわ。市街地ステージよ」

よし、原作通りだ。これでこの試合も展開をある程度予測して行動できる。

「早速移動します。CADの調整は終了していただきますので」

「ご苦労様」

上半身だけ脱いでいた防プロテクション・スーツ護服を着直し、ヘルメットを被りCADを携える。今回は小通連・改は使わずに拳銃型のCADが二つだ。二丁拳銃スタイルって格好いいと思うんだ。

「行くぞ」

一校VS二校、ステージは市街地。

ぼく、二回目の試合が始まる。

◆
作戦は簡単。

兄さんが喚起魔法を使いあらかじめ貼り付けておいた精霊を活性化、元々の主であるミツキーとの間にリンクを確立させる。そして精霊を敵モノリス近くまで連れていきモノリスを開け、精霊と視覚を同調させたミツキーがコードを打ち込む。

つまり今回もぼくの役割は変わらずモノリスを敵選手から守ること。

「守るのはいいけど…別に、アレを倒してしまっても構わないよね！」

二校の選手が放った魔法を『術式解体グラム・デモリッション』で無効にしドライアイス粒子を高速で飛ばす魔法、『ドライ・ブリザード』を連射する。

「当たるかよー！」

が、全弾かわされる。さすがぼく。シューティングゲームが苦手な

だけのことはある。まあ当たらないことは想定内。この魔法は発動させたことそのものに意味がある。

つまりはドライ・ブリザードのドライアイス気化によって水蒸気を凝固させ、気化した二酸化炭素を溶け込ませた導電性の高い霧を発生させることこそが目的。

霧は広範囲に広がりこの階全体を包もうとしている。第一段階クリア。

「ミツキー！」

そしてビルのどこかから精霊を介してこの部屋を覗いているミツキーに合図を送ることのできる魔法は完成される。

合図と同時に空中に生じた球電。

電撃が、二校選手を襲う。

「チェックメイトだ」

そして雷撃は炭酸ガスが溶け込んだ霧や水滴を導線として破れた窓から見える潜んでいたもう一人の二校選手に強烈な一撃を浴びせた。

「『スリザリン・サンダー』。一度やってみたかったんだコンビネーション魔法」

試合終了のサイレンが鳴り響いた。もちろんぼくらの勝利である。

九校戦八日目③ 三校VS八校

決勝トーナメントの組み合わせが発表された。

準決勝第一試合、第三高校VS第八高校。第二試合、第一高校VS第九高校。

トーナメントの開始は正午。ぼくたちの試合は第二試合だけど、三校の試合を見逃すわけにはいかない。

というわけで、少し早い昼食を取るべく兄さんと姉さんはランチボックスを手にホテルへ。ミッキーも自室へと戻った。そしてぼくはといえば――

「格好良かったですよ！特にあの『チェックメイトだ』のところが！」「うう、今思えば恥ずかしい…その台詞」

「私は『別に、アレを倒してしまっても構わないよね！』のところが格好いいと思ったわよ？一人言にしてはテンション高くて」

「止めて！ぼくのライフはもうゼロだから！」

――滯さん、響子さんとお食事をしていた。そしていじめられていた。

「大体、響子さんどうしてここが分かったんですか！滯さんは急に来ることになったのに」

今、ぼくらがお食事をしているのは滯さんが泊まるVIP用の部屋。部屋というには広く小さなパーティーが出来そうなくらいだ。

で、なんでお食事に響子さんも参加しているかというところ、この部屋の場所を電話で教えてもらいやつてくるともうこの部屋の前に響子さんがいたのだ。そしてそのまま響子さんを加えてお食事がとなった。

「裏技よ」

ハッキングですな分かります。

試合後、姉さんから返された携帯電話のGPS情報だけじゃ部屋の位置までは特定出来ないだろうから五輪家のためにずっと空けられていたこの部屋に滯さんがチエックインしたのも調べてここへ来たのだろう。滯さんとぼくが親しいのは知っているわけだし。

「そういえば雪花さんと藤林さんはどうしてお知り合いなんですか？」

このパターンは!?ぼくが気がついた時には遅かった。既に爆弾は落とされていたのだ。

「婚約しているんです。私たち」

カランと滯さんがナイフを床に落とした。すつと現れた執事が新しいナイフをテーブルに置く。あつ邦人さん、お久しぶりです。

「ごっごっごっ婚約!?雪花くん、本当なんですか!？」

「ええ、九島烈閣下に嵌められました。そういうことになってしまいました」

「雪花くんは婚約なんてまだ早いです!こんなに小さいのに!」

「小さいは関係ないよ!というか貴女にだけは言われたくないよ!」

チラツと響子さんを見ると口元がニヤけていた。確信犯である。こうなることが分かかっていてあえて言ったのだ。

その後もお食事会の間中、婚約についての話となってしまうお食事会が終わるころにはぼくの精神力はごっそり持っていかれていた。ぼく、試合が控えているんですが。

それに滯さんが「こうなったら戦争ですつ!」とか言ってたけど大

大丈夫だろうか？…大丈夫だよ？だって最後は笑いながら「次の試合も応援しています」って言ってくれたし。大丈夫なはずだよ？！



「おい、二人とも顔色が悪いぜ？大丈夫かよ？」

「なんだか随分疲れてるようだけど…」

一般用観客席で兄さん、レオぽん、ミツキーと落ち合つて早々にそう問われた。

試合で気合いが入れば大丈夫なんて答える兄さんは確かに疲れているようでぼくもこんななのかと思うとため息が出る。

「はあ…ぼくも試合になれば大丈夫だと思う。なんというか年上の女性には怖いなって不安になってただけだから」

「なんだそれ？」

「真理」

馬鹿なことを言うぼくを置いてけぼりにして三校対八校の試合が始まろうとしていた。

と、ここでぼくはある事を思い付き兄さんに訊ねる。

「兄さん、千葉修次ちばなおつぐさん来てたよね？」

「来ていたが…なんだ、知り合いか？」

「いや、チラツと見かけたからそうかなって。ぼく実はファンなんだよね！帰っちゃうかもしれないしこれから探して会ってくる！」

「雪花、試合は…」

兄さんの言葉も聞かずにダッシュで客席を離れる。そして客席全体を見渡せる位置に移動して遠隔視系知覚魔法『マルチスコープ』を

発動。これにより実体物をマルチアングルとしてとらえることが出来る。

「見つけた！」

どうにか試合が始まる寸前で見つけ出し急いで向かう。

そこには一般客に混ざり何の変装もせずに座っている千葉修次がいた。

「千葉修次さんですか？」

「…君、一校だね。僕に何か用かい？」

長身で兄さんより少し高い身長、細身の引き締まった身体に涼しげな眉目の美青年。気性の優しさが滲み出ている。

そしてぼくはそんな世界的に有名な剣術家である好青年にこう言い放った。

「いえ、一校の男女と名高い渡辺先輩の彼氏がどんなものか見ておこうと思ひまして」

ぴしりと千葉修次の顔が固まった。

九校戦八日目④ VS 九校

第九高校との試合は「く」の字に湾曲した人工の谷間である溪谷ステージで行われた。

と言ってもぼくは何もしていない。自軍のモノリスの前でポーズと立っていたら試合は一校の勝利で終了した。

試合を一言で表すならミツキー無双。それくらいこの試合はミツキーの独壇場だった。

「結界」の魔法で霧を発生させ九校選手の視界を悪くする。これにより九校オフェンスは崖に沿って恐る恐る進むこととなり兄さんは簡単に九校陣地へと到達する。

兄さんの周囲だけ意図的に霧が薄くなっていたし霧のおかげで観客の目がないため存在認識の視力を存分に使うことができたからだ。そして相手に気付かれることなく九校ディフェンダーの背後に回り、難無くモノリスを開き八校との対戦時同様ミツキーが精霊を介してコードを見て打ち込み一度も戦闘を行うことなく勝利したというわけだ。

凄いぞミツキー。

「何故お前は試合前からボロボロだったんだ？」

「いや、うんまあ色々。見た目ほど酷くないから大丈夫」

「はあ…決勝は三時半、今から二時間後だ。遅刻するなよ」

「分かってるよ」

CADの調整を担当している兄さんは二時間のインターバルを競技エリアで過ごすらしいのでぼくは部屋へ戻ることにする。

「修次さんのおかげで最後のピースが揃ったわけだしアレを完成させますかね」

部屋へと戻る道中、ぼくはアレの完成に胸を踊らせながら、修次さんとの決闘を思い出していた。



「いえ、一校の男女と名高い渡辺先輩の彼氏がどんなものか見ておこうと思ひまして」

そんなぼくの暴言に、ぴしりと固まってしまった千葉修次は数秒間のフリーズを経て言う。

「表に出ようか?」

その言葉にぼくが頷いて千葉修次と移動を開始する。向かうのは九校戦会場外の、屋外格闘戦用訓練所。千葉修次のコネで簡単に借りられた。

「で、本当の目的はなんだい?」

しれっと千葉修次が言う。

「ぼくの方がどの程度なのか確かめておこうと思ひまして。剣術家で知られる千葉修次さんに模擬戦を挑もうとした次第です。別に渡辺先輩は男女なんて言われてませんよ?ぼくが個人で思っているだけです」

「:別に怒らせようとしなくても模擬戦なら受けて立つよ。君にも興味があるしね」

「怒らせようとしたのは最初だけで後は本心なんですか?」

「さて、早く始めないか?」

懐から二十センチほどの短刀を取り出してやる気満々の千葉修次。うん、良い感じだ。なるべく本気でやってもらわないとね。

「じゃ、ぼくはこれで」

取り出したのは九校戦で使った拳銃型のCAD二丁。つまりは九校戦のレギュレーションに沿って作ったかなり性能の低いCADで

ある。

「…なめられたものだね」

それを見てさらに目を鋭くさせる千葉修次。

「ルールなんですけどどちらかが降参するか戦闘不能になるまで。後遺症の残りそうな攻撃はアウトというのはどうでしょう？」

「構わないよ」

「では、このコインが落ちたら試合開始ということだ」

右手でコインを宙へ弾くと同時に両手でCADを構える。さあ、
見せてくれイリユージョンフレード幻影刀！

コインが落ちると同時に千葉修次が千葉の十八番である自己加速術式によって一気に攻めてくる。とりあえず今のぼくでは近づかれ
たら詰む。

千葉修次が得意とし幻影刀と言われる所以である加重系魔法『圧斬り』は細い棒や針金などを沿って極細の斥力場を形成し接触したものを
切断する近接術式。それを千葉修次の場合、起点となる短刀だけを
目印にして何もない空中に作り出す。驚異的な技術だ。

まずは小石に群体制御をかけて、それを一斉に飛ばし敵を攻撃する
魔法『ストーン・シャワー』を使ってみるも難無くかわされる。

その後も近づかれないようにひたすら魔法を撃ちまくる。『ドラ
イ・ブリザード』、『エア・ブリット』が見えない刃によって打ち落と
されるか、かわされる。このままでは近づかれるのは時間の問題だろ
う。試合開始から30秒弱…良く持ったほうである。うん、ぼく頑
張った。

「というわけで、ここからは本気の本気でいかせてもらいます」

ぼくは兄さんにも姉さんにも見せたことのない切り札を使った。
今のぼくには痛すぎる諸刃の剣を。

◆ 「強かったな修次さん。結局勝てなかったし」

部屋に戻り一時間。完成した武装一体型CADエクスカリバーを
片手に修次さんとの決闘後のことを考えていた。

千葉だとエリカと被るし修次で良いよと言いながら最後は笑って
許してくれてイケメン全開だった。ありや渡辺摩利も惚れるわ。

「将輝には悪いけど優勝はぼく達がもらうよ」

決勝戦、負けるわけにはいかない。

ぼくは完成したCADの調整をお願いするため兄さんの元へと向
かった。

九校戦八日目⑤ VS三校①

「馬鹿か？こんなCAD、レギュレーション違反に決まっているだろう」
完成したCADを兄さんに持ち込むと呆れたようにそう返された。

「汎用型の武装一体型CAD：普通に考えてこんなものレギュレーションに収まるわけがない。というよりこのCADは光学系魔法に特化した光るだけの剣じゃなかったのか？」

「うん、剣を振ると光の斬撃が飛ぶっていうCADだったんだけど折角だから普通に斬撃を飛ばそうと思ってコレ作ったんだ」

「あの術式をどうやって手に入れたのかは知らんが殺傷ランクはまず間違いなくA以上だ。CAD云々の前にそもそも使えん」

なんてこった。アレだけ苦労して作ったCADが使えないだと。レギュレーションなんて頭からすっかり飛んでいた。何が「将輝には悪いけど優勝はぼく達がもらうよ」だ。恥ずかしいわ！

「どうするんだ？CADを調整するにしてもあまり時間はないぞ？まあお前のなら十五分程度で出来るだろうが」

「仕方がないから最初の案を採用するよ。レギュレーションも何とかする」

「今からか？」

「二十分で全部やるよ」

見せてあげよう。トールスの力を。

新人戦、モノリス・コード決勝。

選手の登場に、客席が大きく沸いた、というわけではなく観客は戸惑いにぎわめいていた。

というのも、ぼくら一校の格好があまりにも奇妙だからだろう。

「使い方は説明した通りだ、作戦通りに行くぞ」

「達也は気にならないの？この格好」

「多少走りにくいだろうが仕方ないだろ。そういう作戦だ」

「：そういうことじゃないんだけど」

ぼくらは三人共、黒いローブに身を包んでいた。魔方陣が織り込まれているローブで着用した者の魔法が掛かりやすくなる効果が付与されている。

「それにその派手なCAD！剣だし金色だし！目立つに決まっているよー！」

「格好いいでしょ？」

構想が頭にあつたから何とか二十分で完成できた。CADとしては大型だろうこのCAD『聖剣エクスカリバー』はぼくの身の丈程もあり、今はローブの上から背中帯に帯刀している。

「幹比古、そこまでだ。試合が始まる」

兄さんの一言で場の空気が変わる。

いよいよ始まる。

原作では勝利した、勝算はある、自信もある。でも実際に戦ってみるまで、勝敗は分からない。

緊張している。不安もある。それでもそれは試合が始まれば消える。消さなければならぬ。

迷いを持てばそれは決定的な隙となって試合の勝敗を決めてしまう。

—ぼくならやれる！

試合開始の合図と共にぼくは剣を振る。

—さあ、はじめようか！— 一条将輝！

「エクスカリバー！」

戦場である草原ステージを眩い光が包んだ。

九校戦八日目⑥ VS三校②

閃光によって視界が一瞬真っ白に染まる。そして同時に両陣営で砲撃が交わされる。

両陣営の距離は六百メートル。それを一校、三校、共に拳銃型のCADを突きつけ合い撃ち合いながら歩み寄る。

一校選手は二丁拳銃スタイル。三校選手は特化型のCAD一丁のみだ。右手のCADで相手の攻撃を打ち落とし、左手のCADで攻撃を仕掛ける一校に対して、三校は意識的な防御を捨てて攻撃に専念している。

「やはり婚約させたのは正解だったな」

それを九島烈は面白そうに眺めていた。



真紅郎はフィールドを迂回して一校モノリスの横手を目指していたが、その途中、一校陣営までおよそ百メートルの地点で黄金の剣を持った黒ローブに行く手を遮られた。

デイフィンダーがここまで前進していることに戸惑いを覚えつつ、

『不可視の弾丸』を放とうとする。が、その瞬間、剣から圧倒的『光』

が放たれ視界を白く染め上げる。エクスカリバーの光学系魔法だ。

『不可視の弾丸』は加重系の系統魔法であり対象のエイドスを改変無しに直接圧力そのものを書き加える魔法。その為、情報強化では防がないという利点を持つ。

しかし、その反面、作用点に直接加重をかける魔法なので作用点を視認する必要が生まれてしまう。

つまり視界がなくなつた現状『不可視の弾丸』は使えない。

そこへ突風が襲い掛かる。

真紅郎は加重系魔法で身体にかかる慣性を減らし、風に逆らわずに

飛ばされることでダメージを緩和した。

そして十メートルほど後方に姿を見せた突風の魔法を使ったと思われる一校選手に『不可視の弾丸』の照準を合わせる。

が、黒色のローブに目の焦点を合わせると、遠近感が定まらなくなる。人影が何重にもぼやけて見えるのだ。

真紅郎がローブはフードで光学系魔法の光を回避するためじゃなかったのか！と自らの勘違いに気がついた瞬間、前方で武装一体型CADの剣を投げ捨てこちらを拳銃型CADで狙っている人影に気がつく。

回避は不可能。飛んでくるであろう何らかの魔法に目を閉じようとした瞬間、その人影は横合いから叩きつけられた空気の爆発で吹き飛んだ。

「将輝！」

将輝が攻撃を続ける傍らの援護射撃で助け出したのだ。

真紅郎はこのチャンス逃さぬよう加重の系統魔法を発動させる。

重力の方向を急に変えられた一校選手、幹比古は倒れ、加重増大魔法によって地面に押し付けられる。

幹比古のピンチと同時に一校のチャンスは訪れていた。

将輝の注意が逸れた一瞬、一校選手は自己加速術式を使い、将輝へと一投足の間合いまで近づいていたのだ。

将輝の顔に動揺が走り、そしてそれはレギュレーションを越えた威力の圧縮空気弾十六連発となって具現化した。

迎撃が間に合わず最後の一発の直撃を受け、倒れる一校選手。

レギュレーション違反は一瞬、審判は気がつかなかったかもしれない。が、自分が友人との本気の対決に泥を塗るようなことを、反則という最低な行為を持ってしてしまったということを、強く後悔した。故に生まれる一瞬の空白。

「ぼくの勝ちだね、将輝」

聞き覚えのあるその声は自分の魔法を受け地面に沈んだはずの達也——正確には達也だと思いついて入っていた人物から発せられた。

後ろから殺気。咄嗟に傾けた首の横を人の手のはしり去る。

そして爆弾が爆発したかのような破裂音がその右手から放たれた。将輝は意識が遠くなり、地面へと崩れ落ちながら、その右手の主を見て弱々しく呟いた。

「司波…達也」

三校選手、一条将輝。戦闘不能。

九校戦八日目⑦ VS 三校③

作戦は簡単だ。

そもそも将輝と撃ち合いをしていたのは雪花だったのだ。そしてエクスカリバーを使っていたのが達也だ。入れ替わったのは開幕直後、雪花がわざわざ声を出して魔法を発動させた時である。光の目眩ましによって視界が塞がっている間にCADを入れ換えたのだ。体格の違いを隠すために様々な工作をし、さらにはあえて声を出して魔法を発動させることで剣Ⅱ雪花だと思わせる。全員がローブを着ていたのはこの作戦のためで雪花が決勝戦までの間、ローブを着て試合に挑んでいたのはこの試合を想定し慣れるためでもあったのだ。

将輝の注意が逸れた瞬間に走り出していたのは撃ち合いをしていた雪花だけでなく将輝の援護射撃によって吹き飛ばされ地面に倒れていた達也もだったのである。

そして達也はレギュレーション違反による動揺で一瞬の空白を作り、雪花の声によってさらなる動揺を強いられた将輝の後ろを取って、指を鳴らしその音を増幅、大音響による鼓膜の破裂と三半規官のダメージによって、将輝を戦闘不能に追い込んだのだ。

が、同時に達也本人も膝をつき戦闘不能に陥る。音によるダメージを受けたのは達也も同じなのだ。

(後は任せたぞ…雪花、幹比古)

試合はまだ終わっていない。



将輝の戦闘不能、つまり敗北は真紅郎の心を大きく揺さぶっていた。

「吉祥寺、避けろっ！」

デیفエンスに残したはずのチームメイトの声を間近に聞いて『避

雷針』の魔法を反射的に発動。

草の電気抵抗を改変することで幹比古の放った電撃を地面に流す。真紅郎は加重魔法で押さえ込んでいたはずの幹比古が立ち上がった。こちらを睨みつけているのによく気がついた。

概ね作戦通りだった。雪花だと思わせた達也が何らかの方法で相手の意識から外れ、達也だと思わせた雪花がタイミングを見計らって正体を明かし将輝を動揺させて達也がその隙に止めを刺す。『一条』という強敵に勝つための作戦。それは成功したのだ。

—ならば、僕が逃げるわけにはいかない！

震える足を意地で支え雷撃魔法を放つ。

—僕なら出来る！あの日貰った勇気を、自信を、そしてそこから得た努力の成果を今、ここで見せる！

身体をかすめる魔法を無視し、大型携帯端末形態CADのコンソールに、長いコマンドを打ち込む。

—吉祥寺真紅郎を倒す！

そしてコマンドを打ち込み終えCADから離れた右手を、足元の地面に叩きつけた。

それは五つの魔法の連続発動。吉祥寺真紅郎という敵を倒すべく放たれた幹比古の全て。

一つ目の魔法『地鳴り』が地面を揺らす。そして二つ目の魔法『地割れ』によって幹比古の手元から地割れが走り真紅郎が空中へ逃れようと魔法を発動させる。が真紅郎の足は地面を離れない。草が足首に絡みついていたからだ。三つ目の魔法『乱れ髪』によって地面すれ

すれの気流を起こし絡みつかせたのである。さらに四つ目の魔法『蟻地獄』により足の下に地割れが到達し、草が足を地面に引きずり込んだ―ように錯覚した。

焦った真紅郎は全魔法力を跳躍の術式に注ぐ。そして必要以上に高く飛び上がった真紅郎に五つ目、最後の魔法が襲いかかった。

『雷童子』。

雷撃の魔法が真紅郎を空中から打ち落とした。

しかし、満身創痍で魔法力もほとんど残されていない幹比古に、三校最後の選手の土砂の塊を叩きつける魔法、『陸津波』が迫っていた。

―後は頼んだよ、雪花。

幹比古は回避を諦め、残った一校最後のメンバーに全てを託しながらそつと目を閉じ押し寄せて来る土砂の衝撃に備えた。

「諦めたらそこで試合終了ですよ…?」

試合終了のブザーが鳴り響き、目を開いた幹比古の目に飛び込んできたのは地面に倒れた三校選手の姿だった。

九校戦八日目⑧ VS 三校④

「諦めたらそこで試合終了ですよ…?」

雪花は『陸津波』を『術式解体』で吹っ飛ばし、勢いを失った土砂が、幹比古の目前で落ちていくのを後目に、唾然としている三校最後の選手を右手のCAD、無系統魔法の『共鳴』で気絶させた。

つまり三校選手全員が戦闘不能となり、一校の勝利が決まったのである。

「痛い、超痛い、マジ痛い!」

雪花には将輝がレギュレーションを越えた威力の圧縮空気弾十六連発を放つことが分かっていた。そしてそれが将輝の決定的な隙を作ることも。

原作知識。

それは雪花の持つ最大にして最高の武器。未来予知にも似た固有の力。

故に雪花は将輝の隙を作るために、圧縮空気弾十六連発を『マルチスコープ』を併用した『術式解体』でその十五発までを迎撃し、最後の一発をあえて受けた。全力の硬化魔法を持つてして。それでも将輝の一撃は雪花がしばらくの間動けなくなる程にはダメージを与えていた。雪花の肉体は貧弱、切り札を使っていたとしても同じであったらう。

つまりこの勝利は、実際のところギリギリだったのだ。

「見てたよ。やっぱり、ぼくが保証した通りだっただらう?」

歓声が爆発し地鳴りとなってスタンドを揺らす中、雪花が幹比古に手を差し伸べながら言う。

それに幹比古は今までにない程の達成感と感動、そして歓声と拍手

を浴びながら頷いた。

「達也の方に手助けが必要なんじゃないかな？」

幹比古は照れ隠しにそんなことを言っただけ立ち上がる。雪花は笑いながら頷いて達也へと走っていく。

そして達也の元へと辿り着くとそこには一校応援席の最前列、両手で口を押さえ、ポロポロと嬉し涙を流しながら、フィールドを見詰める一人の少女、姉の深雪によるめきながら立ち上がり手を振る兄、達也の姿があった。

雪花は声を失ったまま見詰めている姉の視線が自分にも向いていることに気がつき、いつの間にか外れていたフードも気にせず笑顔で手を振る。

会場全てが、暖かな拍手に包まれた。

「全く、めっちゃ痛かったよ、将輝の圧縮空気弾。アレを生身で受けるとか本当に化物だね」

「アレを誰か生身で受けたのかい!？」

「ああいや、もしそんな奴がいたらって話だよ」

「そんなのいるわけないだろ」

「……ですよねー」

達也と共に幹比古と合流した雪花は思いがけない拍手のシャワーによる照れからそんな話をする。

「兄さん、耳大丈夫？」

「鼓膜が片方破れたよ。雪花は大丈夫か？ 一条選手の圧縮空気弾をまともに受けたんだろ？」

「全力で硬化魔法を使ったから怪我はないけどめっちゃ痛かった。後で姉さんにチクろうかな」

「…止めてやれ」

鬼畜なことを言う雪花に将輝の気持ちをなんとなく理解していた達也はストツプをかける。全力で戦った相手へのせめてもの情けである。

「分かったよ。あつそうだ兄さん、それにミツキーも。優勝したらやろうと思つてた決めポーズがあるんだけど一緒にやらな…」

「誰がやるか」

雪花の提案はあっさり二人に断られた。



「あの子、幻術を使いながら一条と撃ち合いをしていたわね」

「…幻術ですか？」

「ええ、達也さんと雪花さん、二人は身長も体格も全然違うわ。それを幻術で誤魔化していたのよ」

異性を妖しく惹き付ける大人の可愛いらしさが同居した美しさを持つ女性は画面に映し出された二人の顔を見ながら暫く黙り込むとやがて口を開く。

「葉山さん、彼女をここへ呼んで頂戴」

己の主が名を言わずとも『彼女』が誰のことであるかを理解した葉山は、恭しく頭を下げて言う。

「承知しました。すぐに連れて参ります、奥様」

自分の意を正確に汲み取って部屋を出た執事長に、四葉家の当主である四葉真夜は満足げに頷くと、画面に映る美少女と見紛うばかりの

女顔を見ながら小さく呟いた。

「中々面白いわね、彼」

雪花の平穩は遠い。

九校戦編〈下〉

九校戦九日目①

「格好良かったです!」

「ほら抱きつかない、こいつも一応、男を自称しているんだから」

「自称じゃないよ!」

昨日は試合の疲れもあり、部屋に戻ってすぐ寝てしまったため一日ぶりとなつたちーちゃん、お姉さんと七草の双子であるが、いつの間にか仲良くなつておりちーちゃんが保護者役になっていた。ただ、ちーちゃんの毒舌は相変わらずである。ぼくを労う気持ちがないのだろうか。結構頑張ったのに。

「そういえばちーちゃん、お姉さんが担当する選手って今日出るの?」

「第一試合、小早川先輩が姉さんの担当」

「へー、じゃあ応援しないかね。もしかしたら小早川先輩が優勝を決めてくれるかもしれないし」

ぼくらが新人戦モノリス・コードでポイントを稼げたことにより一校は新人戦での優勝が決定した。これによつて二位の三校との差は百四十ポイント、今日のミラージ・バットの結果次第では、最終日を待たずに総合優勝が決まるのだ。そして一校にはお姉さんが、それもトラスシルバーのシルバーたる兄さんがエンジンニアをつとめるスーパーチート状態で出場するため、まず優勝が決まっているようなものだ。

たしかこのミラージ・バット中にも事故が起きるはずだが怪我人は出ない。そしてこの事故の後、兄さんが事故の原因となつた仕掛けを姉さんのCADに仕掛けられ激オコ、そこに九島烈が現れ犯人を糾弾、九校戦における事故は以降なかつたはず。

そこまで考えたところでぼくは気がついた。いや思い出した。事故が起きるのは第一試合だと言うことに。姉さんの試合は第二試合、兄さんが姉さんのCADを大会委員に提出するのは事故の後だ。つまりそれは事故が起きるのは第一試合以外にないということ。

芋づる式に平河千秋というちーちゃんの名前に対して違和感を覚えた理由も思い出した。ちーちゃんは原作キャラだったのだ。そしてこの九校戦で起こる事故が原因で兄さんを敵視するようになる。その結果、彼女は命を狙われるような状況にまで追い込まれるのだ。

「ちよっと、どこいくのよ！試合始まるわよ！」

だから急いでるんです！と言う時間すらも惜しい。ぼくはある人に電話をかけながら魔法すら使って全力で競技フィールド脇のスタッフ席へと急いだ。ここで事故を止めればどういことが起きるのか、そんなこと分からない。でも、ぼくは一度目の事故、何も行動せず後悔した。二度目の事故、考えた末に行動せずそれでも後悔した。だったらそれは正解だと信じきれなかったということだ。その選択が正解なんだと信じるのが。ならば、今度こそ友達のために信じてみよう。行動することを。

「その試合ちよっとタンマー！」

物凄い勢いでスタッフ席に突っ込んできたぼくに皆は目を丸くしている。競技フィールドを見ると試合はもう開始されていた。

「雪花か、どうした？」

「小早川先輩のCAD、細工されてる！」
「何？」

足場から空中へ飛び上がる小早川先輩に変わった様子はなく、魔法はちゃんと発動され他校との接戦を繰り広げていた。

事故が起きるタイミングは覚えていない。何事もなく第一ピリオドが終わることを願いながら片手にCADを掴み何時でも飛び出せるよう準備しておく。入っているのは飛行魔法。ここでこの魔法を使ってしまうば姉さんの試合に何らかの影響を及ぼすかも知れないが仕方がない。早く助ければ原作のように魔法不審へ陥るようなことにはならないかもしれないのだ。

「3…2…1…よし！第一ピリオド終了！兄さん、小早川先輩一回戻して！」

兄さんに頼んで小早川先輩を戻してもらおうとするが何やら揉めている。

どうやらちーちゃんの姉に小早川先輩を一度戻すように頼んでいようなのだが拒否されているということらしい。

「強制回収！」

時間がないので小早川先輩からCADを奪い取り、目で確認する。別に何か分かるわけではない。必要なのは試合を止めて彼が来るのを待つこと。故にわざとらしく大きな声で言う。

「やっぱり！異物が紛れ込んでる！」

ぼくの声に反応して人が集まってくる。試合の邪魔だ、さつき大丈夫だっただろ、適当なこと言うな、様々な怒りの声。が、それはすぐ静かになった。

「何事かね？」

「やっと来たよ」

九島烈。魔法科高校の生徒にとっては雲の上の存在。その九島烈

の放つ独特のオーラ、威圧感に圧倒されたのかさつきまでの声はすっかりとなくなり観客の喧騒だけが遠くから聞こえる。

「これ、見てよ」

ぼくがCADを九島烈に投げ渡すとそれを繁々と見詰め、頷く。

「恐らく電子金蚕であろう。電子機器の動作を狂わせる遅延発動術式だ」

「検査係の方は？」

「もう手は回した。このCADを担当した者ならもう拘束されているだろう」

ぼくらのやり取りを唾然と見ていた一校生徒達であるが状況が飲み込めたのか途端に騒がしくなり一人の生徒が大会委員の元へと走っていく。

「雪花、何故九島閣下が？」

「電話で呼んだんだよ。一応、響子さんに訊いておいて良かった」

「お前はなんて無茶を」

こうして、小早川先輩が魔法不審に陥ることはなくなつた。ちーちゃんの復讐フラグを折つたのだ。これにより今後、原作にどんな影響が及ぶか分からない。でも不思議と後悔はなかつた。

「で、お前は どうして細工されていることに気がついたんだ？」

とはいえ、何も問題がないというわけではなさそうだ。

九校戦九日目②

第一試合で一悶着あったもののミラージ・バットは一度、全員のCADを再検査したのち再開された。

そしてぼくの姉さんは無双した。

予選は最初こそ二校選手と接戦を繰り広げていたものの姉さんが飛行魔法使ったことであっさり勝負が決した。

そして決勝。大会委員会から各校へ術式がリークされ六人の選手全員が飛行魔法を使うまさに妖精のダンスといえるそのステージで姉さんはただ一人他とは違う輝きを放っていた。圧倒的、結局姉さんは大差で一位。個人優勝を果たし一校の総合優勝を決めた。

流石です、お姉様。

ぼくは観客席に手を振る姉さんを見ながら今日を振り返っていた。



「で、お前は どうして細工されていることに気がついたんだ？」

原作知識です、とは言えない。かといって良い言い訳も思いつかない。つまり今は誤魔化すしかない！というわけでぼくは頭をフル回転させ、どうしたら原作知識なしにこのタイミングに何か仕掛けられていると気がつけたのかを必死に考えた。

「細工されていることに気がついたわけじゃないよ。細工されている可能性に気がついただけ」

「どういうことだ？」

「兄さんから事故が人為的に引き起こされたものだということと、その検証結果を聞いていたからね。」

送ってもらった事故の動画とワイヤーフレーム化したシミュレーションを見てCADに細工をできるタイミング考えてみたんだよ」

兄さんから話は聞いたものの送られてきた動画は一切見ていない。

「で、大会委員に一度CADを提出するってことに気がついたわけ。後は大会委員のデータを九島烈に頼んで調べてもらい怪しい奴を何人に絞り込んだところでその一人が小早川先輩のCADを担当したことが分かったから慌てて来たってこと」

ちよつと無理矢理ではあるがない話ではないレベルにまとめられたのではないだろうか。実際兄さんは多少疑いの色は残しつつも納得はしてくれたようだ。

「本当に無茶なことを…何も仕掛けられていない可能性もあつたということだろう？それにお前は九島閣下をなんだと思っているんだ？」

「良いじゃん別に、結果小早川先輩は助かったんだから」

「はあ…まあ、そういう事にしておこう」

全部を誤魔化せたというわけではなさそうだが。

と、今日のことを振り返りながら姉さんの試合をちやつかりスタツフ席で見終えた後、気がついた。こちらをじーつと見る視線に。それは本部近くのスタンド、来賓席からだった。

「……………忘れてた」

今日は滯さんと試合を見る約束をしていたのだ。ちーちゃんと七草の双子と第一試合を観たら滯さんのところに行こうと思っていた。が、事故のことに気がつき一騒動起こし、兄さんからの尋問を乗り越えたばかりすっかり忘れていた。

どうしたものかと滯さんの方を見てみるとやはりじとーつとこちらを見ている。

「…………ぐすっ」

そして涙目だった。

「ごめんなさいでしたー!!」

ぼくは全力で土下座した。

そしてなんとか許してもらったぼくはその後もう一度土下座することになるとは夢にも思っていなかった。

完全放置してきたちーちゃんと七草の双子を忘れていたからである。

九校戦十日目

本戦のモノリス・コードは一校の圧勝だった。

十文字克人がいる時点で負けはないようなものではあったが実際に見てみると凄まじい。十文字の多重移動防壁魔法『フアランクス』を応用した突撃に至っては戦車ですかというような迫力があつた。

そして忘れちゃいけない、はんぞー先輩のスタイリッシュな戦い方も格好良かった。忍者っぽいけどあのハゲとは大違いだね。あのハゲだと何やつても格好良く見えないし。

と、そんなわけで全競技が終了し一校は総合優勝を果たしたのだ。



九校戦閉会後のパーティーにぼくも出席することとなった。

「やつぱりぼくも出なくちゃダメかな？」

「当たり前だろ、お前も競技に出たのだから。それに懇親会には来ていたんだ諦めろ」

兄さんにぼくのステルスを見破られていたことに驚きつつ周りを見渡してため息を吐く。

ぼくでも知っているような有名人、知らなくても明らかにオーラの違う人がうようよとおり、正直なところキツイだけだ。こうして壁際でおとなしくしているにも関わらず引つ切り無しに声をかけられる。まあ二重、三重の人垣に囲まれている姉さんよりはマシだけど。

どうにか逃れる手段はないかと視線をさ迷わせていると少し先にパーティードレスに身を包んだ滯さんがいることに気がつく。

「兄さん、ちょっと行ってくる」

渡辺摩利が人の悪い笑みで近づいて来たのを確認しつつ兄さんと別れ、滯さんと合流した。

「澪さん、似合ってますね」

「そうですね？ありがとうございます」

今日のモノリス・コードは澪さんと観ていた。一応約束を果たすことができたのだ。

「そろそろ私たちは退出する時間ですね」

しばらく澪さんと会話を楽しんでいると徐々に大人達が少なくなっていることに気がついた。

「ダンス、楽しんでくださいね？」

澪さんと別れてすぐに管弦の音がソフトに流れ始めた。学生だけの時間、生演奏に合わせてのダンスパーティーである。

「えっ、あ、……あっ？司波!?!」

少年達が群がっているところを目指せばそこに姉さんはいた。そして狼達から姫を守る騎士ナイトのように兄さんはその横に立っていた。少年達が気後れしている原因の一つだろう。

そんな中、素っ頓狂な声を発したのは将輝だった。司波達也と司波深雪が兄妹であると今気がついたらしい。苗字で気づこうか。

「マツキー意外と天然さんだよね」

ぼくが乱入すると将輝は落ち着きを取り戻したらしく「誰がマツキーだ」と返した。

「良いじゃん、ぼくらが勝つただろモノリス・コード。次にマツキーが何かでぼくに勝つまでマツキーってことで」

マツキーは悔しそうな顔をした後、渡辺摩利が浮かべていたような人の悪い笑みで言う。

「まあ、それでいいか。『ソード・プリンセス 剣 姫』?」

『剣姫』。

それが新人戦モノリス・コードから僅か一日で広まったぼくの二つ名?だった。

「何なの? 何で姫なの? モノリス・コードは男子競技なんですか!?! と
いうかぼく、剣なんてほとんど使ってないんですけど!?!」

「お前最後に一人でポーズ取ってただろ? 剣を天に掲げる奴。それで
そんな呼ばれ方になったんだよ。三校でも可愛いーって評判になっ
てたぞ」

死にたい。ノリでやったあのポーズでこんなことになるとは。自
業自得も甚だしかった。マツキーを『クリムゾン・プリンセス』と弄っ
ていたら自分がプリンセス呼ばわりだし。

「二人共、いつの間に仲良くなったんだ?」

目を丸くしたというには表情に変化が少ないが驚いているのだろ
う兄さんが疑問を口にする。

「モノリス・コードの前から友達だったよ」

「…後で話がある」

兄さんがオコである。兄さんが後でと言ったことを忘れることは

ないので今からだるい。

「いつまでもここに固まっているのも邪魔だし、深雪、一条と踊ってきたらどうだ?」

どうやら姉さんの目に敵ったらしいマツキーは誘いを断られることもなくそのまま二人でホールの中央へと向かった。その時、兄さんに感謝と感激のこもった眼差しで目礼をしたのは見なかったことにしてあげよう。

その後、マツキーだけでなく兄さんまでもがラブコメを始めてしまったため一人となったぼくが壁際でゆったりとしていると厄介な奴に見つかってしまった。

「男子からのお誘いもあったんじゃないかしら?」

七草真由美である。

「ぼくは男なのでそんなことはありませんよ」

「モノリス・コードの後、他校から抗議があったわよ?なんで女子が出場してたんだった」

「……もう、帰りたい」

帰りたい。帰って寝たい。そしてもう起きたくない。

「ふふっじゃあ最後に一曲如何かしら?」

この人はぼくの苦手なタイプかもしれない。結局ぼくは馴れないダンスに付き合わされるハメになった。

一度、踊ってからは大変だった。次から次へと現れる女子生徒。一校ではない人も混ざっており全員が初対面であったため断りづらく「最後に一曲」であったはずのダンスを何曲も踊るハメになり本当の

最後の一曲が始まるころには壁に寄りかかっているのがやつとの状態になっていた。

「随分、疲れているみたいだな」

上級生のお姉さま方の引つ張りダコになっていたはずなのに疲れの様子のないマツキーはシャンパンの入ったグラスをぼくに差し出す。

「ダンスなんて普段やらないから」

受け取ったグラスの中身を飲み干して通りかかったウエイトレスに渡す。

「そういえば姉さんとのダンスはどうだった？」

「姉さん？」

不思議そうな顔をするマツキーにぼくは仕返しとばかりに人の悪い笑みで言った。

「そういうえば、言っていなかったね。学校には古葉で届け出を出しているんだけど、ぼくの本名は『司波雪花』なんだよ」

「…つまり姉というのは」

「マツキーがお熱の司波深雪だよ。義兄さんとお呼びしましょうか？」

「なっ何ー!?!」

マツキーの素っ頓狂な声は幸いなことに最後の一曲だからか熱の入った生演奏に掻き消された。



突如として競技に参加することになったり何かと疲れた九校戦を終え自宅に帰ると――

「本日から雪花様の専属メイドとして御奉仕させていただくことになりました。桜井水波と申します」

――そこにはメイドがいた。見慣れた家政婦さんではない、メイドさんである。

明らかな厄介事の気配に、ぼくはその場で崩れ落ちた。

夏休み編

夏の休日①

四葉から派遣されてきたというぼくの専属メイド、桜井水波、水波ちゃんは実際のところ四葉からの監視だろう。そのため、どこに行くにも着いてくる。だから最近、ぼくは第三課に顔を出せていない。ぼくが二代目トールラスである、ということとは四葉に伏せているのだ。監視が付いている今は下手に行動できない。

朝。

「水波ちゃん、毎朝起こしに来なくて良いんだよ？それにこの時間、まだ眠いし」

「奥様から夏休み中は毎朝七時に起こすよう言われておりますので」

「母さんよりぼくの言うことを優先してよ、専属メイドなんだし」

「主人の健康状態を良い状態に保つことも専属メイドとしての勤めですので」

昼。

「水波ちゃん、ちよつとコンビニ行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃいませ」

「いつてきまーす…って水波ちゃん、なんで着いてくるの？」

「専属メイドですから」

「…メイドさん引き連れてコンビニなんて行きたくないんだけど」

「では着替えて参りますので、少々お待ちを」

「…えー」

夜。

「水波ちゃん、もう夜中だし寝たら？」

「いえ、大丈夫です。私、雪花様の専属メイドですから」

「ぼくが寝るまで寝ないってこと？」

「主人よりも先に寝るようでは専属メイドの名折れです」

「…もう寝るよ」

「お休みなさいませ、雪花様」

…これだよ？

何なの？四葉からの精神攻撃なの？だったら効いてるよ！だからもう許してもらっていいですかね！ぼく何も悪いことしてないじゃん！四葉に不利益与えてないじゃん！水波ちゃん「専属メイド」言いたいだけじゃん！

そんな気持ちを吹き飛ばすためぼくは叫ぶ。

「海だあああああー!!」



流石の水波ちゃんも友達との旅行にまでは着いてこない。小笠原のプライベートビーチ付き別荘へ二泊三日の旅行。提案者兼別荘の提供者である北山雫には大感謝である。なんせ海は今世初。テンションが上がるというものだ。

集合が朝の6時と早く、起きるのが辛かったが専属メイドの素敵な起こし方(物理)でなんとか起床。成されるがままに着替えを済ませ、用意されていた宿泊セットを持って兄さん達と合流。

集合場所である葉山のマリーナからクルーザーで六時間の船旅を終え、辿り着いた別荘のある聳島列島。

白い砂、眩しい太陽。そして青い海。

「海だあああああー!!」

ぼくは早速海へと突撃すべく着ていたパーカーを脱ぎ捨てて…ようにしたところでツツキーに止められた。

「何してるんですか!? 雪花くんは上脱いじやダメですよ!」

「えっなんで? というか脱がないと海に入れないんだけど」

「なんで? じゃないわよ。鏡見てきなさい」

「鏡なら今日の朝も見たよ」

エーちゃん（千葉エリカ）までもが絡んでくるがなんなんだこれ。

「雪花、バックの中にラツシユガードが入っていたでしょ? それを着なさい」

姉さんにまで言われて状況が分からないまま渋々と着替え海へと再出陣。なんかテンションも平常に戻ったが遊び倒してやる。

「ぼくなんで怒られたんだろう」

六時間ものクルーザーの船旅で仲良くなったしーちゃん（北山雫）とほののん（光井ほのか）に訊いてみる。

「仕方ないと思いますよ? 雪花くんが上半身裸だとその…ね?」

「うん…背德的」

苦笑い気味に答えたほののんにしーちゃんが同意する。なんだ背德的って。

結局真相は分からなかったが目の前に海があるのだ、このモヤモヤは吹っ飛ばしてくれよう。

「知らない方が良いこともある」

そんなしーちゃんの声は聞こえなかった。



「ヒック、ヒック、エグツ……」

「泣ーかした、泣ーかした」

砂浜にペタンと座り込み本格的に泣き崩れてしまったほののん。というのだ。

女性陣が遊んでいたボートが転覆しほののんが溺れかけた。それを兄さんが表面張力増幅魔法「水蜘蛛」で海面を走って颯爽と近づき海中にダイブ、助けたわけだがその際、ほののんの水着の上が捲れ上がってしまったのである。つまり、ほののんのほののんがこんにちわしてしまったのだ。兄さんは主人公としては標準装備当たり前のラッキースケベを發揮しそれをばっちり目撃。ほののんは兄さんに恋心を抱いているわけでショックも大きいのだろう。

「ほのか、その…すまなかった」

困り顔で謝る兄さんを前にしーちゃんがほののんに何やら耳打ちしている。慰めているということではないな絶対。ろくでもないことを吹き込んでいるに違いない。

しーちゃん凄い悪い顔してるし。

「達也さん……本当に悪かったって思ってますか？」

ようやく顔を上げたほののんは未だ涙目だった。

「嘘偽りなく思っている。本当に悪かった」

再び謝罪をする兄さんにほののんが「じゃあ…」と呟く。

「……今日一日、私の言うことを聞いて下さい。それで許してあげます。ダメですか……?」

「……それで良いのなら」

兄さんが躊躇いがちに頷くと「約束ですよ!」とほののんが満面の笑顔で頷いた。

これは面白くなってきましたよー!他人のラブコメ程見ているニヤヤできるものはないからね!今日は楽しくなりそうだ。

「ねえほのか、もしかして雪花も見てるんじゃない?」

「……………へ?」

他人事のままだったらね!

夏の休日②

「達也と……光井はどうしたんだ？」

「向こうでボートに乗ってるよ」

幹比古が指差した先を見てみればレトロな手漕ぎボートで沖へと向かう二人がいた。

「どうなってんだ、ありや？」

「色々あったのよ、イロイロ」

素っ気ないというよりも半分拗ねているような顔で、そっぽを向くエリカと興味深げな表情の幹比古。一体何がどうなっているんだとレオが考えていると先程まで物凄いテンションではしゃいでいた友人がいないことに気がつく。途中までは一緒に競泳をしていたのだが……と海を見てみるがやはりその姿は見えない。

「じゃあ雪花はどうしたんだ？」

「人柱の準備よ」

問いかけに対する答えは意味の分からないもので首を捻るレオ。

その意味を知ることになるのはすぐ後のことだった。

具体的には斜向かいの席に座る少女から発せられる冷たいオーラを見た瞬間である。

「吉田君、良く冷えたオレンジは如何かしら？」

幹比古がシャリシャリシャリシャリ……という、真冬の深更にでも聞こえてきそうな不吉な音を深雪の手元から聞き取ったのは、この真夏だというのに冷えきった空気のせいで聞こえた幻聴ではなかった。

幹比古はカクカクと頷きながら受け取った冷え過ぎて生シャーベットと化しているオレンジをひきつけた笑みで口にする。

「西城君も如何？」

「あ……どうも……」

いかにレオと言えど、この状況下ではどうすることもできず、そう答えるのが精一杯だ。エリカも普段の騒がしきはどこへやら、静かに海を眺めている。その額に流れる汗は夏の暑さのせいだけではないだろう。縮こまっている美月は今にも倒れてしまいそうだ。

レオ、幹比古、エリカ、美月。四人の心は未だかつてないほどびつたりと合わさっており、ある一人の登場を願っていた。人柱、氷の女王への献上品である。

「黒沢さんの鬼！悪魔！」

「大変お似合いですよ？自信をお持ちになられてください」

「自信持ったら色々終わりだよ！」

来たっ！と四人は心からの声を上げる。今回の旅行に同行しているハウスキーパーの黒沢に半ば引きずられるようにしながら登場したのは涙目の雪花だった。より正確に言うならば女装させられ涙目になった雪花だった。

肩がむき出しの丈の短い薄手のワンピースは黒沢の艶やかな黒色のものとは対照的に真っ白な純白。頭に被せられた大きめの麦わら帽子と良く合っている。背景の砂浜や海も相まって正に夏の少女といった感じであろう。

そして雪花の登場（犠牲）により場の空気は一変する。冷えきった空気、四人を押し潰そうとしていた見えない圧力がすぐに消えたのだ。

その発生の原因であったらう少女、深雪は完全に普段のキャラを忘れ、じたばたとする雪花を抱き締めて頬擦りをしていた。

「ほのかには感謝しないと！」

ほのかが雪花に課した条件は達也と同じ。つまり一日なんでもほのかの言うことを聞くことだ。

そしてほのかが最初にした命令は雪花にとっては入学前の悪夢を思わせる悪魔の命令。

『今日一日、深雪の言うことも聞いてください』

つまりは深雪への献上品になれということである。ほのかとしては折角、達也を独り占め出来るかもしれないチャンスなのだ。いかに友達とはいえ深雪に邪魔をされるわけにはいかない。ならば…というわけで雪花は現状の悲劇を迎えていた。

この策をほのかに与えたのは雫である。当初ほのかは雪花には何も課せずに許すつもりだったのだ。達也とほのかがボートでラブコメし、その間、深雪の注意を雪花に反らす。

この一連の騒動は全て雫の掌の上。正に策士だ。

「誰か助けてー!」

雪花の声に五人は合掌で答えた。



夕食のバーベキューを終える頃になると雪花は疲れきっていた。

最初に着た純白のワンピースを初めとした女物の服(別荘にあった数年前の雫の服)を何着も着せられたあげく途中からはエリカや雫までもが混ざってくるという始末。雪花の精神はもうボロボロだった。とはいえ後はお風呂に入って寝るだけ、修学旅行のノリでトランプ遊びくらいはするかもしれないが…と雪花はもう終った気でいた。

「お風呂はどうする?」

この別荘にお風呂は大浴場が一つあるだけだ。脱衣場こそ男女で

分かれているが大浴場の中に仕切りのようなものもない。つまりは男女どちらから入るか？というのが雫の質問である。

「女子が先でいいんじゃないか？その後には雪花だな。で、最後が俺たちだ」

雫の質問に答えたのは達也。特に誰も異議を唱えることなく頷き、女性陣が入浴の用意をすべく部屋へと歩き出そうとしたその時。電池の切れたおもちゃの人形のようにへたりこんでいた雪花が、ガバツと立ち上がりその行く手を阻んだ。

「ちよつと！今の兄さんの発言おかしいでしょ!?なんで女、ぼく、男で分けるの!?!いじめなの!?!ぼくも男なんだから兄さん達と一緒にいいよ！」

「自分の格好を見てから言え」

今の雪花は女性陣に遊び尽くされた結果、昼間とはまた違った所々にフリルのあしらわれた水色のワンピース、薄く化粧が施され、カチューシャのように編み込まれた髪型という完全女装状態であり、男ですとは説得力のない言葉であった。

「ぼくも皆と一緒にお風呂入りたいよ！折角のお泊まりなんだから！」

雪花の言葉に機嫌が直るどころがむしろ良くなった深雪がにっこりと微笑むと言う。

「なら、私たちと入る？」

固まる雪花。そして女性陣の反応はといえば。

「まあ、こいつならいつか」「別に良い」「ちよつと恥ずかしいですけどね」「そうですね、でも雪花くんですし」

順にエリカ、雫、ほのか、美月である。どうやら受け入れる姿勢のようだ。

「…やっぱり一人で入ります」

とはいえ、当人が受け入れられなくては意味がない。顔を真っ赤にした雪花は小さな声で断った。

「あら、残念」

深雪のこの言葉に深雪どころが女性陣全員が笑みを浮かべており、誰も残念と思っていないことは明らかだった。

つまり雪花は、また遊ばれたのである。

その頃、彼女は

雪花の専属メイドである桜井水波は今日から二日間、雪花が旅行で外泊するため仕事は休みだ。とはいえ専属メイドとしての仕事以外にも『四葉』としての仕事がある。その一つである『メイドの仕事に關してのレポート』を提出するため水波はパソコンへと向かい、これまでのことを思い出していた。

七時に雪花を起こすことが専属メイドとしての一日の始まりである。この『起こす』というのが中々に難しく後五分なんて言い始めたから中々に骨だ。なんせ水波はメイド、主人を起こすためとはいえ出来ることには限界がある。

残念なことに初日は結局七時に起こすことは出来なかった。

しかし二日目になると雪花の母、小百合から多少荒っぽくても構わないというお墨付きをもらい、雪花曰く素敵な起こし方(物理)を使えるようになったため七時に起こすことが出来た。水波はメイドとして小さな達成感を得られたのだ。「嘘でしょ…今後毎朝これ？」という雪花の悲痛な声は聞こえない。

故に水波は三日目も意気揚々と雪花を起こすべくまずは優しく語りかける。ぽわわーんとした良い夢を見ているのである。雪花の寝顔に何の変化もなければ揺すってみたり、軽く叩いてみたりする。が、起きない。水波は薄く笑う。そして素敵な起こし方(物理)を使うのだ。

「起きてるー！ちゃんと起きてますよー！」という雪花の声が朝の定番となることも知らずに。

専属メイドの仕事は朝起こすだけではない。そもそも主な仕事は雪花の身の回りの世話。家全体のこととは家政婦である沙世がこなすため水波の仕事はといえば結局のところその一択なのである。

とはいえそうなると水波のやることは意外と少ない。雪花は一日の大半を部屋で過ごすからである。結果、水波も一日の大半を部屋で

過ごすこととなった。

「一緒にゲームやんない？」

主人の娯楽に付き合うのもメイドの役目である。水波はゲームの類いは全くと言って良いほどやらないがチェスやオセロなどのボードゲーム、トランプを使ったカードゲーム等の所謂アナログなゲームのルールを全く知らないという程ではなかった。とはいえ決して強いわけではなく。

「チェックメイト」

正しくドヤツという顔でそう言った雪花に水波は表面上は顔に出さず内心で「明日の朝は強めに起こそう」と決意する。

そんな決意を知るはずもない雪花は口元を手で押さえながら「水波ちゃん、チェス信じられないくらい弱いね！」と半笑いで馬鹿にした。水波は「明日の朝は泣かす」と決意を改めた。

雪花は苦いものが苦手だ。ゆえにピーマンは大の苦手。が、家庭で出される食事は残さない。たとえピーマンが出たとしても。

「うう…苦い」

それはこの家で食事を作っている人のおかげだ。雪花がこの世でもっとも頭の上がない人間は父でもなく母でもなく兄でもなく姉でもなく、幼少より共に暮らしてきた家政婦の沙世である。その沙世が作っている食事を残すことは出来ない。

水波は沙世がただ者ではないと睨んでいる。幼少の頃、雪花がUSNAへと逃げる事が出来たのは沙世の功績が大きいと聞き及んでいた。当時、沙世は二十三歳。つまりまだ成人して間もないたった一人の女に四葉の追跡部隊はしてやられたということだ。彼女がいる

限りこの家で下手な行動はできない。水波はそれを身を持って知っていた。なんせ水波が初日、あちこちに仕掛けたカメラ、盗聴機が次の日には綺麗さっぱりなくなっているという出来事を実際に体験しているのだから。

「水波ちゃん、ゲームやろうよ」

夜、昼間と変わらず部屋の中で過ごすことの多い雪花がニヤニヤしながらゲームに誘う。自分の勝ちを確信しているのだろう。

水波は「殴つちやおうかな」と頭の隅で暴力的なことを考えながらも顔は至って無表情。今度こそは負けない、とこっそり闘争心を燃やしながら戦い^{ゲーム}へと挑む。

「やっぱり水波ちゃん弱いね！」

が、惨敗。ありとあらゆるゲームで完膚なきまでに叩きのめされた。アナログなゲームでは勝てなかったがデジタルなゲーム、対戦型のリアルタイム・シミュレーションゲームには自信があったのだ。操作は簡単なものですがすぐに覚えることができたし、演習などで戦闘訓練を受けていたからだ。実戦を経験している自分が負けるわけがない。だからノツてしまった。負けた方が一つなんでも言うことを聞くと
いう賭けに。

「じゃあ水波ちゃんは明日一日、語尾に『にゃん』をつけるってことで」

こんな屈辱は生まれて初めてだった。

夏の休日③

雫が深雪に「少し外に出ない？」と誘いをかけ二人が外へ出ていく。ついでにこうとした美月であったがエリカに拘束され罰ゲームを強要されることとなった。

「いいね！ぼくそういうの大好きだよ！」

結局一人で入浴し一時は拗ねていた雪花だったが、遊んでいるうちに機嫌が直ったようで笑顔でそんな二人を見ている。

「じゃあ美月には罰ゲームとしてアレを着てもらいましょうか！」

「まさか！エリカちゃん！」

エリカが取り出したのはメイド服だった。何故かこの別荘にあったもので元々は雪花に着せようと雫が用意した服だ。雪花にとっては嬉しいことにサイズが合わず着ることはなかったのだが…。

「美月なら着れるわよね？」

「そ、そんなさ！」

「王手。あと十手で詰みだ」

「ええっ、もう!？」

メイド服を前に崩れ落ちる美月の声と、将棋の傍らそれを盗み見ていた幹比古の悲鳴は見事に重なった。

しばらく海を眺めてから帰るといふ深雪と分かれ雫は一人、別荘への帰路につく。

頭の中は親友への心配で一杯である。なんせ雫はこの日、『ほのかに告白のチャンスを与える』ために動いていたのだから。

昼間の転覆事故は雫のやらせである。あらかじめほのかは泳ぎが苦手だと伝えておいて、達也に助けてもらい、お礼という名目でアップローチをさせるという計画だったのだ。アクシデントはあったものの結果的には達也を独り占めできるほのかにとっては恥ずかしくも嬉しいことだったのでよしとする。そしてほのかに告白のチャンスを与えるべく深雪を外へ連れ出すことにも成功した。

計画通り、と雫はほくそ笑みながら意気揚々と別荘へ戻ったわけだが。

「これはどんな状況？」

雪花達が一同に集まっていたリビングは混沌と化していた。メイド服の美月、エリカと雪花の二人がかりで服を脱がされそうになっている幹比古。達也とほのかは雫の計画通り抜け出している様だが一体何がどうなっているのかさっぱり分からない。

「ミツキーもぼくと同じ気持ちを味わえば良いんだ！」

「僕が負けたのは達也だろ!?なんで二人から罰ゲームなんだ！」

「達也くんには任せるって言われたのよ！観念して大人しくしなさい！」

「うう、やらせるだけやらせといて私は放置ですか…」

もう、放っておこう。

そう結論付けた雫は一人、部屋へと戻るのだった。
深雪の雷が落ちるまであと数分。



「昨日は酷い目にあつたよ」

「それは僕の台詞だよ！」

深雪によりギリギリのところまで罰ゲームの女装から逃れた幹比古。代わりに雪花とエリカには雷が落ち、こつてり絞られた。美月の件も含めて。

「そんなこと言うけど、ぼくが昨日何着せられたと思ってるの？ 軽く十着はあつたね！」

「雪花は似合うから良いんだよ」

「はあ…高校生になるころには自然と女顔じゃなくなる…そう思っていた時期がぼくにもありました」

昨日は相当我慢していたのか普段の二割増しくらいには達也にべつたりの深雪と吹っ切れて押せ押せ状態のほのかに振り回されている達也を眺めながら砂浜に座り込みそんな会話をする二人。

「その男子？ 二人ー！ そんなところでしけてないでこっちに来なさい！ ビーチバレーやるわよ！」

「エーちゃん男子にクエスチョン付けたでしょ!? 一体どういう意味かな!?!」

「罰ゲームは無しで頼むよ！」

エリカの声に二人は駆け出す。
楽しい旅行はまだこれからだ。

夏の二人旅①

「雪花……タイムだ」

「もう使っちゃうの？まだまだ序盤なのに」

背中合わせに立てたモニターで対戦しているのは魔法大学軍事学部戦術研究室がシナリオを作ったリアルタイム・シミュレーションゲーム。

画面には将輝のタイムにより一切の動作と変化がフリーズした市街地を上空から見た俯瞰映像が映し出されている。

「マツキー水波ちゃんより弱いかもね」

「くっそ、このまま勝てると思うなよ」

画面を食い入るように見つめる将輝を雪花がちやかし、将輝が悔しそうに返す。

それを微笑ましく見守っていた真紅郎は隣に姿勢良く座る少女に声をかけてみる。

「桜井さん、雪花君はこのゲーム得意なの？」

「本人はボードゲームの方が得意だと言っていましたけど……少なくとも私は一度も勝てたことはありません」

水波は一度負けて以来何度かこのゲームで勝負をしていた。こっそり特訓を積み自信満々で挑むも敗北、屈辱を味わった苦い記憶が頭を過る。『にゃん』やら『なり』やらの語尾シリーズに加え「なんか面白いことやって」という無茶振りシリーズ。いつか勝つてこの屈辱を晴らしてみせる、と水波の小さい目標にもなっていた。

「へー雪花君強いんだ、あつ将輝がまたタイム使ってるよ……後半どうする気なんだろう？」

真紅郎の疑問にはあつさりと回答がなされた。将輝は結局、残り時間が半分も残っている状態、つまり後半戦へと突入する前に負けてしまったのだから。



「ご友人とお出掛けになられたりはしないのですか？」

「ああ、うん、そうだね皆忙しいし」

夜、旅行から帰ってきてからというものの、全く家から出ようとせず今日も一日を家でダラダラと過ごした主に呆れ返えった水波がそう聞いてみると、読んでいた本から顔を上げ雪花が気のない返事を返した。

何日間かの共同生活の中でこのくらいの会話が出来るくらいには二人は馴染んでいた。

「でも折角の夏休みだし遠出したいよね。といっても海は行つたし

……水波ちゃんどこか行きたいところある？」

「いえ、特には」

水波の答えに「うーん」と暫く唸っていた雪花だったがやがて何かを思い付いたのかにつこりと笑う。

「水波ちゃん、庭園とかお城に興味ある？」

「ゲーデニングは好きなので庭園には少し興味がありますが」

「じゃあ決まりかな…明日行こうか、石川県！」

元石川県金沢市には日本三大庭園の一つに数えられる兼六園や城址が国の史跡に指定されている金沢城などがあり観光には事欠かない。そしてその金沢市の外れには九校戦において一校と優勝を争った国立魔法大学付属第三高校がある。

「突撃！お宅訪問だ！」

そうだ石川行こう。

そんなノリで急遽決定した石川県金沢市への旅行。さすがにメイド服ではなく可愛らしい私服姿の水波と用意されるが間々に着た中性的な服装の雪花、一見姉妹にも見える二人の旅行はこうして始まった。

羽田空港から飛行機でおよそ一時間、石川県小松空港に降り立ちそこからバスで四十分。金沢市に辿り着いた二人は予定通り兼六園や金沢城などの名所を観光し夕方まで楽しく過ごし、そろそろ宿泊先に向かおうというところで水波は訊ねる。

「宿泊先は決まっているとのことでしたが、どこなんですか？」

「マツキーの家に泊めてもらうよ？」

マツキーというのが誰のことかは分かっていない水波であったが親しげな呼び方から推測するに仲の良い友人だろうと結論付け、旅行先を石川県金沢市にしたのにはそういうわけがあったのかと納得する。

それから雪花に言われるがままにバスへと乗車。『国立魔法大学付属第三高校前』で降り、自然豊かな景色を堪能しながら、のんびり歩いて三十分。水波は宿泊先を雪花に任せたことを後悔した。

目の前にあるのは平均的な一戸建て住宅のおよそ十倍はあろうかという大邸宅。その表札には『一条』の文字。

「雪花様、まさかと思いますがアポイントメントは取ってあるんですよ？。」

「取っていないけど大丈夫。何時でも遊びに来いって言ってたし」

それ、社交辞令では？と水波が疑問の声を上げようとするも既に雪

花の指はインターフォンを鳴らした後だった。水波は黙って近くの宿泊施設を調べ始めた。

しかし数分後、水波の予想に反し一条家の門は開かれた。四葉を知っているが故にアポイントメントなしで十師族の本邸に入れるとは思ってもみなかったのである。

「やあ、マツキー！」

「お前、連絡くらいしろよな。来客があつたらどうする気だったんだ。というかなんで家分かった？」

「あつ来客とか全く考えてなかったよ。家の場所はググったら出てきたよ？」

「……はあ、取り合えず入れよ」

水波は頭痛を堪えるように頭を押さえる一条将輝に妙な親近感を覚えた。

夏の二人旅②

雪花達の突然の訪問ではあったが一条家には客室が数部屋いつでも泊まれる状態で用意されているため、別に困ることはない。二人の宿泊はあっさり認められ今夜の宿は心配なくなった。それから将輝の連絡により一条家にやってきた吉祥寺真紅郎を加え、四人は将輝の部屋へと移動。水波の挨拶もそこそこに雪花は目に入ったゲームで将輝に勝負を挑んだのである。

「というわけで、マッキーはマッキーのままです！」

雪花の言葉に将輝はがっくりと首を垂れた。

次に将輝が何かで雪花に勝つまでマッキー呼びのままなのである。

「将輝は奇策を使われた時の対応を訓練すべきだね。後でもっと実践に近い戦術シミュレーションを僕が探しておいてあげるよ」

「うえ…」

低く呻いた将輝の声が結構本気で嫌がっているように聞こえて、雪花と真紅郎は思わず声に出して笑った。

「楽しそうだね、真紅郎君。何のお話している…の」

「茜…ドアを開けるのは返事を確認してからにしろって、いつも言ってるだろ」

ノックと同時に扉が開いて将輝のすぐ下の妹、一条茜が部屋に入ってくる。がその顔は何故か固まっております。将輝の苦言も耳に入っていない様だ。

「真紅郎君の浮気者！」

「え!？」

茜の声が一条家に響いた。

兄さんが彼女連れてきた、真紅郎君が浮気した、そんなことを叫びながら家の中を走り回った茜をなんとか確保し、そろそろ夕食ということで場所を食堂へと移して事情説明を行う。

「二人は男の子で、もう一人はそのメイドさん？」

事情を理解した茜は自分の間違いに気がついた。

小学六年生の茜は真紅郎に度々「愛の告白」をしている。つまり茜は真紅郎に好意を抱いているということだ。すると先程までの状況がどう写っていたのか。

項垂れる将輝を前にして顔を見合わせて笑う真紅郎と雪花。さらに真紅郎の横にはもう一人美少女が。

茜には真紅郎が将輝から女の子を奪って侍らせているように見えたのである。

「お前、妄想も大概にしろよ」

それを聞いた将輝が呆れたように声を上げるが「だってえー」と雪花と水波を指差す茜。

「茜が騒ぐものだから、将輝と真紅郎君にも遂に彼女が出来たのかと思っただわ」

「兄さんへタレだから、彼女なんて当分無理」

将輝の母、美登里がニコニコしながらそんなことを言うとき茜の下の妹、瑠璃が将輝の心を抉る一言をボソツと呟く。想い人に連絡先すら聞けなかった将輝は大ダメージを受けたようで戦闘不能。テーブルに突っ伏した。

「姉さんはブラコンだから手強いと思うなー。この間、海へ行ったらときも兄さんにべったりだったし。二人でジェットスキー乗ったり、日焼け止めを塗りあったり、あーんで食べさせあったり」
「……」

戦闘不能どころが瀕死に陥った。



桜井水波はショックを受けていた。

水波は雪花が「夕飯をご馳走になったお礼にデザート作りますよ」と言い出した時、「本当に作れんのかよ」という疑いの目を向けていた。というのも毎日家でダラダラと過ごし料理なんてしているところを見たことがないからだ。そんな雪花が一時間足らずで作ったミルクプリンと瑠璃の好物であるチーズケーキ。どちらも茜の好物だという苺を使った苺ソースがかけられている。

「おいしい」

「本当だ！凄くおいしいー！」

瑠璃、茜の言う通りそれは美味しかった。ミルクプリンの甘さは控えめで苺ソースの甘酸っぱさが良く合う。

チーズケーキはスフレのようなふんわりと軽い焼き上がりでほんの少しだけ香るレモンが苺ソースを引き立てていた。

まさか、あの主にこんな特技があったなんてと驚愕すると同時にショックを受けたのである。もしかして自分より料理が出来るのは、と考えてしまったからだ。デザート専門という可能性もあるがこれだけ作れて食事は作れません、なんてことはないはず。水波にも専属メイドとしてのプライドというものがある。主より料理が出来ないメイドなんてメイドじゃない、とは言わないがあんな奴に負けたく

はないというのが正直な気持ちだった。

「これだけのものを良くこんな短時間で作れたな」
「魔法を使っているんだよ」

料理に魔法。自分にはない発想だった。水波の目標に『ゲームに勝利し雪辱を晴らす』こと以外にもう一つ。

『料理に魔法を取り入れる』が追加された。

後日、雪花の調理風景を見て諦めることになるのを水波はまだ知らない。

夏の二人旅③十その頃、彼は

司波龍郎は頭を悩ませていた。

四葉からの監視として派遣されてきたであろう水波は雪花の専属メイドということになっている。四葉との契約で雪花に直接手を出すようなことはしないはずだが、わざわざ雪花と歳が近い水波を派遣してきたことにどういう意味があるのか、簡単に分かることだった。つまり雪花が水波に手を出した瞬間、全て終わりなのである。なのだが…。

「…一人で旅行か」

雪花は爆弾でしかない水波と二人で旅行に出掛けたというのだ。沙世がいれば止めるか一緒に行ってくれたものを…と久しぶりの休暇を取り夫と過ごしているであろう沙世のことを考えながらも龍郎は雪花の旅行先を調べる。

雪花のカバンに取り付けられた小型の発信器から常に送られてくるGPS情報を見るに旅行先は石川県金沢市。連れ戻すにしても遠すぎる距離だった。

せめて忠告をしようと雪花の携帯に電話をかける…が何故か家の中で聞こえる着信音。恐る恐るリビングのテーブルを見てみると、そこには雪花の携帯があった。

「…聞きたいこともあったんだがな」

仕事の忙しい彼が昼間から自宅にいるのには訳があった。それはテーブルの上に並べられた四通の手紙のせいである。

一通目は四葉から。そこには水波の派遣に対するもつもとらしい言い訳が綴られている。

二通目は七草から。これは手紙というより招待状である。七草の

双子の誕生日会へのお誘いだ。誕生日会とはいえ普通の中学生のそれとは全く違う。彼女達は十師族、七草なのだ。それなりに規模の大きいものとなるだろう。

三通目は九島から。司波雪花、藤林響子の婚約について、と書かれたそれは題目の通りの内容で、最後には九島烈の名前が。

四通目は五輪から。内容としては雪花を五輪濤の弟として迎え入れたいというものだ。つまりは雪花を養子にくれというものである。

どうすればこれだけの問題を一度に持ち込めるのか、と龍郎は頭を抱える。

たった十日間、九校戦に行っただけでこの有り様。何をすればこんなことになるのか皆目検討もつかない。

そもそも、応援に行っただけの雪花が競技に出場したのがおかしいのである。その日、普通に仕事をしていた龍郎にかかってきた妻からの電話。妙に焦っている声に何事かと思いつつ言われるがままにテレビのチャンネルを合わせる。そこには剣を掲げる息子の姿があった。意味が分からなかった。

そして届く四通の手紙。
ここまでくると他にも何かやらかしているのではないか、と疑ってしまう。

が、今は何事もなく無事に帰ってくるのを待つしかない。帰ってきたら詳しい事情を聞かせてもらおう。そう考えた龍郎は仕事場へと戻る。

仕事場に戻るとすぐに携帯が鳴った。

新しい問題が増えた。



一条家で二泊し金沢を満喫した雪花は三泊目となる夜、泊めさせて

もらっている客室にて一条将輝と密談をしていた。

「あの二人…どう思う？」

「良い雰囲気…に見えるな」

彼らの言う二人というのはこの場にいない二人、金沢魔法理学研究所の寮へ帰った真紅郎と二つ隣の客室に泊まる水波のことである。

「たぶん一日目の夕飯の後だよ、二人が仲良くなったの」

「ああ、雪花が作ったデザートを食べた後、二人とも食堂を出ていったからな、そこで何かあったと見るべきだろう」

「うん…でも」

「ああ…どうもジョージの一方通行という感じがする」

「マツキーと一緒にだね」

「…言うな」

二人が密談をしているころ、吉祥寺真紅郎は寮の部屋で一人、物思いに耽っていた。その頭の中はある一人の女の子で占められており真紅郎はいよいよ自分の状態を把握した。

「これは将輝にあれこれ言えないな」

そして真紅郎はそのきっかけとなった出来事を思い浮かべる。

雪花達の旅行初日の夕食後、少しだけ気持ちが沈んでいた。

気の置けない一条一家の自然な会話にすんなりと入り込んでいく雪花が羨ましく、いつも愛想笑い、楽しそうに見える笑顔で一家の団欒を眺めている自分が小さいように感じたからだ。

少し、風に当たろうと思った真紅郎が食堂を出るとそこには水波がいた。中学生だというのに雪花の専属メイドだという彼女。何か事

情があるのだろうか真紅郎は特に聞くことはしなかった。魔法師の家系にはそういう『聞いてはならないこと』が沢山あることを知っていたからだ。

とはいえ落ち込んだ様子の彼女が一人、月明かりの照らす中で座っているのを見た真紅郎は反射的に話しかけた。自分でも良く分からないうちに声が出ていたのだ。

「どうかしたの？」

「いえ…ちよつと料理の勉強をしようかと考えていただけです」

真紅郎の問いに答えた水波は振り向くと言う。

「吉祥寺さんこそ、どうかしましたか？」

「…え」

「落ち込んでいるように見えたので」

今日会ったばかりの女の子に自分の内心を当てられるとは思っていなかった真紅郎は予想外のこととその場で固まる。

「あまり…思い詰めない方が良くと思いますよ？」

何も知らないくせにとは言えなかった。水波の目がどこか自分に似ていたからだ。

「僕にはもう両親がいないから…ああいう一家団欒ってちよつと辛いというか」

親友にも話したことのない自分の暗い部分を気がつけば口にしていた。内心がバレているから、とつい口が軽くなっていたのかもしれない。

「分かりますよ…私も両親がいまいませんから」

水波の表情は変わらない。変わっていないが真紅郎には悲しそうに見えた。儂く今にも消えてしまいそうに見えた。

そこから暫くの静寂が続いて水波が立ち上がった時、真紅郎は笑顔で言う。

「今度、手料理づ馳走してよ」

「機会があれば」

水波が立ち去ったのを確認した真紅郎はため息をつきボソリと呟く。

「…将輝の気持ちがあった気がする」

それからというものの、真紅郎は水波が気になって仕方なくなつた。

夏の二人旅④

「うわーお腹が痛いよー(棒)」

「大丈夫かー雪花ー(棒)」

四日目の朝、雪花と将輝による三文芝居はしらーつとした空気をものともせず繰り広げられた。

「これは駄目だー、今日行く予定だったひがし茶屋街はぼくらの事は気にしないで、二人で楽しんでくるといいよー!」

「えっ?いえ私は雪花様の専属メイドですので離れるわけには」

雪花達の三文芝居を無関心に眺めていた水波は突然の提案に否定で返す。自分は専属メイドである以前に別の任務も『四葉』から受けているのだ。なるべく近くにいななくてはならない。

「じゃあ仕事は休み!はい決定!」

「…お腹が痛いのでは?」

「痛い痛い超痛い!」

「大丈夫かー雪花ー(棒)」

ハイテンションで言う雪花にジトツとした目を向ける水波。それを受けた雪花が腹を押さえ痛みを訴えると将輝が駆け寄る。本人達は至って真面目なのだ。

「どうしますか吉祥寺さん?」

「ぼくは構わないよ?ひがし茶屋街には何度も行っているから案内も出来るし」

呆れたように言う水波に平静を装ってそう返す真紅郎であるがその内心は将輝と雪花への非難と感謝でいっぱいだった。こんなの間

いてない、心の準備が、という非難や不安、桜井さんと二人、これはチャンスだ、というポジティブな気持ちと雪花達が後押しをしてきていることへの感謝の気持ち。

「そうですか…では今日一日お願いしてもよろしいですか？」

「僕でよければ喜んで」

真紅郎の精一杯の笑顔は心なしか引きつっていた。

真紅郎と水波を送り出した二人は将輝の部屋でどこに行くかを話し合っていた。とはいえ男二人で観光はな、ということになりボーリング、カラオケ、ゲームセンター、何でもあるアミューズメントパークに行くことになったのだが。

「くりむー（真紅郎） 大丈夫かなー」

まるで自分の部屋とばかりに寛いでいる雪花がゴロゴロとフロアリングの床を転がりながら言う。

「さあな、アイツ女の子と二人で遊びに行くなんて初めてだろうからテンパってるかもな」

後ろ向きで椅子に座り、背もたれに両腕を置いている将輝がニヤリと笑いながら返す。

「マッキーは？女の子と二人で遊びに行ったことあるの？」

雪花の質問に暫く無言を貫くがジトツとした目を向けられ観念したのかボソツと白状した。

「…妹なら」

意地なのか決して『ない』とは言わない将輝。『妹なら』、という言葉で何の意地が守られるのかと疑問に感じるものの本人の譲れないラインという奴なのだろう。

「それカウントするならばくも姉さんと二人で遊びに行ったことあるよ、何度か」

呆れたように言う雪花に将輝は心からの声を上げた。

「代われ」



綺麗な夕日が沈むのを眺めながら真紅郎と水波は一条家への帰路についていた。

そんな中、今日のデート（だと思いたい）は中々うまくいったのではないかと真紅郎は心の中でガッツポーズをする。特に気まずくなることもなく楽しく過ごせた、だからうまくいったはず、ならば今度は。そこまで考えて真紅郎は一度立ち止まり深呼吸する。心の準備である。

「どうかしましたか?」

立ち止まった真紅郎に水波が不思議そうに尋ねる。今しかない、そう思った真紅郎は清水の舞台から飛び降りるような気持ちで言った。

「連絡先、交換しない?」

「そうですね」

あっさり返ってきた望んでいた返答に真紅郎の頭の中でファン

フアーレが流れる。

ここで告白しないあたりが真紅郎のヘタレ具合を表しているとも言えるが、ここはあえて慎重派だと言っておこう。真紅郎はヘタレではない、慎重派だ。

「そういうえば、連絡先を誰かと交換したのはこれが初めてです」
「へーそうなんだ」

水波の言葉に真紅郎は内心で飛び上がった。



「また来いよ、今度は連絡してからな」
「分かってるよ、計画性は大事だからね」

四泊五日の金沢旅行を終え都内にある自宅へと帰ることになった雪花と水波を見送るため一条家の門に集まった将輝、真紅郎、茜。将輝と雪花がにこやかに会話をする横で引きつった笑みを浮かべているのは真紅郎。というのも茜が何やら水波を睨んでいるからである。当の水波はといえば気にした様子もなく雪花の後ろに控えている。

「むー思わぬ伏兵…桜井水波、相手にとって不足なしよー」
「茜ー相手にされてないぞー」

水波を指差し宣言をする茜であるが水波はスルー。すぐに将輝が指摘する。

「今度はぼくの家に遊びに来てよ、姉さんも呼ぶよ?」
「そのうちな。司波さんを呼ぶなら先に言っておいてくれよ、心の準備が必要だ」

「了解、じゃあそろそろ行くよ」

雪花が別れを済ませたのを見ていた水波がふと真紅郎の方を見る。真紅郎を守るように茜が立つのも気にせず水波は爆弾を落とす。

「昨日は楽しかったです。機会がございましたら是非また誘ってください。真紅郎さん」

「この泥棒猫おー!!」

茜の叫びをスルーして歩き出した雪花と水波。

「どうしたの水波ちゃん？ニコニコして」

「いえ、予想以上に反応が面白かったものですから」

二人が見えなくなるまで門の前で立っていた将輝は真紅郎が石像のように固まっていることに気がつく。

「どうした、ジョージ」

「いや、なんでもない」

真紅郎は水波の『不可視の弾丸』に撃ち抜かれ固まっていたのだが、それを口にはしなかった。その代わり真紅郎はボソリと本音を漏らす。

「ちよつと雪花くんが羨ましいよ」

「…俺もだ」

二人は揃ってため息を吐いた。

これからの事と知らなかった事

金沢旅行から家へ帰ると珍しく父さんが居た。まだ夕方、夕食にはまだ早いというような時間だ。本当に珍しい。

「雪花、話がある」

真剣な顔の父さんの手には何通かの手紙があった。

あつこれ厄介事や。

長年の勘で分かるようになっていた。泣きそうだった。



沙世さんが留守らしく今、家の中には父さんとぼく、水波ちゃんしかいない。そしてこの部屋、父さんの書斎にてぼくと父さんは向かい合っていた。

「私はこの話、受けるべきだと思う」

父さんが机の上に出された四枚の手紙の内二枚をこちらにすつと押し出す。九島家と五輪家の手紙だ。

九島家の方は婚約について。ざっと読んでみたが概ね九校戦の時に話した内容そのものだ。そして五輪家の方、正直心当たりがない。

「へっ？・養子？」

「今後、魔法師としてだけでなく何らかの形でお前が大成すれば四葉は必ず接触してくる。その時、今のままでは恐らくお前を守りきれないだろう。言うならば今はただの時間稼ぎでしかない。トールラスであることがバレるのも時間の問題だろうしな。

ならば九島との婚約、五輪の養子、どちらも受けるべきだ。十氏族

二家の後ろ楯があれば四葉もそう簡単には手が出せんはずだ。とい
うよりもリスクとリターンが釣り合わなくなるだろう」

ぼくが把握する前に話は進んでいく。ちよつ 滯さん何やってん
の!?!何養子つて!

「養子になると言っても名前だけ、それも高校を卒業してからで良い
とのことだ。五輪としての義務や責任をかすこともせず、今までと変
わらずに生活を送って良いとな。なんでも滯様のご機嫌取りらしい。
娘にぬいぐるみを買ってやる父親のようなものだ」

滯さん何やってんの、マジで。頭に浮かぶ滯さんのにっこり笑顔。

「…何その好条件。怪しさMAXなんですけど」

「分かっている。調べた上で最終的な判断は下すが、五輪の考えがど
うであれ四葉に行くよりはマシだろうな」

頭を過るのはグツヘツヘへと両手をワキワキさせている四葉真夜
の姿。実際そんなことはしないだろうがイメージである。怖い。

「四葉の監視は受け入れざるを得なかったが今となっては良かったか
もしれん。お前が他の十師族と懇意にしていることを四葉に示し牽
制できる」

「それなら旅行で散々示してきたよ」

一条にアポなしで突撃したからね!我ながら無茶やったものだ。
あの頃は若かったね。

「一条か…その辺の話は後で詳しく聞かせてもらおうとして、七草の双
子とも懇意にしておけ。そこからこのパーティーで当主に接触し、あ
る程度の関係を築ければそれも四葉への牽制になる」

七草の双子、泉美ちゃんと香澄ちゃん。そういえば誕生日会に行く的な約束をしていた気がする。そうだ、九校戦九日目でちーちゃんと双子に土下座した時だ！誕生日会を物凄く盛り上げるって約束したんだった！ハードル高いよ！勢いに任せてなんてことを約束したんだ、ぼく！

「それから…何度も忠告している通り、水波には気を付けろ。アレは四葉の監視だ。この部屋、盗聴機や隠しカメラには最大限の注意を払っているが…今の会話も聞かれていることを前提にして動け、いいな？」

「了解」

返事をしたぼくの頭の中は誕生日会をどうするかで一杯だった。誕生日会盛り上げるってどうすればいいんだ！滯さんの時なんて隅にいただけだし。やっぱ一番盛り上がるのはプレゼントだろうか？何かインパクトのあるプレゼントをすればウォーツてなるんじゃないか？でも今時の女の子の欲しい物って分からない。水波ちゃんに聞く…のは止めよ。なんか流行とか疎そうだし。そうやってくると、やっぱ頼りになるのは沙世さんかな。いつもの確なアドバイスをくれるし。

「父さん、そういえば沙世さんは？いつ帰ってくるの？」

何気なく聞くと父さんの顔が歪む。

「沙世は当分戻らない」

「えっ何で？」

沙世さんは今まで長期休暇なんて取ったことがない。結婚した時だって一週間と休まなかった。なのに、何で。

「……夫婦喧嘩だ。実家に帰らせて頂きます、という奴だな」
「あちゃー」

邦人さん何やってんの？旅行行く前は邦人さんと出会った記念日だから二人で過ごすって沙世さんルンルン気分だったのに。

「なんでも、記念日を忘れていたらしい。そしてその日に仕事まで入っていた」

邦人さああああん!! 終わった！詰んでるよ！沙世さん怒ると怖いのに！あれ…おかしいな、震えが止まらないや。ぼくが怒らせたわけじゃないのに。

「実家って遠いの？」

「いや、そう遠いわけではない。ただ父親の仕事の関係でな、暫く手伝うそうだ」

沙世さんの実家。今思うとぼくが沙世さんの名字、旧姓を聞いたのは一度だけのような気がする。確か――

「名倉三郎、七草のボディガードをしている」

――名倉。

えっもしかして数字^{エクストラ}落ち？

今更気がついた事実には、ぼくは五輪の養子の件より驚きその場で固まった。

会長選挙編

『幻の古葉と生徒会室』

『幻の古葉』

クラスでぼくはそう呼ばれていたらしい。なんでもちやんとクラスに在籍しているはずなのに、誰もその姿を見たことがなかったことから付けられたようだ。

そんな『幻』呼ばわりされているぼくが学校に来るとどうなるか、簡単に分かることだ。つまり注目される。

視線。視線。視線。

例えではなくクラス全員の視線がぼくに集まっていた。帰りたいたいに学校へ来たことを後悔していた。なんだこの地獄は。

夏休み。

金沢旅行から帰ってきた後は忙しかった。

まず飛行魔法専用デバイスの開発。ぼくは兄さんの家に泊まりに行くと水波ちゃんに嘘をついて三日で仕事を終わらせた。そして愛媛にある五輪本家への挨拶。結局返事は高校を卒業した後でも良いということ为先送り。ニコニコ笑顔の滯さんと共に愛媛で五日間を過ごし、ぼくの夏休みは残り一日となった。夏休み最終日は思いつきりだらけた。もはや溶けるんじゃないかというくらいにだらけた。水波ちゃんからの冷たい視線にも、結局三日で帰ってきた沙世さんからの生暖かい視線にもめげずにだらけきったのである。そんな楽しかった？夏休みも終わり新学期、ぼくはなんと学校に登校した。登校したのだが…。

「クラスの雰囲気は辛すぎる」

絶賛後悔中だった。学校というものを舐めていた。始業式ということとで午前中で終わった今日でさえこの疲労感。明日からは通常授業

だというのに耐えられるのか。無理だろ絶対。

そんなことを学校帰りに立ち寄った兄さんと姉さんの家で話せばすぐに返ってくる辛辣な言葉。その通りだけでも！もっと慰めの言葉を要求したい！

「それはお前の自業自得だ。一学期間丸々サボる奴なんて魔法科高校では初だろうな」

「うう、せめて姉さん達と同じA組だったら良かったのに」

ぼくのクラスC組にはまだ誰も友達がいらない。あの空気の中誰かに話しかける勇気なんてぼくにはなかった。

「そういえば明日、お前を生徒会室へ連れてくるよう会長に言われているんだ。深雪が迎えに行くから教室で大人しくしている」

「…勘弁してよ」

ぼくが司波兄妹の弟であることは周知の事実というわけではない。一校でこの事を知っているのは一校幹部の面々と仲間内だけだ。そんな中、姉さんがC組に迎えに来たらどうなるか、いよいよぼくは視線による攻撃に耐えられなくなってしまう。

「ぼくが一人で行くよ」

「不安だがまあ良いだろう、忘れずに来るんだぞ」

行くわけないだろ、面倒くさい。



「そんなことだろうと思っていた」

「お兄様の予想通りでしたね」

翌日の昼休み。生徒会室になんて行きたくないぼくは昼休みになると速攻で教室を抜け出した。そして速攻で捕まった。現在は両サイドを司波兄妹に挟まれて生徒会室へ連行中である。

「無事、雪花を連れてきました」

兄さんがインターホンを押し、そう告げると「ご苦労様」という明るい声と共に微かな作動音がしてロックが外される。

初めて入った生徒会室（そもそも学校に登校したのがまだ二度目のだから当たり前）には生徒会メンバーが全員集合しており、風紀委員長の渡辺摩利も同席していた。

「今日貴方に来てもらったのは大事な話をするためなの」

そこで語られた内容をまとめると、出席日数がヤバイ、でも九校戦で頑張ったしこれから真面目に登校すれば許してあげるわ、というものである。取り合えず退学の危機がなくなり一安心していると真面目な話が終わったからか生徒会室ではガールズトークが始まった。ふと周りを見渡すと、はんぞー先輩がちっちゃくなっており、兄さんも気配を消していた。こいつら慣れてやがる。

「そういえば雪花君ってダンス上手いわよね。達也君はダンスマシーンみたいだったけど」

USNAに住んでいた時は暇すぎて色々なものに手を出していた。ダンスにも手を出していたし、ピアノとか楽器にも手を出していた。

「真由美と雪花君でダンスを？それは随分と微笑ましい光景だったろうな」

「どういふことよー」「どういうことですかー」

ぼくと会長の言葉が重なる。

「そう怒るな、達也君もそう思うだろ？」

「そうですね」

仲間からの支援を得て調子に乗った渡辺摩利はついに『剣姫』の話題を持ち出そうとした。良いだろう、そっちがその気ならこっちもやってやろうじゃないか！

「そういえば皆さん、ぼく面白い話を聞いてしまったんですよー！」

全員の視線がぼくに集まる。嬉々として『剣姫』のことを話そうとしていた渡辺摩利でもある。

「誰とは言いませんが、ぼくの友達のこと…まあ某剣術家としておきましよう。その彼から聞いた話なんです」

某剣術家、と言ったところで渡辺摩利が、ん？と何か思うところがあつたご様子。

「その某剣術家の彼女は普段は凛々しくキリツとした人らしいんですが、二人きりになるとかなりの甘えたがりのようで中々会えないこともあつてか、手をずっと握っているそうですよ」

話を聞く皆は何が何だか分からないのか頭上にクエスチョンを浮かべながらも黙って聞いている。ただ一人を除いて。

「そんな彼女が某剣術家に告白した時の言葉がとても良い台詞だったので皆さんにもお聞かせしたいな、と」

チラツと渡辺摩利を見ると顔を真っ赤にして固まっていた。

「『私じゃ駄目…か？お前を隣で支え…』」

「雪花くん！その話はもう良いんじゃないか!？」

顔を真っ赤にしたまま、ぼくの言葉を遮りアワアワと慌てている渡辺摩利の様子に皆もこの話が誰のことなのかを理解したようで、特にさっきまで言われたい放題言われていた会長はニヤニヤしている。そしてここぞとばかりに反撃に出た。

「で、雪花君。他にも何かある?」

「沢山ありますよ?」

ニツコリ笑顔で言った。

「ぐあああああー!」

おおよそ女の子らしいとは言えない渡辺摩利の悲鳴が生徒会室にこだました。

改変の代償

今、校内で話題になっている会長選挙。何やら『司波達也が立候補するらしい』という噂が流れているがそんなことはないし、ぼくは誰が生徒会長になるのかを知っていた。

中条あずさ。

次の生徒会長は彼女だ。兄さんの『悪魔の口』デーモン・マウスに唆されてやる気になり立候補しそのまま信任投票で新生徒会長に就任するのだ。

小柄な童顔。小動物っぽい印象で、見かけどおりに気弱な性格。

意外なことに、というのは失礼かもしれないが意外なことに姉さんと同じく主席入学をしており、その後も毎回上位5位以内をキープしているとか。今年度1学期の席次では、理論・実技・総合成績とも次席だったようで実技においては細やかさが持ち味らしい。

重度のデバイスタクで語りだすと周りが見えなくなるというオタクの典型。分かる、分かるよ。良いよねCAD！いくらでも語れるよね！周りの冷たい目とか気にならないよね！

そんな、ぼくと凄く話の合いそうな中条あずさは魔工師を志望しており魔工師として『トールス・シルバー』を尊敬している。ここまでは良い、凄くグツドだ。

でも兄さんがトールス・シルバーであると9割以上確信している素振りがあるのはいただけくない。トールス・シルバーの情報は四葉によって厳重に守られている。その厳重に守られている情報を何の後ろ楯もない中条あずさが知ってしまったらどうなるか、答えは簡単。消される。知ってはならないことを知ってしまったから。

ぼくが読んだ中でもっとも未来となる原作知識、原作八巻の時点ではそんなことは起こらなかった。九校戦の時点でかなり確信を持っていたにも関わらずだ。これは中条あずさが気弱な性格で達也のこ

とを誰にも打ち明けていないことが大きい。心の中で留めておけばそれは知らないことと変わりない。

が、ぼくは九校戦において、かなり手を出してしまった。本来起こり得ないことが起きてしまう可能性もある。それに今日気がついた。

「というわけで、あーちゃん先輩、ちよつといいですか？」

「何が、というわけなんですか!? あーちゃん先輩って何なんですか!？」

五時間目終了直後、ぼくはあーちゃん先輩の教室へと乗り込んだ。(魔法科高校は五時限制) 生徒会室へと行く準備をしていたのである。彼女はぼくを見て首を傾げるがその直後に言ったぼくの発言を聞いて声を上げる。

「まあ、まあ。詳しい話は外でしましょう。ここだと目立つので」

「えっ? えっ? ちよつと古葉君!？」

ぼくらが立ち去った後の二年A組には唾然とした生徒達だけが残された。



まず安心したことがある。

「ぼくの方がちよつと大きい!」

「頭の上に手を置かないでください!」

あーちゃん先輩より背が低かったらもう立ち直れなかったかもしれない。涙目で訴えてくるあーちゃん先輩の頭をポンポンしながらカフェの席に座る。ちなみにあーちゃん先輩というのは二年A組に入った時、周りから暖かい目で見守られているのを見てそう呼ぶと決めた。

「実はあーちゃん先輩にご相談がありました」

「その前にそのあーちゃん先輩というのを止めてください!」

「あつ長いですもんね。分かりました、シンプルにあーちゃんでききましょう」

「どうして先輩の方を改善したんですか!あーちゃんの方を止めてくださいと言っているんですよ」

「じゃあ、あーたん」

「悪化した!?!」

「あつそういえば会長に立候補したそうですね、応援しているので頑張ってください」

「あつありがとうございます、頑張ります…って違います!あーちゃんもあーたんも駄目です!司波さんや司波君のように中条先輩でお願いします…!」

「分かりました、それであーちゃん先輩。ご相談なんです…」

「…もう良いです…どうせ私は『あーちゃん』なので」

弄りすぎた。あーちゃん先輩は完全にしょげている。でも反省はしない。後悔もしていない。だって楽しいから!

「トーラス・シルバーが誰だか興味ありません?」

「えっ?それが相談…ですか?」

今、あーちゃん先輩が実際のところどれくらい司波達也トーラス・シルバーだと考えているのか、それを調べる。

「ええ、なんでもあーちゃん先輩はトーラス・シルバーの大ファンだそうで。もしかしてその正体に心当たりがあったりするのかなーと思いますまして」

「あつあるわけないじゃないですか!?!」

「えー本当ですか?本当は心当たりがあるんじゃないですか?例えば

」

この人嘘つけないタイプだ、とすぐに分かる過剰な反応。ぼくはあーちゃん先輩の耳元で小さく囁いた。

「司波達也…とか？」

びくりとあーちゃん先輩の体が跳ねる。

「やつやっぱり…トールラス・シルバーの正体はっ…」

そこまで言ったところでぼくはあーちゃん先輩の口を押さえた。

「そのこと、誰かに言っちゃいました？」

「いいいえ。ほぼ確信を持ってはいましたが私の中だけで他の人には…」

良かった。もし誰かに言っていたらその人まで狙われるかも知れなかつたんだから。

「あっ！そういうえば今日、平河先輩と話した時、私言っちゃいました！もしかしたらそうかもって。まずい…ですか？やっぱり。…って古葉君？」

「…お金ここに置いておきます、好きなものを注文して下さい」

「ちよつと古葉君!?待って!」

「今のごとは誰にも言わないように!」

あーちゃん先輩を置き去りにしてぼくはカフェを出た。まずい。平河先輩というのはちーちゃんの姉のことだろう。二人に交遊関係があつたとは知らなかつた。

あーちゃん先輩がちーちゃんの姉、平河小春にトールラス・シルバー

のことを話すというのはぼくが平河小春を助けたからこそ起きた事態だ。原作知識による予測は出来ない。小さなことではあるが情報の危険度は高いのだ。四葉が口封じに乗り出す可能性もある。

ちーちゃんに電話をする。まだ家に着いて少ししか経っていないらしく妙に機嫌が悪い。電話に出た瞬間、「用がないなら切るけど」だ。用があるから電話したに決まってるでしょ!?!とツツコミを入れている暇はないので早速本題に入る。

「ちーちゃん、お姉さん変わった様子ない?」

「姉さん?別に普通だけど」

どうやら、ぼくの先走り過ぎのようだ。いくら四葉でも友達同士の会話だけでその人を消すなんてしないか。

「あつても何か変なメールがきたわよ?」

「変なメール?」

『司波達也がトラス・シルバーかもしれない』だって。そういえば今日はそれ調べてから帰るって言ってたけど…」

まずいことに事になったかもしれない。

ヨルとヤミ

「私は中条さんに聞いただけ！それで興味を持って調べてただけなの！」

「だって、どうするのヨル姉さん」

「決まっているでしょ、ヤミちゃん。持って帰って調べるのよ。嘘ついてるかもしれないでしょ」

「嘘なんてついてない！こんな状況で嘘なんてつくわけないでしょ！」

平河小春は後悔していた。

今日、後輩から聞いた司波達也がトールラス・シルバーかもしれないという話に興味湧き調べてしまったのだ。するとそれが本当のよな気がしてきた。トールラス・シルバーの所属するFLT、その筆頭株主である椎原辰郎の本名は司波龍郎だということを知ったからだ。FLTと司波達也には繋がりがあるのかもしれない。もしそうならば彼がトールラス・シルバーである可能性も高い―そこまで調べたところで彼女は拉致された。連れてこられた場所が何処だかは分からない。目隠しをされているのだ。木製ではないひんやりとした座り心地のイスに両手両足を固定されており逃げることは出来ない。

そして、聞こえてくる二人組の声。

ヤミ、ヨル。お互いをそう呼び合う二人の声は幼く自分より歳下、口調や声から片方は女の子だがもう片方は声も口調も中性的でどちらともとれ性別は不明：そこまでが小春の限界であった。拉致された、という恐怖の中でこれだけ分析できたのは一重に自分を拉致した相手が子供だったからだろう。心のどこかで危機感が薄くなっていたのだ。

だから―

「で、殺していいの？」

—そんな声を聞いたとき小春の恐怖心は溢れ出した。自分の立場を再確認し涙を流す。聞かれたことには全部答えた。後輩を売るとか見捨てるとかそんなこと考えもしなかった。ただ訊かれるがままに話した。生きるために。

「うるさいから、黙らせなさい」

「了解」

コツつと腹部を触られた：その瞬間、小春の腹部にハンマーでも打ち込まれたかのような痛みが襲いそのまま意識を失った。

「移送の準備が整いました」

ヨルとヤミの協力者である黒服の集団の一人がそう告げたその瞬間だった。

黒服とは別に黒い影が立っていた。その姿を見たときヤミはふざけているのか、と声に出そうになった。それも無理はない。影の主は変装のため派手な格好をしているヨルよりもヘンテコだったのだから。

どこのお土産なのか不気味な木の仮面、絵の具を全部ぶちまけたかのようなカラフルなコート、両手には包帯を巻いている。こいつ、変態だ！と女装している自分を棚に上げてヤミは黒い影を変態と呼称することにする。

「『その人を返してくれるかな?』」

男とも女とも子供とも大人とも取れるあきらかになんらかの細工がされている声で黒い影、もとい変態は言った。

「何者かしら?」

「『通りすがりの正義の味方、スノー仮面』」

変態が右手を斜め上に突き上げ、左手を腰の横で構えたポーズでそう決めた。

「鏡見てから言え」

気がつけばヤミはそう口にしていた。

『仕方ないだろ、有り合わせなんだから』

木のお面からはみ出た長い緑色の髪をかきながら変態改めスノー仮面は平坦な声で言う。

「なんでも良いですわ。ヤミちゃんやるわよ」
「了解」

ヨルが小春の座るイスの背後に立ったその瞬間、小春の身体が消えた。ヨルの『疑似瞬間移動』だ。物体の慣性を消し、その周りに空気の繭を作り、繭よりも一回り太い真空のチューブを作ってその中を移動する魔法。

チューブを作る工程で周囲の空気を押しよける気流が発生するため、移動先が事前に察知されてしまう欠点があるが今回の場合移動先は仲間であろう黒服の元。それを気にする必要はない。

『面白い魔法だね』

「貴方の格好程ではありませんわ」

『私も君程じゃないけどね』

「…ヤミちゃん、本気でいくわよ」

「はいはい」

敵の挑発に乗るなんて姉らしくない、とヤミが呆れたように首をふ

るとスノー仮面がヤミを指差す。

『ところで君、なんで女装してるの？変態なの？』

「…ヨル姉さん本気でいくよ」

女装を見破られたことに関しては良い、むしろうれしい。だが変態に変態呼ばわりされるのは我慢できない。ヤミは先程まで姉に呆れていたことを完全に忘れていた。

『さて、平河小春を連れていかれるわけには行かないからね、私も少しばかり本気を出させてもらおうよ』

戦いの開始はヤミの魔法からだった。

ヤミが右手にはめているマツトブラックのナックルダスターはその殆どが飾りである。掌に握っている棒の部分だけが単一の術式に特化されたCADでありボタンを押すことでヤミ固有の魔法を紡ぎ出す起動式を展開する。

『ダイレクト・ペイン』

人の感覚に直接痛みを与える魔法。先程小春を気絶させた魔法である。

しかし、恐ろしいこの魔法もスノー仮面にとっては関係ない。スノー仮面が右手を振るとその術式は吹き飛ばされる。

「術式解体!」

『私、痛いのは苦手なんだ』

スノー仮面の思わぬ実力にヨルとヤミは焦る。術式解体の使い手は少ない、がその力は絶大だ。射程距離は短いがあらゆる魔法に対して有効。二人がかりとはいえ苦戦は免れない。

「ヤミちゃん、退くわよ。任務は果たした」

『任務は果たした？本当にそうかな？』

ヨルが撤退を決断しヤミを疑似瞬間移動で飛ばそうとすると、スノー仮面がそれを遮るように言葉を紡ぐ。しかしヨルは気にしない。任務は果たした、平河小春は部下の元へ飛ばし運ばせたのだから。

「次に会ったらそのふざけた仮面ごと顔面をぶっ飛ばしてあげるわ」

『じゃあ次会う時はもつとかつこいい仮面を用意しておくよ』

そうして、ヨルとヤミはスノー仮面の前から姿を消した。残されたスノー仮面―雪花は木のお面を外し二人が飛んでいった方を見つめながら言う。

「仲間がいるのはそっちだけじゃないんだよ」



「どうということなの…これは」

ヨルの目の前にはボロボロで転がされた黒服達の姿。その数、十数人。黒服は魔法師でこそないものの手練れ揃いだ。敵が一人だと仮定した場合この短時間でこんなことを出来るのは魔法師だけだろう。それも並の魔法師ではない。

「あの変態は囷だったってことだね、単独で動いてるわけじゃなかったんだ」

「…何者なのかしら」

雨も降っていないのに何故か水浸しになっている地面では座ることも出来ない。二人は連絡した黒服の増員が来るまでその場でただ立ち尽くした。

戦いの準備

「ちーちゃん、お姉さんどうにかならない？」

救出から丸一日経つというのに部屋に引きこもって出てこない。まあ命の危険があつたわけだし普通の女子高生なら仕方ないかもしれないけど。

「こうなつちやつたら無理よ。トイレに出てくるのを待つしかないわね」

「そんなに待てないよ、紗世さんが外で待ってるんだ…仕方ない。時間ないし手荒になつちやうけど」

ちーちゃんのお姉さん、小春先輩の部屋は今時珍しくアナログな鍵、鍵穴式だったのでピッキングして開ける。

「はい、開いたー」

「…貴方そんな技術どうして持つてるの？」

「子供のころ沙世さんに教えてもらった」

「…その人、家政婦さんなのよね？」

「嗜みだつて」

頭を抱えるちーちゃんを置いて小春先輩の部屋に入る。小春先輩は布団を頭から被っているのだろう。その姿は見えずベットの上が丸く膨れている。

「先輩、安全なところに移動させるんで失礼しまーす」

「ちよつと何するの！離しなさい！」

小春先輩を持ち上げて外へ運ぶ。暴れているが布団でぐるぐる巻きにしたためモゴモゴと動いているだけだ。そして外で待機していた沙世さんの運転する車に押し込んでちーちゃんも乗り込み発進す

る。

「どこに向かうの？」

「五輪の別宅」

「…五輪って十師族の？」

「うん、セキュリティは最高だし、何より戦略級魔法師が居てくれるから」

一緒に愛媛に行ったとき滯さんが戦略級魔法師だと知った。同じ戦略級魔法師でも兄さんとは大違いだ。兄さんには滯さんを見習ってもっとぼくに優しく欲したい。



「ごめんなさい、滯さん。ご迷惑おかけします」

「気にしないでください。私のことを頼ってくれて嬉しいですよ。…でも『滯さん』は止めてください」

「うう、分かりましたよ…滯姉さん」

五輪家の別宅に着いてすぐ、全員で滯さ…滯姉さんに挨拶する。なんか愛媛に行つて以来、滯姉さんと呼ばせようとしてくるんだよね。可愛いからいいんだけどちょっと恥ずかしい。

「貴方、九島家だけじゃなくて五輪家とも繋がりがあつたの？」

「高校を卒業したら五輪家の養子になるかもしれないんだ。この前本家に挨拶にも行ったよ」

「…これが終わったらなるべく貴方には関わらないようにするわ」
「酷い!？」

小春先輩を内側からは鍵のかけられない部屋に押し込んでちーちゃんを部屋に案内する。案内と言っても邦人さんに着いていってただけだど。

「あーちゃん先輩は今大事な時期で学校を休めないから沙世さんに迎えに行ってもらったよ。学校はセキュリティが固いし安全だけど帰りは危険だからね」

「その危険な帰り道を家政婦さん一人で大丈夫なの？」

「武闘派家政婦さんなんだよ」

「そんなの聞いたことないんだけど」

「ちなみにその執事さん、沙世さんの夫だから」

用意された部屋に入ろうとするちーちゃんにちよつとしたイタズラ心で教えてあげる。

「…何かごめんなさい」

何故か謝りながら入っていった。

さて、後はあーちゃん先輩を待つだけだ。ここに狙われる危険のある人を全員集め終わったら…いよいよ本番。こちらから仕掛けなくてはと狙われたままになってしまふのだ、なんらかの交渉をしてこの件を終わらせる。

切り札はある。

実質、四葉との対決が始まる。

魔王との交渉

ちーちゃんを部屋に送ってすぐ、沙世さんから信号が送られてきた。それはつまり現在襲撃を受けているということ。GPS情報から場所は学校の近く。白昼堂々大胆な犯行である。

「行きますか」

前回、小春先輩が誘拐された時は急だったため、あんな感じの変装になってしまったが今回は準備万端。音声加工機能が付いた雪の結晶をモチーフにして作った白い仮面を着け、防弾、耐熱、緩衝、身体能力を軽く三倍には引き上げてくれるであろうパワーアシスト機能、レーダー等に映らないステルス機能、ベルトの横には飛行魔法用CADのスイッチが付いているぼく設計のスーパースーツを着用。その上から魔法陣の織り込まれた白いローブを着れば『新・スノー仮面』の完成だ。

五輪家別宅二階の窓から飛行魔法のスイッチを入れて空へと駆け上がった。待つてて沙世さん！

ぼくが到着する頃には沙世さんによって襲撃者は全員転がされていた。あーちゃん先輩の不審者を見るような視線が辛かった。



四葉真夜という人間のことをぼくは意外と知らない。関わらないようにしてきたわけだから当然なのだが原作でそう登場回数が多くなかったのも原因だろう。

四葉家の現当主で未婚。

司波兄妹の叔母にあたり、司波深夜の双子の妹である。たしか46歳。

当代における世界最強の魔法師の一人と目されていて、『極東の魔王』『夜の女王』の異名を持つ。

12歳のときに出席した『少年少女魔法師交流会』にて、誘拐され、人体実験の被験体にされたせいで生殖能力を失い、救出後、心を閉ざした真夜に姉の四葉深夜が精神構造干涉魔法にて、経験を知識に改変したという過去があり一時期は九島烈の教えを受けていたらしい。

うん、絶対手を出したらアカン人だね。魔王とか女王とか言われているし。そんな人とこれから交渉しないといけない。いつまでもこのままというわけにはいかないからだ。襲撃を止めさせるため四葉真夜と話し合いをする。

うわっ緊張してきた。最初は九島烈の教え方あるあるとかの話題で盛り上げた方が良さだろうか？ぼく、真面目な感じの空気って苦手で五分持たない可能性があるんだけど。

頭で色々考えていても仕方がない。そろそろ水波ちゃんにセツティングしてもらった四葉真夜との約束の時間だ。身だしなみを整えて待つ。

すると、電話の呼び出しメロディーが奏でられた。カメラの前に立ち、通信回線を開く。

画面の中で、ほとんど黒に近い色合いのロングドレスを身に纏った上品な女性がにこやかに微笑んでいる。46歳のはずだが外見は三十過ぎにしか見えない。画面越したというのに凄い女王感だ。姉さんもいつかこうなるのかと思うと今から怖い。

お互いに自己紹介を済ませて本題に入る。

「中条あずさ、平河姉妹、並びに今回の件に関わった人間に対して今後一切手出ししないでいただきたい」

『あら、何のことかしら。私としては楽しくお喋りがしたいのだけだわ』

まあ、しらばっくれるよね。頬に手を当てて困ったわ、というような顔をする四葉真夜。大丈夫、その顔が真剣になるくらいの切り札を

こちらはいくつも用意しているのだ。

「まあ、聞いてください。今回の件、なかったことにして頂けるのなら、こちらからは『情報』を差し上げます」

『情報？』

「例えば…大亜連合軍が日本に攻めてきますよって言ったら信じます？」

まずは…といった感じだったのだが意外と好反応。

四葉真夜は瞳を閉じ優雅に紅茶を口へ含むとしばらくの間沈黙し、口を開いた。

『嘘はついていないように思えるわね。…そうね、今日は貴方のことを少し知れたし良いでしょう。その情報で貴方の言う『今回の件』なかったことにいたしましたでしょう。ただしこれ以上の情報漏洩があった時には』

その先を口にすることはなかったが言いたいことは分かっている。

しかし今回はラッキーだった。考えていた中で二番目に良いパターンだ。

「ありがとうございます、大亜連合軍についてはこのままお話しても？」

『構わないわ、水波ちゃんが用意した電話なら盗聴等の心配はありません』

「それでは。」

大亜連合軍が攻めてくるのは十月三十日。場所は横浜。『全国高校生魔法学論コンペティション』に攻め入ります。目的は魔法科高校の生徒達を拐うこと。『人食い虎』の異名を持つ呂剛虎も投入してくるでしょう。大亜連合が公表している唯一の戦略級魔法師で十三使徒の一人である『震天將軍』劉雲徳も追い詰められれば出てくると思います」

『思っていたより詳しい情報ね、驚いたわ』

ぼくはあんたの若作りの方が驚いたよ、とは言えない。まずい、そろそろ真面目モードの活動限界がきている。

交渉が終わった後も話しは続く。誘導尋問を仕掛けてきたりかなりうざいのをなんとかかわして会話を続ける。

「それでは、私はこれで」

『ええ、今度は深雪さんと達也さんと一緒に屋敷へいらっしやい』

誰が行くか、そんな死地。もう黙ってろよ46歳独身。

『何か言ったかしら?』

心の中で土下座した。一瞬、魔王が見えた。本物の魔王見たことないけど魔王が見えたよ!

「いえ、次の長期休みにでも是非お邪魔させていただきます」

『そう。それじゃあ楽しみにしているわ。綺麗な衣装を用意して待っているわね』

画面がブラックアウトし、通信が完全に切れたのを確認する。

そしてぼくは叫んだ。

「綺麗な衣装って何!?!」

後日、高そうな、しかし明らかに姉さんでは着れないドレスが送られてきてぼくは絶望することとなる。

姉さんのアレは血筋なのか。

生徒会長と聖遺物

あーちゃん先輩は無事、生徒会長となることができた。無事、と言っても選挙で姉さんがぶちギレちゃったり、面白：おかしな投票がされたりしたが。当選から一ヶ月は経つというのに未だに七草真由美を会長と呼ぶ人がいるあたり、まだ浸透はしていない様だ。頑張れ、あーちゃん会長。

四葉真夜との交渉により危険はとりあえずなくなったとはいえ、問題が残った。平河小春が論文コンペの出場を辞退してしまったのだ。自分が危機的状況で後輩を売ったことを悔やんでいるらしい。気落ちしてしまいとても論文コンペには出れそうにないのだ。ちーちゃんの話だとあまり学校にも登校していないらしい。結果、原作通り（原作より早い少し早い）論文コンペには代役として兄さんがメンバーに加わった。

ぼくの引き起こした原作改変は結局、物語の大筋を覆すには至らなかったのである。ただ良かったことがあるとすれば――

「司波達也を恨んでも仕方ないでしょ。今回のことは好奇心で踏み込んだ姉さんと姉さんを襲った連中が悪い。姉さんには怪我はなかったし、今は自分を責めているけど：きつと立ち直ってくれるわ」

――ちーちゃんが兄さんに復讐しようとは思っていないさそうなことだ。元々、ぼくが動くこうと思つた根本の部分は達成されたのだ。

「それに：貴方のこと、少しは信じているから。貴方のお兄さんも少しだけ信じてあげる」

それにプイツと顔を背けながら、そんなことを言ってもらえたのだ。デレないツンデレだと思われたちーちゃんがデレたのである。

この台詞の後にトーラス・シルバーがフルカスタマイズした特化型CAD『シルバー・ホーン』をねだられたけどきつと照れ隠しだよ

!



「うう、やっぱり私には生徒会長とか向いていなかったんですよ」

「そんなことないですよ！あーちゃん会長」

「じゃあどうしてそのあーちゃん会長という呼び方が校内で浸透しているのですか!？」

「そっそれだけ親しまれているということですよ！」

「親しまれ過ぎです！アメちゃん食べる？って私は高校生ですよ！」

「ぼくは食べたいですけど、アメちゃん」

あーちゃん先輩があーちゃん会長にクラスアップしてからというもの週一くらいで愚痴を聞かされている。といってもカフェで楽しくお喋りするといった感じだが。あーちゃん会長的にぼくは誘いやすいそうさ。

「はあ、どうしたら前会長のようになれるでしょうか」

「なる必要はありませんよ」

前会長、七草真由美は尊敬される良い生徒会長だったのかもしれない。でもそれを真似する必要はない。中条あずさとして学校をどうしたいか、どうするべきか、考えて動けば評価は後から付いてくる。あーちゃん会長は意外と優秀なのだ。

「意外とは余計です！…でもそうですね、私は会長…いえ真由美さんの様にはなれません。けど！私は私らしく生徒会長として頑張ります！」

グッと両手を握りしめてそう宣言するあーちゃん会長。盛り上がっているところ申し訳ないのだが一つ言わせてもらおうと。

「あーちゃん会長、恥ずかしいんで座ってください」
「…はい」

椅子を倒して立ち上がったたりするものだから他のお客さんから大分注目を集めていたのだ。あーちゃん会長は顔を真っ赤にしてゆっくりと席に座った。

会長の威厳とかは一生出せそうにない。



あーちゃん会長とカフェでお喋りし家に帰ると珍しく母さんが帰宅していた。この時間に帰っていることは滅多にないというのに。

「レリック?」

「そう、にのまがたま瓊勾玉系統の聖遺物レリック。これを達也に届けて欲しいの」

手渡された宝石箱に入っていたのは赤味を帯びた半透明の玉。

「私が行くよりも貴方が行った方が話が上手くいくと思うの。詳細はこの書類に書いてあるから、一緒に渡してね」

大変な物を預かってしまった。これアレやん。持っていると襲われる奴じゃん。

いや、ポジタイプに考えよう。これをぼくが届ければ母さんは襲われないのだ。

ぼくはビビりながらも兄さんと姉さんの住む家へと向かった。もちろん完全装備で、だ。

横浜騒乱編 解放される殺意

「聖遺物の複製か…また無茶をしたものだ。俺の魔法を使っても複製できるかは分からないぞ」

「仕方ないよ、もう受けちゃったんだから」

「他人事のように言っているが、お前にも手伝ってもらうからな」

「…マジですか」

特に襲撃もなく無事に司波兄妹の家へと辿り着いたぼくは、お使いを果たした。言われていた通り書類を渡し聖遺物のサンプルを見せたがあまり反応はよろしくなかった。まあ聖遺物っていうのは現代技術で人工的に合成することが難しいらしい。ただこの聖遺物には魔法式を保存する機能があるため、それについての手掛かりが欲しかった兄さんはやる気を出してくれた。ぼくを巻き込むのは止めて欲しかったが。

「雪花、夕飯はどうするの？」

「家で食べるよ、今日は母さんがいるし」

制服からオールインワンのキャミソールワンピースに着替えた姉さんが聞いてくるが今日はパスする。母さんは普段帰ってくるのが遅いため中々一緒に食事をする機会もないのだ。こういうときはなるべく一緒に食べるようにしていた。

「サンプルは預かって良いのか？」

「あーたぶん良いんじゃない？というか、ついでだし帰りに第三課に持っていくよ」

ぼくの家からFLT本社までは歩いて十分もかからない。帰り道

だし効率的だ。

「送るよ」

「良いの？面倒じゃない？」

「それにどれだけの価値があるのか分かっていいるのか？襲われる可能性もある」

お使いは家に帰るまでがお使いだ。原作でも司波兄妹宅からの帰りに母さんは襲われていたしむしろ帰りの方が危険だったのだ。本職のボディガード（ガーディアン）である兄さんがいれば安心だ。

「それじゃあ深雪、行ってくる」

「お兄様、お気を付けて。雪花も迷子にならないように」

ぼく、ここまで一人で来たんですけど！



F L Tの本社へ向かう道中、そいつは立っていた。引き締まった体付きの東洋人、顔立ちも服装もありふれたもので、だからこそその猛獣のような気配が際立っていた。

「呂剛虎：『人食い虎』だったか？」

このタイミングで呂剛虎が出てくるわけがない、という楽観的な思考はこの際捨てるべきなんだろう。原作知識は絶対ではない。ぼくというイレギュラーが存在している時点で原作との解離は避けられないのだから。ぼくはゆっくりとC A Dを取り出す。照準補助システム付きの汎用型C A D、『スノー・ホワイト』。ぼく一人の力で作った最高のC A Dで今は拳銃型。

「司波達也と司波雪花だな？抵抗は止めてもらおう。司波小百合はこちらで預かっている」

「…なっ!？」

「確認してみろ」

家に電話をかける。出たのは水波ちゃんだ。

『奥様なら仕事場に忘れ物をしたから、と十五分ほど前に出かけられました』

家にはいない。電話を切って母さんに電話をかける。出ない。出ない！出ない！出ない！出ない！

「聖遺物と交換だ」

呂剛虎の後ろに黒い車が止まる。そしてそこから出てきた二人の男に母さんは車から押し出される。口を何かテープのようなもので塞がれ両手を後ろで縛られている。見たところ怪我はない。

「聖遺物はこちらにはない」

「調べはついていない。時間の無駄だ」

恐らく調べがついているというのは嘘だ。母さんが家を出たのは十五分前、さらに無傷ということは情報を聞き出すことは時間的に無理だったのだろう。そして、先に母さんを狙ったということはぼくがサンプルを持っていると正確な情報を掴んでいるわけでもないだろう。つまり奴らは現状、不確かな情報しか持っていない。

「早く出せ、でないところいつを殺す」

呂剛虎の合図で母さんを拘束していた二人の内一人が母さんの首

にナイフを押しつけた。

血が流れる。

涙が流れる。母さんが泣いている。

―ああ、そうだ。母さんが泣いている。

―泣かせたのは誰だ。

―あいつらだ。あいつらが母さんを泣かせた。

―なら、どうする？

―そんなの決まってる。

プチリと何か切れる音が聞こえた。

そして、次の瞬間。

母さんを拘束していた二人は氷の氷像となった。

「お前らには、祈る時間も勿体ない」

―殺そう。

「兄さん、母さんを頼むよ」

呂剛虎は既に臨戦態勢のようだ。全身から殺気を放っている。

「かかってこいよ虎夫君、遊んでやる」

そんな呂剛虎にぼくは全く脅威を感じなかった。

冷たい笑顔

呂剛虎。

彼の得意とする『剛気功』は気功術を元にして皮膚の上に鋼よりも硬い鎧を展開する魔法で、彼はこの剛気功の第一人者であり対人接近戦闘において世界で十指に入ると称されるほどの大亜連合の白兵戦魔法師だ。

その呂剛虎に対して雪花に對人戦の経験はほとんどなかった。それでも雪花は呂剛虎に脅威を感じない。感じるのは怒り。ただ熱く燃え上がるような怒りが、そして反対に冷たく凍てつくような殺意が雪花を支配していたからだ。

「かかってこいよ虎夫君、遊んでやるよ」

「ほざけ」

呂剛虎もまた雪花を脅威とは思っていないかった。魔法師とはいえず詮高校生。怒りで状況を理解することも出来ないに足りない相手だと考えていた。むしろ呂剛虎は達也を警戒していた。明らかにこちら側の人間。それも、かなりの修羅場をくぐり抜けてきている。厄介な相手、それが呂剛虎の達也に対する印象だった。戦えば勝てる自信はある。が、彼の目的は戦いに勝つことではなく聖遺物の奪取。雪花と達也が持っているとは限らないこの状況下で優先すべきは司波小百合。情報を聞き出した後で人質とする方が確実だ。雪花の激怒を見るに見捨てられることはないだろう。

思考は一瞬。

呂剛虎は司波小百合を狙った。

「汚い手で触るな」

が、その手は届かない。目前で透明な壁に阻まれたのだ。そして雪花が右の掌を突き出すと呂剛虎がまるでトラックにでも跳ねられた

かのように吹き飛ばす。

「兄さん」

雪花が聖遺物の入った宝石箱を投げ渡すと同時に達也は動いた。あまりのショックに気を失った小百合を抱え走り出す。

「そのくらいじゃ死なないだろ、虎夫君」

雪花の言葉通り呂剛虎は死んでいない。それどころがほとんど無傷だった。

「…投降しろ。新たな人質が必要になった」

呂剛虎は立ち上がると特に表情を変えすることもなく雪花に投降を促す。しかし内心では雪花への警戒を高めていた。たかが学生、そう侮ることを止めたのだ。

「嫌だね」

「…後悔するぞ」

無手の構え。呂剛虎は一直線に突進する。が、またも目前で壁に阻まれる。見えない障壁。それは呂剛虎を持つても破ることは出来ない。

「ぼくは怒っているんだよ、虎夫君。こんなに怒りを感じるのは初めてだ、ってくらいにさ」

雪花が幼少期、魔法の暴走をさせることがあったのは、ある一つの魔法のせいだった。今も日常的にその制御のために魔法制御の力を半分以上使っている。それを雪花は解放していた。

瞳に映る世界が変わる。

「だからちよつと遊んでやる。この怒りが収まるように、激しく楽しくさ」

雪花は笑う。

その笑顔は酷く冷たく、感情というものがまるで感じられない。

「遊ぶ、だど？」

呂剛虎は正体不明の魔法に阻まれながらも自分が負けるとは微塵も考えていなかった。

しかし、こいつは普通の学生ではない、ということを中心に片隅で考えた。敵が戦いなれていないのは雰囲気で分かる。闘志や殺気、そういうものが薄いからだ。にも関わらず敵に恐怖している様子はない。むしろ余裕があるように見える。呂剛虎の頭に撤退の二文字が過った時、呂剛虎の背筋に冷たいものが走った。

恐怖。

それは最近では戦闘中でも中々感じることもなくなったものだった。

「ああ、安心して。お代は安くしておくよ——君の命で結構だ」

膨れ上がった殺気。それと呼応するように雪花の立つ地面が沈む。

「さあ、精々無様に抗いたまえ」

雪花はまた冷たく笑った。

心の闇

呂剛虎をドライアイスの弾丸が襲う。それも無数の弾丸があらゆる方向から常に死角をついて、である。呂剛虎はドライアイスの弾丸をかわすことをしない。剛気功の鎧はドライアイスの弾丸を容易に弾き返すからだ。

「うわ固い、さすが『食いしん坊の虎夫君』と呼ばれるだけのことはあるね。サンドバッグとしては中々優秀だよ」

雪花と呂剛虎の距離は目測でおよそ五メートル。ドライアイスの弾丸を受け徐々に距離が離れてしまったのだ。しかし呂剛虎にとつてそれは決して遠い距離ではなかった。ドライアイスの弾丸も剛気功の前ではそう大した威力ではない。ゆえに呂剛虎は全力で雪花に突撃する。が、また透明な壁。正体不明の魔法が呂剛虎から攻撃の手段を奪っていた。

「君と接近戦はしたくないな、痛いし疲れるんだよ」

また、雪花が右の掌を突き出し呂剛虎は吹き飛ばされる。

「でも、君を斬り刻むっていうのも面白そうだ」

拳銃型であったはずの『スノー・ホワイト』が変形し短い小刀のような形状に変わる。

と、同時に吹き飛ばされるも倒れることなく再び突進をしてきた呂剛虎の鋭い突きが雪花を襲う。今度は障壁を使わずにその突きをかわずと、小刀となった『スノー・ホワイト』を振り降ろす。小刀は届かない距離。それでも呂剛虎が頭上に左手をかざした。この魔法には心当たりがあったからだ。呂剛虎の予想通り小刀の延長線とかざした左手の交差点で重い音が鳴る。

「やはり幻刀鬼と同じ魔法か」

「正解、虎夫君意外と博学だねー」

幻刀鬼とは千葉修次に付けられた異名『幻影刀』のことである。そして千葉修次がそう呼ばれる由縁である魔法、『圧斬り』。

「でも、これは知らないでしょ」

雪花は魔法を自ら無効化し、空振りへと戻った小刀をそのまま振り下ろした。そして後方に飛ぶ。一瞬にして十五メートル程の距離をまるで瞬間移動のように移動し、また小刀を振り下ろす。

飛ぶ斬撃、『空絶』。

圧斬りを元にして作られた全く新しい術式。

呂剛虎がそれをかわすことが出来たのは直感だった。何かが来る。その直感に従い呂剛虎は左に飛んだ。先程まで呂剛虎のいた場所に刃物で切り裂かれたような跡が音もなく出現する。目でも耳でも捉えることの出来ない斬撃。その威力は剛気功でも無傷では済まない。しかし斬撃の位置を予想することは出来る。この『飛ぶ斬撃』はあくまで斬撃が飛ぶだけなのだ。つまり雪花の振り下ろす『スノー・ホワイト』からある程度の位置を予測することが出来る。

そうならばかわすことはそう難しくくない。

「やっぱり魔法の開発は兄さんの領分だね、切り刻むのは止めだ」

—深紅の花になってもらおうか。

ゾツとする程の殺気に呂剛虎が撤退を選択しようとしたその時—雪花が拳銃型に戻った『スノー・ホワイト』の引き金を引こうとしたその時—

「そこまでだ、雪花」

呂剛虎の背後に達也が現れた。その右手には『シルバー・ホーン』が握られており銃口は呂剛虎に向いている。

「こいつからは情報を聞き出さなくてはならない」

暗に殺すな、と言っている達也に雪花はにっこり微笑むと――

「分かったよ」

――その引き金を引いた。

「ぐっがああああ!?!」

呂剛虎の右腕が深紅の花となって消えた。

「殺しはしない。でもこれくらいは良いよね」

雪花がもう一度引き金を引く。発動された魔法、『雷童子』の雷撃が片腕を失ってなお意識を保っていた呂剛虎を完全に気絶させた。

「楽しかったから代金はそれで良いよ虎夫君」

何の表情もなく、雪花は言った。

「じゃあ兄さん、後は頼むよ。母さんは家?」

「…小百合さんはFLTだ。家より近かったからな」

達也は何も聞かなかった。

◆

雪花は結局のところ誰も殺していない。最初に氷の氷像となった二人も死んではいなかった。しかしその事を雪花が知るのは後の話。このときの雪花は自分が二人の人間を殺した、と確かに理解していた。理解した上で小さく呟く。

「今日の夕飯はカレーだったっけ」

雪花にとって二人の命はどうでも良いものだった。少なくとも今日の夕飯よりは。

そもそも雪花は本当に『敵』と認識した相手に対して一切の情がない。九校戦の時、達也に無頭竜の幹部達が消されることを分かっているが、そのことを一切気にしなかったのも単に無頭竜を『敵』と認識していたからだ。

「母さん、帰ろう」

雪花は小百合にいつも通りの笑顔で言った。

世界が変わった日

28人。

雪花がUSNAへ亡命する時、目の前で死んだ人の数だ。

敵、味方問わず沢山の人が死んだ。

雪花は思った。どうして簡単に人を殺せるのか。人の命はそんなに軽いものなのか。

考えた。雪花にある前世の記憶と転生してからの記憶の全てを使つて。

そして雪花は考えに考えた末に答えを導き出した。

―間違っているのはぼくの方なんだ。

ぼくはこの世界を知らない。知識として知っていても実際に触れたのは世界に対して狭すぎるマンシヨンの一室だけなのだから。

『敵』は『敵』であつて『人』ではない。だから殺して良い。ここはそういう世界なのだ。前世とは違うのだ。適応しなければ。ぼくはこの世界で生きていくのだから。

「わーこれが自由の女神かー大きいなー」

そう考えたらどうでも良くなった。失われた命も、心に沈殿した気持ちの悪い感情も、何もかも。

―適応したのだ。この世界に。

雪花は新しい価値観と共に一つの異能を手に入れた。
世界の見え方が変わった。

―ああ、やっぱり今までのぼくが間違っていたんだ。

雪花はただ笑った。



論文コンペまで一週間を切った月曜日。中条あずさはクラスメイトからの質問に固まった。

「あーちゃん会長って古葉君と付き合ってるの？」

いつもなら、自分が所属する2-Aにも浸透してしまった『あーちゃん会長』呼びにツツコミを入れるところなのだが、それよりもツツコまなければならぬところがあつた。

「わわわ私が雪花君とですか!？」

「うん、だって放課後二人でデートしているの何度か見てるし、いつの間にか名前呼びになってるし」

「でついででデート!?違いますよ!二人でお茶したり買い物したりしてるだけです!名前です!名前で呼んでいるのは本人がそう呼んで欲しいと言うので!」

「男女二人でお茶したり、買い物したり、を世間ではデートって言うんだよ。それにあーちゃん会長が男子を名前で呼ぶのって古葉君だけじゃない?」

言われて考えてみるとたしかに男子を名前で呼ぶことはまずない。そもそも男子と関わるのがあまりなかったというのもあるだろう。放課後一緒に遊びに行く、なんて絶対になかった。

—とはいえ、相手はあの雪花君だ。一般的な男子と比べるのは違うような気がする。たしかに私の話をちゃんと聞いてくれたり慰めてくれたりして優しいし、一緒にいて楽しい。それに真剣な顔をしているのを見るとちよつとドキツとしたりして、でも何を真剣に考えているのか聞いてみると「あの雲が何かに似ているんだけど何に似ているのか思い出せない」とかどうでも良いことを考えていたりして、でもそういうところが可愛かったり—

と、そこまで考えたところでクラスメイトの声に現実へと引き戻される。

「どうしちゃったのあーちゃん会長？ぼーつとして」
「いっいえ何でもありませんっ！」

少し顔が赤くなっているのが分かった。

そんなことがあったからだろう。

いつものお茶会がいつもと違って感じる。

「あーちゃん会長、今日何かありました？いつもよりテンション低い
ような気がするんですけど」

「そんなことないですよ？」

「そうですか？」

「そうですよ」

雪花は「なら、良かったです」とこの話を打ち切り、学校に来る時、
いつも持つてくるリュックから紙の束を取りだしテーブルの上に置
く。

「これを見てください」

「えーつと…一位・古葉雪花、二位・中条あずさ、三位・明智英美…こ
れ何の順位ですか？私の名前もありますけど」

「…『部のマスコットにしたい生徒ランキング』の順位です」

「え!?!なんですかそれ!?!」

「ちなみにぼくが登校し出すまではあーちゃん会長が不動の一位でし
た、なんでも入学式の答辞が凄く可愛かったとか」

「あれは思い出させないでください！緊張していたんです！」

あずさにとつて入学式の答辞は高校入学以来最初にして最大の失
敗だった。思えば今のキャラが確立してしまったのもあの答辞のせ
いなんだろう。来年は会長として挨拶をしなくてはならないと思う
と今から気が重い。

「大体誰なんですかこんなくだらないランキングの集計をしているのは!」

「十文字会頭ですね、部活連の企画だそうです」

予想外の答えにあずさは頭痛を感じる。こんなくだらない企画を真面目に集計している十文字の姿が浮かんでしまったからだ。あずさは十文字が少し天然であることを知っていたため、あり得ないことはないと思っていた。

「ぼくはもうクラスで『雪花たん』と呼ばれ愛でられるキャラを脱却したいんですよ!」

無理だと思います、という言葉をあずさはなんとか飲み込んだ。雪花の顔が真剣だったからである。

「お兄さんの真似をしてみたらどうです?」

「…それはもうやりました。『大人ぶってて可愛い』との評価を頂きました」

一応アドバイスを試みるが、返ってきたのは残念な結果だった。雪花はしょんぼりとしてしまい、あずさは慌てて次の案を出す。

「じゃっじゃあ逆にお姉さんの真似をしてみるというのはどうでしょう!?!」

「あーちゃん会長、真面目に考えてないでしょ!?!」

「考えてますよ!?!すっごく考えてますよ!?!」

「じゃあ、そんなんだからあーちゃん会長は一年生にまであーちゃん会長と呼ばれるんでしょうね!」

「なっ!?!それは雪花君のせいじゃないですか!クラスに友達いないくせに吹聴して歩いて!」

「ぐはっ!?言ってはならないことを言ってしまったね!去年のクリスマスではクルクルちゃん、略してクルルちゃんと呼ばれてたくせに!」

最初のどこかいつもと違う空気はどこへやら。周囲のお客さんが温かい目で見守るいつも通りの二人がそこにはあった。

「そういえばあーちゃん会長」

「なんです?」

そろそろお開きというところで雪花が何気なくあずさに質問をした。

「あーちゃん会長の家って十師族となんか関係あったりします?」

「えっありませんよ?もしかしたらどこかで繋がっているかもしれませんが私の知っている限りではないですね。どうかしたんですか?」

「いえ、なんでもありませんよ」

その時雪花はとても嬉しそうに微笑んでいた。

服部刑部少丞範蔵の苦難

「雪花から連絡があった。婚約は破棄するそうだ」

「あら、残念。まあ本人はあまり乗り気では無かったですしね。でも大丈夫なんですか？五輪の養子になるって話もあるみたいですけど」

九島烈からの電話に藤林響子は疑問を口にした。藤林は九島烈が雪花をととも気に入っていると思っていたからだ。

「問題ない、こちらにはアンジェリーナがいる。その気になれば何時でも取り込めるだろう」

「だと良いですけど」

そう上手くいくのかしら、と雪花の破天荒ぶりを達也からも聞いていた藤林は思ったものの、アンジェリーナという人間と雪花の関係性について殆ど知らない自分には分からないこともあるのだろう、とそのままそつと電話を切った。



服部刑部少丞範蔵は尊敬される先輩であろうと常日頃から心掛けていた。実際、自分のことを慕ってくれる後輩はいるし、彼もその一人だ。彼が純粹に自分のことを尊敬してくれているのは分かるし悪い奴ではないことは確かだ。だからこうして放課後に相談がある、と呼び出されれば出向くし話も真剣に聞く…聞くのだが彼には一つだけどうして言いたいことがあった。

「その、はんぞー先輩というのを止めろ！何度言ったら分かるんだ！」「えっ？じゃあ…はんぞーくん？」

「はんぞーを止めろ！何故先輩の方が駄目だと思ったんだ！」

首を傾げている後輩、古葉雪花を前にして服部はため息を吐く。一見、というより何回見ても女の子にしか見えない容姿をしていながら

正真正銘男だというこの不思議生物は服部も良く知る学内でも有名な兄妹の弟でありその二人を越える問題児だ。服部はいつの間やらこの問題児のお世話係のようなものになっていた。尊敬する十文字克人と七草真由美の二人から頼まれてしまったからである。断れるわけもなかった。

雪花が何か問題を起こすたびに急行し問題を解決する。そんなことをしていたせい、というより副産物として多少わだかまりのあった司波達也と今では苦労を分かち合う仲となっていた。もしこれを狙って問題を起こしていたというのなら大したものだが本人は素でやっているのだからどうしようもない。

『歩くトラブルメーカー』。

風紀委員会からそう呼ばれているのも頷けるというものだ。

「もう良い、いや良くはないが…取り合えず相談を聞こう」

このトラブルメーカーを相手にする上で大切なのは『諦める』こと。それが出来ない人間にはお世話係なんて到底無理だろう。雪花から専属メイドがいるという話を聞いたことがあるが彼女には心から同情する。なんせこんな奴を毎日相手にしなくてはならないのだから。

「実は女の子に告白をしようかと思うんですけどなんかアドバイスが欲しくて」

服部は予想外の相談に目を丸くした。何となくではあるが雪花はそういったものに興味がなさそうだと思っていたからだ。とはいえ相談されたからには真剣に考える。が、服部にとってこの相談にはあまり良いアドバイスが出来そうになかった。そもそも恋愛経験というものが乏しい上に告白というものをしたことがないからだ。服部は自分が告白された時のことを考える。そういえばあの時、全く知らない人から告白され戸惑ったものだ。ある程度、仲を深めてからでなければそもそも告白をする意味がないのではないか。自分が感じた

ことを素直に口にしてみる。

「その点は心配ない…:とりたいです。週一くらいで二人で遊んだりしてるんですけど」

「そうか…:なら問題はなさそうだな」

男女二人が週一くらいで遊ぶのは所謂『良い雰囲気』という奴なのではなからうか。少なくとも周りからお前ら早くくつついちゃえよ、と思われるくらいの仲なのではないだろうか、と雪花の話から『当たって砕ける』ような勝算のない告白ではないらしいことを服部は悟った。だとしたら自分からアドバイス出来ることはもうないというこも。

「俺ではこれ以上良いアドバイスは出来そうにないな。誰か恋愛経験の豊富そうな人に聞いた方が良いと思うが」

「…:ぼくの友達で唯一彼女がいる某剣術家に相談したら『告白をしたことはないけど、全力でいけばきっと大丈夫』というお言葉を頂きました。それから、『もし無理だった時は妹とお見合いをセツティングしてあげよう』との玉砕前提のお言葉も」

「つまり、良いアドバイスは受けられなかったと」

「だって剣で愛を語り合うとか言い出すんですよ？参考になるわけないです」

服部は恋愛経験が豊富そうな雪花と共通の知り合いを脳内で検索してみる。すぐに思い当たったのは桐原武明だった。しかし先程の某剣術家の話を聞くに剣術カップルからはあまり良いアドバイスは期待できそうにない。次に思い当たったのは五十里啓だった。校内でも有名なカップルの片割れであるし、面倒見の良い性格だ。きつと良いアドバイザーとなってくれらるだろう。が、今は論文コンペで忙しい時期だ。時間が取れるとは思えない。するといいよ誰も思い付かない。そもそも雪花と共通の知り合いという時点で人数が絞られ

てしまうのだから。

「ここは雪花の人脈に頼るべきだろう。」

「誰か他に相談できそうな相手はいないのか？」

「うーん、そもそも友達が少ないので」

悲しい答えが返ってきた。どうやら他のアドバイザーに頼るということは出来そうになかった。そこで服部はふと思った。そういえば雪花はどこに誰に告白をするのだろうと。正直なところ服部は恋愛に疎かった。だから、というわけではないのだろうが雪花の想い人に全く検討がつかない。想い人が誰なのかが分かれば、もっと良いアドバイスをすることが出来るかもしれない。

服部が思いきって告白の相手を聞こうとしたその時、雪花が「あつ！」と声を上げて立ち上がった。

「邦人さんがいるじゃん！沙世さんには恥ずかしいから相談できないけど邦人さんなら相談できそう！」

どうやら相談できそうな相手がいたらしい。聞いたことのない名前だか恐らくは学校外の知り合いなのだろうと服部は当たりはつけた。

「じゃあ、俺の役目は終わりかな」

「聞いてもらって本当にありがとうございました！やっぱり頼りになりますね、はんぞー先輩！」

「はんぞーは止めろ」

服部はもう何度目かも分からない訂正をし雪花を残して席を立つ。そしてさりげなく雪花の分も会計を済ませ、カフェから出て一言、小さく呟いた。

「告白……か」

服部刑部少丞範蔵。

彼もまた、悩める男子高校生の一人に過ぎない。

決意を胸に

雪花が『トールラス・シルバー』のトールラスとなってから初めて発売される新モデル、それが飛行魔法専用デバイスだった。トールラスとして初めて設計から全てを手掛けた作品である。

それをキラキラとした瞳で見つめ、いつまでも語り続けるのが中条あずさだった。こんなにも純粹に自分の作ったものを褒められたことが嬉しかった。きっかけはそんなものだったのかもしれない。

そしてそれが恋心に変わるまでそう時間はかからなかった。



ぼくがもつとも長い時間を過ごした女の子はまず間違いないくらいだ。例えばぼくが生まれたときから殆ど容姿が変わっていないかったとしても沙世さんを女の『子』とするには少々歳が……なつななんでもないよ！うん、沙世さんはいつまでも若いよねって話だよ！

で、そんなリーナから言われたのが「セツカは女の子にはモテないわね、男の子にはモテモテかもしれないけど」という認めたくない残酷な現実だった。その後リーナが「ま、まあセツカには私がいるもんね!だからモテなくても大丈夫だよ」と慰めてくれたものの、ぼくはすっかりブルーな気持ちになり、リーナの話を大して聞いていなかった。

今になって思うとあの時リーナはどうしたらモテるのかを教えてくださいたいのではないだろうか？だとしたらぼくは適当に「そうだねー」とか「たしかにね」とかで聞き流すべきではなかったのかもしれない。まあその時はリーナの機嫌が妙に良くなったのでよしとしたいわけだが。

そんなぼくだからいざ女の子に告白する、となっても中々踏み出せない。そこでアドバイスを貰うことにした。まずは修次さん。あの渡辺摩利を彼女に持つ彼なら良いアドバイスをくれるに違いない。

そう思っていた時期がぼくにもありました。

剣で語れば分かってもらえるとか、本気でいけばなんとかなるなどの参考にならないアドバイスを多数頂いた。さらに振られたら妹を紹介してあげる、という縁起でもないことを言い出す始末。こいつは駄目だ、ぼくとは違う世界を生きていると判断したぼくは困った時はんぞー先輩に相談することにした。

するとさすがはんぞー先輩。的確なアドバイスをくれた。どうやらあの『服部は女の子を百人侍らせたことがある』という噂は本当だったらしい。市原鈴音から聞いたときは嘘だと思ったのだが：流石ですはんぞー先輩！

最後に邦人さんに相談してみた。告白の、というよりも女の子と上手く付き合うためのノウハウみたいなのを教えてもらった。どうやら昔は結構遊んでいたらしい。後で沙世さんにチクろうと考えるが、ためになる話を聞いた。

そして、今日。論文コンペを明日に控えた土曜日。

ぼくは告白する。

緊張し過ぎて吐きそうだ。体が思うように動かない。

前日に約束はしておいた。

いつものようにあーちゃん会長を教室へ迎えに行く。

「あーちゃん会長ー」

「あつ雪花くん。なんか顔色が悪い気がするのですが大丈夫ですか？」

「気のせいですよ」

「そうですか、なら良いのですが」

あーちゃん会長と二人で放課後に遊びに行くというのはもう何回もしているはずなのだ。それこそ十回は軽く行っているだろう。なのに今日は告白すると決めているからか全然違うもののように思えてくる。

「雪花くん聞いてますか？」

「聞いてますよ？えーっとどうして金平糖は美味しいのかって話でしたっけ？」

「違いますよ！明日は本番ですから体調が悪いようなら今日はこの辺にしておきませんか？って話ですっ！」

「ああ、そうでしたね」

あーちゃん会長に言われて二人でカフェに入ってもう三十分が経とうとしていることに気がついた。どうやら緊張しすぎてまともに会話も出来ていなかったらしい。

「本当に体調が悪いとかじゃないんで大丈夫です」

ふと、思った。明日、論文コンペの会場がある横浜は戦場となる。原作通りなら一校の生徒は誰一人として死ぬことはないが、それは原作通りならの話だ。既にイレギュラーな事態が起きている以上何があつても不思議ではない。不安が広がった。そしてそれは、すぐに口から漏れた。

「あーちゃん会長、明日の論文コンペ一緒にサボりませんか？」

ぼくはただの応援であるため正確に言うならサボるのは生徒会長であるあーちゃん会長だけになるが。

「駄目ですよ、私は生徒会長なんですから。私なりに頑張るんです。そう教えてくれたのは雪花くんですよ？」

頭を撫でられる。

生徒会長になってから初のイベントということもあって張り切っているらしいあーちゃん会長は明日は頑張りますよー！と腕を振っている。

彼女が生徒会長として頑張ろうとしている。そしてそれをどこぞの馬の骨が邪魔しようとしている。

そうだ、彼女も明日の論文コンペに向けて頑張ってきたのだ。見え

ないところで頑張つてぼくにこっそり弱音を吐いて。

「あーちゃん会長、ぼくが間違っていました。やっぱり明日は行きましよう。一校の勇姿を見ないわけにはいきませんしね」

だから、ぼくが守ろう。彼女を害する全てから。

「それで、論文コンペが終わったら次の週にでも遊びに行きませんか？」
「良いですね、どこに行きますか？」

そして、告白する。

だから今日のところは取り合えず告白は保留だ。
へたれたわけじゃない、戦略的撤退だ。

「遊園地とかどうですか？ぼく行ったことなくて」

今日はこのまま、いつも通りのお茶会をしようと思う。
もう一度言うけどへたれたわけじゃない。

その恋の理由

論文コンペの会場へ向かうために乗り込んだキャビネットの中でぼくはあーちゃん会長について考えていた。

マツキーが姉さんを好きになったのは一目惚れ。なら、ぼくは？と聞かれると『いつの間にか好きになってた』としか言いようがない。きっかけは褒められたことだろう。キラキラした目でCADを見つめて語り続ける姿は嘘偽りなく本心で称賛してくれていることが分かった。けど、それはあくまできっかけで、決め手は？と問われれば首を捻ることになる。

結構重度のCADオタク、頭が良い、意外と運動神経も悪くない、ぼくと同じで苦いものが苦手、ちよつとした仕草が可愛い、髪は癖毛、朝が弱い、結構頑張り屋さん。

少しずつ『中条あずさ』という人間を知っていつて気がついたら好きになっていったのだ。

あーちゃん会長と遊ぶようになったのは会長に当選してからだから約二ヶ月。一緒にいる時間がただ楽しかった。彼女のことを知るたびに好きになった。

だから決め手という決め手が特にあるわけじゃない。けど、それが恋だと気がついたのはつい最近だった。

随分前から招待状を貰っていた泉美ちゃん、香澄ちゃんの誕生日会へ持つていく誕生日プレゼントを一緒に選んでもらうため二人で放課後、買い物に行った。ぼくは基本的に学校とFLT以外では家から徒歩でいける距離しか行動しないためどこにどんな店があるとか良く分からない。そういう話をしたらあーちゃん会長が着いてきてくれたのだ。正直、どんなものをプレゼントすれば良いのかも分からなかったぼくとしてはありがたかった。

そんなプレゼント選びのためにやって来たショッピングタワー、そこでぼくは二人のプレゼントにリボンを買った。白に黒いラインの入ったりボンだ。ただ七草のお嬢様相手にプレゼントがりボンだけ

というのもしかと思つたのであーちゃん会長の「手作りのものを貰つたら嬉しい」という意見を参考にしてアクセサリーを自分で作ることにした。CADにハマる前はアクセサリー製作にハマっていて色々作っていたのだ。そこで気がついたのだが自分で作ったアクセサリーをプレゼントするというアイデアを最初から思いついていれば、プレゼント選びで悩むようなことはなかったのかもしれない。手作りのアクセサリーといえば思い出すのがリーナにプレゼントした指輪である。二人の約束の指輪。ぼくはネックレスにして常に首から下げているがリーナはどうだろう。あのポンコツぶりを見るに無くしていてもおかしくはない。今度、再会した時のために新しく作っておいた方がいいかもしれない。泣きつかれるのが目に浮かぶ。

「何か面白いことでもあつたんですか？」

自然に顔が綻んでいたのだろう。あーちゃん会長が不思議そうに訊ねてくる。

「いえ、なんでもありません」

唐突、というわけではないのだろう。もっとも長い時間を一緒に過ごした女の子であるリーナのことを思い浮かべたからこそ感じたことだ。

リーナに対する好きとあーちゃん会長に対する好きはなんだか違う気がした。それに姉さんやちーちゃん。響子さんや漣さんとも違う気がする。

「雪花くん、次はあそこに行きましょう！」

ぼくのプレゼント選びだったはずなのにいつの間にかあーちゃん会長に振り回されていた。でもそれはそれで良いかなと思つてしま

う。

キラキラした笑顔をぼくに向けられるとドキツとする。
少しでも一緒にいたいと思ってしまう。

「迷子になっちゃうかもしれませんから手を繋ぎましょうか」

「迷子になんてなりませんよ！私を子供扱いしないでください！」

「いえ、ぼくがですよ」

「まさかの迷子宣言!？」

ああ、これが恋なのかもしれない。

このどうしたら良いのか分からない、なのに心地良いこのモヤモヤが恋なのかもしれない。

「もう、仕方ないですね、離しちゃダメですよ？」

いや、これは恋だ。

ぼくは初めて恋をしたのだ。

十三束鋼は見た

十三束鋼は雪花という人物を噂でしか聞いたことがなかった。最初に聞いたのは入学してから一ヶ月程度が過ぎた頃、クラスの友達から。なんでも入学式から一度も学校に登校しておらず『幻の古葉』と言われている生徒がいるらしいという噂だ。たしかにクラスに在籍していて席もあるのに一度も学校に来ていない。『重い病気を患っているが魔法力がずば抜けている』やら『既に魔法師のライセンスを持っていて学校から授業を免除されている』など様々な予想が飛び交ったものだが、結局、彼は一学期間丸々学校に来なかった。

そんな本当に在籍しているのかも怪しい生徒を十三束が目撃したのは夏休みのことだった。目撃と言っても画面越しではあるが。夏休みに行われた九校戦の新人戦モノリス・コード、一年で同じ風紀委員である森崎駿が出場するということで応援すべくテレビで見ているのだが、その試合中相手校の反則により一校メンバー全員が大怪我を負う事故が発生した。もちろん森崎もである。

そしてその代わりとして出場することになったのが、これまた十三束と同じ一年の風紀委員である司波達也だった。彼はエンジニアとして参加しているんじゃないの!?!と驚く間もなく吉田幹比古の名前がコールされる。彼に至ってはそもそも九校戦のメンバーですらなく、しかも二科生。司波達也は色々例外ではあるしエンジニアとして出場していたわけだからセーフとして彼はアリなのか!?!と混乱へ落ちる間もなく、噂でしか聞いたことがなかった存在すら怪しい生徒の名前、古葉雪花の名前がコールされいよいよ十三束は限界を向かえそうだった。そしてそんな十三束を置き去りにして試合は始まってしまふ。驚きの連続、魔法も戦術もCADもその一つ一つに驚かされた。そして彼らは十師族の一角である一条の次期当主『クリムゾン・プリンス』一条将輝の率いる三校すらも倒し見事優勝を果たしたのだ。

そんな九校戦のあった夏休みも終わり、今度は論文コンペが近づいてきた。十三束も九校共同会場警備隊として現地に赴くことになっ

ており無関係というわけではなかった。その論文コンペが十三束と雪花を引き合わせた。

十三束は二学期から登校するようになった男なのか女なのかも分からないというより女の子であつて欲しい不思議生物と関わるようなことはないだろうと思つていた。クラスも違えば部活や委員会が一緒なわけでもない。関わる機会はないだろうと。

「十三束にはしばらくの間、雪花くんを任せる。達也くんが論文コンペで忙しいからな」

『歩くトラブルメーカー』。トラブルに愛されているとしか思えないほどにトラブルを起こし、さらにはそのトラブルを放置したまま歩き回ることから雪花に付けられた二つ名。その雪花がトラブルを起こした際、風紀委員会からは達也が、生徒会からは（会頭となつても担当は変わらず）服部が、出向いて処理にあたるのが通例だったのだが、達也は急遽論文コンペのメンバーに選ばれそんなことをしている時間はない。そこで十三束が代わりとしてしばらくの間、雪花を任される形となつたのだ。同じ一年の森崎でないのは性格的な問題である。雪花と森崎が衝突するのは目に見えていた。

そんなわけで雪花のお世話係となつてしまった十三束はその日から何度も雪花と関わることとなる。そして雪花からトミーと呼ばれるようになった頃、十三束鋼は見た。

司波深雪にむぎゆむぎゆと抱き締められている雪花を。

十三束は見なかつたことにした。自分は疲れているんだと言ひ聞かせて。

しかし十三束鋼はまた見てしまう。夏休みにあつたとある一件以来やたらと絡んでくる明智英美と偶然出会い、無理矢理シヨツピングタワーに連行されたあげく放置された日のこと。彼は見てしまった。

雪花と生徒会長である中条あずさが手を繋いで楽しそうに歩いて

いるを。

微笑ましい、実に微笑ましいのだが、これはつまりそういうことなのだろう。いや、恋愛は自由だと思うし問題はないのだが……十三束の脳裏に深雪に抱きしめられる雪花の姿が過る。

—僕は見てはいけないものを見てしまったのかもしれない!?

どこからか戻ってきた明智英美からどうかしたの?と訊ねられるが答えるわけにはいかなかった。下手をすれば生徒会が修羅場と化すかもしれない秘密を知ってしまった……と十三束は思っているのだから。

十三束鋼の不運は続く。

それから数日して日曜日。週に一度しかない休みを満喫するべく都心へと出掛けた十三束鋼は見た。見てしまった。

雪花が知らない女の子と手を繋いで歩いているのを。

「私から離れないでください」やら「絶対に手を離さないでください」という女の子の声が断続的に聞こえてくる。女の子はかなり雪花に依存しているようで、「雪花様」と呼んでいる。

—帰ろう。

十三束鋼はその日、家で寝て過ごした。

『歩くトラブルメーカー』。彼は自分の知らないところで今日もトラブルを撒き散らしていた。そしてそれを放置したままどこへともなく歩き出す。

結局、十三束鋼は誤解したまま論文コンペ当日を迎えた。

変装

十三束鋼が何人もいる警備の中からペアを組むことになったのは、なんと一条将輝だった。心強いのはたしかなのだが、どうにも近づきたい印象。正直、十三束としてはあまり歓迎すべきペアではなかった。

「オートミーとマツキーじゃない！どうしたの？」

どうしたの？はこっちの台詞だった。自分がトミーというあだ名で呼ばれているのは一旦置くとして一条を油性ペンみたいなあだ名で呼ぶとはどういう神経をしているんだ、と十三束は短い付き合いで何度となく考えさせられたことを繰り返す。そして一番ツツコまなくてはならないところをツツコもうとしたところで将輝が声を上げた。

「どうしたの？はお前だよ。なんだ、ついにそっちに目覚めたのか？」

雪花は女装していた。薄く化粧をし、髪を編み込み、一校の女子制服を着て。

「違うよ。これは…変装だ！キリッ」

キリッと口で言いながらポーズを決める雪花。

「…絶対誰かに騙されてるな、こいつ頭は良いが馬鹿だからな」
「…たしかに」

十三束は雪花の起こしたいくつもの事件を頭に浮かべて深く頷いた。もしかしたら一条くんと仲良く出来るかもしれない、と悲しいところに友達になるきっかけを見つけながら。

「ぼく、兄さん達呼んでくるよ」

雪花がどこかへと消えていくのを見ながら将輝は十三束に声をかけた。

「十三束…だっけ？雪花と知り合いだったのか」

「うん、そういう君の方こそ意外だったよ。なんせ九校戦では死力を尽くして戦った敵同士だったんだから」

「それ以前からの友達だったんだよ、と言っても九校戦で知り合ったんだがな。そういう十三束はクラスメイトか何かか？」

当たり前のことではあるが話してみると意外に普通の男子高校生だった将輝に十三束は安堵を覚えた。警備の間中気まずい空気、では必要以上に疲れてしまう。十三束は雪花に初めて感謝した。

「クラスは違うけど僕は彼のお世話係代理でね。いつもは司波君、九校戦で雪花さんとチームだった彼がその任についてるんだけど、論文コンペで忙しいから僕に回ってきたんだ」

「それは御愁傷様…キツイだろ？」

「最初はね、でももう慣れたよ。知ってる？彼と上手く付き合うためには『諦めること』が大切なんだよ」

「…知ってるよ。その結果が『マッキー』だ」

「ぼくも『トミー』だよ」

哀れな少年達が苦労を語り合っていた時間はそう長くはなかっただろう。しかし彼ら二人の間には確かに友情が生まれていた。

「司波さん！」

将輝が内心で良くやってくれた雪花！と感謝しながら想い人の名

前を呼ぶ。

「一条さん」

が、深雪の反応は薄い。深雪としては将輝よりも雪花を愛でることに集中したかった。

「一条さんが目を光らせてくださっているのであれば、わたしたちもいつそう安心できます。よろしくお願いしますね」

「ハイッ！必ずやご期待に添えるよう全力を尽くします！」

彼はこんな感じで一日持つのだろうか、と十三束が他人事のように考えていると深雪から「十三束君も頑張ってください」といきなり声をかけられ、しどろもどろになりながらもなんとか返事を返す。放置状態だったため完全に油断していたのだ。

「ぼくはもうちよつと話してから行くから、先に行つて」

「化粧をしているのだからあまり顔には触らないようにね」

「分かつてるよ、だからむぎゆるの止めて」

むぎゆる、というのは後ろから抱きしめられることを表した雪花語である。

「…雪花くんと司波さんって仲良いよね」

十三束は先日、目撃した光景を思い浮かべながら呟く。

「姉弟だからな…羨ましい」

「えっあの二人姉弟なの!？」

衝撃の事実十三束はつい大声を出してしまう。二人が姉弟だと

言うことはあの光景はただのスキンシップ…にしては少々やり過ぎ感があつたが十三束は姉弟だったら問題ない！と、無理矢理自分を納得させる。

「あーあいつこの事あんまり知られないようにしてるんだっけ？悪い、聞かなかつたことにしてくれ」

「う、うん心の内にとどめておくよ。いやー良かった。この間、別の女性と手を繋いで歩いてるの見ちゃって」

十三束が生徒会戦争勃発は避けられそうだとほっとする間はなかった。将輝がさらなる爆弾を落としたからである。

「あいつ、婚約者がいるからな。十歳以上歳上らしいが、かなりの美人だ」

「…へっへえーそうだったんだー」

冷や汗が流れる。十三束が見たのは一校の会長、中条あずさと中学生くらいに見える女の子と手を繋いでいるところだ。十歳も歳上となると全く心当たりがない。

「楽しそうだね、何の話してたの？」

そこに雪花が登場し、十三束はつい雪花をまじまじと見つめてしまう。どう見ても女の子にしか見えない雪花が果して女の子を何人も侍らせているのだろうか？ありえない、そうは思うが実際に見て聞いてしまっている。

一人で考えていても答えが出るわけもない。

本人に確認するしかない！そう決意した十三束が口を開こうとすると、なにやら将輝から冷たい視線を浴びせられていることに気がつく。

「十三束…気持ちは分からないでもないが…流石にそれは引くぞ」

「へっ?」

十三束が将輝の言葉の意味を正確に理解するまで数秒かかったのは本人にその気が一切なかったからに他ならない。十三束が雪花を見つめていたのには別にそういう意味はなかったのだから。

「誤解だよ!?ちよつと雪花くんに聞きたいことがあったんだよ!」

「あーいや、うん。そうだな、俺は分かってたから」

「分かってない!分かってないよ!その見て見ぬふりをする姿勢は絶対分かってないよ!」

「あつぽくもう行くね。約束があるんだ」

「雪花くんこのタイミングで去らないで!」

「やつぱりお前…あついや、俺は何も知らないがな」

「一条くん一回話を聞こうか!?!」

十三束鋼、彼の苦労はまだまだこれからである。

毒舌メイドと脱走と

トミーとマツキーと別れて客席へと行く前に待ち合わせていた水波ちゃんと合流する。一校の控え室に行くときに別れたのだ。

「ごめん、水波ちゃん。おまたせ」

「……………いえ、大丈夫です」

「大丈夫じゃないよね!? 何かを飲み込んだよね!?!」

「いえ、本当に大丈夫です。この変態何やってんだ馬鹿、知り合いだと思われたくないから近づくなよ…なんて言葉、飲み込んでいないので」

「解説ありがとう! それは飲み込んで正解だったよ! だって今ぼく死にたくなってるから!」

ここまで言われたら話さねばなるまい。トミー、マツキーと出会う前、会場に着いてすぐに向かった一校の控え室で一体何があったのかを。



会場についてすぐ水波ちゃんと別れて向かった控え室で兄さん、姉さんと談笑しているとぼくの元婚約者、藤林響子さんがやって来た。急に婚約破棄したりして気まずくなるかなーと少し心配していたがそんなことはなかった。何故ならそんなことは気にしていられない程の事態が発生していたからだ。

「呂剛虎に逃げられたわ、護送車が襲撃を受けたのよ」

「まさか!?!…口封じでしょうか? 戦力としての価値はもうないようには思えますが」

「ええ、呂剛虎は片腕、それも利き手を失っている上ボロボロだわ。口封じの可能性も十分ありえる。ただ、今日に間に合うように奪還作戦を行ったのは何らかの意図があると推定するべきでしょうね」

呂剛虎の逃亡。やっぱりこうなるのか、と原作知識を持っているぼくはあまり驚くことはない。逃げられることが分かっていたからこそ片腕を消しといたのだ。今思うと足も消しておくべきだったのかもしれない。

その後、兄さんと響子さんの話し合いは進みぼくと姉さんは置き去りにされる。いや軍の事とか良く分からないし。

「そこで、雪花くんにはこれを着てもらおうわ」

だから突然、目の前に一校の女子制服を出されて意味が分からなかった。

「貴方は呂剛虎に恨みを買ってるでしょうから変装をしておいた方がいいわ」

変装。そう言われると女装もカッコいい気がする。

「会場内でも不自然じゃない変装でこれほど良いものはないわよ？
だって性別が変わるんですもの、呂剛虎も気がつかないわ」
そうしてぼくは変装することとなった。

「…というわけなんだけど」

「はあ、事情は分かりましたが…」

「何？また何か飲み込んだ？」

「いえ、やっぱり雪花様は馬鹿だなと」

「言っちゃった！そんな、てへっ！私ったらドジーみたいな顔しても許されないよ！それで許してくれるのは、くりむーだけだよ！」

そんな、最近ぼくの扱いが酷い水波ちゃんを連れて（といっても水波ちゃんにはかなり距離をあけられている、本当に酷い）客席に向かう、その途中。

「雪花くん何してるんですか!?!」

「あーちゃん会長! 今日でも可愛いですね!」

あーちゃん会長がパタパタと駆け寄ってくる。心なしかいつもより髪の毛の巻きがダイナミックな気がする。

「ふえ!? ありがとうございます…って違いますよ! その格好はなんなんですか!?!」

「よくぞ聞いてくれました! これは…変装ですキリッ」

渾身のポーズ。

「キリッじゃありません! そんな格好で客席に入れるわけにはいきませんよ! 一校の評価が著しく下がります! ちゃんと着替えてから来てください!」

怒られた。めっちゃ怒られた。

ぼくが落ち込みながら、去っていくあーちゃん会長を見ると、離れていた水波ちゃんが近寄ってくる。まさか慰めてくれるの?

「怒られちゃいましたね…プフツ」

ただ笑いにきたただけだった。

「水波ちゃん、ぼくもそろそろ怒るよ!?!」

結局女装は止めました。呂剛虎よりあーちゃん会長に嫌われる方が怖い。

それに良く考えたらただ響子さんに遊ばれていただけのようすがする。

ハロウインのはじまり

論文コンペは厳粛な雰囲気の中で開幕を迎えた。皆、格式張った態度でなんの面白みもない。だから最初の発表校、第二高校によるプレゼン「収束魔法によるダークマターの計測と利用」が始まるころには既に瞼が閉じようとしていた。

「雪花くん、起きてください」

意識の遠くの方からあーちゃん会長の声が聞こえてはっと目を覚ます。あーちゃん会長は審査員なので客席の最前列にいたはずなのだが。

「ありや、寝ちやってた?」

「もう午前の部は全部終わっちゃいましたよ?」

まさかの午前の部を丸々寝ていたらしい。

周りを見るともう客席にはほとんど人がいない。一緒にいたはずの水波ちゃんもいない。

「司波君達はお友達と昼食に行ったようです、眠っている雪花君は放っておいて良いと言われたのですが…一応」

お昼は友達（水波ちゃん）と食べるから良い、と言ってあったのだが…起こすくらいはして欲しかった。全く、駄目な兄さんだなー。

「ありがとうございます、昼食を逃すところでしたよ」

「いえいえ、さすがに放置しておくのは忍びなかつたので。あっそうだ、この後一緒に食べませんか?」

「喜んで!」

兄さんありがとう！さすがですお兄様！

あーちゃん会長と楽しい昼食を終えたぼくは再びどこからともなく現れた水波ちゃんと合流した。

「ぼく置いてどこ行つてたのさー」

「この警備状況を見て回っていました。そもそも今日の私の仕事は論文コンペを見ることではなく、『情報』の通りの事態が起きたとき雪花様を守ること。馬鹿みたいに寝ている主人に構っている暇はありません」

「最後の悪口要らなくない!？」

なんか機嫌が悪くなってる！なんで!？

「もう時間ですから行きますよ」

「…はい」

メイドから命令される主人。いつからぼくの扱いはこんなに酷くなってしまったのか。夏休みはもっと優しくかった気がするんだけど！

午後三時からの一校のプレゼンテーションは予定通り始まり何事もなく終わった。いや、何事もなくというのは語弊があるかもしれない。会場は割れんばかりの拍手に包まれ、聴衆は惜しみない称賛を送ったのだから。

「水波ちゃん行くよ」

「えっ？帰るんですか？」

まだ論文コンペは終わっていない。三校、くりむーのプレゼンテーションが残っているが―それは残念なことに行われぬ。

「遊ぶための準備だよ」

―お馬鹿な勘違い集団とね。



「VIP会議室…こんな部屋どうやって」

「細かいことは気にしないで、時間がないから」

ぼくは昼休みの内に会議室に隠しておいた荷物を取り出す。

「なんですか？それ」

「まあ、色々必要なもの…あつ水波ちゃん一ついいかな？」

「はい、なんでしょうか？」

「ちよつと寝ててよ」

CADを使わずに無系統魔法『共鳴』を発動させ生体波動とサイオン波の共振で気絶させた水波ちゃんを床に寝かせる。

「ごめんね、水波ちゃんに魔法を見せると面倒だから」

今回、ぼくは本気でいく。色々見られたらヤバイ魔法も使うかもしれないし奥の手は絶対に見られるわけにはいかない。

「というわけで、『スノー仮面』参上！」

ぼく設計のスーパースーツに目の部分に特殊な仕掛けを施してあるフルフェイスのヘルメット。もちろん変声機能も付いてる。

そしてスーツの上から魔法陣の編み込まれた白いローブを着れば『スノー仮面』の完成だ。ただ『スノー仮面』はダサイとちーちゃんに不評だったので、その内別の名前を考えなくてはなるまい。

「まあ、兄さん達がくるはずだから大丈夫だと思うけど：一応武器置いておくから」

ぼくは水波ちゃんの戦闘スタイルを知らない。けど魔法だけで戦うというのはごく一部の強力な魔法師だけだから銃と銃弾を置いておく。ぼくはごく一部の方だから使わないし！

もし、目覚めなかった時のために保険もかけておいた。

「さて、行きますか」

そう呟いた瞬間、会場が爆音と振動で揺れた。

どうやらハロウィンパーティーが始まったようだ。

桜井穂波

VIP会議室。

予想外に大規模で深刻な事態が進行しており情報が欲しい、と思っていたところに雫からされた提案がそれだった。一般には解放されていない会議室で閣僚級の政治家や経済団体トップレベルの会合に使われる部屋だという。暗証キーもアクセスコードも知っているという雫がいれば大抵の情報にはアクセス出来るだろう。

そう考えてやって来た達也達であったが。

そこに女の子が寝ていた。その横には銃と銃弾が置かれている。

誰もが唾然としている中、達也と深雪だけは他の皆とは別の理由で固まっていた。

「桜井…さん？」

深雪がそう漏らしたのも無理はない。

なんせその少女の顔は亡き母のガーディアンだった元警視庁SP、姉のように気安く、親身に、愛情を注いでくれた女性、今は亡き桜井穂波に瓜二つだったのだから。

「何、深雪知り合い？」

「ああ…少しな」

エリカの問いに答えたのは達也だった。

「とりあえず情報だ。雫、頼む」

達也は新たに発生した問題事項に頭を悩ませながらも、ここへきた目的を果たすことにした。



予想を越えて悪化していた状況を確認し、地上からシエルターに避難することにした一行は避難の前にデモ機のデータを処分するべく、達也と幹比古を先頭にエレベーターホールからステージ裏へと回る通路を突き進んでいた。達也の背にはVIP会議室にいた女の子が背負われている。

「司波、吉田」

そこで服部と沢木を従えた十文字克人と偶然出会い、少しばかりの話し合いをした結果、服部と沢木が地下通路を進む他の生徒を万が一の事態から守るために駆け出す。そして、今度は克人を先頭にして一行はデモ機の放置されたステージ裏へと戻ってきたのだが。

「何をしているんですか」

そこにはデモ機をいじっている鈴音、五十里とそれを取り囲むように見守る真由美、摩利、花音、紗耶香が避難もせずに残っていた。

「リンちゃんや五十里くんが頑張っているのに、私たちだけ先に逃げ出すわけにはいかないでしょ?」

どうやら鈴音と五十里がデータの消去をしているのを待っているらしい。

達也が深雪と共に他校の控え室を回ってデータを消去（分解）を使ってストレージを空にしたし戻ってくると、今後の方針を決めるべく一同は控え室に集まった。

「まず聞きたいのだが…その女の子はどうしたのだ?」

摩利の質問は誰もが疑問に思っていたことだった。もちろん、司波兄妹も含めて。

「途中で保護しました。逃げ遅れたようです」
「なるほど」

達也は嘘はついていない。ただ言っていないことがあるだけである。それを知っているはずのメンバー、VIP会議室にいたメンバーは誰もその事を指摘しない。何か言えないわけがあるのかもしれない、そうでなくてもこんな状況でわざわざ追求するような事でもないからだ。

「敵の狙いは魔法協会のメインデータバンクね。重要なデータは京都と横浜で集中管理しているから。論文コンペに集まった学者さんたちを狙っているって線も考えられるけど」

真由美がそう、話し合いの結果をまとめた時、彼女は呻き声を上げながら目を覚ました。

「あなた、大丈夫？」

状況が分かっているのかキョロキョロとしている少女に一番近くにいる深雪が声をかける。

「……ここは？」

「一校の控え室よ、あなたはVIP会議室に寝せられていたの。まさか自分で床に寝たわけではないのでしょうか？」

「深雪、まずは名前を聞かないと。君、名前は？」

「…桜井水波です」

少女…桜井水波が自らの名前を明かすことに一瞬躊躇があったのは、四葉の許可なく当主候補である深雪とそのガードイアンである達也に接触して良いものか迷ったからである。既に接触してしまつて

いる、ということに気がついてすぐに答えたわけだが。

そんなことで迷ってしまう程、今の水波は混乱しているのだ。

そしてそんな水波と同様、達也と深雪も混乱していた。

顔と名字、この二つが揃えばいくらなんでも偶然では片付けられない。この少女は桜井穂波の関係者だ、と結論づけざるを得ない。そうになると、この少女の目的は何なのか、何故あんなところで寝ていたのか、知らなくてはならないことが沢山あった。ただ、それをこの場、第三者が大勢いるこの場で聞くことは出来ない。混乱するのも無理はなかった。

「会場に侵入してきた兵士に部屋に入るよう言われて入ったら気絶させられました」

大まかな状況を理解した水波は誰にも聞こえないほど小さな声で「あの女男次会ったら殺す」と呟いた後、深雪の質問に真実に少しの嘘を混ぜた答えを返した。

部屋に入るよう言われて入ったら気絶させられた、という部分は大体真実である。

「そう、大変だったわね。もう大丈夫よ、お姉さんたちが守ってあげるから」

可愛らしくウインクをする真由美にコクコクと頷きながら、水波は今後の対応を考えていた。

CADは常に持ち歩いている、確認せずとも重さで懐に入っているのが分かった。どうやら丸腰というわけではなさそうだ。

—さて、とりあえずあの女男は殺すとして、どうしましょうか

水波の右拳は知らず知らずの内に固く握られていた。

白虎

「トミーさん、マジイケメンですわ」

こつそりとシエルターへ避難する一校生徒にある魔法を使つて変装したまま混ざり見守っていた雪花は十三束が逃げ遅れていた千秋を救出するのを見て、そう呟いた。

十三束が繋いでいた手を引いて千秋の身体を抱き寄せ、空いている右手で自分の右腰を叩き、崩れ落ちた瓦礫を抜けてシエルターの通路へたどり着いたのである。

「あーちゃん会長もこれで大丈夫そうだ…結構怖がつてたけど会長として頑張つてたし」

あずさは悲惨な光景に目を塞ぎたいのを生徒の代表を任せられた義務感から必死で抑え込んで表面上は平静を保った。自分達のために身を盾にして戦ってくれている仲間から目を逸らさずジツと見つめながら。

「うん、良く頑張った」

雪花がそう呟いた瞬間だった。

まだ完全には閉じていなかったシエルターの入り口に白い異形の腕が差し込まれる。そして無理矢理入り口を抉じ開けて入ってきたのは白い虎だった。

正確には剛気功を増幅する中華古式魔法・道術の呪法具、白虎甲を纏った呂剛虎である。その右手には義手というには異形な、まるで虎の腕のような鋼鉄の塊が取り付けられている。この腕は白虎甲と合わせて使うことを前提に開発が進められていた呂剛虎の専用武装を義手としたもの。いかなるものもその腕のみで突き破ることをコン

セプトに作られた破壊の剛腕。

すぐに沢木と服部が戦闘体制を取った。攻撃に入らないのは敵に隙がないというだけでなく背後にいる一校の生徒、それ以外の避難している人達の事を考えてのことだった。

『おいおい虎夫くん…いや白虎夫くん。なんだいその右手！格好いいじゃないか』

だから突然、背後から正体不明の人物が現れたことに背筋を凍らせた。

『ああ、勇気ある少年達、君たちは下がっていなさい。アレは私が処分しよう』

正体不明の人物、雪花にそう促されるものの警戒を怠るわけにはいかない。沢木と服部はこの白い不審人物を微塵も信用していなかった。

故に雪花が右の掌を突き出すのも見ていた。見ていたが故に信じられなかった。

呂剛虎は瓦礫の海へ吹き飛んだ。

『上でやろうか、白虎夫くん』

そして、その呂剛虎を追いかけようにして雪花が一瞬で移動し、呂剛虎を掴むと地下通路の崩落によって出来た地上へと繋がる穴に呂剛虎を放り投げた。

沢木と服部を含めたシエルターに避難した人々はその光景を咄然と見ていた。

◆ 陥没した路面から何かが上空に打ち上がる。そしてそれを追うように下から飛び出してきた白い物体。

「今度は何!?!」

そう叫んだのは千代田花音。

人型の移動砲台を二機、真由美と深雪が破壊した直後だったからである。

『そーい』

雪花は気の抜けた掛け声を出しながら上空で呂剛虎を蹴り落とす。呂剛虎は勢い良く地面に叩きつけられる…かと思われたが何らかの魔法を使ったのであろう。静かに着地した。

『げっ姉さんいるじゃん…うわっ水波ちゃんもいるよ』

上空でそれを確認した雪花はこちらを見つめているというより睨み付けている一校生徒の中に会いたくない人達がいることに気がつき、思わず声を漏らした。

『はい、皆さん危ないので離れてくださーい。白虎夫くんに噛みつかれますよー』

「なっ呂剛虎!?!」

雪花のふざけた口調での警告によって摩利はやっとその存在に気がついた。白い不審者に気を取られるあまり、落ちてきた物体が人であることにすら気がついていなかったのだ。

『君たちは下がっててね、私みたいなプロの猛獣使いじゃないと彼は中々厳しいと思うよ』

上空からゆっくりと降下してきた雪花がそんなことを言っつて呂剛虎の前に立つ。

「この前のようにはいかぬぞ」

『それは私の台詞だよ、この前みたいに優しい対応は出来ないよ？』

呂剛虎を挑発しながら雪花は背後の二人を意識してどう戦うべきかを考えていた。雪花のCAD『スノー・ホワイト』はもしもの時のために本気の本気で作った完全実戦用CAD。四葉と戦うことになったことを想定して水波にも、さらには達也にまで存在を明かしていなかった。しかし、前回の呂剛虎との戦闘で達也にはCADを見られてしまっている。もし、CADの特徴が深雪にも伝わっているとすれば雪花の正体は完全にバレてしまうのだ。それ以前に達也と深雪は『精霊の眼』の知覚情報を、サイオン情報化されたイメージとし、身体の接触によって遣り取りをする事が可能なのだから深雪にCADを見られればこの場ではバレなくてもいつかはバレてしまう。

他にもいくつかのCADを持っているものの、全て一点物である上、達也の手が加わっているものである。

結局のところCADを使えば正体がバレることは確実だった。

— 疲れるからあんまり使いたくないんだけど。

『かかってこいよ白虎夫くん、遊んでやる』

雪花はCADを取り出さなかった。

幻想眼

雪花は沢山の死を目の当たりにすることで『死の記憶』を思い出す。前世の自分が死ぬ瞬間、そして『死んでから転生するまでの記憶』を。魂だけの存在となつて何も無い白い空間を漂い、やがてどこへともなく吸い込まれた、『魂の記憶』。それを認知した瞬間、雪花に見える世界が変わつた。全ての生物に共通して透明な霊体のようなものが見えるようになったのだ。それは魂。存在すらも曖昧なそれを雪花は視認できるようになった。そしてその副産物なのか、この世に存在する実体のない曖昧なものすらもその瞳で捉えることができるようになった。それは魔法式であつたりサイオンであつたり精霊であつたり。

雪花はこれを『ファンタジー・サイト幻想眼』と名付けた。

当初、雪花はこの力をちよつとした手品みたいなもの大した力ではないと考えていた。しかしある時、雪花は気がついた。自分の異常な記憶力に。

意識して一度見れば、聞けば、触れば、それを忘れることはなかった。

何故なのか、ただ記憶力が良いというだけではないことは何となく分かつた。『記憶している』という感覚とはどうも違う気がした。そしてその疑問は魔法師となることで解決した。

雪花は無意識下で情報を魂に刻んでいたのである。

魂だけとなつていた雪花にとっては当たり前前の行動、人間が脳に記憶するのと同じくらい自然であり得ない程効率の良い記憶方法だった。

人間が脳に記憶するのはそこにそういう機能があるからで、別にそれよりもスペックの高い記憶媒体があればそちらを選ぶのは自然なことなのかもしれない。例えばそれが魂などという曖昧なものであっても。

それに気がついたとき雪花は一つの裏技を思い付いた。

『ソウル・キャスト』

四葉家秘匿の技術であるフラッシュ・キャストを応用したことからそう名付けた。

フラッシュ・キャストは、記憶領域に起動式をイメージ記憶として刻み付け、記憶領域から起動式を読み出し、起動式の展開、読み込み時間を省略する技術だ。

司波達也の場合、意識内の魔法演算領域という特異性から、記憶領域に魔法式をイメージ記憶として蓄えることで魔法式構築の時間すら省略する。

四葉が秘匿しているような技術であり、もちろん一魔法師が真似できるようなものではない。

雪花がやったのは記憶領域の代わりに魂に刻み蓄えるというやり方だ。故にソウル・キャスト。そんなソウル・キャストは達也同様魔法構築の時間を省略できただけでなく『直接目で見た魔法を何時でも使用できる』。

『幻想眼』で捉えた達也ですら知り得ないような魔法の情報までも魂に刻むことでそのまま魔法式として使用することが出来るのだ。

ただノーリスクというわけではない。

『ソウル・キャスト』は所詮裏技。

無理矢理の技術であり精神、特に魂に、CADで魔法を使うのとは比較にならないほど負担がかかる為、『もう一つの奥の手』程ではないが、使用には細心の注意が必要なのだ。『ソウル・キャスト』は諸刃の剣なのである。

『予言しよう。君は私に一度も触れられずただの一撃で華々しく散るだろう』

故に雪花は魔法を一度しか使わないと決めた。一撃必殺をコンセプトに作った魔法にそれだけ自信があった。

そんな雪花に呂剛虎は無言で突きを繰り出した。

『幻想眼』を発動している雪花は気配や殺気といった見えないが感じる『存在が曖昧なもの』を捉えることで相手の動きや考えを読む。攻撃がどこに来るのか、どうやってくるのか、分かっているならば今の雪花でもかわせる。

『ははー当たらなければどうということはないわー！』

呂剛虎の突きを蹴りをその全てをかわす。スーツに仕込まれた身体能力を軽く三倍には引き上げてくれるであろうパワーアシスト機能がなければ分かっているにもかかわらずの程の猛攻であった。

『君の剛気功は確かに良いものだ。その武装によってさらに増幅されているみたいだし、君自身、世界屈指の近接戦闘魔法師と言われるだけのことはある』

当たらない。幾人もの人間を、何台もの兵器を、破壊し蹂躪してきた拳が、蹴りが、全て紙一重でかわされる。呂剛虎の繰り出すフェイントも、あえて作った隙にもかからない。

まるで全てを見透かしているように。

『だから、こう思いたまえ。―相手が悪かった、と』

ただ呂剛虎の猛攻をかわしていた雪花が右手を前に出した。その手は親指と人差し指だけを立てた銃の形。

『ばーん』

雪花の言葉と同時に呂剛虎の全身から血が吹き出す。

『名付けて『クリムゾン・デスパーション爆裂解散』。地獄で自慢しなよ、君が犠牲者第一号だ』

仮面の下で、雪花はかつてないほど全力のドヤ顔をした。

赤虎と三校

クリムゾン・デイスバージョン
『爆裂解散』。

一条の爆裂と術式解散を合わせた魔法。

グラム・デイスバージョン

術式解散 は、魔法式を無意味なサイオン粒子に分解する無系統

魔法であり、『爆裂』は一条家の秘術、対象内部の液体を瞬時に気化させる魔法で生物ならば体液が気化して爆発する、発散系の系統魔法。

この二つの魔法を一つの魔法の工程として放つのが『爆裂解散』である。

今回の場合、第1段階で呂剛虎の剛気功をサイオン粒子に分解し、第2段階で情報強化を分解、第3段階で爆裂を放った。

一撃必殺。

ただの一撃で敵は赤い花となって散る。これはそういう魔法だ。全ての工程を完璧にこなせていたとするならば。

呂剛虎はまだ生きていた。

術式が悪いのか情報強化の分解が上手くいかなかったためである。爆裂は人体に直接干渉する魔法だ、情報強化の分解が不完全では効きにくい。

『うわ恥ずかしっ！まだ虎夫くん生きてるし！赤虎夫くんになって生きてるし！何が『予言しよう』だよ！恥ずかしいわ！地獄で自慢？笑い話だわ！』

既に瀕死、戦えるどころが意識すらない状態の呂剛虎の横で雪花は一人、暴れていた。

「何なのアイツ」

それを離れたところから見ていた花音が呟く。

「分からない…分からないがとんでもない奴だ。あの呂剛虎を無傷で倒した」

「何か言っているみたいですが聞き取れませんね」

摩利と鈴音も正体不明の白い不審者に戸惑いつつも、敵意がないことはなんとなく理解していた。自分達を庇護するような発言を聞いていたからだ。

『ここに長居すると正体バレそうだし、移動しよ。恥ずかしいし』

一通り暴れなんとか冷静さを取り戻した雪花は飛行魔法で上空に飛び立つ。実際には雪花の台詞のほとんどは呂剛虎にしか聞こえていなかったことなど知るよしもなく、無駄に恥ずかしがりながら。

「飛んでっちゃいましたね…それで、これからどうするですか?」

話し合いの結果、ヘリの到着を待つことになった一校面々の頭からは白い不審者のことなどすっかりどうでも良くなっていった。

ただ一人、水波を除いて。



会場近くに隠しておいた制服に着替えた雪花はどこに避難すればいいのか分からず、彷徨っていた。

「疲れたし、ぼくが居なくても後は掃討戦だし大丈夫だろうと思って着替えたわけだけど…どこに避難しよう」

マルチスコープを使いながら適当に歩いていた雪花であったが、大型特殊車両専用の駐車場でゲリラを相手取る三校の生徒達を見つけ、三校のバスに乗せてもらおう、と思いつく。

「はいはい、雪花くんが通りますよー」

『フレイム・フリーズ
凍炎』。

凍結の概念拡張魔法で燃焼を妨害することが出来る。雪花はこれによって火薬を使う銃火器の使用を不可能にし啞然とするゲリラの間を堂々と走り抜ける。

「嵐が来るよ」

ゲリラがコンバットナイフで雪花に斬りかかるころにはもう遅かった。

激しい風が荒れ狂う。頭上から吹き下ろす風に身体を押さえつけられたかと思うと、後ろから、横から、強風に煽られ、ゲリラはその場で立っていることすらままならない。そしてバタバタと倒れていくゲリラ達。

空気中の窒素の密度を引き上げる魔法と、その空気塊を移動させる魔法。収束・移動系複合魔法『ナイトロゲン・ストーム窒素乱流』だ。

酸素濃度が極端に低下した気流を発生させており、吸い込んだなら、低酸素症でたちまち意識を失ってしまう。

「来ちゃった」

「……マジか」

可愛くウインクをする雪花に将輝だけでなく先程まで吐き気を抑えきれずにいた三校の生徒までもが吐き気を忘れて固まった。

脱出

「敵の陣容にそれほど厚みは無いよ。揚陸艦が一隻と、事前に潜伏させたゲリラが進行軍の総兵力だからね」

「お前なんでそんなこと知ってるんだよ？」

「軍の人から聞いた。もう掃討戦に入ってるらしいよ」

「どうやら三校には偵察手段がなかったらしくあまり状況を把握できていなかったらしい。」

「そうか…だが」

「魔法協会支部に向かうんでしょ」

「ああ、俺は『一条』だからな」

十師族には魔法協会に対する責任がある、一条の長男であるマツキーが知らん顔で逃げるわけにはいかないのだろう。だから無理に止めることはしない。マツキーが死なないのは分かっているし一番ヤバそうな虎夫くんは既に処分した。

「ジョージに皆を無事に脱出させるよう言っておいてくれ、正直、先生や先輩たちだけでは無事、脱出できるかどうか心配で戦いに集中できない」

「了解、無理はしないでね」

マツキーは短く返事をして、独り、更なる戦場へ向かった。

信じられるかい？あの人、あれで好きな女の子に連絡先も聞けないんだぜ？



なんとか脱出に成功したばくと三校生徒の乗るバスの中で切って

いた携帯の電源を入れてみると表示させる着信履歴。その数47件。その内、38件が姉さんだった。

怖い！怖すぎるよ！狂気を感じるよ！

「くくくくりむー！どうしたら良いと思う!?!」

ガクガクと震えながらくりむーに携帯を差し出すと「うわあ…」と声を上げて苦笑い。

「まあこんな状況だし、お姉さんも心配なんだよ」

「その心配していた姉の電話を数時間に渡って無視していたわけなんです!?!」

「……頑張つて」

あれ？手が震えて上手く操作できないや…。

「もしもし姉さ『雪花!?!』…うん」

『無事なの!?!怪我は!?!今どこ!?!』

「無事無事、怪我もない。今は三校のバスで避難してる」

『無事なら無事で連絡しなさい！心配するでしよ!』

「うん…ごめん」

完全にぼくが悪いので素直に謝っておく。ぼくとしては何が起きるか大体の予測がついていたわけで、そんなに危険は感じていなかったけど、姉さんは違う。突然襲撃され、そこにぼくはいなかった。うん、心配するのも無理ないね。38回も電話するのも無理ないよね!

『続きは帰ってからね、それより今は聞きたいことがあるのだけど』
「えーまだ続くんですか…ぼく疲れてるんだけど」

『桜井水波さんを知っているかしら?』

忘れてた。水波ちゃんを放置しておいたんだった。それでVIP会議室に来た姉さんたちと合流したんだろうけど：何の言い訳も考えてなかった。

まず、水波ちゃんが姉さん達にどこまで話しているのかが分からないと言いつてもできないし。

というわけで。

「えいっ」

通話を切った。そして別の携帯を取り出して水波ちゃんに仕掛けておいた『保険』を起動させる。超小型のカメラだ。水波ちゃんが兄さんたちと合流する可能性は考えていたので仕掛けておいた。その映像を携帯でみる。

まず、静かにぶちギレている姉さんが映った。

ぼくは震える指で水波ちゃんにメールを送る。

『一人になって』

水波ちゃんは携帯を見て、ため息を吐くと「やれやれだぜ」とでも言いたげな顔でその場を離れる。映像を見るにヘリからは降りているようだ。

映像を見て水波ちゃんが一人なのを確認して電話をかける。

『……もしもし』

めっちゃ不機嫌だった。声から殺気が伝わってくるよ！『幻想眼』使わなくても見えるよ！

「も、もしもし水波ちゃん？ちよつと聞きたいんだけどぼくとの関係は説明した？」

『……今のところは何も、名前しか。そういう状況でもなかったの』
そうになると、なんで姉さんは桜井水波という名前をわざわざ口にしたんだろう。ぼくと水波ちゃんに関連性がある、と分かっているからこそだと思っただけだ。

『じゃあ、なんでぼくのことバレたの？姉さんぼくらのこと知ってそうなおぶりだったけど』

『……七草の双子ですよ、私、泉美さんとクラスメイトですから。メイドの仕事で学校を休むこともありますし、雪花様のことを話したこともあります』

「えっ!?なにその衝撃の事実。というか水波ちゃん学校行ってたんだ」

『行っていないわけがないでしょ、常識で考えてください。その空っぽの頭で。ああそういうえば雪花様は中学校どころが小学校、幼稚園すら卒業していませんでしたね、すみません、幼稚園生以下の頭で常識で考えろとは無茶でした』

毒舌がキレッキレだよ！というかただの悪口だよ！そもそも学校に行けなかったのは四葉のせいだよ！

『ところで、私を気絶させた件についてですが、謝…』

「えいっ」

切った。通話どころが携帯の電源を切った。

「くりむー、ぼく来週遊園地に行くんだ」

「えっ?うん、行ってらっしゃい」

「逝ってらっしゃい」に聞こえたぼくは恐らくもう駄目だろう。あーちゃん会長との約束は果たせそうにない。

姉さんと、水波ちゃん、二人の魔王にぼくは恐らく勝てないだろう

から。

「くりむー、ぼく、遊園地に行くんだ」

「なんで泣いてるの!?!というか顔色が大変なことになってる!」

遊園地…行きたかったなー。

ぼくはこの時、知らなかった。魔王は二人だけではなかったということ。

メイド雪花と仲直り

横浜から帰ってきてからは大変だった。

姉さんから散々説教され、色々思い出したくないことをされたあげく、今度買い物に付き合う約束までさせられてしまった。姉さんの買い物に付き合わされるということは必然的に着せ替え人形になるということだ。今から覚悟が必要である。

水波ちゃんのこととは正直に話した。四葉から派遣されてきた専属メイドで、一緒に会場へ来ていたということ。でも逃げている途中で『はぐれてしまった』ということ。いやー、気がついたら水波ちゃん居なくなつてて焦つたなー(棒)。

そして、夜。

冷蔵庫から作っておいたミルクプリンを取り出す。

「水波ちゃんそろそろ機嫌直してよー、はい、プリン」

「…おいしい…ムカつきますね」

「なんで!？」

ぼくは今、水波ちゃんの機嫌を直すため奮闘している。メイド服で。うん、メイド服で。

「どうか水波ちゃん、メイド服着たら許してくれるって言ったじゃん!」

「駄目です。今の雪花様はメイド服に着られています。心までメイドにならないければメイド服を本当の意味では着ることが出来ないのです。主人のために全力で尽くし奉仕する。それがメイドなのです」

「じゃあ水波ちゃんはいままでメイドじゃなかったんだね!」

「私はもう寝るので起こさないでください」

「わあーごめん!嘘、嘘!超嘘!水波ちゃん程優秀なメイドは中々いないよ!強い、賢い、可愛い、メイドに必要なものを全部持つてるよ

！足りないのは胸とぼくへの優しさだけだね！」

「…じゃあ寝るので」

「水波ちゃんーん！」

水波ちゃんは本当に寝た。



次の日、結局機嫌が直らなかつた水波ちゃんは、もちろんぼくを起すようなことはせず、学校に行ったためぼくは当然遅刻した。沙世さんは今、色々大変らしい五輪家を手伝うため出張中なのだ。ぼくを起こしてくれる人はいない。

「本当にどうしたら機嫌を直してくれるんだろう？」

四葉のことを考えれば仕方がなかつたとはいえ、たしかに問答無用で気絶させたのは悪かつたと思ってる。床に寝かせて放置したのも。

だから水波ちゃんの機嫌が悪くなるのは当然なんだけど、早く機嫌を直してもらわないと結構ピンチなのだ。もう、ぼくは水波ちゃんなしではまともな学校生活を送れないということに気がついてしまったからだ。遅刻したし、ネクタイ締められないし、教材忘れたし、お弁当も忘れた。これも四葉の作戦かもしれない。いつの間にかぼくはメイドなしでは学校にも行けない駄目人間になっていたようだ。

というわけで、ぼくは水波ちゃんにプレゼントをして機嫌を直してもらったことにした。

そうすれば水波ちゃんも「わーい、雪花様ありがとう！」という具合に機嫌を直して、ぼくへの態度も柔らかくなるに違いない。

しかし、そうなる問題はプレゼントをどうするかということだ。水波ちゃんはアレで可愛いぬいぐるみが好きだったりする。沙世さんの話では部屋でぬいぐるみを抱いて眠っているらしいし、前にこっそりぬいぐるみに話しかけているのも見たことがある。

プレゼントはぬいぐるみで決定なのだが、如何せん店が分からない。ネットで買うのが手取り早いけど、ぬいぐるみはモフモフ感が大切だと個人的には思うので自分の目で見て触って選びたい。というわけで、あーちゃん会長にまたお願いしようと思っていたわけだけど。

「完全に避けられてるんですが!？」

話しかけようとするのとすつと逃げる。目が合うとすつと逃げる。近づくとすつと逃げる。

絶対避けられてますね、分かりたくないです。

「もうぼくは駄目だ…」

放課後、ぼくはカフェテリアでだらーんと溶けていた。何故かちらちら見られたり写真を撮られたりしているがそんなこと気にしてられない程に脱力していた。

脱力している間に寝てしまったのだろう。窓から見える空は赤色だ。

「…帰ろ」

ぼくがトボトボと帰ろうとしたその時、あーちゃん会長の後ろ姿を見つけた。あのクルクル、あの小ささ、間違いなくあーちゃん会長だ。

「あーちゃん会長!」

こちらを振り向いたかと思うと、ピッと顔をそらされた。が、その場を動こうとしない。

「あーちゃん会長!」

隣まで走っていったってもう一度呼んでみると今度は小さな声で返事をしてくれた。

「…少しは私の気持ちが分かりましたか？」

「へ？何が？」

ぼくの反応にあーちゃん会長は爆発した。それはもう可愛く爆発した。

「昨日！横浜で私とっても心配で何回も電話をしたのに出ませんし！司波さんにかけてたら一緒にいないって言いますし！帰ってきてから電話しても出ませんし！凄く心配したんですからね！それで眠れないまま今日学校に来て、朝、教室に行ったらいませんし！本当にどうにかなくなってしまったのかと、急いで司波さんに尋ねてみれば、無事に横浜を脱出してたというじゃないですか！学校にもケロッとした顔で来てますし！」

だから今日は一日、無視することになりました！少しは私の気持ちを分かってもらえるかと思ったので！まあ無駄でしたが！」

正に怒涛である。息継ぎなしでこんなに喋ったからか顔を真っ赤にしている。可愛い。頬がぷくつと膨れているのもグツドだ。そして何より、ぼくを心配してくれたというのだ。こんなに嬉しいことはない。

「ごめんなさい、怖くて携帯の電源を切って放置してたから連絡できなかったんです。お詫びに甘いものでも一緒に食べに行きませんか？」

「私、今日という今日は許しませんよ！そんなもので誤魔化されません」

「じゃあ遊園地も行かないんですか？ぼくすつごく楽しみにしてたのに」

あーちゃん会長をじつと見る。

「うっ、そんな目で見ないください。なんだか悪いことをしている

ような気がしてきますう。うう分かりました！私もちよつと子供っぽかったかもしれません。仲直りしましょう？」

「はい！じゃあ行きましょう！今日はぼくが奢っちゃいますよー！」
「後輩に奢らせたりしませんよ」

ぼくらは二人並んで歩きだした。

この時、ぼくは忘れていたんだ。家に不機嫌な魔王がいることを、他にも連絡していない魔王がいることを。

だってあーちゃん会長が可愛かったから！

セツカ・イン・ワンダーランド①

ワンダーランドはマジックをテーマにしたアミューズメントパークだ。

その為なのかどうなのか、敷地全体にわたり生け垣やアトラクション施設が迷路を構成するように配置されており、またそれぞれのアトラクション施設に仕掛けが施されていて一旦入場すると、全てのアトラクションを素通りしても中々外に出られない園内構造になっていた。

「全く、あーちゃん会長も水波ちゃんもどこ行っちゃったんだか。しょうがないなー」

そんな、ワンダーランドで雪花は迷子になっていた。自分が迷子になっていることに気がつかないまま。

「むむ、あっちの方にいる気がする！」

雪花は走り出した。二人がいるのとは正反対の方向に。

右半身が黒、左半身が白の衣装に幅の広い縦縞のシルクハット、右半分が泣き顔、左半分が笑い顔の仮面を付けたキャラクター。

それに仮装した十三束鋼は急遽入ることになった警備巡回のバイトであろうともしっかりと仕事をこなしていた。夏休みに散々やったバイトである。手慣れたものだった。

「あれ？雪花くん」

「おおその声はトミーじゃないかー！何々？コスプレ？」

「バイトだよ、雪花くんは一人で来たの？」

「ううん、三人で来たんだけど二人が迷子なんだ、全く困ったものだ

よ」

困っているのはその二人だろうね、と十三束は心の中でツツコミを入れる。迷子なのはまず間違いなく雪花の方だからだ。

「電話すればいいんじゃないかな、ここちようと目立つ『賢者の塔』の近くだし」

「…電話するという発想はなかった」

賢者の塔はワンダーランドのシンボルアトラクションで、もつとも高い構造物でもある。

待ち合わせにはピッタリだった。

「何故かぼくが怒られたんだけど」

「当然だと思う」

電話をしてトボトボと帰ってきた雪花に十三束は冷たく言った。



「私も行きます」

結局ぬいぐるみのプレゼントも出来ず、相変わらず不機嫌な水波ではあるが最低限のことはしてくれようになり雪花もやっと安心してのだが、日曜日の朝、急にこんなことを言い出したのだ。

雪花としては遊園地、『ワンダーランド』には想いを寄せるあずさと二人で行きたい。この提案は到底のめるものではなかった。

「チケットがないんだ」

「四葉から支給されたものがここにありません」

準備万端だった。雪花が今日、ワンダーランドに行くことは既に知られていたのだ。

「私は雪花様の専属メイドですから、離れるわけにはいきません」
ニヤリつと水波は笑った。雪花が二人で行きたがっているのを分かった上での発言だからだ。

「……いじわる」

「仕方ありません、仕事ですから」

端的に言うとしたらの嫌がらせだった。

三人でワンダーランドに行くことになってしまった雪花はどうかあずさと二人きりになるべく策を巡らせた。生け垣やアトラクション施設の配置を考え、水波を出し抜き二人きりになる方法を。なんせ今日、雪花は告白するつもりなのだから。それはもう必死に考えた。

なのに、いつの間にか雪花は一人になっていた。

入園して十分と経たずに。

これは水波のせいである。雪花が一人、迷子になるようこっそり誘導していたのだ。全ては嫌がらせのため。「雪花くん、どこですかー？」とチヨコチヨコ歩きながら雪花を探している小動物の横で水波はニヤリと笑った。今日、水波に雪花たちを二人つきりにしてやるつもりは微塵もなかった。

その後、あずさの携帯に賢者の塔で待ち合わせようという連絡が入ると、水波はあずさを全く別の方向へ導く。極自然に、ギリギリ賢者の塔が見えないルートで。

「…仕返しとは倍返しですが基本です…私は十倍ですが」

小さく呟いた声は誰の耳にも入ることはなかった。

「十三束くん、今日ここでバイトしてるんだって」

「それで、急に遊びに行こうなんて言い出したのか…いやはや、十三束くんも隅におけないね」

雪花が十三束に保護され、水波があずさを迷わせている頃、明智英美と里美スバルはワンダーランドに入園していた。

奇しくも今日、このワンダーランドには一校の『部のマスコットにしたい生徒ランキング』の上位三人が揃ったのだ。

そして、とある一校女子団体による『女装させたい男子生徒ランキング』一位と五位も揃っていた。

セツカ・イン・ワンダーランド②

中条あずさは困っていた。初対面の相手と二人きりというこの状況に。論文コンペにも来ていた様なのだがあずさには覚えがなかった。

「大変なんじゃないですか？雪花くんの専属メイドというのは」

「はい、家から出られると途端にウロチヨロするので大体的場合、今日の様なことになります」

苦笑いを漏らすしかない。なにせ自分から迷子になるから手を繋ぎましょう、と言い出す始末だ。本当にそうなるのだろう。

この娘は雪花のことを良く知っているんだな、とあずさはふと考えた。専属メイドの仕事は住み込みらしく、雪花の家に住んでいる。一緒に住んでいれば良く知っているのは当然なんだろう。しかしあずさは何故かそれが寂しかった。自分が知っている雪花は雪花の極一部でしかないような気がしたからだ。そんなことを考えてしまったのは朝のことがあったからに他ならない。

あずさは正直、今日は二人きりだと思っていた。

もう十回は二人で遊びに行っているだろう。しかしそれは全て、放課後、学校が終わってからのこと。だからこうして休日に一緒に出かけるというのは初めてだったりする。

故にあずさは緊張していた。

休日に男の子と出かける。そんなシチュエーションが初めてでどうすればいいのかわからず、服選びも友達にニヤニヤとされながら考えて精一杯オシャレした。その友達から言われたデートという言葉も緊張に拍車をかけていたのだろう。

しかし集合場所に着いたとき、そこにいたのは雪花とその専属メイドだという女の子。

デートだとか考えて緊張していた自分が馬鹿みたいで恥ずかしく

なった。そのせいで雪花とろくに話もできないまま、雪花は迷子と
なってしまった。

「賢者の塔…見えませんね。凄く大きいはずなのですが」

「その内見えてくるのではないのでしょうか。あーこちらの方が近い
ですね」

あずさは水波に言われるがまま、賢者の塔とは正反対の方向へ進ん
でいく。



「十三束くん、ハーレムだね。美少女三人に囲まれて」

「端から見たら女の子を二人侍らせた美少年に絡まれる哀れなピエ
ロって感じだろうけどね」

「ナチュラルにぼくを美少女にカテゴリーするの止めてくれないかな
！」

『賢者の塔』の前に仮装した十三束と美少年のような少女里美スバル、
それに引っ付く明智英美、迷子の雪花は集まっていた。

「そういうえば、雪花くんは誰と来たんだい？二人とはぐれたって聞い
ただけど」

「あーちゃん会長と水波ちゃん。あつ水波ちゃんって言うのはぼくの
専属メイドね」

雪花の答えに三人は目を丸くした。特に二人、と聞いて司波兄妹と
来ていると思っていた十三束は思わぬ修羅場の予感に他の二人とは
違う驚きがあった。まあ仮面でその表情は見えないのだが。

「意外な組合せだね、想像もしていなかったよ」

「うん、私はてつきり深雪と司波君と来ているのかと思ってた。なんか雪花くん仲良いし」

「ああ、そのせいで深雪は百合なんじゃないかって噂がたつて大変だったな。本気で告白しようとする女子が結構いて」

専属メイドがいる、ということに何のツツコミも入らなかったのは魔法科高校の生徒は比較的裕福な家の者が多く、メイドがいるのが当たり前というような環境で暮らしている生徒も珍しくないからだ。実際、十三束の家は百家だけあって国内の魔法師で有数の資産家と言われる一族であり、明智英美の実家はイングランドにおける現代魔法の名門、ゴールドエイ家、メイドというものは身近といえば身近なものだった。

「もう電話してから一時間は経つけど…遅いなー」

「…自分が迷子になったくせに偉そうだね」

十三束が雪花に聞こえないほど小さな声で呟く。

「もしかして、水波ちゃんが嫌がらせて迷わせてる？いやまさか、いくら水波ちゃんでもそこまでは…やりそう。やられたら十倍返しか考えてそうだし！」

今回の迷子騒ぎを水波の仕業だと考えた雪花は携帯を取り出すと何やら凄い速さで打ち込み始める。

「あー！やっぱり！全然違うところ移動してるし！」

「それは…携帯のGPS情報を見ているのかい？」

雪花の携帯を覗き込んだスバルが尋ねる。

「そう、水波ちゃんは何か対策しているかもしれないし、あーちゃん会

長の方のね」

「他人のGPS情報って簡単に見えるものだっけ？」

「ハッキングしたの。…内緒だよ？」

十三束が頭を抱え、英美は「どうやったの？どうやったの？私にも教えて！」とはしやぎ、スバルはそれを面白そうに見ていた。

「よくもやってくれたな水波ちゃん、お仕置きだ」

雪花は高速で手を動かしながらニンマリと悪い顔で笑った。

セツカ・イン・ワンダーランド③

『クマさんクマさん、良い子にしていましたか？みーちゃんは今日もお仕事頑張りましたよ。うん、えらいえらい』

あずさが水波の誘導により園内をぐるぐると迷わされていると、突然、そんな園内放送が流れた。

「なんででしょう？何かのイベントでしょうか？」

あずさがそう、水波に問いかけると何故か水波は冷や汗をダラダラと流しながら顔を青くしていた。

「具合が悪そうですけど大丈夫ですか？座りますか？」

あずさの声に水波は反応できない。それほどの非常事態だった。

『ウサギさん、みーちゃんが撫で撫でしてあげましょう。ふふつむぎゅーもしてあげますからね』

水波は携帯を取り出すとすぐに雪花に電話をかけた。

「…これをやったのは雪花様ですね？」

『えーどうだろう？さすがのぼくでも園内の放送システムをジャックして、水波ちゃんの恥ずかしい音声を合流できるまで流し続けるなんて鬼畜なことはいないよー』

「…十五分で行きます」

『たしか水波ちゃんの中学校って緊急時に学校から全生徒の携帯端末へデータを送れるようになっていたらしいね。それ、音声データも送れるよね？いやー流石にお嬢様学校だからぼくがこのシステムを乗っとるとしたらー十分はかかるかな』

「…十分で行きます」

水波は何がなんだか分かっておらず「ふえっ？」と声を上げたあずさの手を掴んで全力疾走した。



「君…とんでもない鬼畜だね」

「ぼくもどんな音声データが入っているかは知らなかったんだよ。沙世さん、ぼくの家家政婦さんに水波ちゃんを脅す時に使えって前に渡されてた奴なんだ」

「悪魔かその家政婦は」

「怒ると怖いよー」

スバルと雪花が会話をする横で十三束はリストラされたサラリーマンのようにベンチで頭を抱えている。

「僕は何も見てないし聞いていない、僕は何も見ていないし聞いていない」

「なんか十三束くんが壊れてるけど大丈夫かな」

「エイミーこれはチャンスなんじゃないか？慰めて好感度を上げるんだ」

「おおー流石スバル！」

英美は十三束の隣に座ると「あの園内放送なんだったんだろうね！」「雪花くん、ハッキングしちゃうなんて凄いよね」と折角なかったことにしようとしている事実を十三束に突きつける。

そしてそこに大急ぎで来たのだろう、息を切らした水波とあずさがやって来る。

「み…水波さん…ハア…私…足が」

「すみません：しかし私の命がかかっていたので」

「ふえ!? 命がですか!？」

「ええ、社会的死が」

水波が雪花を睨み付ける。こちらをニヤニヤと見ているからである。

「水波ちゃんが悪いんだよ? ぼくを怒らせるから。この音声データ、本当に使う気はなかったのに」

「くつまさか盗聴されていた上に録音までされていたとは：細心の注意を払っていたはずなのに」

「沙世さんだからね、水波ちゃんじゃちよつと厳しいかも。ああ、それからもしこの音声データを使ったら水波ちゃんに送るように沙世さんから言われていたデータがあるんだ。水波ちゃんの携帯に送っていたよ」

水波は携帯に送られてきた画像データを見て顔を真っ赤にする。そして恐る恐るといった具合に雪花に聞いた。

「せ、雪花様：この画像データ、見ましたか？」

「見てないよ? 沙世さんから見ないように言われてたから」

水波は沙世に逆らうのは最終手段だと心に刻む。四葉の命令次第ではそうせざるを得ない事態になるかもしれないからだ。その事がないよう心から願う。

そんな水波に雪花はニヤニヤとしながら特大の爆弾を落とした。

「でも、今回のことはぼく、結構怒ってるんだよ? そもそも二人で行きたかったのを邪魔されてるし。凄く楽しみにしてたのに。だから、泉美ちゃんには音声データの一部を送っちゃいました」

「え、ちよつと待つてください、私、明日も学校が」

「頑張つてねー、大丈夫、泉美ちゃんは言いふらすような娘じゃないよ、たぶん」

その場に崩れ落ちる水波。急遽二学期から転校した今の学校、お嬢様学校ということもあり、才色兼備な上運動神経も良い水波はそのクールな性格もあつて人気があつた。所謂、百合な方達から。

その中でも頻繁に絡んでくるクラスメイトが七草泉美だった。七草ということもあり邪険にも出来ず、今まで放置していたが、ぬいぐるみに話しかけているようなことを知られば何をされるかは分からない。

本人は否定しているがボディタッチがやたらと多く、まず間違いない百合だろう、と水波は確信していた。

「あの、水波さんは大丈夫なのでしょうか？未だに良く状況が分かかっていないのですが？」

「あーちゃん会長は気にしなくて大丈夫ですよ、水波ちゃんのごことはトミーがなんとかしてくれます。なんせここの職員ですからね。

「さあ、ぼくらは遊びましょう！」

えー!? 僕に丸投げ!? と叫んでいる十三束をスルーしあずさの手を掴むと雪花は最初のアトラクション、『賢者の塔』に飛び込んだ。

セツカ・イン・ワンダーランド④

この心臓の鼓動が繋いだ手を通して雪花にも伝わっているのではないかとありえないことを考えては、繋いだ手を意識してしまい、顔を赤くする。

「楽しいですね、次はどっちに行きます?」

「そうですね…左に行ってみましょう。さっきは右に曲がりましたし」

緊張しているのは自分だけではないんだということに、あずさはいつもより少し固い雪花の言動から気がついた。

そこでふと、あずさは雪花の言葉を思い出した。

『そもそも二人で行きたかったのを邪魔されてるし。凄く楽しみにしてたのに』

水波に対して雪花の言った言葉。雪花は二人で行きたかったという。そしてそれを凄く楽しみにしていたという。それはどうしてなのか。単純に仲の良い先輩と初めての遊園地へ行くことを楽しみにしていたのか、それとも…。

「あーちゃん会長どうかしました?なんだか顔が赤いような気がするんですけど」

「いえっ!大丈夫ですよ!」

「なんかテンションもおかしいですし」

「そんなことありませんよ!私はいつもこんなテンションです!イエーイー!」

「…イエーイー?」

自分でも何を言っているのか分からない程に頭が混乱する。だといふのに顔は赤いままなのはちゃんと分かるのだから、あずさはいつ

まで経つてもいつもの自分を取り戻せない。

「本当に熱があるんじゃないですか？」

が、混乱しているのはあずさだけではなかった。もしかして自分が水波を脅して走らせたなりしたから体調が悪くなってしまったのでは、と考えた雪花も同じことだった。そして、雪花はいつもなら絶対にやれない行動を起こす。

「ふえっ!？」

自分の額をあずさの額に合わせた。

自分が熱を出したときに沙世が良くやる行動であり、額がちょうど良い位置にあったというのが主な理由だろう。

「熱はない、良かったー!」

あずさはついに限界を向かえてしまった。

「あーちゃん会長!？」

つまり、意識を失った。



「会長、顔赤くしてる」

「雪花くんも大分緊張しているみたいだね、手と足が一緒に出てる」
里美スバルと明智英美は水波を十三束へと押し付け、雪花とあずさを尾行していた。

「あーでも私たち何やってるんだろ、折角の休日に他人のイチャラブ

を尾行して」

「確かに…でもこれ深雪が知ったらどうなるんだろうね。深雪、雪花君を猫可愛がりしていたし」

「あー今思うと九校戦の時、深雪が私の制服借りたの雪花君に着せるためだったのかも」

「いや、いくらなんでもそこまではしないだろ…とは言えないな。僕たちが雪花君に女装させようとしたときも嬉々として仲間に加わったしな」

スバルが苦笑いしながら答えると、何やら英美が興奮した様子で袖を引っ張ってくる。

「スバル！二人がキスしてる！」

スバルが英美の指差す方を見てみるとたしかに二人は重なっていた。さらにあずさの顔は遠目でも分かるほど真っ赤だ。

「これは流石に見てはいけないところを見てしまったんじや…」

「スクープだよスクープ！二人はやっぱり付き合ってたんだよ！」

「マスコットカップルか…和むな」

もし、幻想眼を使っていたのなら二人の視線に気がついただろう。しかし雪花は気絶したあずさに手一杯でそれどころではなかった。

どうしよう！と一通り慌てた後、あずさをベンチに寝かせて自分の膝に頭を置く。

「キヤー！膝枕！膝枕してる！」

「雪花くんだと違和感がないな」

二人が尾行を止め、あずさに膝枕をした雪花も眠りにつくまで、後三十分。



『人違いです』

あずさが雪花に初めて会った時、そう言われて簡単に信じてしまったのは雪花が女の子にしか見えなかったからである。その部屋には男の子が泊まっているということを知っていたのにも関わらず、だ。まるで人形の様という使いふるされた表現がぴったりな容姿。声も中性的というよりは女の子寄りで、その容姿にぴったりなものだった。

それがどうだろう。

二人で出かけることを意識して、お洒落して、手を繋げばドキドキする。

いつの間にか雪花を男の子として意識していたのだ。可愛いと思う。でもそれは同姓に向けた可愛いとは違う感情でもあった。

その感情がどこからくるものなのか、考えてみる。

考えて、考えて、その答えが分かったとき、あずさは閉じていた目を開いた。

「あっ起きました？寝顔可愛かったですよ？」

するとそこには、視界いっぱい雪花の顔があつて…さらに可愛いとかわられて…。

「雪花くん！結婚しましょう!?!」

気がついたらそんなことを口走っていた。

セツカ・イン・ワンダーランド⑤

「雪花くん！結婚しましょう!」

笑顔のまま固まった雪花は言葉の意味を理解することが出来ずその思考まで停止していた。

「はわ、あ、えっと、あれ？私今…何て言いました？」

言葉の意味を理解できていないのは言った本人も同様だった。雪花に恋心を抱いていたのだ、ということに気がついた直後に雪花の顔が視界いっぱいになり、可愛いと言われて混乱に混乱を重ねたあずさは自分でも何を言ったのか分かっていなかった。

「えーっと…結婚しましょうって」

私は馬鹿なんですか!とあずさは内心で自分にツツコミを入れる。たしかに好きだと自覚した以上、いつかは告白となるのだろうが、いきなり結婚を申し込むというのは自分で自分の思考回路を疑わざるをえない。

「ぼく…まだ十五歳なので—」

「いいい今のは忘れてください！私が馬鹿だったんです!」

恋を自覚した次の瞬間に結婚を申し込み、それをすぐに忘れるように言っている自分は何なのかと考えて、今度から雪花にどう接すればいいのだろうかという不安感が胸いっぱい広がる。

引かれてしまっただろうな、もしかしたら嫌われてしまったかもしれない、とあずさはネガティブな思考に捕らわれており、次に発せられた雪花の言葉は幻聴か何かなのではないかと一瞬疑った。

「―婚約するのはどうですか？」

「へ？あれ？それってオツケーってことですか？」

「ええ、実はぼく今日あーちゃん会長に告白するつもりだったので」

「えー!!」

正直なところ、あずさが目覚める数分前に目覚めた雪花は今日の告白は止めておこう、とへたれていた。というのも、本来ならばこのワNDERランドで色々なアトラクションに乗ってさらに仲良くなり、最後に告白をする予定だったのだが…水波のせいでその計画は最初から頓挫した。二人きりという大前提が覆された上、引き離されたからだ。さらに、やつとの思いで二人きりになってみれば、あずさは気絶してしまい自分も一緒に寝てしまった。雪花の思い描くデートとはかけ離れたものになってしまったのだ。だから告白はまたの機会にと考えていた。

「じゃ、じゃあ雪花くんは、その、わ…私のこと…好き…なん…ですか？」

照れと恥ずかしさと期待で顔を赤くした上に涙目。その破壊力は雪花を一瞬でキョドらせた。

「うう…好き、ですよ。えっと、その、これくらい！」

あずさより顔を真っ赤にして手を大きく広げ、自分がどれくらいあずさを好きかを表現する雪花の姿はあずさの沸騰した頭を冷まさせ微笑ませるくらいには愛らしかった。

そして、その微笑みを見て雪花も笑顔を浮かべ落ち着きを取り戻す。

「婚約指輪はないけど、代わりにぼくがとっても大切にしている指輪を預けます」

ネックレスにして首から下げていた指輪をあずさの首にかける。

「じゃあ私からはこれですね」

雪花の頬に柔らかいものが当たった。真つ赤になったあずさの顔がすぐ目の前にある。

「私、初めてですよ?…つてあれ?雪花くん?…気絶してる!?!雪花くーん!」

雪花は限界を向かえてしまった。



ワンダーランドから一足先に帰宅した水波は、雪花が特定の女性に好意を抱いていることを、いつも通り『メイドの仕事に関してのレポート』として報告した。すると、数時間後、秘密回線で四葉真夜から直接の通信が入った。

『水波ちゃん、貴女に新しい任務を与えます』

新しい任務。雪花の監視という今の任務はそれほど危険は伴わないが四葉家当主から急な任務依頼だ。危険なものに違いない、と水波は緊張しながら真夜の言葉を待つ。

『雪花さんをこちらに引き入れなさい。幸い貴女は綺麗で、歳も近いことですしね。期待していますよ』

一方的に切れた通信。

真夜の言わんとしていることを理解した水波は、暫くそこで立ち尽

く
し
た。
。

メイド・イン・スクール

中学三年生、それも二学期からの転校ということもあって水波は注目を集めた。初めはその整った容姿で話題をさらい、次にその優秀な成績と運動能力でファンを増やし、最後にクールな性格で心を掴んだ。

クールビューティー、それがこの中学校での水波のキャラだった。

「うふふ、水波さんおはようございます」

「…おはようございます、泉美さん」

七草泉美。水波は彼女に自分のキャラを崩しかねない秘密を知られていた。テンションが普段以上に落ちる。

「あら、元気がないですね、心配しなくても言いふらしたりはしませんわ。学校で私だけが知っている秘密って素敵じゃありません？」

「…そうですね」

「まあ、私もぬいぐるみだと思ってもっとフレンドリーに接して頂きたいですわ、みーちゃん？」

殴りたい、がそんなことをすれば七草的にも、秘密的にもまずいことになるのは分かっているので我慢する。

「ギャップがあつて可愛いと思いますわよ？」

さわさわと肩や腹を触られるもいつものように振り払うようなこととはしない。今の水波には耐えることしか出来なかった。例えば泉美の顔が不自然に赤く、息切れしていても、だ。

そこに、救世主が現れる。泉美の双子の姉、香澄である。この学校で唯一、泉美を止められる女子生徒だった。

「香澄さん、これどうにかしてもらえませんか」

「ちよつと泉美ちゃん、水波さんが嫌がつてるでしょ！ほら離れて！」

しかし、そんな香澄もクラスは別。当然、いつもいつも助けに入れるわけではない。

「次は体育ですわね、水波さん一緒に着替えに行きましようか」
「遠慮します」

貴女みたいな危険人物と一緒に着替えなんて出来るかよ、という言葉葉を飲み込んでソフトに返す。

「ふふ、恥ずかしがって可愛いですわね、でもあんまり断られると傷つきますわ」

「そうですか」

「ええ、傷ついてクラスメイトに泣きついてしまうかもしれません：みーちゃんが仲良くしてくれない、と」

「泉美さん、行きましようか。私と貴女の仲じゃないですか」

水波は笑顔で泉美の肩に手を置くとそのまま二人で更衣室に向かう。ついに桜井水波が七草泉美に落とされた。そんな噂がその日の放課後の内に広まった。



水波がぬいぐるみに話しかけるようになったのは両親を亡くしたころ。寂しさを紛らわせるために幼き日の水波が自然とやっていたことだった。みーちゃんというのはその頃の一人称だ。大人びているとはいえ中学生。両親もなくその代わりとなる存在もいなかった水波にとって、ぬいぐるみを集めて部屋をいっぱいにすることは家族の温かさを求めている行動だった。

「水波ちゃん、あの画像データってなんだったの？さすがに着替えとか盗撮されてたら削除するように沙世さんに言っとくけど」
「……そういうのじゃないので」

水波がぬいぐるみを集めるのには単に可愛いものが好きだということもある。そんな可愛いものが好きな水波の普段の服装は意外にもボーイッシュなものが多く、スカートを穿くのはメイド服や制服の時からだった。

それは単純に恥ずかしいからであったり、自分のキャラじゃない、と周囲からの視線を気にしているからだ。

実際、水波は結構な少女趣味だった。フリフリとした服は大好きだしゴスロリとかごてごてしたのも好きだった。結果、一人きりの部屋で着てみては鏡の前で悦に浸るのが趣味になっていた。それを盗撮されていたのである。水波にとって死んでも知られたくないことだった。それこそ、ゴスロリでぬいぐるみをぎゅつとしながら悦に浸っている自分、なんてものは特に。

「なら良いんだけどね」

実は雪花にゴスロリを着せてみたいと思っている水波。脳内で色々な服に着替えさせていたりする。

「じゃあ、ぼくもう寝るから。おやすみー」

「御休みなさいませ」

そんな雪花をこちらに引き入れる。それが今、水波に与えられた任務。沙世がいない今は絶好のチャンスだった。雪花はぬいぐるみ。そう思うようにして水波はすっかり雪花が眠った夜中、雪花の部屋に忍び込む。忍び込むと言っても朝起こす都合で部屋の合鍵を預かっている水波にとっては簡単なことだった。そしてそのまま雪花の

ベッドに潜り込む。

翌朝。

「ちよっ!?!みみみ水波ちゃん!?!なんでいるの!?!というか裸!?!何これ夢!?!」

「昨日は激しかったですね…」

「別に何もなかったよっ!顔赤くするの止めてくれないかな!?!」

シーツで体を隠し顔を赤くする水波に状況が分からず混乱する雪花。

そして水波が侵入した時、鍵が開けっ放しになっていたドアが開けられる。

「雪花、朝から何を騒いでいるの………私、仕事があるから」

「母さんちよっ!誤解だよ!?!」

「私、今日は病院に行ってきますね、あなた」

「本当にこれ何!?!新しい嫌がらせ!?!」

水波の添い寝は沙世が帰ってくる日まで続いた。

来訪者編

アンジー・シリウスの特別任務

私、アンジー・シリウスことアンジェリーナ・クドウ・シールズは制服のまま自室のベットに寝転がった。そのまま寝返りを打ち、うつ伏せに、顔を枕へ押し付ける。

処刑任務。

USNA軍統合参謀本部直属魔法師部隊『スターズ』の総隊長、シリウスのコードを与えられた者の任務だ。アメリカ人、魔法師、スターズのメンバー、三重の意味で同胞である隊員をこの手で処刑する。これは何度経験しても慣れるものではないし、慣れたいとも思わない。この心の痛みが消えてしまうことは許されないような気がした。

押し潰されそうになる。自分に課せられた責任と自分が課した罪の意識に。

私はいつものようにそれを取り出した。透明なガラスの瓶。その中にはいくつもの星が入っていた。

昔、雪花から教えてもらった日本のお菓子、金平糖だ。私はその甘くて美味しいキラキラとしたカラフルな星を悲しい時や寂しい時に口にする。

すると少しだけ元気を貰える。雪花の優しさが少しだけ私を癒してくれる。

「会いたいな…セツカ」

不意に、呼び鈴の音が聞こえた。お節介な部下が様子を見に来たようだ。

「どうぞ」

リモコンで鍵を開けて、ドアホンのマイクに向かい短く答える。

「失礼しますよ、隊長」

入ってきたのは予想通りの人物。ベンジャミン・カノープス少佐、スターズのナンバー・ツーで私が不在の時、総隊長を代行兼務する第一隊の隊長。十二あるスターズの部隊、それぞれの隊長の中でもっとも迷惑をかけているかもしれない。

彼からの差し入れであるハニー・ミルクに口をつけながらそんなことを考える。

「総隊長、もう準備は終わっているんですか？」

「ええ、大体は」

部屋の隅に積み上げられた個人用コンテナを見る。十月末に極東で観測された戦略級魔法によると思わしき大爆発の実行者、術者の正体を探るといふ特別任務のための荷造りだ。

情報部が絞り込んだ五十一人の容疑者の内の二人が東京の高校に通う学生だった為に、同じ年頃というか同じ年の私が潜入捜査なんて不慣れなことを命じられたのだ。

「総隊長の役目は、容疑者に接触して揺さぶりをかけること、と考えて気軽に楽しまなければ損だと思えますよ。その方が相手も隙を見せて来ると思えますし」

私の不満が伝わってしまったのかベンジャミン・カノープス少佐、ベンはその私に言葉をかけてくれた。

思えば、特別任務でしばらく滞在することになる極東の国、日本には雪花がいる。いやUSNAに比べれば小さな国とはいえ国は国。その中から一人の人間と偶然再会出来るなどとありえない話ではあるのだが、もしかすると、と少し期待してしまう。国のしがらみ無しにしても自分から雪花に会いに行くというのは気が引けた。私の手は既に血に染まり、雪花の手を握ることは酷く躊躇われた。記憶の中の優しい笑顔を踏みにじってしまうような気がしたから。けど、偶

然、奇跡的に再会出来たならその時はまた…。

「まだ少し早いですが、いってらっしゃい。スターズのごことは私にお任せを」

慈しみのこもった笑顔で敬礼するベンに私は感謝の笑顔で答礼した。



私に与えられた任務は潜入捜査でありながら陽動の側面を強く持つている。その一環としてターゲットの容姿を確認すると同時に自分の姿を相手に見せるための最初の接触ファースト・コンタクトを行ったのだが…。

「気のせい…よね？」

ターゲットである司波達也と司波深雪は日本の伝統であるらしい初詣なるものを友人達としていたようで十人くらいの団体だった。その中に雪花の姿があったように見えたのだ。いや、ありえないことだというのは分かっている。そもそも雪花らしき人物は日本の女性女性が着るといいう着物を着ていたし、何よりその横には小さい女の子がくっついていていた。うん、絶対あれは雪花じゃなかった。日本に来て早速ナイーブになっていたらしい。少し気を引き締めなければ。

私は気持ちを新たにして今回の任務で生活拠点となるマンションのドアを開けた。

「お帰りなさい」

まさかもう帰ってきているとは思っていなかったが、部屋の中から同居人の声がした。

「シルヴィ？」

わざわざ玄関までやって来た年上の同居人、シルヴィア・マーキュリー・ファースト。シルヴィア以外はコードネームで、スターズ惑星級魔法師『マーキュリー』の第一順位を表している。階級は准尉で二十五歳。元々は軍人志望ではなく大学でジャーナリズム専攻していたこともあり情報分析技能に長けていて今回はその能力を買われて私の補佐役に抜擢されたようだ。

そのシルヴィイが私をまじまじと見てくる。それはもう凝視と言っているくらいに。疑問の声もあげるといふものだ。

「リーナ……何です、その格好は」

「あっこれですか？ 不必要に目立たぬよう、前に日本人から『日本の女の子の憧れ』だからと貰った服と同じものを購入しておいたんです。USNAでは中々手に入らなくて、結構苦労しました。似合っていますか？」

シルヴィイがこめかみに手を当て、頭痛を堪えているような表情をしている。

「リーナ、はつきり言います。その格好は所謂コスプレという奴です」「えっ!?!」

「えっ、じゃありません!?!どこの学校の制服ですかそれは!?!そんな短いスカートと制服が今の時代あるわけがないでしょ!?!それに今の時代、わざわざ不必要に長い靴下を穿くくらいなら長いスカートを穿くでしょうに。目立って仕方なかったでしょう」

スカートとニーソックスの生み出す絶対領域は芸術とまで言われている、って雪花が言ってたのに!?!この服は女の子の憧れで絶対領域こそが最高のファッションだって!?!

「本日、以後の予定はキャンセルしましょう。僭越ながらこのマーキュリーが、日本における最近のファッション動向をじっくりと、分かりやすく、ご説明して差し上げます」

ちよつとこれどういうことなの雪花！

シルヴィの口調だけは丁寧な冷たいセリフに私は言葉を飲み込んで大人しく従うしかなかった。

うう私、総隊長なのに。

アンジー・シリウスの潜入初日

交換留学生として一校に潜入することとなった初日、少々予想外であったがターゲットの方から接触してきた。司波深雪：深雪は生徒会の副会長であるらしくまだ日本にもこの学校にも不馴れな私の面倒を見てくれるらしい。びっくりする位綺麗で所作がとても一般の高校生とは思えないお嬢様然としたものだった。そのせいで声をかけられたときはターゲットということもあり、ドキツとしてしまった。正直、私はポーカーフェイスが上手い方ではないしこういう不意打ちは今後も気を付けた方が良さだろう。

「ただの人間には興味ありません。この中に、宇宙人、未来人、異世界人、転生者がいたら、私のところに来なさい。以上」

雪花から日本の高校では伝統だと聞いていた自己紹介を試してみたのだが、皆ポカーンとしてしまっている。発音が悪かったのだろうか。

「それはな、そんな伝統はないからだよ」

「ええ!？」

深雪から紹介されたもう一人のターゲット司波達也：達也に今朝の自己紹介のことを話すとため息を吐いてそんなことを言われた。

「あるわけがないでしょ、それに『ただの人間には興味ありません』って私たちは皆魔法師なのだから、ただの人間とは言えないんじゃないかしら」

「あつもしかして、そういうジョークなんじゃないですか？USNAの」

私は転入そうそうとんでもない赤っ恥をかいたらしい。なるべく

キメ顔でした方が良いとのことだったので全力のキメ顔だったのも今思うと恥ずかしい。ポーズまで決めちゃったし。

「ほのか、その話はもう止めてあげた方がいいわよ、ほらリーナの顔真っ赤」

とりあえず、奇跡的に雪花に再会した時には一発殴ることにした。



流石、戦略級魔法師の容疑者になるだけあって深雪の魔法技能は飛び抜けていた。仮にもスターズの総隊長である私、アンジー・シリウスと互角の勝負をしてくるのだから。いや、実際戦ったら負けないけどね！

「深雪も新たなライバル出現でモチベーションを上げているからな。その点、リーナには感謝している」

一度は頷いたものの、達也の発言に顔を見返す。深雪のモチベーションが上がったことに何故達也が感謝するのかちよつと分からなかったからだ。

「出たよ、達也くんのシスコン発言」

隣のエリカが「やれやれ」と言わんばかりに、わざとらしくため息をつく。

「あ、ああ、なるほど……タツヤとミュキって仲が良いのね」

日本ではノリが大切だと聞いていた。周囲に合わせて冷たい視線で達也を見る。

「アンジェリーナの愛称は普通、『アンジー』だと思うんだが、俺の記憶違いかな？」

「いえ、記憶違いじゃないわよ。でもリーナって略すのも珍しいって程じゃなくて、私は子供の頃からそう呼ばれていたから皆にもリーナって呼んでもらうようにしているのよ」

『アンジーよりリーナの方が可愛くない？』

そんなことを言う雪花の顔が浮かぶ。リーナと誰かに呼ばれる度に雪花のことを少し思い出してしまうのは日本に来てまだ間もないからだと思いたい。こんな状態ではすぐに金平糖が無くなってしま

う。

「そっ、誰か美味しい金平糖の売ってるお店知らない？私、好きなのよ」

「……知ってるよ、金平糖を好きな奴がいてな。良く買ってこいと頼まれるんだ」

学校帰りに早速買いに行くことにした。

雪花逃亡中

東京某所とあるホテルの一室にて。

「水波ちゃん、ぼく彼女いるじゃん」

「いますね、ちつこいのが」

「これってさ、浮気に入ると思う？」

「入りませんね」

「だよー」

雪花はベッドの上で水波に膝枕されていた。その黒い髪を水波に撫でられ目を瞑っている。

「…水波ちゃんの恥ずかしい音声データを流すためにハッキングした時、気がついたんだよね。他にもハッキングしている奴がいることに、さ」

雪花がハッキングした時、ワンダーランドの監視カメラの映像を何者かが盗み見ていることに気がついた。そしてその犯人が四葉で自分を狙っているのだということにも。

「それで、あの指輪を？」

「うん、あーたんに何かあったらまずいからね。自然なタイミングで常にあーたんが身に付けそうなものを本人にも気がつかれないように渡すにはあのタイミングしかなかったから」

「本人には狙われるかもしれないこと、伝えた方が良いと思いますが。警戒しているのとしてないのでは対応が随分違うと思いますし」

「駄目だよ、あーたんがビビって泣きそうなのも可愛いけど、やっぱり笑顔が一番なんだから」

「ノロケですか、このロリコンが」

「あーたんは高校生だよ！」

ガバツと起き上がって反論するも、すつと水波に元の姿勢へ戻される。

そして頭を撫でられふにやりと力が抜ける。

「大体その指輪の『赤い糸』も良く理解できないんですが」

「話したでしょ、ぼくの『幻想眼』で指輪の位置と、その持ち主に危険が迫っていないかが分かるって。まあ範囲は狭いし今までリーナの方は見えてなかったんだけど」

「ある日突然見えるようになった、と？ふあんたじーさいと（笑）で、ですか？」

幻想眼を小馬鹿にしたように感じたのは気のせいだ、と思うことにした雪花はそのまま話を進める。

「うん、ただその位置が動かないから常に持ち歩いてるわけじゃ無いんだらうけど」

「国内、それも近くにいるってことですか？」

「リーナが無くしてそれがたまたまこの辺に流れ着いたって可能性もないわけじゃないんだけど…見える感じ的にたぶんリーナなんだよな」

「うわ、雪花様変態ですね」

「なんで!?!というか水波ちゃんちよくちよく悪口挟んでくるよね!?!息をするように毒吐くよね!?!」

今度は起き上がるだけでなく距離をとって反論する。が、水波はふつと鼻で笑うと何事もなかったかのように話始めた。

「リーナさん怒るんじゃないですか、大事なものだったんですよ?」「スルーですか…うん、リーナなら分かってくれる…かな、なんか大泣きしてヘビィ・メタル・バースト乱射してきそうな気もするけど。」

あれヤバイんだよね。一回見たけど使う気にならないもん」

「私なら取り合えず殺しますけど」

「くりむー逃げて！この娘ヤバイよ！バイオレンスだよ！殺されちゃうよー」

「なんでそこで真紅朗さんの名前が出てくるんですか？」

「…くりむー」

意中の相手に全く意識されていない友人に心の中で合掌する。中々会う機会もなければ、久々に会えるかもしれない論文コンペでも会うことが出来なかったのだから仲が伸展していないのも無理はないのかもしれない。真紅朗は性格的に自分から連絡するようなことは出来ないからだ。

「まあ、指輪のことは分かりましたけど、私たちはこんなにのんびりしてて良いんですか？」

「一応、四葉にあーたんに手を出さないよう言ってきたけど安心は出来ないし、近くで護衛したいところなんだけど、ぼくが近くにいることでより危険になる可能性も高いから、今は沙世さんに任せてる。下手にぼくらが動いて被害が拡大するより安心だ」

「葉山さん半殺しにしちやいましたしね」

苦笑い気味に言う水波に雪花はうーん、と考えるが結局誰のことだか分からなかったらしく水波に質問する。

「それどの執事さん？あの時適当に何人かやったから覚えてないんだけど」

「うわー人間のクズですね」

「ストレートな悪口止めてくれるかな!？」

「ちび」

「怒るよ!?!ねえ！怒るよ!?!」

「嫌がらせで当主様の下着を屋敷中にならまくような人はクズだと思

うんですが」

本気で蔑んだような眼で見られ、たじろいだ雪花は「あれはたまたま」とか「そんな気はなかった」とか冷や汗をだらだらと流しながら言い訳した後、それでも蔑むように見てくる水波にじゃあと言葉を返す。

「じゃあクズは良いよ認めるよ！でもチビは認めないよ！ぼくよりちっちゃい人だつてたくさんいるよ！」

「…一校の男子で居たんですか？」

「……探せば居るよ！たぶん！きつと！」

「……ドちび」

ボソツと呟かれた一言に心を折られた雪花は体育座りで落ち込んでしまう。

「ぼくにもね、優しさって必要だと思うんだ。もっと甘やかされるべきだと思うんだ」

一通り落ち込んだ後、完全放置されていたというのに立ち直ったらしい雪花が酔っぱらいのように水波に絡み出す。

「大体水波ちゃん、敬語はデフォオだとしても、雪花様は止めない？もうメイドじゃないんだし」

「じゃあ何て呼びます？」

面倒そうに水波が返す。

「お兄ちゃん一択で」

「黙れ変態」

「酷い！ちよつとふざけただけじゃん！八割本気だったけど！これく

「らい良いじゃん！」

涙目の雪花に水波は一言。

「おい、雪花」

「ぼくは逃亡犯か！いや四葉から逃亡中だけど！というかまさかの呼び捨て!？」

「ワガママですね、じゃあもうゴミで良いですよ」

「どの辺を譲歩したのかな!?!じゃあの意味が分からないよ！あれ!?!ぼく結構水波ちゃんのために頑張ったよね!？」

「余計なことしやがって」

「それツンデレだよね!?!本音じゃないよね!?!そうだよね!?!」

「勘違いしないでよね！別にあんたのためじゃないんだからね！」

「何が!？」

逃亡中だというのに二人は結構楽しそうだった。



「そういえば水波ちゃん、ぬいぐるみがないと寝られないんじゃないかなかったっけ？」

「無くても寝れますよ、あつた方がいいだけで」

心外です、とばかりに顔を背けた水波であったが、すぐに雪花の方に向き直るとニヤリと笑う。

「まあ、今日はここにちょうど良いのがあるわけですが」

「ちよっと！流石にそれは…って強い！痛いよ！殺しにきてるよ！」

水波に抱きつかれたままベッドに押し倒された雪花はじたばたと抜け出そうとするが力の差は歴然。脱出は不可能だった。

「裸で寝た仲じゃないですか」

「なんか出る！出ちゃう！うう！女の子のパワーじゃないよ！」

「鍛えてますから」

「分かったから離してよ！体がギシギシいつてるから！これヤバイ音だから！」

「一緒に寝てくれますか？」

「もうぐっすり寝ちゃう！だから離して！このままだと永遠の眠りについちやうよ！」

水波は力を緩め雪花を抱き締めるようにして寝ると布団を被せた。

「もうこれは完全にアウトだよ、あーたんに何て言えば良いんだ」

「問題ないですよ、私たちは兄妹、『家族』なんですから。ね、お兄ちゃん？」

甘えたように言う水波に雪花は何も言えなくなってしまう。水波の過去を四葉で知ってしまった雪花としては水波に家族とかいう話題を持ち出されると弱い。自分も家族と何年も離れて暮らしていたこともその要因だろう。

「あーずるい。水波ちゃんずるい」

「お兄ちゃん」

止めとばかりに水波が涙目でお願する。

「本当にずるい!!」

結局二人は一緒に寝た。

司波家の兄は基本的に妹には勝てないのだ。

アンジー・シリウスの敗北

都内で起きている連続変死事件、通称『吸血鬼事件』。

死因は全員、衰弱死。かすり傷以外の外傷は一切無く薬物反応も全て陰性、そして傷かかないにもかかわらず、被害者の体格から推定される血液の約一割が失われていた。

その犯人とされる『吸血鬼』にレオが襲われた、というのだ。放課後、そのお見舞いにやってきた達也達はレオの証言から『吸血鬼』の正体を予想する。

「多分、レオが遭遇した相手は『パラサイト』だ」

幹比古が講義口調で語り始める。

「人に寄生して人を人間以外の存在に作り変える魔性のことをこう呼ぶんだよ」

「それが吸血鬼の正体か」

そしてこれを期にエリカは報復のため動き出す。周囲の人間を巻き込んで。



達也にちよつかいをかけて返り討ちにあつたり、ほぼ正体がバレていることに気がついたり、東京に潜伏しているという脱走兵の処分を言い渡されたり、USNA大使館でミーティングをしたり、アンジー・シリウスとしての任務を遂行中に先日知り合ったばかりの学友、レオが路上に倒れていたり、結局任務は失敗したり。

今日なんてエリカに右肩を折られたし！あんなに強いなんて聞いてない！達也には訳のわからない技術だか魔法だかで術式を無効化されちゃうし！日本の高校生はどうなっているのかしら！雪花が言ってたチートなの!?!あつ痛い！興奮してきたら肩が。痛し辛いし

帰りたいたいし！泣きそう、色々泣きそう。

任務とか吸血鬼とか学校とか色々なものを全部吹っ飛ばしたい気分だった。

とはいえ何もかも吹っ飛ばすなんて出来るはずもなく私は今日も学校に行つた。

臨時生徒会役員、なるものに勧誘されたものの正直なところあまりやりたくはない。私には任務があり放課後に時間を取られるのはあまり好ましくない。

私は今日も任務があるわけだし。

白覆面と全く楽しくない鬼ごっこ、それが私の任務。その任務の途中遊び相手^{ターゲット}が銃で腹部を撃たれた。銃弾の飛んできた方向には拳銃を構えた達也の姿。なんで私の邪魔ばかりするのかしら！

腰から単一用途の武装デバイスを引き抜き情報強化の魔法を発動させる。銃身を通過する銃弾の諸属性を強化する魔法だ。

しかしその銃弾は一瞬で微塵に分解された。

嘘!?!なんで!?!その動揺が私に隠しきれない隙を作ってしまったのだらう。

偽りの姿が剥がれていく。

無意識に銃弾を放つ。しかし五発の弾丸はやはり達也に届くことはなく塵と消えた。

そして今度は拳銃そのものがバラバラになり、魔法で破壊される。訳がわからない。私は一瞬、たしかに動きを止めてしまった。

「止せリーナー！俺は君と敵対するつもりは無いつ」

その空白を狙つたのだらう。けど、正体がバレてしまった以上達也はここで始末するしかない！

パレードで位置の情報を偽装し本体の居場所を掴ませないようにしながらダガーで攻撃する。座標を特定出来なければ魔法をかけることはできない。このパレードを破るためには幻影を破壊し、新たな

幻影が形成される前に本体の位置を見つけ出して攻撃するか、五感に頼らずアイデアにおける本体の座標を割り出して攻撃するかの二択。魔法の発動の速さには自信がある。特にこの魔法は誰にも負けないという程の自信があるのだ前者の方法で破られることはないだろう。そして後者も恐らく達也には無理だ。そんなことをこの戦闘中に行えるような実力と能力があるのなら私はどうの昔に無力化されているはずだ。

このまま押しきる！

気合いを入れて五本目のダガーを投げることがかわされる。そして達也が何やら円筒形の缶を軽く上へ放り投げた。

「ジ」

何のまねかしらと不思議に思ったのは一瞬だった。私は直ぐに対物障壁を展開する。なにせその缶は小型の投擲榴散弾だったのだから！ジーザスなんて言っている暇もない。

そして直ぐに達也が飛び掛かってくる。新たに形成しようとした対物障壁はまたも謎技術で消し飛ばされる。完全に不意を突かれた私はそれ以上の抵抗は出来ず仰向けに押し倒された。

が、これで終わる私ではない。

「アクティベート、『ダンシング・ブレイズ』！」

達也の手がマスクに触れたと同時に、叫ぶ。投擲済みのダガーが私の声に応じ達也を襲う。そして体に突き刺さった……と思った瞬間、全てのダガーが細かな砂と化して消え散った。

「腐食……いえ、分解……？」

私の疑問に答える声はもちろんない。その代わりに達也が強引に仮面を剥がしにくる。激しく首を降って抵抗するもその手を振り解けない。

「後悔するわよ、タツヤ！」

「捕獲に成功したはずのターゲットに逃げられた時点で、たつぷり後悔している」

唇を噛み締めて睨み付ける。仮面が外された、もう達也は処分するしかない。だから私は――悲鳴をあげた。

「誰か、誰か助けてっ！」

この悲鳴は合図。警官に扮した仲間が四人、達也を囲む手はずになっっている。いやなっていたはずだった。

『助けを呼ぶ声聞きつけて、正義の味方大参上！』

何故か、変態が一人増えた。

謎の乱入者

『そこに隠れているハゲと女の子、出てきてくれないかな?』

「ありやく参ったな、君何者だい」

いつも通りの飄々とした顔であるもののたしかに驚いているらしい八雲が姿を現し、それに続く形で深雪も現れる。

『正義の味方』

突如現れた乱入者の答えに八雲は大きく肩をすくめる。達也の変わらない無表情からの視線が心なしか冷たくなった。

『そんなCAD物騒なものしまつて、私と世界平和について語ろうじゃないか。それとも今期のアニメについて語るかい?』

「生憎とあまりアニメは見ない」

『それは残念、人生損してるね』

白いフルフェイスのヘルメットはシンプルなデザインで装飾の類いはなく、視界を確保するためのバイザー部分だけが薄い水色。スーツも白く所々に細かな金属部品が見え、それがただのスーツではなく何らかのギミックを積んだ特殊なものであることが予想できる。そのスーツの上から絵本に出てくる『魔法使い』が着ているような白いローブを着ており、何らかの加工が施されているのだろう、月に照らされキラキラとラメのようなものが光っている。

「…貴方、四人をどうしたの?」

何時まで経っても現れない仲間にはリーナは正体不明の白い乱入者に問いかける。

『…四人？ああ、警察官のコスプレした四人ね。なんか銃向けてきたから気絶させてグルグルに縛って放置しといたよ』

自分を庇うように現れたとはいえ、乱入者は当然、自分の仲間ではない。しかしどうも達也達の仲間というわけでもなさそうだ。ならばこの変態は何なのか、と自分がかかなり追い詰められているという現実を逃避するためというわけではないがリーナは考えを巡らせる。

『そんな警戒しないで、私は通りすがりの正義の味方。もう用事は済んだし帰るから』

「黙って帰らせると思うか？」

『たしかに君たちは手練れだけど、私とアンジー・シリウス相手じゃ無傷とはいかないと思うなー。それにあまり時間も無いでしょ？というわけでお邪魔しましたー』

飛行魔法で飛び去っていく白い仮面に達也は何もしなかった。深追いする意味もないし、乱入者の言う通り時間がない。達也以外の『吸血鬼』を追っているグループがこちらに駆けつけてくる可能性があるからだ。

「…リーナ、取引しないか？一対一の勝負だ。君が勝ったら今日のところは見逃すし俺が勝ったら訊かれた事に正直に答える。どうだ？」
達也の問いに苦慮したあげく条件を呑んだリーナに深雪が待ったをかけ、勝負はリーナと深雪で行うこととなった。

睨み合う、二人の美姫。

二人の類稀な美少女による、華麗なる決闘の幕が切って落とされようとしていた。



東京某所とあるホテルの屋上。

「実に良い仕事だったよ、水波ちゃん」

『とんでもないことを私にさせますね、アンジー・シリウス、九重八雲、司波兄妹、化物の巣窟に放り込むとは』

「ごめんごめん、でもSOSがきたらすぐ助けられるよう準備はしてあったし沙世さんもついてたでしょ。おかげでわざわざ用事作って七草家にまで行ってアリバイを作れたし、今後多少は動きやすくなっ
た」

ヘルメットを外した水波がねだるように上目遣いで雪花を見て言う。

「これはぐ褒美が必要ですね」

水波の瞳に不穏な気配を感じ取った雪花は距離をとる。が、じりじりと水波も近づいてきて壁際に追い込まれてしまう。

「その目は姉さんがぼくに女装させる時の目！いや、水波ちゃんまさかそんなことは…」

「前からゴスロリを着せてみたいと思っていたんですよー」

「ぼくは着ないからね！そう何度も何度も女装させられてたまるか！」

「そうですか……私頑張ったのに」

しよぼーんと落ち込みトボトボとした足取りで部屋に帰っていく水波。その様子を雪花はじっと見て、唸りながら葛藤し葛藤し…結果。

「……………き、着るよ！良いよ着るよ！好きにすると良いよ！もう今日は無礼講だ！」

雪花は女装することを了承した。水波の悲しそうな背中を見ていられなかったのである。

雪花の言葉にパアと顔を明るくする水波。その顔を見てまあ女装
くらい良いかという気になってくる雪花。

寒いから早く部屋に行こうか、と水波に一言声をかけて前に行く雪
花を見て水波は薄く笑う。

計画通り、と。

アンジー・シリウスのネガティブ思考

「リーナ、いい加減に起きてくださいー!」

シルヴィにどやしつけられて、私は渋々ベッドから這い出た。力尽くで布団をはぎ取られて仕方なく起きたのである。

「まったく……いくら日曜日だからって、だらしないですよ」

ダイニングテーブルの前に座ってパジャマのままブーツとしていと呆れ顔のシルヴィが私の前に蜂蜜入りのホットミルクのカップを置いてくれる。

まだ寝ぼけてふわふわとしていたが、少しずつカップの中身を口にしハニーミルクを飲み干すころには意識が覚醒した。

「ごちそうさまでした……シルヴィ、本部から何か言って来ていませんか」

ふわふわした厚手のパジャマにブラシも当てていない頭では威厳が出ないだろうから口調だけはスターズ総隊長としてのものを意識する。リーナはポンコツでもアンジー・シリウスは格好良くなければならないのだ。って私もポンコツじゃないけどね!……ちよつとドジかもしれないけど。

「今のところは、まだ何も。ですが、何のお咎めも無く済むとは思えませんね……」

「シルヴィもそう思いますか……」

シルヴィの返答を聞いて頭を抱える。

「もしかして……負けたんですか?」

衛星級が一度に四人も無力化され、ミノムシのようになって木に吊るされていた、とか。

リーナまで三時間以上も交信途絶、行方不明になった、とか。

シルヴィイから痛いところをつかれまくって、止めとしてその質問をされた。私はあまりの情けなさにテーブルに突っ伏した。どうせ私はポンコツなので。

「私はもうダメです。やっていける自信が無くなりました。シリウスの称号は返上します」

昔から私はダメな人間なんですよ。未だにツインテールが不揃いになることがあるし、こないだなんて靴下が左右違うものだったし、昨日だって深雪に負けたし。あああもう私なんて宇宙ゴミ級で良いですよ。シリウスなんて私には過ぎた称号だったんです。所詮私はポンコツ、人の上に立てるような人間ではないんです。なんか本当に色々ごめんさい。

「えーと、そうですか、今回は運が悪かったんですよ」

「タツヤとミユキと忍者が三人もいたんですよ！だってばよ、の忍者です！分身したり口から火が出たりするやつです！」

雪花から忍者の話は聞いていたし、タツヤが忍者とつながっていたのも知っていたけど、あんな手練れがあの場合面に介入してくるなんて予想外だった。特にハゲてる奴はマスタークラスの忍者だったし！これは情報部が悪いわね！もっとバツクアツプはしっかりしてもらわないと！うん、やっぱり私は悪くない！ポンコツじゃない！



「シルヴィイ、すみませんでした……」

ため込んでいた不平不満を吐き出したお蔭で、いつもの自分を取り戻したものの、そうなるさつきまでの自分が恥ずかしくなってくる。そういうところがポンコツなのかもしれない、とちよつと自己嫌

悪。

「良いんですよ、たまには愚痴くらいこぼさないとパンクしちゃいますからね」

ハニーミルクのお代わりをさりげなく差し出しながら、シルヴィは笑って首を振った。シルヴィさんマジ天使。そして私はポンコツの総隊長。駄目な上司である。

そこからしばらく真面目な話をして、ふと最近ミアと会っていないことに気がついた。

隣の部屋に住んでいる別部隊の一人で本名はミカエラ・ホンゴウ。日系人という点は同じでも、私と違って日本人とほとんど外見上の区別がつかない彼女は、本郷未亜という偽名でマクシミリアン・デバイスにセールス・エンジニアとして潜り込んでいるのだ。

「ここ数日、真夜中過ぎまで走り回っているようです。今日も仕事みたいですよ」

「日曜日だというのに勤勉ですね」

部下にどやさされてベッドから渋々這い出るような総隊長（笑）とは大違いだ。

「明日は第一高校に行くそうです。CADの調整用測定器の納入に行行するそうですよ」

「えっ?」

「お昼からの予定だそうですから、ランチタイムにでも会いに行つては如何です?」

何故かミアに私が高校生をやっているのを見られるのは抵抗があった。なんだかこう、私の総隊長としてのキャラというか、威厳というか、そういうのが無くなっちゃうような気がするのだ。いくらポンコツの総隊長（笑）でも守りたいものはある。

提案を口にしたシルヴィから目を逸らし、私は明日のことを考えた。

アンジー・シリウスとパラサイト

A組のクラスメイトと食事をしながら、私はこの後どうするか迷っていた。昼休みは一時間。まだ三十分程残っている。目の前の食事はあと五分すれば食べ終わる。いつもなら場所を変えて食後のお茶か、臨時役員として生徒会室に顔を出すか。

だが今日は、ミアが潜入先の社員として第一高校を訪問することになっていいる。最近では任務が忙しくもう数日ミアとは顔を合わせていない。特に用があるわけじゃないけど、良い機会であることは確かかわけで何を迷う必要があるのかと私自身思うけど謎の気恥ずかしさで私は中々決断できなかった。

しかし、私はすぐにミアの元へと向かうことになる。

一瞬異質な波動が膨れ上がったからだ。

周りの生徒に気づいた様子はないが、魔法の気配、サイオンの波動ではなかったからだろう。これは先日鬼ごっこをした白い覆面の怪人、『吸血鬼』の気配。方向も大雑把にだが見当がつく。通用門、業者が入りする門の方角だ。

場所を意識すると、連鎖的に直前の思考が戻ってくる。今はちょうどミアが第一高校に到着する時間帯。納入業者の一員として訪れるなら通用門を使うはずだ。

「すみません。少し用事を思い出しましたので、お先に失礼しますね」

同席していたクラスメイトへ丁寧に断りを入れて席を立った。

◆ 嫌な胸騒ぎが私を駆り立てた。

トレーラーから降りてきたミアが虫を払うように手を降っている。今の季節、部屋の中ならともかく、屋外を羽虫の類いが飛び回っているはずもないのに。

「何これ？ 囲まれた!？」

しかしそんなことを気にしている余裕はなくなった。認識阻害の領域魔法が私たちを取り囲んで発生したからだ。

直後、小太刀による攻撃を受ける。

回避行動は完全に直感頼りのものだったがミアを突飛ばし、その反動で私も後ろに転がった。砂だらけになりながらも内ポケットから旧式の情報端末を取りだしその中に仕込んでおいた汎用型CADを起動させる。

「何をするの、エリカ!？」

エリカを吹き飛ばすための魔法を発動させるものの対魔法障壁に阻まれる。

「カット・ジユウモンジ!？」

愕然として振り返った先には年齢を誤魔化してるんじやと密かに疑っていた十文字克人。事前の調査でその力量は要注意とされていた。だから一瞬、気を取られてしまった。その一瞬でエリカは距離を詰め小太刀をミアに振るう。

「ミア!？」

私の叫びはミアを案じたものから驚愕のものに取って代わる。

ミアが素手で小太刀を受け止めていたからだ。CADを使わず防壁の魔法を掌に纏わせて。

「どういふこと……?？」

呆然と呟いた私の耳に、見計らっていたかのようなタイミングで囁きが飛び込んでくる。

『良かったーようやく通じた』

通信機を通じてではなくシルヴィの得意とする魔法によるもの、肉体を介さず、空気を音として振動させ、空気の振動を音として読み取

る魔法だ。

『ミアだったんです！白覆面の正体はミカエラ・ホンゴウです！』

シルヴィの声に私の意識が空白に埋め尽くされる。

「――ミア、貴女が白覆面だったんですか!?!」

ミアは隣の部屋に住んでいて、時々一緒にお茶を飲んだりお喋りしたりする間柄に過ぎない。単なるチームメイト。だとしても、ミアが何度も殺し合いを演じた相手だったという事実はショックだった。

そんな私にミアは敵を警戒する冷たい、非人間的な視線を向ける。

そんなミアにエリカが再び小太刀を振るう。その斬撃はミアの防御をかいくぐり正面から胸を貫く。

そしてミアの腹を蹴りつけ、その反動で小太刀を抜くと、軸足でジャンプし大きく後方に跳び退った。

ミアの貫かれた胸の穴が瞬く間に塞がっていき、完全に治ってしま

う。

「治癒魔法!?!あの傷を一瞬で!?!」

エリカがミアを睨み付けながら吐き捨てる。どうやらミアは本物の化物のようだ。

「だったら、これでどうかしら」

トレーラーの陰から聞こえたその声と共に、ピンポイントでミアに凍気が襲い掛かる。何の抵抗も出来ないままミアは呆気なく凍りついた。

「深雪?」

あまりに呆気ない結末に、思わず構えを解いたのだろうエリカが気の抜けた声で問い掛ける。

その視線の先には深雪と達也。そして達也がこちらに歩み寄ろう

とし―突如、CADを抜き凍りついたミアに向けた。

『ありやーやつぱり気がつかれちゃいます?』

いつの間にかミアの横には人がいた。

白いフルフェイスのヘルメットに白いローブ。その右手には白い杖を持っておりいつか絵本で見た『魔法使い』を彷彿とさせる。それは昨日、達也との交戦中に突然乱入してきた人物と同じ格好だった。背丈は同じくらいに見える。加工された声とはいえ口調もあんな感じだった。同一人物と見るのが妥当だろう。

『この娘は私が貰うよー、少し興味がある』

「俺はお前にも興味があるんだがな『白い悪夢』?」
ホワイト・ナイトメア

『えっ何その恥ずかしい二つ名』

達也、エリカ、深雪、十文字克人が変態を囲む。私も何時でも魔法を使えるように戦闘態勢。

高校生レベルを越えた手練れが五人。この状況でミアを連れ出すことなんてできるわけがない。

なのに―

『きやー私、怖い』

アイツは余裕そうに言った。

雪花思考中①

日曜日、東京某所とあるホテルの一室。

ぼくは眠い目を擦りながら水波ちゃんに今日の成果を報告する。

「色々情報を集めて分かったのは最近騒がれてる吸血鬼は『パラサイト』とかいう魔性で、USNA軍から脱走した魔法師だってこと。いやーさすがスターズ、ハッキングするの大変だったよ」

「無茶してますね」

水波ちゃんが呆れたという顔でため息混じりに言う。

「それでリーナがなんでこっちにいいのか分かった。リーナはたぶん脱走兵を追って日本に来たんだ。USNA軍で偉い立場になったって前に聞いたしね」

「どうするんですか？ 四葉にパラサイトにUSNA軍、問題は山積みですが」

「さてどうしましょうか」

ぼくは考えをまとめるべく取り合えず四葉での出来事から思い出すことにした。



大き目の武家屋敷調伝統家屋。それが門の外から見た四葉本家最初の印象。普通の家と比べると確かに広いしお屋敷と表現しても違和感がない。でもマツキーの家に比べると随分こじんまりとしていてしょぼい。魔王城みたいなのを期待していたぼくとしては拍子抜けもいいところだ。

「まあ、死の気配は魔王城と大差ないかもね」

重厚な作りの門から敷地内に入ると同時に体が重くなったと錯覚してしまふような重く冷たい空気がずっしりとのしかかった。

論文コンペから一週間後、兄と姉が呼び出されたがぼくは特になかったので安心してあーたんと遊びに出掛け晴れて婚約した日からさらに一週間。お互いになんだか恥ずかしくてこの一週間まともに話すこともなかったが来週からはイチヤイチャしてやる！と気合いを入れていたところに四葉からの出頭命令が来た。当然、無視しようとしたわけだが父さんと話し合った結果行くことにした。無視したことを理由にちよっかいを出されるよりは大人しく応じた方が良さだろうという判断だ。今回の出頭命令は主に顔見せの意味合いが強く危険はないだろうし。とはいえ相手は四葉、護衛として沙世さんが付いている。もちろん水波ちゃんも一緒だ。

『謁見室』と通称されているらしい大応接室に通される。実際に四葉真夜と顔を合わせるのは初めてだ。画面越しでも相当の女王感であったが本物はもつとすごいのだろう。跪ずきなさい！とか言うんだらうか。馬鹿なことを考えていたからか、後ろに立つ水波ちゃんから冷たい視線が浴びせられているのが分かる。止めて、緊張を少しでも解すために必要なことだから。

少しだけ待っていると初老の執事さんと共に四葉真夜は表れた。形だけの挨拶をして会話をする。内容としては達也さん、深雪さんとは仲良く出来ていますかとか、横浜でのことは大変でしたねとかだ。

「澪さんが艦隊に？」

「ええ、参謀長より五輪家に出動要請があり、五輪家はこれを受けたようです」

近々愛媛の本家に帰ってしまうという話だったがこれと関係があ

るのかもしれない。沙世さんが必要になるくらい大変だったみたいだし。

「それにしても、水波ちゃんは何者かに気絶させられたそうね、貴女には雪花さんの警護を頼んだはずなのだけど」

「申し訳ございません、油断しました」

「全く、使えないわね」

「…気絶させたのはぼくだよ。水波ちゃんからそういう報告があったはずだよな?」

「あらそうだったかしら?」

そろそろ歳ですね、とは口が裂けても言えない。物理的に裂けてしまいかもしれないからだ。いくら水波ちゃんを無駄に傷つけるような言動にキレかかって敬語が崩れていたとしても、それくらいの理性はある。

「水波ちゃんみたいな可愛い娘にそんなことするなんて酷いわね、どうしてそんなことしたのかしら?」

「さあ、忘れてしまいました。水波ちゃんが可愛かったからじゃないですかね」

適当に返す。ぼくが気絶させたのは当然、魔法を見られないようにするためであり、それは四葉真夜も分かっているはずなのだ、真面目に答える意味はないし答えてもこちらが不利になるだけだ。これから来るであろう本命の質問に。

「そう、なら呂剛虎を無傷で屠った白い仮面の不審者を知っているかしら」

「直接は見てませんが、話には聞きましたよ」

不審者じゃない、ヒーローだ!と頭で考えながら冷静に返す。実

際、姉さんから変装したぼくのごことは聞いているし、直接見てはいないから嘘はついていない。

とはいえ、四葉真夜はぼくがその白い仮面の奴だと半分以上確信しているだろう。でなければそもそもこんな質問は出てこない。

「水波ちゃんは実際に見ていたそうだけど、何か気がついたことはある?」

「……呂剛虎の攻撃を軽々とかわす程体術に優れており、情報強化を一瞬で破る程の魔法力を持っていました」

「他には?」

「……特には」

「そう、やはり駄目ね。貴女は失敗作かもしれないわ」

えっと、これはそろそろキレていいのかな? いや四葉真夜の目的がぼくを怒らせその实力を見ることだというのは分かっている。分かっているんだけどね、うん。でも水波ちゃんはもう知り合いでもなく友人でもないそれ以上のものになりつつあるんだよね、ぼくの中で。それをボロクソ言われればさ、怒りたくなるよね。まあ我慢するけど。所詮物忘れが酷くなってきたババアの戯れ言だし? 独身拗らせちゃった若づくりババアの戯れ言だし? 取り合えずババアだし!

「親の教育が悪かったのかしら、まあもう死んでるのだからどうこう言えるわけではないのだけど」

水波ちゃんの両親が亡くなっているという衝撃の事実とそれを馬鹿にしたように言うババアにそろそろぼくは限界を迎えそうだった。我慢するんだ、ぼく。耐えろ、ぼく。

「まあ、親の教育というのはそう関係がないのかもしれないけど。だって雪花さんは優秀なものね、両親はサイオン量しか取り柄のないボンクラと、どこにでもいる凡庸な女だというのに」

あつ無理や。

「ちよつと黙ってくれるかな、殺しちやうよ？」

「…出来るかしら？」

乱暴にドアが開けられ沢山の執事が入ってくる。真つ黒の執事服がまるでゴキブリのようだ。

「死にたくない人はお帰りを。死にたい人は—さようなら」

いくつもの魔法がぼくを襲った。

雪花思考中②

執事たちは真夜にとつて死んでも良い程度の捨て駒に過ぎないがそれでも実力は並みの魔法師を凌ぐ。

「冥土の土産に教えてあげよう。今のは『エレメンタル・アーチャー精霊の射手』、滅茶苦茶格好いいでしょ？今考えただけど」

その執事たちがものの数秒で全滅していた。四種類―炎、氷、風、土―の魔法による弾丸が全方位から射出されたからだ。嵐のように蹂躪する魔法を止められるものなどいかなかった。

瞬間、世界が夜に塗り潰された。

闇に浮かぶ、燦然と輝く星々の群れ。

天井が月の無い、星の夜空に変わっていた。

星が、光の線となって流れ、血臭が、室内に漂う。

が、音もなく夜は碎け散る。

「逃げるよー」

雪花の声で沙世は動き出す。唾然としている水波を米俵のように担いで応接室のドアから飛び出した雪花に続く。

「なな何をしているんですか貴方は！当主様に四葉に手を出すなんて！とか下ろして下さい！」

「やっちゃったものは仕方ないでしょ！反省はしているよ！後悔はしてないけどね！沙世さん、水波ちゃんを下ろさないように！」

水波はじたばたと暴れるものの沙世による絶妙な拘束により力が入らず抜け出すことは出来ない。耳元で大人しくしなければあの画像データが白日の下に晒されることになりますよ、なんて脅されてからは人形のように大人しくなったが。

「水波ちゃん、四葉真夜の私室は!？」

「すぐそこですが…何をやる気ですか？」

「弱味を握れるかもしれないでしょ、何か探すんだよ」

真夜の私室に入り幻想眼で『真夜の見られたくないもの』を探す。人に見られたくないものというのは独特の色で見ることが出来る。

「見つけた!」

雪花はタンスの棚を勢い良く引き抜いた。

「……変態」

「ちち違うよ!偶然!本当に偶然なの!」

雪花が両手で持っている引き抜いた棚にはぎつしりと色とりどりの布が詰め込まれていた。それは女性用の下着だった。水波だけでなく沙世からも冷たい視線が雪花に送られる。が、言い訳をしている暇はなかった。すぐにドアから執事が二人、入ってくる。それを風の魔法で吹き飛ばし三人―正確には二人と荷物が一人―は部屋を出て走り出す。

「まさか下着だなんて思わなかったんだよ!こう秘密文書的なものとか、そういうのが出てくると思ってたの!」

「その割には大事そうに持ってますね」

屋敷から脱出し少し余裕の出来た雪花は早速言い訳をするが水波の指摘どおり雪花の手には中身の殆ど無くなった棚が掴まれていた。つまり雪花は真夜の私室から屋敷を脱出するまで下着を撒き散らしながら逃げていたのである。

「……何故、私と一緒に連れてきたんですか？」

四葉の敷地を抜けたところで水波はボソツと雪花に尋ねた。

「だってアイツ嫌なことばかり水波ちゃんに言ってたじゃん。そんな奴のところに居させられるわけないでしょ」

「でも私は……私は……」

四葉に命令されて監視し、逐一貴方のことを報告していた、そう口から出すことは出来なかった。

「関係ないよ、水波ちゃんがどうしようとしてそれをぼくは許すし気にしない。そのせいで四葉が何かしてくる……ぼくの大事な人を傷つけるって言うなら―その時は潰せば良い。勿論水波ちゃんも大事な人だよ？」

「なんで……どうして……」

「一緒に遊んで、一緒に旅行に行つて、一緒に寝て、楽しくなかった？ぼくは楽しかったよ」

それは思つてはいけないことだと自分に言い聞かせてきたことだった。任務だから、命令だから、と心の中に押し込んでいた溜まり続けていた感情だった。

水波の中からそれが溢れてきた。止まらない涙と一緒に溢れてきた。

「……楽しかった……です。なんだか暖かくて……居心地が良くて……家族……みたいで。心から楽しいと思えた」

水波の言葉に雪花は笑った。

それは水波が何度も見ている自分にも何度も向けられた心からの笑顔だった。

「家族みたいなんじゃない、ぼくらはもう家族なんだよ。水波ちゃんが笑うと嬉しいし、泣くと悲しい。なんだかんだ言いながらもゲームで本気になっちゃう水波ちゃんも、結局負けて悔しがつてる水波ちゃんも、夜中にこっそり特訓しちゃう水波ちゃんも、全部可愛いと思う。ぬいぐるみに話しかけちゃう水波ちゃんもね。」

四葉？関係ないね。水波ちゃんはぼくがもらうことにしたんだから。だって水波ちゃんは家族だ。そうだね…ぼくの妹、かな」

雪花の言葉に水波は笑った。

それは水波が初めて雪花に向ける何年も忘れていた心からの笑顔だった。

「私が姉ではないでしょうか？」

「え!?!いやだって水波ちゃん年下じゃん！ぼくがお兄ちゃん水波ちゃんが妹だよ！」

「毎朝、起こして貰って、着替えを用意してもらって、ネクタイをしめてもらって、眠いとき朝食を食べさせてもらって、やっと学校に送り出される兄…ですか？」

「こ、これからは大丈夫だよ！あつやっぱり朝は起こして！」

水波は笑う。雪花も笑う。

初めて心が通じあった気がした。

「仕方ないですね、私が妹で良いですよ」

「よろしい、ならば早速お兄ちゃんが守ってあげよう」

空から降ってきたいくつもの魔法攻撃をフランクスによって防ぐ。

「これは警告だよ、四葉。ぼくの大事な人に手を出したらどうなるか、

しつかり刻んであげるよ」

ムスペルヘイム。

気体分子をプラズマに分解、陽イオンと電子を強制的に分離することで高エネルギーの電磁場を作り出し灼熱地獄とする魔法。

雷光瞬く灼熱が雷炎の世界を作り出す。

その日、四葉家本家は半壊した。

雪花思考中③

四葉から脱出した後、しばらくは平和なものだった。そのおかげであーたんと一緒に初詣に行けたし。いや、うん。まさか晴れ着を着せられることになるとは思わなかったけど。水波ちゃんとあーたんがいつの間にか連携してたからね、不可避だったよ。水波ちゃんからは着ないと二人が婚約したのを司波兄妹にチクると脅され、あーたんからは可愛くお願いされてしまったらもう無理だよ。着たよ。

迷子になってしまいますから、とか言ってくつついてくるあーたん可愛すぎたね。でも何故かその後水波ちゃんの機嫌が悪くなって大変だったけど。

まあ本当に大変なのはこの後なんだけどね。

どうやら四葉は準備をしていただけみたいでそこからは襲撃の嵐。現れる刺客をちぎっては投げ、ちぎっては投げで、とても学校に行けるような状態ではなくなり逃亡生活がスタートした。水波ちゃんからあーたとぼくが親しい仲だと報告されているはずだからあーたんは危険。というわけで沙世さんは現在あーたんの警護にまわっており、ぼくは水波ちゃんと二人でホテルを転々としていた。そんな中、吸血鬼やらUSNA軍やらと新たな問題も発生しこれからどうしましょうか、というのが今の状態なんだけど。

「取り合えず、四葉はなんとかなりそう。そのための仕込みは終わってるし」

「じゃあ、吸血鬼…パラサイトとUSNA軍はどうしますか？スルーする気はないみたいですよ」

「うん、パラサイトは単純に興味があるし、USNA軍はリーナが関係しているみたいだからね、放置はしないよ」

USNA軍にハッキングをした時、さすがにアンジー・シリウスが含まれているからか人事データはとても閲覧出来なかったがパラサイトに関する情報は得られた。USNA軍もそこまでパラサイトに

ついでには分かっていたいなかったらしくあまり有益な情報はなかったが、だからこそ興味が沸くというものだ。

「リーナって人のこと私、幼馴染みで指輪をプレゼントしたというこ
とくらいしか知らないんですが」

「あれ？そうだったけ。まあリーナは水波ちゃんと同じで家族だけど
…それ以上に恩人なんだ」

「恩人…ですか？」

きつとリーナがいなかったらぼくは何もかも分からないままどう
でも良い人生を過ごしていたかもしれない。心に沈殿した気持ちの
悪い感情を抱えたまま。



五歳の時。

シールズ家に来てからというものの何のやる気も起こらなかった。
何をやっても楽しくないし、何を食べても美味しくない。だから何も
やりたくなかった。寝て起きて寝て、なんで生きてるのかも分からな
いような生活だった。ただ胸の辺りが異常に苦しくて、時折冷たい涙
が流れてくる、何かの病気なのかもしれないと思った。このまま死ん
でしまうのかもしれないと思った。それも良いかもしれないと思っ
た。

「セツカ、また泣いてる」

笑顔が明るくてキラキラしてて星の輝きのようにも思える少女。
何が楽しいのか毎日毎日ぼくのところに来て来る彼女、アンジェ
リーナ・シールズはぼくの涙を見て、そう言った。

「おなか痛いのか？」

本当に心配そうに聞いてくる彼女にぼくは首を振った。別におな
かは痛くない。痛いのは胸だ。

「なんだか胸が苦しいんだ、それに涙が止まらない」

彼女はうーん、と唸りながら考え、何かを閃いたのかパアツと顔を
明るくしてぼくに抱きついた。

「きつと寂しいんだよ、家族と離れて。だから私がぎゅつとしてあげ
る。涙も拭いてあげる。貴方は一人じゃないのよって教えてあげる」

心に温かいものが流れ込んできて、沈殿した気持ちの悪い感情が流
されていく。

「セツカはきつと優しいのね、だってこんなに温かいもの」

「…人間は大体温かいよ」

「心が、よ。こうしてぎゅつとしてると分かるの」

「……リーナも温かいよ…ぼくよりずっと…温かい」

ぼくの言葉にリーナはキョトンとした。

「リーナ？それって私のこと？」

「うん、アンジェリーナだからリーナ。アンジーより可愛いと思うん
だ」

その時ぼくは自然と笑っていた。

アンジー・シリウスと白い悪夢

『きゃー私、怖い』

変態がふざけた口調でそう言った瞬間だった。

「なっ落とし穴!？」

地面が崩れ変態を囲んでいた皆が視界から消える。ふざけんじやないわよー!!というエリカの声が響く。

『ドツキリ大成功ー!じゃ、この娘は貰ってくよ』

ミアを抱え飛行魔法で空高くに飛び上がった変態をこのまま逃がすわけにはいかない。

そう思つて魔法を発動しようとしたのだが……その前に放出系の魔法によつて引き起こされた空中放電が変態を襲う。

『えっ!?!こんなの聞いてませんよー!』

何らかの障壁魔法でそれを防いだ変態は慌てた様子でミアを手放した。何せ今の魔法を放つたのは凍りついたままのミアなのだから。

そのまま飛んで逃げる変態をどうこうする暇はなかった。

「自爆!？」

氷の彫像は雷光に包まれ、ミアの体が炎を発する。乾いた紙のように一瞬で燃え尽き、そして―舞い散る灰の消え失せた何もない所から、魔法の雷が襲う。

何もないところから降り注いでいる電撃の雨は雷ではない。その速度は目で視認できる程度。ゴルフボールサイズの小型球電。それでも人を行動不能に至らしめるには十分、同時に十発も喰らえば死ん

でしまうだろう。

咄嗟に使った防壁の魔法で防ぎきれない分はプラズマで蹴散らす。いつの間にか穴から出てきていた四人も各々防いでいる。

電子が分子から分離され空中に収束する事情改変の兆候を読み取ることで、ランダムなポイントに生じているように見える攻撃に、辛うじて対処が間に合っているのだ。

しかしそれも達也や十文字克人が攻撃に対処できるようになるまでの話だ。余裕が出来たことでパラサイトについて話し合う。

「パラサイトは人間に取り憑いて、人間を変質させる。取り憑く相手に適合性があるらしいんだけど、宿主を求めるのは自己保存本能に等しいパラサイトの行動原理らしいわ」

最初、黙秘を決め込もうとしたけどそんな場合じゃないと思い直し話す。吸血鬼の正体に気がついていたことには驚いたが達也たちは例外だと思うことにする。こんな高校生が普通なわけがない。

「つまり、俺たちの誰かに取り憑こうとしているのか」

「多分」

「どうやって」

「知らないわ。ワタシが教えて欲しいくらいよ」

「……使えん」

「悪かったわね！」

パラサイトの攻撃をブロックしながら憎まれ口を叩く達也。本当に嫌な奴！

それにしても達也と十文字克人が確実にブロックできるようなってから結構経つのに攻撃が止まない。

無限に魔法を放つことは出来ないだろうがパラサイトのエネルギー代謝のシステムは全くの未知。エネルギーに限りがあるとしても、このまま五人の誰にも取り憑けないと判断して別の場所に移動されてしまうのは困る。

そう考えていると、突然慌てた様子で達也がCADを持っていない左手を突き出した。

それからは良く分からないままに事態が進行していき私に分かったのはどうやらパラサイトを逃がしてしまっただけらしいということだけだった。

「逃がしたか……まあいい。逃がしたとはいえ、相手も無傷ではあるまい。今回は被害が出なかっただけでよしとすべきだろう」

そろそろ援軍がくるが今日のところは撤退する。マクシミリアンの社員をフォローしなくちゃいけないし……ってそんな状況作つたの達也達じゃない！なんで私が……いや私の部下がやってくれるんだけど。

結局、エリカが私に斬り掛かろうとしてきて羽交い締めにされた、というハプニングはあったものの何故かそのまま帰らせてくれた。パラサイトと手を組んでいると誤解しているらしい彼らが、六体一という圧倒的優位で拘束もせずに逃がしてくれたのは達也が私の正体を既に分かっているからだろう。お前程度いつでも倒せる、と。そういう訳なんですか！本当に嫌な奴よね！

今日は金平糖をやけ食いしてやる！



「なんですかあれ！ピカッてしましたよ！」

いつものキャラが完全に崩れてしまっている水波が雪花に報告をする。

「水波ちゃんから話を聞くに自爆だったんだらうね。うーん、全く予想してなかったよ。自爆とかするんだね」

自分がこんなに慌てているというのに落ち着いている雪花に水波は段々とイライラし始めていた。

そもそも、水波は突然雪花に今チャンスだから突っ込んで！と言わ

れ渋々スーツに着替えて（スーツは新技術により一瞬で着脱可能）漁夫の利を狙うべく、ヤバイ高校生達の集団に突っ込んだのだ。『きゃー私、怖い』というのは本音だったりする。雪花からイタズラで学校中に仕掛けた落とし穴を使うと通信があっても不安だったのだ。そして任務成功間近で予想外の事態。あの魔法を防げたのは奇跡だときえ水波は思っていた。それを、まあそういうこともあるよね、といった感じで返されればイライラもする。

「雪花様が七草真由美とイチャついてる間に私が大変な目にあつたというのにそんな反応ですか、そうですか」

「いや別にイチャついてたわけじゃないよ!? 顔を出してただけ!」

「お兄ちゃん、私はご褒美を要求します」

「水波ちゃん、甘える時だけお兄ちゃんと呼ぶのはずるいと思うんだ。そしてぼくもそう何度も何度もお兄ちゃん呼び一つで落ちたりしないよーぼくだって馬鹿じゃないんだから」

「どうだ、と言いたげな顔でふんぞり返る雪花。」

水波は両手を胸の前で祈るように合わせ、涙目で下から覗き込むようにして言った。

「お兄ちゃん」

「お兄ちゃんどんな願いも叶えちゃう!」

雪花は結局馬鹿だった。

馬鹿は馬鹿でも妹馬鹿だが。

アンジー・シリウスとチョコレート

人生初とも言えるぐらい居心地の悪い査問会をヴァージニア・バランス大佐、USNA統合軍参謀本部情報内部監察局第一副局长、内部監察局のナンバーツのおかげでどうにか何事もなく乗り越えられた。ブリオネイクの使用も許可されたし。全くあの狒々オヤジ共、いつかぶっ飛ばしてやるわ！査問委員だかなんだか知らないけどやる事が汚いのよ！

機嫌が悪いのは査問委員たちのせいだけではない。日本で共に生活していたシルヴィが帰国命令を受領され本国に帰ってしまうからだ。合理的な理由があつてのことだし仕方のないことではあるがやるせない気持ちになる。

「リーナ、お寝坊さんな貴女を一人残して帰国するのは心苦しいのだから」

「寝過ごしたのはい昨日だけです！」

最後の別れであるし砕けた口調で良いと言ったらこれですよ。シルヴィは私のお母さんなんですか!?

「リーナは感染などしていません。私たちのシリウスは、デーモン魔物に寄生されるほど脆弱な存在ではありませんから」

「もちろんです。私はパラサイトなどに屈しません。今度接触する機会があったら、その時こそ焼き尽くしてやります」

「そうですね。だから早く任務を終えて本部に帰って来てください、総隊長殿」

瞳に笑みを残して敬礼するシルヴィに、私は自信満々の態度で答礼を返した。

その自信は強がりではなかった。

◆

七賢者とかいう奴等が機密扱いになっていた情報をどこぞのメディアに流したせいで私は比喻ではなく頭痛がした。マイクロブランクホール実験を強行したせいで次元の壁に穴が空きパラサイトを呼びよせてしまったことや吸血鬼の正体がパラサイトに憑依されたUSNA軍の魔法師であることなど、の情報だ。

学校になんて行ってる場合ではないのだが実戦しか出来ない私ではこの事態の沈静化には何の役にも立たない。バランス大佐からも「いつもどおり」と指示されている。サボることはできなかった。

そんな状態で過ごした学校生活はバレンタインデーを明日に控えているからか、チヨコの話で持ちきり。誰に渡すの？とかやっぱり司波君？とかそんな質問を何度もされた。なんだやっぱり司波君？つて！渡さないわよ！むしろ私が貰いたいくらいだわ！昔から私は貰う側、雪花から毎年貰えた手作りのチヨコレートが懐かしい。

そして放課後、生徒会室。

「光井さん、今日はもう上がってもらっていいですよ」

さつきから繰り返し鳴っているエラー音。その発生源であるほかを、どこか具合が悪いのかと気遣ったのだろう。生徒会長がその声を掛けた。

日本人特有なのか、いえいえ大丈夫です、無理しない方が、というような問答の末にはほのかは帰っていった。頬が赤かったし熱でもあったのだろう。

「ホノカ程ではないですけど、なんだかカイチヨーさんも元気ないですよね？」

「えっ？そ、そんなことはないですよ？」

初めて会ったとき生徒会長だと深雪に紹介されて驚きの声を上げ

てしまったのは少し前のこと。

生徒会長は落ち込んでしまい、周りがよいしょして立ち直らせるといふ一場面を謀らずも目撃してしまった。私の生徒会長のイメージが十文字克人みたいな感じだったから余計に驚いたというのもあるが何て言うか生徒会長感がない。ちんまぐ纏まっついていてクルクルの髪型がチャーミングな全体的に可愛い人だ。威厳的なものは微塵もない。

「僕も思っていました。なんだか悩み事とか心配事があるみたいに感じます」

「本当になんでもないですよ?」

ビクビクとしていて、とてもなんでもないようには見えないが本人が言いたくないことなら無理に聞く必要はない。今、この生徒会室にいるメンバーでそれ以上突っ込んで質問する程不躰な人間はいなかった。

学校から駅への帰り道。

私と深雪、達也の三人で並んで歩く。

「要するに、ホノカの調子が悪かったのは、タツヤにあげる明日のチョコレートが気になっていたから?」

「よく分かったわね、リーナ。チョコレートをあげるのは日本固有の習慣だと思っていたけど」

「そんなことないわよ。『バレンタインデーにチョコレート』は有名なジャパンカルチャーだもの。ステイツでも真似してる子は多いし、私も毎年貰ってたわ」

やっぱりチョコレートは貰うに限ると思う。わざわざあげたいと

思うような男子もいないし義理チョコも面倒くさい。それに私が個人的な贈り物をしたりしたら、色々問題が発生する。

「そうなの？人気者ね」

「人気者というならミュキの方が凄いいじゃない。ミュキは誰にあげるの？やっぱり本命はタツヤ？」

深雪が達也に本命チョコを渡すのは自明のこと、せいぜい惚気なさい！思いつきり弄ってあげるから！

「何を言ってるの、リーナ。お兄様とわたしは兄妹なのよ。実の兄を相手に本命チョコなんておかしいでしょう」

「……………」

二の句を継げないとはこの事ね……今日は帰りに金平糖を買っていこう。やけ食いしてなくなってしまったし。またやけ食いすることになるかもしれないし！

番外編 司波深雪の弟①

司波深雪が中学生の時、突然弟が出来た。生まれたというわけではなく親の再婚で出来たというわけでもなく単に今まで存在を知らなかっただけの半分とはいえ血の繋がった同じ年の弟である。

中学生の多感な時期それも実の母が亡くなってまだ一年しか経っていない中、父親から実は俺お前の母親と結婚する前から付き合ってた彼女がいて結婚したあとにも愛人関係が続けていました。息子もいます。そしてその愛人と結婚することになりました。息子は弟として可愛がってあげてね。というようにことを言われれば見る目も変わるというものだ。

深雪の敬愛する兄、司波達也からは半分とはいえ血の繋がった弟にまで親の責任を負わせるようなことはしない、ともっともなことを聞いてはいたもののそれをすぐに受け入れられるほど四葉とはいえ中学生というのは大人ではない。

故に初顔合わせの日、深雪は刺々しい雰囲気纏っており達也でさえ話しかけることに躊躇いを覚えるほどであった。が、それはすぐに霧散する。現れた『弟』が予想していたものとはあまりにも違いすぎたからである。ポカーンと口を開けて虚空を見つめふらふらとした足取りで歩いているその弟の容姿は義理の母となった小百合から直接、『息子』と紹介されても『弟』であると納得できるものではなかった。

深雪の目にはその弟がどう見ても女の子、つまりは『妹』にしか見えなかったのである。

服装は男物に見えるが女の子が着けていても違和感のない範囲に見える。未だ一言も発していないため声で判断することは出来ない。胸の膨らみは皆無。が中学生ということを考えればそれもおかしいことではない。

ちらつと兄を見てみる。いつも通りに見える。何か疑問に思っている様子はない。

深雪は意を決して直接尋ねた。

「小百合さんは彼を息子と言いましたがあの私には女の子に見えるのですが」

すると小百合は弟（仮）の頭に手を乗せて答える。

「これでも一応男よ。昔から女顔ではあつたけど成長してこんな美少女になるとは思つてなかつたわ」

「ちやうわー！美少女ちやうわー！」

突如抜けていた魂が戻つたかのように大声で否定した弟の声は中性的というより女の子寄り。良く見てみても喉仏なんてものはないように思える。尋ねてみても疑いは晴れない。

深雪は両親が帰宅し一人残された弟と兄とが談笑をしているのを眺めた。

名前は雪花。肩に掛かる程度にのばされた男にしては長い黒髪に大きな瞳。処女雪のような白い肌。男とは思えない華奢な体躯で自分よりも小さい。

兄との共通点は髪の色くらいだろうか。とはいえ黒髪というのは日本人にもっとも多い髪の色であり珍しいわけではない。考えを巡らせる内に気が付いたのは弟は自分と似ているのかもしれないということだ。

見た目もさることながら名前も同じ『雪』の字が入っている。そう思うと彼と血が繋がっているというのがより実感できた。

ところが彼が弟であるということにはより疑惑が深まった。自分と似ているのに男だなんて認めたくないという気持ちがあつたからだ。

深雪は観察する。じーつと雪花を見つめる。――何故か冷や汗を流している。さらに見つめる。――何やら顔が青い。体調が悪いのかと聞いてみるが「自分の未来について考えてただけなので大丈夫です

……体調は、ね」と意味不明の回答。深雪は混乱することとなる。

そして達也はそれを面白^{暖かい}そう^{目で}に見ていた。

番外編 司波深雪の弟②

雪花は生まれてこの方一度も学校へ行ったことがないらしい。それどころが外出することも殆どなかったというのだ。

初顔合わせから一週間。二度目の対面の時、今日初めてキャビネットに乗ったという話を聞いて達也の尋ねた「中学校は徒歩なのか？」という何気ない質問に対する答えがそれだった。

どうやら彼は四葉に狙われていたためUSNAに国外逃亡をしていたらしい。逃亡したのは5歳の時で以降先週までをUSNAで過ごしたのだという。当然、逃亡しているわけだから学校へは行かず殆どを家の敷地内で過ごした。だからなのかCADや魔法について達也と対等に話せる程の知識を有しており特にCADのハード面では達也を驚かせる程の独創性や技術を持っていた。トールスシルバーのシルバー、世界的魔工師である達也を驚かせる程のである。

深雪は雪花のことを心のどこかで何の苦労していないんだろうなと思っていたのかもしれない。何年も日本を離れ隠れ住んでいたという事実には驚きを隠せなかった。達也はといえば四葉に関わっている以上そういうこともあるかと納得している様子。むしろ狙われた程度で済んだならまだマシな部類だとさえ感じていた。

「高校はどうするんだ？」

「兄さん達と同じ一校にしようと思ってる」

雪花に四葉の血は流れていない。流れているのはサイオン量だけを取り柄の父親の血、知識はともかくとして技能は大丈夫なんだろうかと自分も入学が危ういと思っっている達也は疑問に思う。知識がどれだけ優れていても頭でつかちでは一校には入学できない。

まあその時がくれば分かることだ、と達也は気にしないことにする。弟のことばかり気にしておいて自分が落ちたら洒落にならない。

「今日は外食にしようか、雪花が一度もしたことがないというし」

そろそろ昼食時、深雪が仕度をしようとする。達也がそう提案した。深雪に達也の提案を断る理由はなく、雪花もまた大はしやぎで賛成した。

三人でファミリーストランに入る。雪花が一度入ってみたかったということで、ここにしたので。店員がお子様限定のサービスであるプチケーキを雪花に配膳し、雪花が本気で落ち込む、という事故があったものの楽しい食事となった。

雪花は意外にもきちんとしたテーブルマナーを学んでいたようで、生粋のお嬢様である深雪の目から見ても十分合格をあげられるレベルだ。まあファミリーストランでテーブルマナーの採点をされるようなことはまずないだろうが。

昼食をすませた後は三人で街を歩いた。雪花はキラキラと目を輝かせながらあっちへ行ったりこっちへ行ったりしており、達也の精霊の眼がなければまず間違はなく迷子になっていただろう。精霊の眼で弟の迷子を防止することになった達也は未来の自分が心配になる。苦勞するんだらうな、というのは確信に近い予感だった。

「えっ現金って使わないの？」

「日常で現金を使うことはそうそうないな。カードで済むだろ」

現代では現金の用途は限られておりマネーカードがその代わりを果たしている。

それは当たり前のことだ。知っていて当然、というより普通に生活をしていれば知らないわけがないのだ。

雪花は当然、普通の生活は送っていないかった。人生のほぼ全てを家の敷地内で過ごしているのだから。ゆえに知識には偏りがあり、子供でも知っているようなことを知らないかと思えば達也が感心するよ。うな知識を持っていたり、そんなこと知ってどうするとうようなどううでも良い雑学が豊富だったりする。百年前のサブカルチャーにも

やたらと詳しい。

これから一般常識を教えていくのは俺の役目なんだろうか、と達也は遠い目をした。さっきまで隣にいたはずの弟がいつの間にか数百メートルも離れていて、今時珍しいくらい露骨なナンパに引っ掛かっているというのだから仕方のないことだろう。もちろん？ナンパしているのは男だ。

達也はため息を吐いて雪花の救出に向かう。

達也の予感が確信に変わった瞬間だった。

番外編 司波深雪の弟③

「何だったんだろうねさっきの人。一緒にお茶しない？つて友達いないのかな？」

「……そうなんじゃないか」

呆れと面倒くささで適当な対応になる達也。今は厄介事を起こさせないために右手を達也、左手を深雪が繋いでいる。

「兄さん、兄さん、あの四角いのは何？」

「あれは――」

その後も街を探索しながら雪花の質問に答えていく。楽しそうに歩く雪花と若干お疲れ気味の達也、その横で深雪は少々不機嫌だった。

雪花は達也を兄さんと呼ぶ。いつの間にかそう呼ぶようになっていた。深雪としては達也が素晴らしい人間で兄としてこれ以上ないくらいの存在であるからそうなることは必然である、と思う。

しかし。

「ねえ雪花」

「何ですか？深雪さん」

雪花は達也を兄と呼ぶのに深雪を姉とは呼ばなかった。それどころが『知り合って間もない異性のクラスメイト』くらいの距離感なのだ。なんなら『ちよつと苦手な』が付くくらいの、だ。

ニツコリと笑顔を向けてみる。

ひっ、と明らかに怯えた声を出して深雪の手を離し達也の後ろに隠れる雪花。

「どうしてそんな大魔王でも見るような目で私を見てるんです!？」

深雪は涙目になりながらずっと我慢していた言葉を雪花に投げ掛けた。

たしかに当初、雪花にあまり良い気持ちは抱いていなかったかもしれない。でもそれは本当に最初だけ、雪花の姿を見るまでの話で、私たちはたしかに血が繋がっていて雪花は弟なんだ、と感じた今はむしろ可愛く思っている。猫ではないが撫でたりしてみたいとも。

だというのに、距離は縮まらない。なんだか避けられてるし、こちらから歩み寄ればそれだけ距離を空けられる。泣きたくもなる。

「だって怖いし」

達也の後ろから顔だけを出してそう言った雪花の顔は成る程、確かに怯えている。

「なっ何故です……お兄様！」

困った時のお兄様、とばかりに深雪は達也に雪花をなんとかしてくれるよう促した。

すぐるような眼差しと共に、涙を浮かべて擦り寄って来た深雪を前にして、達也はため息を吐く。

「雪花」

「うっ、なんか威圧感あるんだよ。氷の女王様的な」

「こっつ氷の女王様?! 私はそんなに偉そうな態度をした覚えはありませんっ！」

泣きそうな声で深雪は否定する。

が、そのせいで雪花はますます怯え再び達也の後ろに隠れてしまう。

「深雪、雪花はきつと深雪の凜とした雰囲気からそう言ったただけだろ

う。そう悪い方にだけ取ることはない」

達也の言葉に深雪は何かを思い付いたのか、少々お待ちを、と一声かけてどこかへと行ってしまおう。

「怒ってる、怒ってるよ……うー氷像にはなりたくないっ」

「……お前は深雪をなんだと思っているんだ」

兄さんシールド！なんて言いながら深雪を見送った雪花の呟きにツツコミをいれる達也。

何がそこまで雪花を怯えさせるのか、まだ会ったのも二回目だというのにこの怯えようは少々異常だ。やはり初日に勘違いを正しておくべきだったか、と達也は後悔する。

「お待たせいたしました」

十分もしないうちに帰ってきた深雪の手には紙袋。深雪は早速その中身を取り出した。

「……これでどうです！もう私を氷の女王様とは思わないでしょう！」

ネコミミだった。白いネコミミ。それが深雪の頭にくっついていてた。

無駄にリアルなそれは本物と大差なく毛の一本一本が作り込まれているのが分かる。ネコミミの付いたカチューシャであるとは思えない程だ。

可愛い。普段の深雪ならまずつけないようなものだが似合っている。

ただ、それは何か違うんじゃないか、と達也が危うく口に出しそうになったとき達也の後ろからヒョコツと顔が出てきた。その目は輝いており、先程までの怯えはない。

「これはプレゼントです」

深雪が雪花の頭にお揃いのネコミミカチューシャをつける。雪花は自分のネコミミをペタペタと触ると、おー！つと感嘆の声を上げた。

「すごい！本物のネコミミみたいだ！」

「ふふっ、面白いでしょう？」

「うん！ありがとうございます！」

機嫌良く笑っていた深雪の顔が固まった。

これは少し時間がかかりそうだと達也は頭を抑えて今日何度か目になるため息を吐いた。

アンジー・シリウスとメイド

不審者がいた。

サングラスにニット帽にマスク。いくら冬とはいえありえない枚数の重ね着をしているのだろう、もこもこに膨らんでいる。唯一露出している手が綺麗だし、靴も女の子物、だからたぶん女の子。深く被ったニット帽から三つ編みが飛び出している。

「……金平糖にこんなに種類があるとは……」

この店は金平糖専門店というわけではないが二十五種類以上もの金平糖が常時置かれている。達也から教えて貰ったがこの辺では一番品揃えが良いそうさ。

「……そもそも、なんで私が……」

なんだか不機嫌そうな不審者。

私があんまりじっと見ていたからか不審者がこちらに振り返った。

「あつごめんなさい、随分熱心を選んでたみたいだから」

「……いえ……それにしてもこの店暑いですね」

「……それは……そんな厚着してたら暑いわよ」

外は寒いけど店内は暖房も効いているし、暖かい。それをもこもこになるまで重ね着していれば暑いだろう。

「それより、貴女も金平糖好きなの？ここはこの辺では一番種類が多いから迷っちゃうのよね」

それで結局全部買ってしまうのだ。これでもスターズの総隊長。お金に困るようなことはない。ってこれでもって何よ私！

「好物というほどではありませんが、好きです。しゅじ……兄の好物なので散々食べさせられましたから」

「へーそのお兄さんとは話が合いそうね、それで何か迷ってるみたいだったけど?」

「ええ、実は金平糖を買ってくるよう頼まれたのですが…種類が多くて。どれを買うべきか、と」

私が日本に来て驚いたのは味の付いた金平糖が売っていることだった。メロン味とかキャラメル味とか。USAにはなかった。ただ色々な味があると飽きずに食べられるからつい沢山食べてしまうのだ。

日本でも味の付いた金平糖というのは珍しいらしくこの辺ではこしか売っていない。折角ならそこから選ぶべきだろう。

「味の付いた金平糖が良いんじゃない?メロンとかキャラメルとかイチゴとか。今だとチョコレート味が限定で売ってるみたいね。ほら明日バレンタインデーだし」

「そうですね、じゃあチョコレート味を買っていくことにします。一応他にもいくつか珍しいそうな奴も」

悩む必要あったの?というくらいぼんぼんカゴに金平糖を入れていく不審者改め女の子。

「そういえば自己紹介がまだだったわね、私はアンジェリーナ、リーナで良いわよ?」

「……………桜井水波です…リーナさん」

何故か動揺している。サングラス、ニット帽、マスクでその表情は分からないが私が自己紹介をした瞬間ビクツとしたように感じた。ただの気のせいかもしれないけど。

「ねえ、どうしてそんな厚着してるの？それにサングラスとかマスクとか…正直怪しいわよ?」

「気にしないでください、趣味なので」

「……………変わってるわね」

オシャレが趣味な女の子は大多数だろうけど、厚着するのが趣味の女の子なんてそうそういないだろう。変わってるといなか変人だ。こうして話していると普通どころが礼儀正しくて良い娘なのに。

「では、私はこれで。兄も待っていますし」

連絡先を交換して欲しいと頼まれて交換した。プロフィールを見るに中学生のようだ。確かに結構話し込んでいたのかそろそろ暗くなるし、お兄さんも待ちくたびれているだろう。

「家は近くなの？そろそろ暗くなるし送っていくわよ？最近物騒だし」

「ありがとうございます、でも近くなので大丈夫です」

吸血鬼を抜きにしても最近物騒だからと思ったのだが大丈夫だというので引き下がる。

「じゃあ、また今度」

「はい、楽しみにしています」

店の前で彼女、水波ちゃんと別れる。どういうわけか水波ちゃんにはちゃん付けをしたくなる魔力があるようで水波ちゃんと呼ぶことにした。

そんな水波ちゃんの歩いていった方向と私の住むマンションは逆方向。くるりと方向転換して歩き出そうとしたその時―銃声が聞こ

えた。

「水波ちゃん！」

背後を振り返ると対物障壁魔法を発動して銃弾を防いだと思われる水波ちゃん。

続いて二発目の銃声。魔法の気配はない。恐らく遠距離からの狙撃。スナイパーがどこかに潜んでいるのだ。

私が考えている内に水波ちゃんは走り出す。その方向には明らかに悪そうな黒服の男たち。

「ああーもう！何がどうなってるの！」

状況は分からないけど今は水波ちゃんを助けないと！CADを取り出して黒服達を何人か魔法で気絶させる。

「リーナさん、私は大丈夫ですから逃げてください。私から離れればあの人達は追ってきません」

「それでハイそうですか、ってなるわけないでしょ」

ぞろぞろと現れた黒服達から走って逃げながら会話をする。するといつの間にか水波ちゃんがニット帽、サングラス、マスクを外し、もこもこ厚着からメイド服になっていた。えっいつ着替えたの!?!というかメイド服!?!

「水波ちゃんいつ着替えたの!?!」

「早着替えはメイドの嗜みですよ」

「…水波ちゃんメイドさんだったの? だからメイド服?」

「いえメイド服はただの趣味です」

やっぱり変わってるよこの娘！キリツとした顔で趣味って言われ

ても困るわよ！というかそもそもこの黒服は何!?

今日知り合った女の子、水波ちゃんは変装？を止めたら美少女で、メイドさんで、突然狙撃され、謎の黒服に追われていました。

本当に何がどうなっているの!?

雪花暴走中

リーナが水波と少々デンジャラスな理由で街を走り回っているころ。

中条あずさはいつもより少し遅めに帰宅の路についていた。学校の帰りに寄り道をしていたからだ。明日はバレンタインデー、気合いを入れてチョココレートを作るため材料を買い込んだのである。

「……作っても渡す相手がいないかもしれませんか……」

どういうわけかあずさの婚約者、雪花は最近学校に来ていなかった。それとなく、雪花の兄と姉に何かあったのかと聞いてみれば、苦笑い気味に旅に出た、と言われた。意味が分からなかった。

首から下げていた指輪を服から引つ張り出して握りしめる。雪花から預かった指輪である。

「……何があったんでしようか」

このままでは退学になってしまいかもしれない。雪花は1学期間を丸々サボっており本来なら退学も十分あり得た。それがなかったのは単に学校側がそれどころではなかったというのもあるが九校戦で活躍したことが大きいだろう。その活躍、そして七草真由美の口添えによつて雪花はなんとか退学を免れた。しかし、また何週間も続けて休むような事態になれば今度こそ退学、ということになりえるのだ。

「……明日はきつと来てくれます！だから私は精一杯チョココレートを作りましたよ！」

ネガティブな思考から抜け出すために拳をぎゅつと胸の前で握り気持ちを声に出す。

すると少しだけ頭の中がすっきりした。だから気がついた。目の前に人がいたのだ。それも二人だ。

顔が赤くなる。

それほど距離は離れていない。今の一人言は確実に聞こえていただろう。見ず知らずの他人に言い訳をしても仕方がないしここは素早く立ち去ろう。そう決めたあずさは歩幅を精一杯大きくして早歩きでその二人の前を通り過ぎようとして――

「中条あずさ、ですね？」

――声をかけられた。

何かの仮装でなければ壊滅的なセンスであろうド派手な格好をし眼帯に長い巻き毛の少女。その隣には全身真っ黒、ミニのジャンパースカート、レギンス、タートルネックの長袖シャツのせいで肌が露出しているのは顔と手だけだが、胸も確かに小さく膨らんでおり少女であろう。

もちろんあずさにこんな知り合いはいなかった。だが相手は自分を知っているようだ。

二人の姿が明らかに年下の女の子であったことも災いしたのでらう。あずさはほとんど警戒していなかった。

「誘拐されちゃってくれます？」

だから眼帯の女の子の言葉と共に何人もの黒服が現れたとき、その場にペタリと座り込むことしか出来なかった。あずさとして優秀な魔法師の卵、抵抗するくらいのことには出来たはずなのに。

「大丈夫、傷は付けませんよ。ただ少し眠ってもらっただけです」

無意識に指輪をぎゅっと握りしめる。その行為に何か意味を見いだしていたわけではなかった。願いを込めたわけでもなかった。た

だ恐怖の中で無意識に行った動作。

「君たちさー、この世には絶対やっちゃいけないことってのがあ
るわけ」

けれど彼は現れた。

久しぶりに見る婚約者。小さくて可愛い、女の子のような彼、雪花は
—無表情だった。

喜怒哀楽の全てが抜け落ちて、まるで機械のように思えるそんな表
情。雪花の容姿も相まって本物の人形のようにうだ。

「それやっちゃったらさー死ぬしかないよね？」

二人の少女は迷わず『逃げ』に徹した。

雪花の実力は分かっている。キレたら何をするか分からないとい
うことも。故に撤退のための手段は用意していた。婚約者を狙えば
雪花が出てくる可能性は大いにあったのだから。ただ一つ彼女たち
に誤算があったとするならば—

「壁!?!魔法っ!?!」

—雪花にとって二人は既にまな板の上の魚も同然だったというこ
とだ。

「一つ、あーたんを怖がらせた」

眼帯の少女が吹き飛び、見えない壁に叩きつけられる。

「二つ、あーたんを泣かせた」

もう一人の少女も吹き飛ばされ、何度も地面を跳ねた後、壁にぶつ

かつて止まる。

「三つ、ぼくを怒らせた」

二人の少女を雷撃が襲う。情け容赦のない雷撃は辛うじて意識のあつた二人を簡単に気絶させた。

「それがお前らの過ちだ——死んで償え、ゴミ共が」

雪花は二人にもう一度、銃口を向けた。
二人の命を奪うべく。

雪花説教中

「駄目です!!」

引き金を引こうとした雪花の動きを止めたのはあずさの声だった。

「分かってるよあーたん、こいつらダメダメだよね」

雪花の無表情の中に明確な殺意があることにあずさは気がついた。だから叫んだ。それはやってはいけないことだから。それをさせたくはないから。

なのに雪花は止まらない。止められない。

首に掛けたチェーンを手繰り、襟元から路線ロケットを引っ張り出す。それをチェーンから引き抜き左手で握り込んだ。

このロケットはCADの基幹部分のみを組み込んだ、ただ一つ魔法の為の術式補助デバイス。一種類の起動式を記録し、出力する、ただそれだけの機能しか持たないが故にあらゆるシステムが省略され小型化されたものだ。

ロケットへサイオンを注ぎ込む。

情動干渉魔法『梓弓』。

澄んだ弦の音が雪花の動きを止める。

その音は幻聴だ。無意識の中で響く心の音。

「……落ち着きましたか?」

「……うん……ごめん」

雪花の顔に表情が戻った。CADをしまつて申し訳なさそうな顔をしている。

『殺すならあずさに見えないところで殺るべきだった』、と。冷静になった雪花は考えて落ち込んだ。

「じゃあ正座してください」

「へ？」

「そこに正座してください」

あずさの言っている意味が分からない。言葉の意味が分からないのではなく、ここでそれをする意味が分からないのだ。

「いやあーたん、今そんな場合じゃなくて…これから事後処理とかあってね、ぼく忙しいしかなーなんて」

「雪花くん？」

いつものあずさにはない気迫を感じて雪花は無意識に早口になる。

「ほら、この人達いつまでも転がしておくわけにいかないでしょ？逃げた黒服の奴等も懲らしめないとだし」

実際のところ、もう黒服達は紗世によって処理されている。雪花がどうこうする必要はないのだが今はこの場から逃れるために言い訳が必要だった。

「雪花くん？」

「あれ、あーたんがNPCみたいになってる？はっ恐怖でおかしくなってしまったのか！これは大変だ、今すぐ病院に！いや、ぼく医者を呼んでくる！」

オチャメにこの場を去ろうとした雪花の肩に小さい手が置かれる。ギギギッと錆びついたロボットのよう後ろを振り向くと――

「雪花・く・ん？」

「見てこの完璧な正座！慣れてるからね正座！」

――笑顔のあずさがいた。雪花はその笑顔に姉の姿を見た気がした。

瞬間、自然と正座していた。

「やり過ぎです」

「でも、あいつらあーたん誘拐しようとしたし」

「命を奪うのはやり過ぎです。雪花くんが私のために怒ってくれるのは嬉しいですが、そのせいで人の命を奪うようなことはしてほしくないです」

今、あずさが泣いているのは自分のせい、自分が軽率だったから。

「そもそも、どうして学校に来ないんですか!? さっきの人達が関係しているのでしょうか? 私にも:私にも言って欲しかったです! 役に立たなくても何も出来なくても知っていたかったです! それに心配します。心配で心配で、毎日:そわそわしてしまいました」

もしかしたら自分は何も分かっていなかったかもしれない。あずさのことを考えているようで、自分のことしか考えていなかったのかもしれない。結局は自己満足だったのかもしれない。

「ごめん:あーたん」

「分かれば良いです」

頭の上に置かれた小さな手は温かくて。

あずさは満面の笑みだった。

「……明日は学校に来れるんですか?」

後の処理を沙世と協力者達に任せ近くだったらしいあずさの家まで無言で歩いた。そして家の前まで来たところであずさは呟くように言った。

「……行くよ、必ず行く」

明日からは問題なく学校にいける。それは嘘ではなかった。あずさが狙われたのは敵にとつて今日が最後のチャンスだったからなのだから。しかし、雪花はあずさに言われるまでは学校のことなどすっかり忘れていたりする。あずさの一声がなければ明日は登校しなかった可能性が高い。

「なら、また明日です」

「うん、また明日」

小さく手を振って玄関から家に入っていくあずさを同じように手を振りながら見送った雪花は小さく呟いた。

「…なんかあーたん甘い匂いがしたなー」

雪花は明日がバレンタインデーであることをすっかり忘れていた。だから勿論知るわけもない。

明日、とんでもない目にあうことなど。

四葉真夜の目的と第三の可能性

「水波ちゃんただいまー…ってどうしたの？」

雪花が宿泊先のホテルの部屋へ戻ると、そこにはツインテールにした水波がいた。

「雪花様はこういうのが好みみたいなので」

くるっと回転してどうですか、とばかりにポーズを取る水波。心なし照れている様でほんのり顔が赤い。

「うん、可愛いよ。でも水波ちゃんはやっぱり三つ編みが一番可愛いと思うな」

「…そうですか」

「顔真つ赤だよ〜？」

耳まで真つ赤にした水波はからかうような口調でそれを指摘した雪花の腹を無言で殴った。女の子とはいえ過酷な環境で訓練を積んだ女の子の拳だ。貧弱を絵に描いたような紙装甲である雪花はぬぼっ!?!という謎言語を発しながらその場で蹲った。涙目になって呻き声を上げる雪花を無視して水波は髪を三つ編みにしていく。雪花がどうにか立ち直った時にはいつも通りの水波が澄ました顔でしれっとしていた。咎めるような視線を向けてもあまりこっち見ないでください、セクハラは犯罪ですよ、と言うような無言の圧力をかけられ雪花はこの件をなかったことにした。こうして一つの事件は握りつぶされたのである。

「それで、水波ちゃんの方は大丈夫だった？絶対にバレない自信がある、とか言ってたけど」

「…やはり四葉は優秀ですね、変装は見破られ襲撃されました。まあ

「返り討ちにしてやりましたが」

「そうなんだ、無事で良かったよ。でも一人でやろうとしないで少しでも無理そうならばよくか沙世さんに連絡してね」

「分かっています」

実際の所、水波を襲撃した四葉の部隊を撤退に追い込んだのはリーナだった。水波が魔法を使えることを見ていたリーナであったが水波にどうにも抜けている所があると思っていたリーナはついつい水波を守る形で襲撃者を撃退してしまったのだ。スターズの総隊長であることを隠している身としては実戦に慣れていることを悟られるわけにはいかなかったにも関わらずだ。とうにその正体を数人に看破されているとしても、正体を知られることは避けるべきことであり、軍人としてはあまり褒められた行為ではなかった。

「そうそう、明日からは学校に行くからちやんと起こしてね。水波ちゃんも登校して大丈夫だから。手続きは終わってると思うけど一応職員室で確認はしておいて」

「分かりました。でも、本当にこれで襲撃が無くなるんですか？四葉があそこまでした私たちを見逃すとは思えませんが」

「リスクとリターンの計算が出来ないほど四葉真夜は馬鹿じゃないし、アメも用意した。それに四葉真夜がぼくらを追い回していたのは何か意味があったんだと思うよ。そもそもぼくを抹殺するために刺客を送るというのならもつと優秀な奴はいたはずだし、兄さんだっただけでいたんだ。恐らく四葉真夜の目的は別にある。ぼくらが逃げ回ることでも何らかの利益を得ることができるんだと思うよ。まあそれが何なのかは分からないけどね」

水波は考える。

四葉がどんな利益を得るのか、を。

雪花という強大な力を持つ魔法師を敵に回してまで得られる利益。

本来ならば雪花は味方につけるべきなのだ。四葉真夜ならそうするはず。それをしなかった、いや出来なかったのかもしれない。雪花は過剰なまでに四葉真夜という存在を嫌悪していた。何か理由があるのかもしれないし何も理由はないのかもしれない。それを水波は知らないし知りたいたとも思わなかった。重要なのは雪花が四葉に付く可能性は限りなく低いということ。

「久しぶりの学校か…あーたんがいなかったら間違はなくサボってたね、まああんまり行かないと退学になっちゃうんだけど。そういえばしーちゃんと交換で留学生が来てるんだっけ。怖くて兄さん姉さんと何の連絡も取り合っていないからまだどんな人なのか分からないんだよ。ねえ水波ちゃんはどんな人だと思う？」

学校。中条あずさ。退学。留学生。兄、姉。

水波の中で全てが繋がった。

「金平糖の好きな金髪ツインテールじゃないですか？」

「なんでそんな具体的なのさ。まあそれだったら話も合うし仲良く出来そうだけど」

雪花が四葉に付く可能性は限りなく低い。しかしそれは四葉真夜が当主だからだ。次の当主はまず間違はなく司波深雪、そうすれば十中八九雪花は四葉の味方に付く。

しかしそれが覆る可能性が一つだけある。

『リーナは水波ちゃんと同じで家族だけど…それ以上に恩人なんだ』

アンジェリーナ・クドウ・シールズ。

彼女に付き四葉の敵、つまり九島に付く可能性。

四葉真夜は雪花を彼女に会わせたくなかったのだ。だから自分と雪花を追い回した。雪花を学校に行かせないために。四葉真夜の考

えではそのまま退学させることを目的にしていたはずだ。二人を会わせないためにはそれが最善。しかしその必要がなくなった。

中条あずさ。

雪花の婚約者。彼女の存在によって雪花とリーナが恋仲となり四葉の敵に回ることはない、と四葉真夜は判断したのだろう。中条あずさは十指族の家系ではなく司波兄妹との仲も悪いわけではない。特異な魔法を持ち魔法師としても優秀だ。彼女が雪花の婚約者であることは都合が良かった。だから最後の襲撃になるであろう今日、これまで放っておいたあずさを襲わせた。雪花とあずさの仲を確かめるために。

四葉真夜の目的は雪花を敵に回さないこと。

だから雪花の両親や友人を狙うようなことはせず程ほどに襲撃を繰り返した。学校に行かせないために、二人を会わせないようにするために。つまり四葉真夜の狙いは利益を得ることではなく不利益を無くすこと。そしてその目的はほぼ達成されている。

「あーたんと久しぶりにイチャイチャしてやる！今日はお怒り気味で仲良く出来なかったからね」

「そうですか」

雪花とリーナが結ばれないこと。それが四葉真夜の目的のために必要だった。

「じゃあ今夜は私の抱き枕になってください、お兄ちゃん」

「じゃあ、の意味が分からないよ!?!」

なら、その相手は中条あずさでなくても良いはずだ。

リーナでもあずさでもない第三の可能性があっても良いはずなのだ。

「好きですよ、お兄ちゃん」

「今日は寒いから仕方ないよね！二人で寝ても！」

水波はその日、いつもより強く雪花を抱き締めた。

バレンタインデーとC組

キャビネットには時刻表がなくその性質上渋滞は発生しないので到着が大幅に遅れるということはないが、軌道内には法定制限速度が無いので早く到着する分にはかなりの時間差が生じる。

「やーやー、久しぶりじゃないかお兄様とお姉様！」

そんなわけで十五分程駅で待っていると兄さんと姉さんが現れた。久しぶりに見たがやっぱり兄妹の距離ではない。恋人の距離である。むしろぼくとあーたんより近い。

「……当主の下着をばらまいて四葉から追われるような弟を持った覚えはないな」

「それは誤解だよ！あれは事故だったんだ！」

久しぶりに会ったというのに兄さんは微塵も優しくなく。というかなんでも良いところだけが伝わっているんだ。ぼくが四葉を半壊させたことは伝わっていないみたいだし。

「連絡の一つもない、というのは薄情なのではないかしら？」

「あああ朝だからかな！寒い！極寒だよ！」

「深雪やるなら後にしてくれ。今は雪花に聞きたいことがある」

後でやられるんですね！逃げたい！けど兄さんに右手、姉さんに左手を掴まれたぼくに逃げ場なんてなかった。いやそもそも説明するつもりで待ち伏せしたんですけどね！

「実際何があったんだ？俺の所には情報が回ってこなくてな」

「詳しいことは放課後に家で話すけど、一言で言うとうー四葉半壊させちった」

「……深雪、もういいぞ」

ゆらゆらと迫ってくる姉さん。あかん。これは長くなる奴だよ。

「おはようございます、達也さん」

姉さんの説教を止めてくれたのはほののんだった。彼女の登場が姉さんにブレーキをかけてくれたのだ。

マジ女神！ほののんマジ女神！

そんなほののんのすぐ後に来たツツキーは何やらそわそわしており落ち着かない様子。

瞬間、ぼくは察した。

―トイレに行きたいんだ、と。

兄さんとぼくがいるこの場でトイレに行きたいとは言いつらい。エーちゃん辺りだと堂々とトイレに行けそうだが相手はツツキーだ。エーちゃんとは女子力が違う。

「美月、貴女、制服に何をつけているの？」

「えっ？」

「いらつしやい。とってあげるから。お兄様、申し訳ありませんが先に行ってください。ほのかも先に行ってください？」

「ああ、分かった」

一生懸命首を捻り、肩越しに背中を見ようとしているがツツキーの背には何もついていない。これは姉さんのフォローだ。このままトイレに連れ出すつもりなのだろう。

何故だかギクシャクした足取りで兄さんの背中に続き歩き出したほののんを不思議に思っていると後ろから襟首を掴まれた。

「何してるの、貴方も行くのよ」



「バレンタインデー？」

「そうよ、そのためにお兄様とほのかを二人にしたの」

「助かりました、凄く居心地が悪かったので」

どうやらツツキーがそわそわしていたのはトイレに行きたかったからではなくほののが出していたらしい邪魔なんだよオーラにやられていただけだったようだ。

それにしてもバレンタインデー。おかしいなー朝、水波ちゃんからは何も貰えなかったぞー。こう妹からの義理チョコ的なものがあったても良いと思うんだ。うん、きつと放課後にあるよね！そうだよね！

姉さんとツツキーと別れ、一人、C組に向かう。

すぐく久しぶりの教室だがどうせぼくは空気みたいなものだ。『幻の古葉』なんて呼ばれてぼつちを貫いている。

「えーつと…新しいタイプのいじめかな？」

山だ。

机の上に山があった。正確にはチョココの山だ。

「クラス全員が一個ずつ雪花くんチョコレート。しばらく来てなかったから無駄にならなくて良かったよ」

隣の席の女子…えーつと…うん、その人が教えてくれたが良く意味が分からなかった。クラス全員からって男子からもだよね？それ違くない？何か違くない？

「雪花くん性別は関係ないよ。可愛いから愛でる、常識でしょ」

いじめだった。やっぱり新しいタイプのいじめだった。ぼくは今最新のいじめにあっているのだ。久しぶりに来てみれば散々である。

「はい、あーん」

「あつずるーい！私もやる！」

「私も私も！」

人形のように隣の席の女の子の膝に乗せられ口へチョコを運ばれる。あーんの声に合わせて口を開きチョコを食べる。

「ただ食べてるだけで可愛い！」

「あつ今の苦かったんだ！涙目になってる！可愛い！」

「ちよつと男子！ビターは駄目って言ったじゃん！雪花たんは苦いの駄目なんだから！可愛いかったから許すけど！もつと食べさせるけど！」

女の子怖い。

ぼくは黙ってチョコを食べ続けた。

アンジー・シリウスとバレンタインデー

『私は妹で満足する気はありませんが……貴女はどうでしょう？』

水波ちゃんを襲撃した謎の集団を追っ払い、『あれはただのストーリーですね、好きすぎて殺したいとかそういう類いの奴です』という明らかに嘘な今考えたみたいな説明をドヤ顔でされた後、水波ちゃんが私に言った言葉だった。正直なところ意味が分からなかったがその言葉の意味を知る前に水波ちゃんは姿を消した。気にするような事ではないのかもしれない。でも昨日からずっと頭の中をちらついている。まるでその問いの答えを出さずには前に進めないかのよう

に。

「ねえねえ、リーナは誰にチョコあげるの？」

「やっぱり司波君？」

とはいえ今日はゆっくり考えられそうにない。悪気はないのだろうけど何度も何度も同じような質問を繰り返されれば煩わしくもなる。そもそも私は生まれてこの方チョコをあげたことなんて一度も……いや一度だけあった。毎年、毎年、雪花から貰うばかりでは女子的にあれなのでは？と思いついにか手作りのチョコをあげたことがある。雪花はチョコを全部食べた後、『うん、その、個性的なチョコだったよ』と絶賛したものだ。けどその後に『ぼくは貰うよりリーナがチョコを食べて笑顔になってくれた方が嬉しいな』と言ってくれたからそれ以来食べる専門となったのである。

「あら、リーナ。いつもの場所が塞がっていたの？」

「そういう訳じゃないけど」

次の授業は体育、短い休み時間の中に体操服に着替えなくてはならない。

いつもなら入り口に近い場所のロッカーを使うのだが、今日は深雪のいる右の壁際にやってきた。チヨコのことで色々言われるのが嫌になったからだ。

「みんな気になるのよ。リーナは可愛いから」

「じゃあ何でミュキは質問攻めに遭わない……のよ」

深雪が制服のワンピースを開けて右肩を抜こうとした瞬間、その特に何ということはないその仕草が私の目を釘付けにして舌の回転を滞らせた。

「さあ？色気が無いからじゃないかしら」

私が張り合うように制服のワンピースを勢いよく脱ぐと深雪は羨ましいと言いながらウエストのくびれをさすってきた。無邪気な触り方、同性愛的意味合いはないのだろう。だけど顔が赤くなるのを止められない。私も触ってやろうと手を伸ばすも躊躇してしまう。なんだ私は、ちよつと意識しちやってるの？たしかに深雪は綺麗だけど私は女、同性なのよ、あつても雪花も女の子みたいな感じだったし、もしかして私ってそういう趣味だったの？えっ衝撃の事実発覚？

私の思考がおかしな方向に飛んでいきそうなところでガタン、という大きな音がして現実に戻ってきた。そこではほのかが腰を抜かし掛けてロッカーにすがりついていた。辺りを見回せばクラスメイトたちが顔を赤くして顔を背ける。どうやら私たちは注目を集めていたようだ。

「……早く着替えてしましましょうか」

「ええ」

丁度同じことを考えていた私は二つ返事で頷いた。

◆
放課後。

浮わついた空気が一気に盛り上がった校内。私のクラスも例外ではなく絡まれる前にさっさと生徒会室へ避難してきたわけだけだ。

「はい、これチョコー！」

ドンツという重い音と共にテーブルへ置かれたのはお弁当箱ほどもある厚紙の化粧箱いっぱい詰められた手作りと思われる粒チョコレート。

生徒会室へ押し掛けてきた風紀委員長、千代田花音から生徒会の会計、五十里啓へのプレゼントだ。その場で食べるよう笑顔で圧力を掛けられ苦笑いしている。若干汗をかいているように見えるのは気のせいだろう。

「どこもかしこもチョコ、チョコ、チョコ…これが日本のバレンタインデーなのね…あれ？…そういえばほのかとカイチョーは？」

「ほのかは五十里先輩の代理で準備棟へ行つたわよ。会長は何やら私用があるとかで、かなり挙動不審というか様子がおかしかったから…たぶん」

深雪は最後まで言わなかったけど、今日という日に挙動不審で私用だというのなら答えは一つしかない。

「カイチョーにもそういう人いたんだ。なんか意外」

「ちよつと失礼かもしれないけど、私もよ。お相手の想像がつかないもの」

会長は見た目のせいもあるのかもしれないけど恋愛には疎そうだった。かくいう私もそう経験があるわけではない、というか皆無な

のだけど。

「私の弟なら知っているかもしれないわね、話が合うみたいで仲が良いのよ」

「不登校の?」

「ええ、今日から復帰しているはずだから帰りに紹介するわ」

司波兄妹の弟。一応弟がいるということは事前に知っていたが詳しいことは知らない。情報部からの資料にも名前すらなかったから特に重要ではないのだろう。達也が弟のことを話題に出すと深雪が怒るから、とあまり話題に出ることのなかった彼だけど、どうやら深雪と仲直りできたらしい。

その後も会長のお相手をあれこれ予想していると会長が真っ赤な顔して生徒会室に入ってきた。いや駆け込んで来たと言うべきだろう。

私と深雪は目を合わせて頷く。この状況で聞かないのはありえないだろう。

「チョコレートは上手く渡せましたか?」

「はひ!?! なんな何のことでしょうか!?!」

私の質問に飛び上がって否定する会長。これ程分かりやすい人間も珍しい。

「お相手は何方でしょう?よろしければ教えていただいても?」

「だ、だだ駄目ですよ! 司波さんは特に駄目です!」

駄目だと言っている時点でチョコを渡したこと自体は認めたも同然なのだが、恐らく会長は気がついていないだろう。さすがにこれ以上聞くのは可哀想だ。今にも爆発してしまいそうなほど顔を真っ赤

にして目をグルグル回しているのだ、小さな子供を泣かせるみたいな罪悪感がある。

「えーつと…何があつたんですか？」

ほのかが生徒会室へ戻ってくる頃には、ぐったりした五十里先輩、ニヤニヤと温かい目で会長を眺めつつ仕事をする私と深雪、エラーを連発しながらあわあわと仕事をする真つ赤な会長、という状況が出来上がっていた。

「バレンタインデーテロってところかしらね」

「えっ？えっ？」

キヨロキヨロ生徒会室を見回して混乱しているほのかの姿に私は笑いを堪えきれなかった。

苦味と甘味と妹の思惑

「うう嫌いだ…もう絶対口聞かない！寄るな触るな！」

「随分と嫌われましたね、七草先輩」

放課後、クラスで散々な目にあつた雪花は校内をさ迷つていた。というよりクラスメイトから逃げていた。

そんなわけで雪花はカフェテリアの片隅、パーティションで仕切られた簡易なミーティングスペースが並ぶエリアに来たのだ。人気が高く、事実上、一科の三年生御用達となつており下級生は三年生が一緒でないと中々足を向けられない場所、クラスメイトから逃げるのに最適だった。

とはいえ、中々足を向けられない場所、というのは雪花も同じこと。彼がここに入り込めたのは知り合いの姿を見つけたからである。

七草真由美と兄の司波達也。

何やら忘れ物を取りに戻つてきたという二人に笑顔で近づいていった雪花はそこでとんでもないものを食べさせられる。

カカオ95%、糖類0%のチョコレート、それもエスプレッソパウダーをこれでもかとふりかけた奴だ。

「たっ達也くん！どうしたら良いと思う？」

真由美としてはちよつとしたイタズラのつもりだった。二回連続で成功しているのだ、雪花もきつと良いリアクションを取ってくれるに違いない。その程度の考え。

結果、雪花にとんでもなく嫌われた。

「どうしようも無いでしょう。雪花は苦いものが苦手でコーヒーすらまともに飲めませんからね。あんなものを食べさせられれば…」

「どうして先に教えてくれなかったのよ！」

真由美が焦るのも無理はない。雪花の蔑むような視線だけではなく、周囲からもそれと同じような視線を浴びせられているのだ。八つ当たりの一つもしたくなる。

「もう嫌だ…バレンタインデー嫌い、七草真由美嫌い」

ふらふらと立ち上がった雪花がゆらゆらと立ち去っていくのを真由美と達也はただ黙って見送った。

それくらい雪花の状態はヤバかったのである。

「バレンタインデー最高！」

だが数十分と経たずに雪花のテンションは最大まで上がっていた。婚約者である中条あずさから手作りチョコレートを貰ったからである。

「大きいですよ、死にそうな顔して歩いていたら何があったのかと心配していたのですが大丈夫そうですね」

「そんなのあーたんのチョコで回復したよ！やっぱりチョコは甘くないとー！」

小さめのチョコが六つ、化粧箱に入っていたがそれを次々と口に放り込んでいく。

そして最後の一つを食べようとしたとき、それを小さな手が横からかつさらった。

「あーん」

顔を真っ赤にしてチョコを差し出してくるあずさに雪花は笑顔で口を開いた。

「おいしいですか?」

「とつても」

雪花がチョコを全部食べたことで我に返ったのか自分のやったことを思いだし顔を真っ赤にしたあずさは脱兎の如く去っていく。

「あれ?これあーたんの携帯?」

慌てすぎているのだろう。あずさは自分が携帯を落としたことに気がつかなかった。雪花が携帯に気がついた頃にはもうあずさの姿はない。

「生徒会室つてどつちだっけ?」

放課後、達也と深雪の家へ行くことを約束していた雪花は結局二人の仕事が終わるまで校内で待つ予定だった。生徒会室まで届けにくいことは別に苦ではない。

例えば良く場所が分からなくても。



雪花が学校でラブコメを繰り広げているころ、水波は一足先に家に帰っていた。四葉からの襲撃の心配がなくなり、昨日から元の家に戻ってきていたのだ。その際雪花が今までにないくらい怒られたりしたものの水波は受け入れられこうして今日もこの家に帰ってきた。両手に合わせて四つの紙袋を持って。

中身は勿論チョコレートだ。女の子同士、義理チョコというやつだろう、と水波は信じることにした。例えばその中に明らかに力の入りすぎた手作りチョコがあったり、可愛らしい便箋の手紙が入っていたりしたとしてもだ。

水波はチョコの入った紙袋をテーブルの上に置いてエプロンを装

備。チョコレート作りを開始した。

雪花は司波兄妹宅で事情聴取されぐったりした状態で帰ってくるだろう。そこにおいしいチョコレート。水波はこの作戦をより効果的なものにするためチョコを作る素振りを一切見せていない。ツンデレの原理である。

ゆえにこの時間、雪花が帰ってくるまでにチョコを完成させなくてはならないのだ。

「さて、やりましようか」

水波の戦いが始まる。

疑惑と幻覚と作戦と

生徒会の仕事も一段落し、雑談を交えつつ帰り支度をする。話題は勿論バレンタインデー。自分が聞かれるのは嫌だが人の話を聞くのは楽しい。成る程、クラスメイトが散々私に聞いてくるのも分かるというものだ。

「あんまりいじめちゃ駄目だよ?」

私と深雪で会長を質問攻めしていると今期生徒会唯一の男子メンバーである五十里会計が微笑みながら止めに入った。

「でも気になりませんか? 私も興味あります」

今日はやたらと機嫌が良くテンションの高いほのかも目をキラキラとさせている。

「うう、もう私のことはいいでしよう。ほら、リーナさんとかどうですか?」

話題の矛先を私に向けようとしているようだが無駄である。なんせ私は誰にもチョコを渡していないし渡す予定もない。チョコは貰う専門なのである。

「私は昔から貰う専門なんですよ、チョコは食べるに限ります」

それを口にしてみれば皆微妙な顔をしている。何かしら、その顔は!?

「貴女からのチョコを心待ちにしている男子も多そうなものだけど……別に手作りでなくても良いのだし」

「それは私にチョコレートは作れないと言っているのかしら！前に一度だけあげたことがあるけど大絶賛だったわよ！個性的なチョコだって！」

何故か皆さらに微妙な顔になる。五十里会計なんて苦笑いだ。

「何よ？」

「あのね、リーナ。個性的なつてそれ美味しくなかつたつてことなんじゃないの？」

「そんなわけないじゃない」

全くなんてことを言うんだか。

そもそもチョコレートなんて溶かして固めるだけのおてがる料理じゃない。まあそれだけじゃつまらないから色々とアレンジは加えたけど。

「じゃあなんで一度しかあげたことがないの？渡した人から何か言われたからじゃないの？」

「ええ、『ぼくは貰うよりリーナがチョコを食べて笑顔になってくれた方が嬉しいな』つて言ってくれたの」

再び皆が微妙な顔に。そして深雪に視線が集まりため息を吐いた深雪が言う。

「それ…甘い言葉で誤魔化されたんじゃないの？」

すぐに反論しようとするも、心当たりがあつた。

思えば私が料理をしようとするといつもいつも雪花が割り込んできていた気がする。そういえば雪花のついでにお父さんにもチョコをあげたけど…個性的つて言われた。沙世さんは渡す前に忽然と姿を消した。これはもしかして…。

「ちよつとどういふこと雪花!」

「えっ?」

「へっ?」

私の声は何故か深雪と会長から疑問の声が上がる。五十里会計とほのかも不思議そうな顔をしている。

「はいはい雪花くん登場!」

ドアを勢い良く開けて、ポーズを決めた雪花の幻覚が見えた。



リーナが幻覚?を見ているころ、水波のチョコが出来上がった。雪花の大好物である金平糖の形をした小さいチョコレートである。色も様々あり水波も満足の出来だった。

「後はこれをどう渡すか…ですね」

今日、雪花と水波はこの家で二人きりになる。雪花の両親は仕事が忙しく夜遅くまで帰ってくることはない。沙世は暫く帰っていないかったこともあり夫の所に泊まる予定。渡すタイミングはいくらでもある。

なら問題はどうかやって渡すか。

水波は考えた末にインパクトを重視して帰ってきた瞬間に渡すことにした。玄関を開けたその瞬間、驚きと共にチョコレートを渡そうと。

そうと決まればまた新たに準備するものがある。夕飯の支度もしなくてはならない。タイムリミットは迫っている。急がなくては。

水波はいそいそと準備に取りかかった。雪花の驚く姿を思い浮かべて普段は絶対にしないような鼻唄を歌いながら。

アンジエリーナ・クドウ・シールズと雪花

迷いに迷った末にどうにか生徒会室にたどり着いた雪花はどうせなら驚かせてやろう、とインターフォンを押さずに勝手にロックを外して中に入る。

「はいはい雪花くん登場！」

ポーズを決めてそう宣言すると、ガタツと椅子の倒れる音が聞こえた。

「「雪花（くん）!?!」」

重なる三人の声。

「えっあれっ?本物?本物のセツカ?」

「…リーナ?」

雪花はリーナが日本の、それもすぐ近くに来ているであろうことを知っていた。そしてそれがUSNA軍関連の何かであることも。

「触れる…嘘…だって…でも」

やられるがままに頬をむにむにされながら雪花は目の前の人物を見つめる。一目で分かった。見間違えるわけもない。リーナだ。制服を着ている、この学校の生徒であろう。頭の中で様々な情報が飛び交い一つの答えを出した。雫と交換で一校にやってきた留学生。それがリーナであると。

「…セツカ…セツカ」

USNAに比べれば小さな国とはいえ国は国。その中から一人の人間と偶然再会出来るなどとありえない話、そう考えていた。微塵も期待していなかったわけではない。会いたいと思っていなかったわけでもない。しかし、リーナはその気持ちとは裏腹に今の自分を見せたくないとも思っていた。会いたくないと、心のどこかで思っていた。

血に染まり、汚れてしまった自分を雪花に見せたくはなかった。国のため、と元仲間を処刑し今もその任を受けてこの場にいる自分を雪花には。誇りが無いわけではない。スターズの総隊長として、アンジー・シリウスとして、何より今までに処刑してきた仲間の命。それらに賭けて自分が間違ったことをしたとも思っていない。思うことは許されない。

記憶の中の優しい笑顔を踏みにじってしまうような気がした。だから雪花に会いに行くようなことはなかった。居場所を調べることが簡単だっただろう。軍の力を使えば一人の居場所を調べることくらいわけではない。会いに行こうとすれば軍から何か言われたかもしれない、止められたかもしれない、しかし言い訳はあった。会いに行こうと思えばいけた。それでもしなかった。

会いたい、会いたくない。
今の成長した自分を見せたい、今の血で染まった自分を見せたくはない。

リーナには二つの思いがあった。

だから、偶然に奇跡に任せることにした。それは逃げだったのかもしれない。確率は限りなく低くリーナ自身、諦めていただろう。

しかし、それは叶えられた。

目の前には雪花がいる。

話したいことが沢山あった。それこそ一日じゃとても話しきれないくらい沢山のことだ。

なのに言葉がでない。どうしたらいいのか分からない。そこに雪花がいるのに、何もできない。

「久しぶり」

でも始めにやってほしいことは一つだった。別れたときも、雪花がやっと自分に心を開いてくれた時も、そうしてお互いに相手の温かさを確認したのだ。

「うん、久しぶり」

ただぎゅつと抱き締めてもらいたかった。そうすることで初めて雪花がそこにいるだと実感できた。

温かく心地よい。このままいつまでもこうしてゆっくり時間が流れていけばいいのに、とそんな風に考えてしまうほどに。

「雪花?」「雪花くん?」

ただこの場にいるのは二人だけではなかった。

「いつまで抱き合っている気かしら?」

「雪花くん、自分から抱きつきましたよね?…あれ?これは浮気でしようか、そうなんでしょうか?だとしたらどうするべきなんでしょうか?」

雪花が震えている。それは恐らくこの凍てつくような寒さのせいだけではないだろう。

あずさの声をリーナは半分も聞き取れていなかったが、いつものぼやぼやとした空気はどこへやら、光のない目でこちらをみてる姿には恐怖を感じずにはいられない。

「こ、これは二人にとって儀式というか、通過儀礼と言いますか、なくてはならないアレなわけで」

この二人から守らなくては。そうリーナは本能で感じとり雪花を背に隠した。

「リーナ、そこをどいてくれないかしら？」

「それは出来ないわね」

一触即発。いつかの夜のように二人はお互いを威圧する。

「雪花くん、お話ししましょうか。ほらここにはお茶と軽食もありますし、ゆっくりとお話ししましょう」

リーナは深雪と雪花、あずさと雪花の関係を知らず、深雪はリーナと雪花、あずさと雪花の関係を知らず、あずさはリーナと雪花の関係を知らない。しかし三人とも共通してある認識を抱いていた。

——こいつは敵だ。

殺伐とした空気。

何が起きているのか全く分からないのは怯えてしまい椅子の後ろに隠れた。同じく何も分からない五十里は止めに入ろうとすることを諦め傍観に徹する。正し本当に危険な事態になればいつでも止めに入れるように準備だけはしていた。自分にこの三人を止められるとは思っていない。だとしても冷静に戻すことくらいはできるはずだ、と五十里は考えていた。

そんな状況。言うならば特大のトラブルの中に彼が現れないはずはなかった。巻き込まれないわけがなかった。この世界の主人公たる彼が居合わせないはずがなかったのだ。

「あー風紀委員としての職務を全うした方が良い状況ですか？」

司波達也が開けっぱなしだったドアから入ってきた。微妙な顔、いや失敗したというのが顔に出ている。

「…そうならないことを祈っているところだよ」

五十里の言葉に達也はため息を吐いた。

司波達也の見解

達也の仲介のおかげでどうにかリーナと雪花の関係についての説明をしてその場はお開きになり

現在、達也と深雪の二人は深雪の作ったバレンタインデー仕様の夕食を食べ、ソファで寛いでいた。

「まさかリーナと雪花が幼馴染みだったなんて」

「予想もしていなかったよ。雪花からリーナの名前は聞いたことがなかったからな」

悲しいことに雪花の起こす問題には慣れている達也は大概のことならば、まあ雪花だからで流せるようになっていたが今回ばかりはため息を吐かずにはいられない。只でさえ何やら四葉と揉めているらしい弟に新たな厄介事の影が見えるのだ、仕方のないことだろう。

「そこは別に良いんだが……問題は雪花がリーナのことをどこまで知っているのか、だ」

「アンジー・シリウス、のことですか？」

「ああ、雪花が知っているんじゃないかと鎌をかけてみたんだが成果はなかった。俺としては知らないでいた方が動きやすいんだが……少し気になることがあってな」

達也は生徒会室で行った雪花の説明会を思いだす。思いがけず司会進行をやることになったりとかかなりの苦勞を強いられた出来事に微かな胃の痛みを感じる。

「雪花はリーナが一校の生徒になつているとは知らなかった、と言っていたが……それは少しおかしいだろう。それを言うならば日本に来ているとは知らなかった、の方が自然だ。恐らくだが雪花はリーナが日本に来ていることは知っていた、だが一校の生徒であることは知らなかった」

「どういうことでしょうか？」

「断片的にリーナが日本に来ていることだけを知っていたとすると、可能性としてもっとも高いのが叔母上から情報を与えられたという可能性だ。叔母上なら雪花とリーナが幼馴染みであることは知っていただろうからな。ただ、雪花の話を聞くと、この可能性はないように思える。叔母上は雪花を取り込みたいらしいからな、わざわざ九島に所縁のある者の情報を与えたりはしないだろう」

雪花とリーナの親密さを思い、可能性を切り捨てる。当時も監視していただろう四葉真夜のことも考えた上でだ。

「リーナが一校の生徒だということを知らないということは、雪花は学校関係者以外からリーナが日本に来ているという情報を得たか、独自にその情報を入手したということになり、そこに叔母上が絡んでいないとなると可能性は相当絞られる。が、リーナが日本へ来たことと一校への編入はイコールだ。交換留学生として日本に来たわけだからな。そこがどうにも噛み合わない。リーナが日本にいることを知っているのならまず間違いなく一校の生徒であることも知ることができるはずなんだ」

本来、雪花がどこから情報を得たのかというのはそもそも本当に雪花がリーナが日本にいるということを知っていたのかが分からない現状では考える意味のないことだろう。しかし、達也には妙な確信があった。

雪花はリーナが日本にいることを知っていた。そしてその情報の出所は――

「これは完全に俺の推測だが情報の出所は雪花の魔法によるものだろうと思う」

――魔法。

どういわけかこれが一番しっくりくる。これしかない、とそう思えてくる。

「雪花は俺たちに何かを隠している。そしてその隠しているものは十中八九、魔法だ。俺の精霊の眼のような異能」

九校戦で疑惑を持ち、呂剛虎の一件で確信に変わった。いや、それ以前から気にはなっていた。何かを隠している、これは達也だけでなく深雪も感じていたことだった。

「一番考えられるのは知覚系の異能。これならばリーナが日本、それも近くにいることを知っていてもおかしくはない。それに、雪花は普通の人間とは違うものを見ているような時がある。まるで俺たちには見えない何かを見ているようにな。視線の動きが不自然なんだよ。眼……いや視界を起点にした知覚系の異能……それが最有力だ」

「知覚系の……異能」

「まあ、全て俺の予想に過ぎない。考えすぎということも十分にありえる。あまり深く考えない方が良さだろう」

そう言っ達也は深雪の頭に手を置いた。深雪は頬を少し染めいっつもより少しだけ大胆に達也にくっついた。

—雪花……お前は何を隠しているんだ？

言葉とは裏腹に達也は頭の片隅で思考を続けた。—その相手が今、この瞬間、自分に助けを求めていることなど知らずに。

幼馴染みと妹と婚約者と雪花①

「まさか雪花が二人の弟だったなんて…でも言われてみれば似てるかも」

兄さんのおかげでどうにか乗り越えたと思ったのも束の間、生徒会室から速攻で逃げようとしたぼくの肩に手が置かれる。

「雪花：何逃げようとしてるの？」

「そうですね、まだお話は終わってませんよ？」

目に光がない。ちよつ肩痛い！ミシミシ言ってるよ！

「ぼく、ちよつと用事があつて兄さんたちの家に行く約束してるから今日のところは」

これは本当のこと。嘘は吐いていない。いやー残念だなー！ぼくもお話したかったのにー。

「気にするな、急ぎじゃないし明日でもいいさ。久しぶりの再会で積る話もあるだろうからな」

兄さーん!?アイコンタクトで裏切り者！と非難すると自業自得だ、俺を巻き込むな、と突き放される。鬼！悪魔！涙目でどうにかするよ。頼むが完全に無視だ。酷い。

「……セツカは二人と一緒に住んでいないの？」

「ああ、色々あつてな」

皆、兄さんの色々を勝手に解釈したらしくそれ以上聞いてくることはなかった。複雑な家庭の事情にズカズカと踏み込んでいくような

人間はこの場にはいない。兄さんも分かっていたからこそその発言だったのだろう。

「そう、じゃあセツカ借りるわ」

「ああ、好きにしてくれ」

「でも生徒会室を私用でいつまでも使っているわけにもいきませんし、場所を変えましょうか」

この場には味方がいない。兄さんはぼくを売ったし、姉さんはぼくがリーナのことを話していなかったからか拗ねてしまい目も合わせしてくれない。ほののんと五十里先輩はさっさと帰っちゃったしね。どうしよう、このままリーナとあーたんに連れていかれたらもう家に帰れないような気がする。

「なら、ぼくの家に来る？」

「セツカの家…良いわね、行ってみたいわ」

「私も賛成です」

ふふっ家に帰れば水波ちゃんがいる！これでぼくにも味方が増えて二対二、何故か機嫌の悪い二人を相手に一人は辛いからね。完璧だ！これで今日は乗り越えられる！

「お兄ちゃんおかえりなさいーい！」

そう思っていた時期がぼくにもありました。



玄関を開けた瞬間、オシャレした水波ちゃんが抱きついてきた。そりやさ、いつもは毒ばっかり吐いてくる水波ちゃんがお兄ちゃんとか言いながら満面の笑みで抱きついてきたら嬉しいじゃん、頭撫でる

じゃん。

「セツカがメイドにお兄ちゃんと呼ばせるような変態になってるなんて…」

「そうです、デレデレしちゃって」

「まあお兄ちゃんは私にデレデレですからね」

そしたらね、なんか地獄になった。

怖いよ！三人に囲まれてつい正座しちゃってるよ！なんで!?!どうしてこうなった!?!特にリーナ！誤解だよ！いや微妙に誤解じゃないんだけど、その蔑むような目を止めて！あーたん、デレデレしていたのは認めよう。ぼく、デレデレしてました！でも兄妹のスキンシップだから！兄妹ならこれくらい普通だから！うん、普通だから！

「みみみ水波ちゃん！ぼくお腹空いちやったなーなんて…言ってみたり」

不穏な空気をどうにかしようと、勇気を振り絞って発言した。今日は沙世さんがいないから水波ちゃんが作ってくれているはずだ。もし出来ていなくても、水波ちゃんは戦線離脱することになる。

「そうですね、お兄ちゃん。じゃあお皿を並べてもらえますかお兄ちゃん」

やけにお兄ちゃん連呼するの止めて！いつもは中々言ってくれないくせに！どうしてこの状況でそういうことするかなっ！ほら、二人からの視線が痛い！刺さってる！なんか刺さってるよ！

「お二人もどうぞ、量は多めに作っておりますから」

兄さん助けて！ぼく一人じゃどうしようもないよ！この三人に対

抗することなんて不可能だよ！

「お兄ちゃん、こっちのお皿もお願いします」

「…また」

「……これはどうするべきでしょうか」

ぼく、ここで死ぬかもしれない。

幼馴染みと妹と婚約者と雪花②

夕飯になったら皆落ち着くなって思ってた。美味しい食事を皆で楽しく食べられるかなって思ってた。

「はい、セツカあーん」

フォークに熱々のハンバーグを刺してぼくに突き出してくるリーナ。うん、大きいよ！そして熱いよ！そんなの一口じゃ無理だよ！そんなぼくの反論むなく口に詰め込まれる。美味しい、けど詰め込み過ぎだし熱い！苦しい、死んじゃう！涙目になりながらどうにか食べきる。

「雪花くん、口にソースがついていますよ、とってあげます」

リーナが次の料理を食べさせようと差し出してくるが間にあーたんが入る。ぼくの口を紙ナプキンで拭いてくれた。あれ、おかしいな、二人の間に火花が見えるよ。

「お兄ちゃん、私の膝に座りましょう、そうしましょう」

ひよいつと持ち上げられたかと思うと水波ちゃんの膝に座らせられていた。

「水波ちゃん、ちよつとやり過ぎじゃないかしら」

「雪花くん、なんでされるがままなんですか」

がちりホールドされているからだよ！力で水波ちゃんに勝てるわけないでしょ！ぼくが水波ちゃんに唯一負けたゲームが腕相撲だよ！

「お兄ちゃんは大体ここで食べますからね」

さらっと嘘吐かないで！火に油注ぐようなことしないで！ほら二人が怖い！ちよつリーナ、CAD持つてるよ！駄目！ぼくの家は魔法禁止だから！そのルール今考えたけど！

「セツカ：嘘なら嘘と否定しないと」

「そうですよ、嘘ですよね雪花くん」

何故か笑顔の二人が怖い。恐らく否定すればこの圧力はなくなるだろう、けど強ち嘘とも言えないということに気がついてしまった。本当に眠いとき、朝御飯をこんな感じで食べさせてもらうことはあるのだ。毎日じゃないけど週一、いや週二くらいで。

「へー否定しないんだ」

「雪花くん？」

ヤバイよ！姉さん以上の圧力を感じるよ！水波ちゃん、そのドヤ顔止めてくれないかな、被害は全部ぼくのところに来るんだからさ！

「私とお兄ちゃんは毎日一緒に寝ています」

唐突に特大の爆弾落とすの止めて！それもまた否定しづらい奴！だってたまにおねだりされて寝ることあるし、水波ちゃんがいつの間にかベッドに忍び込んでいたりするからね！

「わ、私も一緒に寝たことあるわよ！ねっセツカ！」

リーナ競わないで！いや、あるよ！何回もあるよ、でもそれ今言わなくて良いよね!?

「へーどういふことでしょうか雪花くん、私そんな話全然聞いたことなかったんですが。いえ、それ以前にUSNAに住んでいたことも知

りませんでしたし、司波さん、司波くんと同じ家に住んでいないことも初めて知りました。あれ？私には何も教えてくれないんですね」

あーたんが怒ってるよ！今までにないくらい怒ってるよ！リーナと水波ちゃんは睨み合ってるし！もう収集つかないよ！

「大体、水波ちゃんは専属メイドじゃなかったんですか？」
「えっ？私は妹って聞いたけど？メイドは趣味って」

うん、そういえば説明してなかった。リーナと水波ちゃんが知り合
いっぽいのが気になるけど取り合えず説明しよう。もしかしたらこ
の状況が良くなるかもしれない。

「兄さん、姉さんは血の繋がった兄と姉。水波ちゃんは戸籍上の妹な
んだよ」

「戸籍上って…水波ちゃんの名前は桜井でしょ？セツカは司波」
「それは昨日までの話です」

四葉からの襲撃をどうにかするためぼくは水波ちゃんに四葉が手
を出せないようにした。それによって水波ちゃんは戸籍上の妹、正確
には将来の戸籍上の妹になったのだ。

「今の私は五輪水波です、改めましてよろしくお願いします」

つまり水波ちゃんは五輪家の養子になったのである。

幼馴染みと妹と婚約者と雪花…と母

水波ちゃんのごときは魔法の才能を認められて養子になったってことにした。ぼくが滯さんと仲が良いことをあーたんは知っているし、どうやらリーナは水波ちゃんが魔法を使えることを知っていたようので二人とも納得顔だ。

「水波ちゃんは分かったけど、それでどうしてセツカと兄妹になるのよ？」

「ぼくも高校を卒業したら五輪に入るつもりなんだ、養子として」

「……その話も私、聞いてませんが」

「ああああと話そうと思ってたよ!?でもまだ決まった話じゃないし、そうなるかもって段階だからさーちゃんと決まったら話すつもりだったよ!?!」

「なんでか今日のあーたんは怖いよ!チョコをくれた時までにはこんなじゃなかったのに!」

「そろそろ九時になりますが、お二人とも時間は大丈夫なんですか?」

九時といえぼくの前限でもある。と言っても一人で出歩く時の前限は六時だけど。水波ちゃんとか沙世さんとかと一緒にいないと夜は出歩いちゃいけないことになっている。

「私、そろそろ帰らないと」

あーたん家に前限とかあるのかは知らないけど魔法が使えるとはいえ女子高生が出歩くには少々危険な時間だろう。なんせ『吸血鬼』なんてものがあるんだから。

「じゃあ私も今日のところは帰ろうかしら」

あつまた来る気満々なんです。いや歓迎するけど。

「セツカ、あれやって」

リーナが両手を広げて立っている。うん、これはシールズ家に住んでいた頃、寝る前に必ずやっていたアレだね。

ぼくはリーナを抱き締める。懐かしい。何年か前、身長を抜かされた時は落ち込んだものだ。抱き締めるとき露骨に分かつちやうからね。セツカ縮んだ？って聞かれたときの悲しみは言葉では表せないね。あつ、ちなみに夜寝る前に抱きつくのはUSNAでは普通のことらしい。リーナから教えてもらったし、シールズ家のメイド達も抱きついてきたから間違いない。

「雪花くん、私にもやってください！」

何やらリーナと火花を散らしているあーたんがそんなことを言う。ぼくとしてはあーたんに抱きつくのは嬉しい限りなのでリーナと同じようにぎゅつとする。

「はわ、はわっ」

口から意味のない言葉を発して真っ赤になってしまったあーたん。可愛い。やつといつもものあーたんが戻ってきた気がする。まあ怒ってるあーたんも可愛いけどね！ちよつと膨れてて！

「お兄ちゃん、私も」

お兄ちゃんと呼ばれれば断ることなどできるわけもなく、水波ちゃんもぎゅつとするわけだけど…力強くない？ちよつ加減ってものがあるじゃん？動けない。全然動かない。

「セツカ、水波ちゃんだけ長くないかしら？まさか雪花までシスコンだ、なんて言わないわよね？」

「違うよ！水波ちゃんが離してくれないんだよ！あと流石にぼくも兄さん程じゃな…痛い！水波ちゃん力強めたでしょ!?!いよいよ夕飯が出ちゃうよ！」

むぎゆつというよりぐぎゆつて感じた。潰れそう。なんかメシメシ言ってるし！これヤバイ音だよね!?

ぼくの話聞いてぼくを引つ張るリーナ。そんなに引つ張ったら千切れちゃうから！ぼく、ぬいぐるみ並みの強度しかないから！

涙目で訴えるもあーたんまで参戦。抱き締める水波ちゃんからぼくを引つ張るリーナとあーたん。もはや意識も飛びそうになってきて、あっ死ぬかと思った瞬間だった。

ガチャリつとドアが開けられる。

「…………私、仕事思い出したわ…………えーつとごゆつくり」

が、すぐにドアを閉めようとする。ピシッとスーツを着た気まずそうな、いたたまれないといった様子の女性。

「母さんちよつと！見捨てないで！助けて！」

母さんだった。いつもより少し早めに帰宅した母さんだ。

「母さんを自分の修羅場に巻き込まないで！自分で解決しなさい！」

「修羅場!?意味分からないよ！このままじゃぼく、殺されちゃうよ！」

ぼくはどうか母さんを味方に付けるべく精一杯助けを求めた。

幼馴染みと妹と婚約者と雪花…と母…と姉

母さんと押し問答をしている間に皆落ち着いたのかぼくは自然と解放された。ありがとう、母さん！ぼくを見捨てようとしたけど！

「はあ…どうして貴方はそう問題を次から次へと」

心底疲れたようにソファに腰かけた母さん。いや本当になんてこんな問題ばかり起きるのかぼくが知りたいです。

「じゃ、じゃあ私帰るわね！」

「わ、私も！そろそろ失礼します！」

母さんの登場で気まづくなつたのか、二人とも冷や汗を流しながらさつと荷物を持って帰り仕度をすませる。

「送っていくよ」

元々送つていこうと考えていたのでそう提案する。水波ちゃんが不満そうな顔をしているが仕方ない。頭を撫でて誤魔化しておく。兄さん流、妹のご機嫌取り術だ。

「ああ雪花、ちよつと待ちなさい、実は今日―」

母さんから声がかかったのは丁度、一足先に玄関に向かったリーナがドアを開けたところだった。

「サプライズ！雪花くんと妹になつた水波ちゃんにチョコレートです！驚きました？驚きましたよね？だって愛媛の本家にいるはずの私がここにいるんですから！ふふっ良いでしょう教えてあげます。実はチョコを渡すためにヘリと車で…あれっ？…えーつとどち

らさまです?。」

そこには漣さ…漣姉さんがいた。何やらテンションが高く大分喋ったところでやつとリーナの存在に気がついたようだ。リーナも突然現れた車椅子少女?に目を丸くしている。

「漣様がいらっしやる予定なの」

言うの遅いよね!?



漣姉さんから貰ったチョコレートは愛媛らしさを感じさせる一口大のみかんチョコ。漣姉さんは引きこもってるだけあつて料理がとても上手い。部屋で時間を潰す方法とか、ベッドの上だけで楽しく過ごすためにはどうしたら良いかとか、話せば話題の尽きないぼくたちだけど、料理の話も結構する。二人とも甘いものが好きだからデザートの話が多いけど。

「とっても美味しいです!」

「美味しいです」

水波ちゃんと二人で感想を言うとニコニコといつも以上の笑顔を向けてくれた。あーたんとリーナにも一個ずつあげてみるとそれぞれ美味しいとのこと。あーたんはともかくリーナのチョコは…うん、子どもの頃の話だからね!きつと今はちゃんと作れるよ!信じてるよ!

「こうして直接会うのは初めてですけど画像で見るとより可愛いですね!こんな可愛い妹が出来て嬉しいです」

滯姉さんは水波ちゃんにあれをやりましょう、これをやりましょうと、色々提案していた。女兄弟がいらないらしいから、妹が出来たら色々やりたいことがあったのだろう。水波ちゃんも自分が求められていることが嬉しいのか微笑みながらコクコクと頷いている。早速仲良くなれたようで何よりだ。

「雪花くん、五輪滯さんって確か二十歳を過ぎていたような」「うん、滯姉さんは二十六歳だよ？」

こそこそつと聞いてきたあーたんにそう教える。確かに初見では少々驚くかもしれない。一見少女にしか見えないし車椅子も子供用のサイズだ。滯姉さんと水波ちゃんが並んでいると水波ちゃんの方がお姉さんみたいだし。実際は十歳以上滯姉さんの方が年上なんだけどね。可愛らしくニコニコ微笑む滯姉さんは、ぼくの疲弊した心を癒してくれる。

「あつ雪花くん、お二人を送っていくなら家の車で送りますよ？キャビネットで二人とも送っていくのでは大変でしょうから」

折角の好意なので車に乗せてもらうことにした。セレブ御用達の黒くて長い車、愛媛にいる間は結構お世話になった。飲み物完備な上、広い車内、振動もほとんどない快適な車んだけど…今は地獄だった。

ぼくの右側に座り腕に抱き着く滯姉さん。そのさらに右隣には何故かついてきた水波ちゃん。そしてぼくの左側にリーナ、さつきからぼくの腕をチラチラ見ている。その左隣に座るあーたんはこんな車に乗るのは初めてなのか萎縮してちっちゃくなっている。可愛い。

が、そんな状況も最初だけだった。何故か数分で皆が火花を散らし始め車内は地獄と化したのだ。滯さんは相変わらずニコニコしているだけだが他の三人が無言で何かやってるよ！言葉は話してないし、動いてもいないんだけど、何かが起きてるよ！今、この車内で！

早く着いて！
ぼくは冷や汗を流しながらひたすらそう願った。

番外編 司波深雪の弟④

「私はもうダメです。どうせこのまま弟から女王様と恐れられ距離を置かれるんです」

あの手この手で雪花と仲良くしようとした深雪であったが、結局今日のところは『深雪さん』で終わった。

「きつと照れているんだよ、異性の兄弟が急に出来ればこんなものだろう。深雪は美人だから余計にね」

「ま、まあお兄様ったら」

深雪がクネクネと照れているのを見ながら達也は雪花のことを考えていた。

雪花が深雪を深雪さんと呼ぶことはどうしようもなかったが距離は詰められた。怯えることも少なくなったしプレゼントの効果もあり仲良くはなったのだろう。

「何かきつかけがあればすぐに打ち解けられるさ」

そして、その時はすぐにやってきた。



「しばらくお世話になります」

雪花が司波宅にしばらくの間泊まることになったのだ。両親が新婚旅行に行き、丁度良いから沙世にも休暇をといてわけで雪花が一人になったからだ。ちなみに沙世はこの休暇で奉賀^{未来}邦人^{未来}と出会うことになるのだが。

「ぼくの部屋があるんだよね？」

「ああ、空部屋になっていたが元々お前がいつでも泊まれるように作られたものらしいからな。用意の良いことだ」

龍郎がこの家を達也たちのために用意したとき雪花のための部屋を一部屋確保していた。普段は使われていないが最低限の家具は揃っている。

「必要なものは全部揃ってるね。枕は持ってきたし」

雪花より大きい特大の枕が荷物の中にあつたことを思い出して苦笑いの達也。

「さつさと片付けて夕飯にしよう。深雪がいつも以上に張り切っているからな」

深雪は雪花が泊まりにくるということでも小百合から雪花の好みを聞いたりして入念に準備をしていた。料理で雪花に近づこうと考えたのである。このおかげで深雪と小百合の仲が改善され、数年後には雪花の画像を送り合う程度には仲良くなっていたりする。

「美味しい！深雪さん料理上手なんだね」

「そっそう？ありがとう」

美味しい、という言葉にパアツと顔が明るくなるが「深雪さん」という呼び方に変な笑顔で固まってしまふ。それを見ていた達也がフォローに入った。

「深雪、そろそろあれが出来上がっているんじゃないか？」

「そうでしたー！」

深雪は小百合から雪花の好みを聞いている。当然、甘いものが好き

なことも。ならば、と用意した秘密兵器。雪花の大好物の一つ、ゼリーだ。プリン、ゼリー、アイス、は雪花の三大好きなデザートである。ちなみに金平糖は主食である。

「初めて作ったからうまくいったかどうか少し心配だけど」

おしゃれな、ぐにやりと曲がった入れ物に入ったゼリーは様々な色があり、苺、みかん、ぶどうなどの果物を使っている。

「どう…かしら？」

「うん、とっても美味しい」

ぱくぱくとゼリーを食べる雪花はご機嫌で、深雪も嬉しくなる。実は何度か練習していたことは内緒だ。練習で作ったゼリーをいくつも食べさせられた兄がいた事実などない。

「雪花、深雪はお前に姉さんと呼んで欲しいそうだぞ？」

「お兄様!？」

深雪はぱつと達也の方を見たあとすぐに雪花を見る。これで深雪さんと呼ばれるようなことがあれば、自分はもう立ち直れないかもしれないなんて思いながら。

「えーつと…姉さん？」

ちよつと照れたように頬を掻きながらこてつと首を傾げてそう言った雪花。

「もう一回お願い」

「姉さん？」

「もう一回」

「ね、姉さん？」

「可愛い！」

姉と呼ばれたことで今まで我慢してきたものが溢れてしまったのだろう。ひしつと雪花を抱き締める深雪。

「雪花、お姉ちゃん、て呼んでくれるかしら」

「えっそれはなんか恥ずかしい」

「一回だけでいいの、お願い」

「うう…お、お姉ちゃん？」

深雪から熱心にお願ひされ恥ずかしがりながらもそれに答える。だが羞恥から涙目になり下から見上げるように言ったのがいけなかったのだろう。

「可愛いわ！」

深雪は暴走した。

「ああ、妹というものがこんなに可愛いなんて！今日は一緒に寝ましょうね！」

「ぼくは弟、だよ…だから一緒に寝ないからね！というか兄さん、ゼリー食べてないで助けて！」

深雪に抱き締められジタバタする雪花からの救援要請に達也は目をつぶって達也用に作られたコーヒーゼリーを一口。そして小さく呟いた。

「…まあ、今日くらいは良いだろう」

基本的に兄は妹の味方なのである。

達也はそのままもう一口ゼリーを口に入れた。姉弟のじやれあいをBGMにして。

ピクシー①

リーナとあーたんを家に送って、その日はなんとか乗り越えた。どうやら滯姉さんは結局こっちに戻ってきたらしい。五輪の別宅はそのままでからそこに住むそうだ。本家の皆は過保護過ぎるとか色々愚痴っていた。

まあ何はともあれ無事、今日という日を迎えられることを嬉しく思う。

「ぼくは本当になにもしてないよ!」

いや、思っていた。ついさつきまでは。いつものように、水波ちやんに起こして貰って用意されていた制服に着替え、朝食を食べさせてもらって家を出た。そうして遅刻することなく余裕をもって登校し、授業を受けて、昼休み。沙世さんがお休みなので水波ちやんお手製の弁当を食べようとした時、ぼくは兄さんに連行された。連行された先はメンテナンスルーム。初めて来たけど結構広いこの部屋にはあーたんや五十里先輩、姉さんと愉快な仲間達いつものメンバーがおり、普段はないであろうもの、具体的にはロボット研究部のガレージに保管されているであろうものがあつた。3H・タイプP94、通称ピクシー。3Hというのはヒューマノイド・ホームヘルパーの略だ。

兄さんの話ではこのピクシーが異常稼働し、その間ずっと嬉しそうに笑みを浮かべている映像が監視カメラに記録されていた、ということらしい。そしてそれはぼくのせいなんじゃないかと。

「お前が何かイタズラしたんじゃないか?」

「してない!してないよ!大体ぼくは昨日とんでもない目にあつてそれどころじゃ…な…いい?」

「…心当たりがあるんだな?」

思い出した。

たしかぼくが学校にくるようになってちよつとして何かと兄さんとはんぞー先輩に怒られる毎日を送っていた時。ちよーつと校内で迷ってロボット研究部の部屋に辿り着いたことがある。そこでピクシーをちよこつと、本当にちよーつとだけ弄ったかもしれない。

だつて車椅子77の機能は五輪家の人に外されちゃったし。なんでも濔姉さんのプレゼントには一度検査が入るらしい。危険なものがないかチェックするわけだね。まあそこで車椅子の機能は危険とみなされてそのほとんどが外されちゃったというわけ。だからこのピクシーでリベンジしてやる、とかなんとか思つて改造しちゃったりしたかもしれない。結構面白くなつちやつて何日も弄つたりしちゃつたかもしれない。

「でも表情を変える機能なんて付けてないよ！耳が大きくなる機能とか手が伸びる機能とかそんなのしか付けてないよ！たぶん！」

正直色々付けすぎて自分でもどんな機能をつけたか良く覚えてない。表情を変える機能もつけちゃつたかもしれない。

「はあ、まあ良い、すぐに分かることだ…ピクシー、サスペント解除」

兄さんがピクシーにそう話しかけると、ピクシーはパチツと目を開けて、座っていた椅子から立ち上がると深々と一礼をした。良かった、ランダムでツンデレメイド風とか色々な挨拶をするように改造しておいた奴が出なくて！

「何か用かしら？」

本来なら、ご用でございませうか、が起動時の決まり文句なんだけど…：…出ちゃつた！ツンデレ風出ちゃつたよ！起動時の決まり文句にも設定しておいたんでした！そうでした！うっ周囲からの視線が痛い！特にあーたん！

「……今朝七時以降の操作ログと通信ログを閲覧する。その台の上に仰向けに寝て、インスペクション点検モードに移行しろ」
「ふうん、じゃあアドミニストレーター権限を確認するわ」

また出ちゃった！このピクシー、ぼくをいじめてくるよ！普通にしてよ！

そんなぼくの心のツツコミは聞こえているわけはなく、ピクシーは兄さんをじつと見ている。兄さんの命令は管理者権限を必要とするものだから、胸ポケットの権限を示すカードを見ているのだろう。そのはずなんだけど……なんかあれ、兄さんの顔を見つめたまま固まってない？あれ？権限確認の時にも何か機能つけたっけ？ツンデレ風以外にもお嬢様風とか妹風とか色々つけはしたけど……。ぼく以外のみんなも何かがおかしいと感じ始めていたと思う。

「ミツケタ」

ピクシーが小さな音声でそう紡ぎ出し、兄さんに向かって飛びかかった。

声にならない悲鳴が上がった。誰もが、言葉を発することができなかつた。それほど驚きが、室内を支配していた。だって、ピクシーは兄さんに抱きついていてるのだ。両腕を兄さんの首にしっかり回して。

「…へえ、司波君って、ロボットにまでモテるんだ」

衝撃の瞬間に居合わせていなかったがゆえだろう。たった今、部屋に入ってきたばかりの千代田花音が白けた声でツツコミを入れた。

うん、なんというか…流石ですお兄様。

ピクシー②

「……お兄様に、お人形遊びのご趣味がお有りとは、存じませんでした」

「とにかくまず、落ち着け、深雪。俺の方から抱きついたわけじゃないぞ。抱きつかれたんだ」

「お兄様の身体能力なら、避けることなど造作も無かつたはずですよ」

妹からは冷たい、ほののんからは咎めるような視線を向けられさすがの兄さんも慌てているのか、モテる男の浮気の言い訳みたいなものをしていくけど視線はそのままだ。ピクシーが、がっしりとくつついたままだしね。何かピクシーがにやけてる気がするけどきつと気のせいだろう。

「俺が避けたら、お前にぶつかっていたじゃないか」

なんと兄さんはそこまで計算して避けなかったらしい。流石、我們のお兄様である。姉さんはそれにシユンと萎れて自分の非を詫びた……んだけど落ち込んでるように見えて、微妙に嬉しそうだ。ほののんも納得という感じで頷いている。ほののん、シスコンは許すんだ……。

「ピクシー、離れてくれ」

兄さんがそう命令するとピクシーは大人しく両腕を解いた。うん、名残惜しそうに見えたのは、単なる見間違えだよ。熱っぽい眼差しで兄さんを見上げているのも錯覚だよ。いやー流石ばく、細部までこだわってますね。

「美月」

「は、はいっ?」

突然の指名に声をひっくり返したツツキー。どうやら兄さんはツツキーにピクシーを視てもらうつもりらしい。ツツキーが大きなダメージを負わないようにミツキーもサポートに入る。

そういえばまだ幻想眼でこのピクシーを見ていなかった。兄さんの前で使うとバレそうだからあんまり使わないようにしてるんだよね。でも気になるから使っちゃう。好奇心には勝てないのです。

「います……パラサイト、です」

いた。それっぽい、糸のようなものがぐにやぐにやとしている。でもこの感じ……見たことがあるような気がする。ぼくは直接パラサイトを見たのは初めてのはずなんだけど。

ツツキーも何か引つかかるようで眉をひそめて「むっ」と悩んでいる。やがて、ぼくがその違和感に気がつくより早くその正体が分かったらしいツツキーははっと目を見開くと急に振り返った。視線の先にはほののん。じくつと凝視して、ほののんとピクシーの間で視線を往復させる。

「このパターン……ほのかさんに似てる」
「ええっ!？」

ほののんが仰天の声を上げた。そのおかげでぼくは声を出さずに済んだ。思わず「それだ!」って言いそうになったからね、助かった。

「パラサイトは、ほのかさんの思念派の影響下にあります。…コントロールを受けているとかラインが繋がっているというわけではなく、ほのかさんの思念をパラサイトが写し取ったという感じです。あるいはほのかさんの『想い』がパラサイトに焼き付けられた、残留思念のようなもの、でしょうか」

「残留思念……つまり、光井さんが何か強く思ったことが、偶々近くを

漂っていたパラサイトに写し取られ、その後、憑依した？それともピクシーの中に潜んでいたパラサイトに光井さんの想念が焼き付いた……？」

ミッキーの盛大な独り言はほののんにも聞こえていたのだろう。何か心当たりがあったらしいほののんは両手で顔を覆って俯いている。その隙間から見える顔は真っ赤。その反応で大体どんな『想い』なのかは想像がつくわけだけど、それを口にするのはあまりにほのんが可哀想だろう。たとえ周知の事実だったとしても。

『私は、彼に対する、彼女の特別に強い想念によって覚醒しました』

ピクシーの唇が本当に言葉を発しているかのように動いている。実際はテレパシーのようだけど。ピクシーには当然、発声器官がないのだから。

「我々の言語に随分通じているようだが、どうやって修得したんだ」
『前の宿主より、知識を引き継いでいます。それにこの身体にインプットされていた言語情報も参考にしています』

うん、それ参考にしなくて良い奴だから忘れようね！

ぼくが内心でピクシーにツツコミを入れている間も兄さんとピクシーの会話は続いていく。どうやらパラサイトは宿主を移動する際に引き継ぐことができるのは、宿主のパersonalityから乖離した知識だけで、personalityと結び付いた記憶は、移動の際に失われるらしい。だから前の宿主がどんな人間だったのかは分からないし、それが一人なのか二人なのかもつと沢山なのかも分からない。ただ、自己保存の欲求はあるようだ。うん、中々どうして面白い。

「お前のことは何と呼べばいい？」

『我々には名前がありませんので…そうですね、我々のことはパラサ

イトと呼称されているようですし、この個体の名称「ピクシー」と合わせて、斉藤ピクシーというのはどうでしょう』

このパラサイト、ネーミングセンスが壊滅的だよーたぶん、パラサイト↓サイト↓斉藤にピクシーをくつつけたんだろうけどもつと良いのがあるでしょ！というか斉藤必要なの!?!ピクシーだけで良くない?!

どうやらピクシーがぼくのインプットしたデータを参考にしてるのは言語だけではないらしい。だから忘れようか、そのデータ。

「……ではピクシー。お前は我々に敵対する存在なのか?」

ピクシーの斉藤をさらつと受け流して、そう質問する兄さん。

「私は貴方に従属します」

「俺に?何故」

『貴方のものになりたい』

なんだか情熱的な眼差しを兄さんに向けてピクシーは続ける。

『私は彼女―個体名「光井ほのか」の、この想念によって休眠状態から覚醒しました』

ここからは酷かった。ほののんが完全に晒し者になったのである。尽くしたいとか貴方のものになりたいとか、貴方に全てを捧げたいとか、ほののんの兄さんに対する想いを全部ぶちまけられちゃったわけだからね。こっちが恥ずかしくなってくるくらいだから、当然、本人は恥ずかしさの限界を突破して床に崩れ落ちた。うん、なのに一切反応を示さないお兄様、流石です。流石は真性のシスコン、ぶれない。まあ単に意識が「情」ではなく「知」に占められているだけだろうけど。

「我々は本来、ただ在るだけのものです。「望み」は宿主によつてもたらされます」

「まあ責任の所在は別の機会に追求するとしてだ……ピクシー、お前は俺に従う、ということが良いんだな」

『勘違いしないでよね！べ、別にアンタのためじゃないんだからねっ！それが私の「望み」なだけなんだから！』

ツンデレ挟まなくて良いよ！普通に答えようよ！そしてそのやつてやったぜ、みたいな顔止めようか！確かにやっちゃったけどね、盛大に！

「……では俺の命令に従え。今後、俺の許可なくサイキックを使用することを禁止する。表情を変えているのも念動の一種だろう？それも禁止だ」

ツンデレ発言に多少の動揺を見せたものの、そう命令する兄さん。止めて、こつち睨まないで。ピクシーが変なのはたぶんぼくのせいじゃないから……ごめんなさい、八割ぼくのせいです！

『じゃあ壁ドンして、耳元で命令してもらっても良いですか？…その方が萌えるので』

齊藤ピクシーさん！それぼくのインプットしたデータ以外にも変なもの参考にしてますよね!? いや参考になっているというより少女漫画的なものにハマってますよね!? 電子頭脳から余計な知識引張ってきてますよね!? 萌えとか知らなくていいもの知っちゃってますよね!? いや萌えは重要だけどね!!

ぼくの頭がツッコミでいっぱいになるころにはピクシー先生による壁ドン講座（生徒、兄さん）が勝手に始まって終わったらしく、まあ命令の仕方を変えるだけで素直に従ってくれるなら、と兄さんがピ

クシーに壁ドンしている。そして耳元で囁く。

「ほう、ご馳走さまでした……では、ご命令の・ままに」

ぼくが付けといた機能でわざわざ顔を真っ赤にして、ご馳走さまでした、と言った後はサイキックを切ったのだろう。ぎこちない声だ。勿論、表情もない。そう、作られた仮面の表情のはずだ。なのに、その仮面の表情が、どこかニヤけているように見えるのはぼくだけだろうか。

…はあ、もうやだこのピクシー。

ピクシー③

『達也様のあのクールな感じ、冷たい眼差しで命令されると…むふっ…胸が熱くなりますね』

駄目だ、このピクシー…早くなんとかしないと。

放課後、ぼくは一人、ピクシーの元を訪れていた。パラサイトというものに興味があるというのと、何より、ピクシーがこんな残念な感じになってしまった原因を調べるためだ。まあ原因は、ぼくがインプットした言語データに前の宿主の知識と照らし合わせると不可解な点があったため、電子頭脳で調べたことらしい。そのせいでピクシーは新しい扉を開いてしまった。うん、なんかごめん。

「テレパシーも表情を変えるのも、サイキックだよね、兄さんから禁止されてるでしょ」

『バレなければ良いんですよ。まあ、お仕置きとかあったら最高ですけどね。むふふ、夢が広がります』

でもここまで変態になっちゃったのはぼくのせいじゃないよね!? わざわざサイキック使ってまでそのニヤニヤ再現しないで!

『でも優しくされるのも良いですよね、達也様はシスコンの様ですし、今度は妹モードで接して見ようと思います』

「…そう、まあ、うん、頑張って」

でもぼくがいないところでやってほしい。兄さんから怒られるのはぼくなんだから。

『む、なんか適当ですね、……そういえば雪花たんってかなりオタク入ってますよね?』

「雪花たん言うの止めようか! オタク言うの止めようか!」

『あつ私のことはシーたんでも呼んでくれていいですから』

「なんか親密みたいだから嫌だよ！斉藤さん！」

『なんだよー雪花たん冷たーい。ぷにぷに』

うざい。限りなくうざい。冷たーいとか良いながら頬をツンツンしてくるが反応しても面白がるだけなので我慢する。

『女の子を無視するなんてーそんなんじやモテないぞー』

ロボットを女の子として意識するようになったらいよいよおしまいだ。そして余計なお世話だ。可愛い彼女がいるわ！

『…雪花たん女の子みたい顔してるし…あつ……もしかして私のライバル？負けないんだからねっ！達也様は私のもの…いえ、私は達也様の物なのよ！』

「その察したみたい顔止めてくれないかな！何も察してないよ！」

『そうね、最初は皆戸惑うみたいだからね、でも大丈夫。愛に性別は関係ないわ。私なんて種族だって越えられたんだから』

「ぼくをそっちの人扱いするの止めてくれないかな!?ぼくちゃんと彼女いるよ！ノーマルだよ！」

『ほー彼女ですか?』

しまったああああ！完全にピクシーにのせられた！冷や汗をだらだらと流すぼくをピクシーはニヤニヤとしながら小突いてくる。

『相手は誰ですか?んーあのクルクル髪の毛のちっちゃい人じゃないですか?なーんか怪しかったんですよねー雪花たん、チラチラ気にしてたし』

鋭い！何その無駄なハイスペック！もつと別のところで使おうよ！色々機能つけてあげたでしょ！かき氷を一瞬で作れる機能とか！

今冬だけど！

『あー別に言いふらそうってわけじゃないですよ？むふふ、たーだ、私、達也様の命令には逆らえませんし、逆らう気はありませんし？役に立ちたいですし？ポロつと言つちやつても怒らないでくださいよ？』

「な、何が目的？」

『えー目的とか言われてもー私分かんない、ただ、ちよつとお願いがあ
るんです』

黒い！このピクシーただの変態じゃないよ！出来る変態だよ！

『サイキックを使わなくても、表情を変えられるように、ちゃんと話せるようにして欲しいんですよ』

「えっ、それはちよつと無茶というもの…」

『へーあの人、中条あずさつて言うんですね。今、生徒データを調べました。いえーい！雪花たんとあずさんは付き合ってるうー！』

「無茶だけど無理とは言つてない！やりましょう！やつてやりましょう！だからその歌止めようか！」

このピクシー凄く苦手。でも一緒にいて楽しかったりする。ぼくが終始ツツコミに回らざるを得ないほどの変態だけど、楽しい奴だ。まあ、脅し？とかなしにしてもお願いを聞いてあげようじゃないか。こいつがこんなになつてしまった責任がぼくにも多少ある気がするし。

『ふうー！流石は雪花たん！達也様の次に愛してるー！もうハグハグしちゃうー！』

ただ、かなりうざいけどね！頬をスリスリするの止めて！ちよつ力強い！抜けられない！！

『雪花たんハグハグ!』

「誰かー!?助けて!?!」

散々弄られた後、ロボット研究部の部員達によって助けられました。ありがとう、でも見てたんならもっと早く助けようね。百合展開に胸熱だった、とか知らないよ!君らがそんなだからピクシーは!

はあ、これからピクシーの新機能を開発するとか辛い。でも家に帰れば水波ちゃんがいるから、癒してもらおう。

そう思ってたけど、現実には辛かった。

『USNA:…スターズが動き出しました。狙いはー達也様です』

水波ちゃんからそう連絡が入ったのは、ぼくがリーナの指輪が移動していることを感知したすぐ後だった。

どうやら今夜は一騒動あるらしい。

アンジー・シリウスの葛藤

雪花の家から車で送ってもらった後、達也に襲撃^{アタック}を仕掛けることが決まった。

脱走者の追跡、処分を一時棚上げし、当初の任務への復帰、つまり『質量・エネルギー変換魔法』の術式もしくは使用者の確保が最優先の任務となったのだ。そして達也をターゲットと仮定し第一波として今日、襲撃^{アタック}を仕掛けるのだけど、私もブリオネイクを装備し、これに参加する予定だ。

以前なら、雪花に再会する前の私なら何も迷うことはなかっただろう。それどころが、あの男に与えられた屈辱、あの敗北に雪辱してやる！と意気込んで任務に挑むことができたはずだ。

でも、私は知ってしまった。

達也と雪花が血の繋がった兄弟であることを。

雪花は兄のことを慕っている。達也は頭も良いし、体術にも優れ、魔法にも精通している、およそ弱点の見当たらないような人間だ。嫌な奴ではあるけど、その辺は私も認めてる。雪花が慕うのもまあ仕方がないのかもしれない。

そんな慕っている兄が、酷いことに、例えば―死んでしまうようなことがあれば雪花は悲しむだろう。そしてそれをやったのが私だと知れば雪花は私を嫌いになる。

そこまで考えて、いつもは箱に入れて大事にしまつてある指輪を握りしめた。雪花からもらった、大切な指輪。約束の指輪。

『じゃあセツカはずっと私のそばに居てくれる？』

『それは無理だよ。でもリーナがどうしても辛くなつてもう涙が溢れそうになったときぼくを呼んで。ぼくは必ず君に会いに行くよ。そうしてこうして抱き締めてまた優しくして明るいリーナに戻ってもらう』

涙が溢れそうな時は何回もあった。辛いときも悲しいときも沢山

あった。それでも私は雪花を呼ばなかった。きつと呼んだら本当に雪花は会いに来てくれただろう。抱き締めて、慰めてくれたに違いない。でも、そうはしなかった。涙をプライドで押し留め、寂しさを思い出で封じた。

強く、なりたかったから。

雪花は私の前だと強くあろうとする。兄であろうとする。私を守ろうとする。

でも本当に守らなくてはいけないのは雪花だと思った。誰かが支えてあげないと、包んであげないと、一緒にいてあげないと、壊れてしまいそうな、消えてしまいそうな、そんな気がした。

だから、私が強くなつて雪花を守る。そう決意した。

初めて雪花に会った時、なんて悲しい目をしているんだろう、と思った。でも、そのことに誰も気がついていない様子がない。私だけが気がついた。雪花が助けを求めていることに。苦しんでいることに。

『なんだか胸が苦しいんだ、それに涙が止まらない』

毎日、毎日、雪花に会いに行つて、やっと聞けたその言葉。

ぎゅっと抱き締めた。そうしないといけない気がしたから。

それから少しずつ雪花は元気になっていった。雪花が悲しくならないように夜寝る前はぎゅっとする習慣をつけた。ちよつと嘘を教えちゃったけど雪花は疑うこともなく毎日それを繰り返した。そのうちメイド達まで抱きつくようになったのは誤算だったけど。

元気にはなった。明るくはなった。でも、きつと雪花はまだ心に傷を負つてる。そしてそれは今も…。

再会したとき、雪花はちよつと子供っぽくなっていた。年齢を重ねて成長したはずなのに、幼く感じた。姿形はほとんど変わつておら

ず、ちっちゃくて可愛い雪花のままだったけど、そう感じたのだ。

きつとそれは『家族』のおかげだと思う。雪花は私たちを『家族』だと言うけれど、本当の父、本当の母から注がれる愛はやっぱり違うと思うから。

そして、兄と姉。

弟になったことでより一層雪花は幼くなったのだろう。頼れる二人は心を許せる相手だったはずだ。

『家族』の存在が雪花の心に余裕を与えたことだろう。良いことだと思う。雪花は幸せなんだと思う。

その幸せを私は壊そうとしている。守りたかったはずのものを自分の手で。

今の私はアンジェリーナ・クドウ・シールズというだけでなく、アンジー・シリウスでもある。

こんなことは、考えてはいけないことなのかもしれない。

『シリウス少佐、こちらは任務を開始する。貴官は自己の判断で適時介入せよ』

バランス大佐からの通信。

アンジェリーナ・クドウ・シールズとしての私。アンジー・シリウスとしての私。頭の中に二人の私が現れる。

そしてそれ以外に沢山の人の顔。

守りたかった雪花。

達也、深雪のようにこの日本で出会った人々。

ベン、シルヴィのように共に仕事をするスターズのメンバー。

—この手で処刑してきたかつての仲間達。

「…了解」

—私はもう引き返せない。

今の私はアンジー・シリウス。

戦略級魔法師、十二使徒の一人、USNA軍の魔法師部隊スターズの総隊長。

—任務を遂行する。

アンジー・シリウスVS司波達也

今、私はパレードの効果を外見の変更に止め、座標情報の書き換えは行っていない。勿論、油断しているわけではなく、単に余裕がないだけだ。座標情報を書き換える為に必要な魔法力を確保できないのである。

戦略級魔法『ヘビィ・メタル・バースト』。

この魔法を使って、達也に負けるわけにはいかない。負けてはならない。

ぎゅつとブリオネイクを握る。

ブリオネイクは私の為に製作された携行兵器で、その威力は最大で戦艦の主砲に匹敵する。

『ヘビィ・メタル・バースト』とブリオネイク。この二つが揃って初めて、本当の意味でのアンジー・シリウスは完成する。

「タツヤ、ノコノコついて来るとは思わなかったわ」

一見、灯りが隈無く街を照らしているように思えるこの街にも、フツと光が途切れている箇所がある。街の灯りの狭間、私が達也を誘い込んだのはそんな公園だった。といっても名ばかりの公園で空き地のようなものだ。生け垣は手入れされているけど、遊具もベンチもない、街灯も申し訳程度にしか配置されていない何も無い公園。この場所には達也と私の二人だけ。ヘビィ・メタル・バーストは私にとっても高度な術式。今は外見の変更すら行っていないのだ。

魔法同士の干渉を避けるため、私、単独の方が良い。

「しつこくつきまとわれるのは迷惑だからな」

人を食った回答に私は意識して酷薄な笑みを浮かべた。

「自信家ね。でも今回ばかりは自惚れ過ぎよ」

ブリオネイクを達也へ向ける。

「タツヤ、投降しなさい。アナタがどんな手段で魔法を無効化しているのか知らないけど、このブリオネイクを無効化することはできないわ」

うっかり回答に時限を設けるのを忘れていたとはいえ、投降勧告に対する無回答は慣習上、拒絶を意味する。

残念だわ、達也。せめておとなしく投降してくれることを願っていたのに。

ブリオネイクの先端が煌めく。

細く絞り込まれた光線は達也の右腕を掠め、肘から先を炭化させ消し飛ばす。そのまま衝撃で達也は背後の生け垣に投げ出された。いや、自ら飛び込んだのだろう。

私はブリオネイクを長物のように構えて突進する。間合いを詰め、生け垣に向けて水平に振り回す。

生木は燃え散るも、その後ろの達也にはプラズマは届いていなかった。右肩を押さえ右半身を後ろに隠し、方膝をついている。痛みに対する耐性が高いのだろう、表情一つ変えていない。対拷問訓練を積んでいる特殊な兵士には珍しいことではない。

杖の中で再度、魔法式を瞬間発動させる。

魔法によって作り出された高エネルギープラズマという事象が、それを包む容器の中で、私の意思によって形を変える。

それをはなさき鼻先に突きつけられても、達也の表情は変わらない。

「FAE理論を実用化していたとは…世界の、物理法則の影響を遮断

する結界容器の中で魔法を実行することによって、物理法則が作用するまでのタイムラグを引き延ばすとはね。素直に称賛しよう。潔く脱帽しよう。そのブリオネイクを作った人物は、本物の天才だ」
「タツヤー！」

思わず、達也の言葉に聞き入ってしまった。失われていく戦意を無理矢理奮い立たせるように、あえて大きな声を上げた。

「もう一度言うわ。投降しなさい！片腕では得意の武術も使えない。もうアナタに勝ち目はないわ！」

達也は酷薄な笑みを浮かべた。それはついさっきの私の笑みを鏡写しにしたような笑み。

非人間的なゾツとする笑みだった。

「俺を捕らえて何がしたい？人体実験か？アイツら、スターダストのように？」

聞かない。耳を貸すな。

強くブリオネイクを握る。

「当たり前だが……モルモットになるのはお断りだ」

「だったら動けなくして連れていくまでよ！」

ブリオネイクの先端を、至近距離で、方膝立ちの足に向ける。

—終わりよ！

—ごめん、雪花。

この時、私にあったのは二つの思い。

でもそれとは別に一つ、確信があった。心のどこかで勝利を確信してしまっていた。

油断。

勝利の確信がそれを生んでしまったことを誰が否定できようか。

―ブリオネイクの筒先に銀色のCADがねじ込まれた。

芽生える怒り

銀色のCADは焼け落ちたはずの右腕でねじ込まれていた。

「その腕!？」

私の悲鳴と同時にブリオネイクの筒先から、常温のガスと化した金属粒子が勢いよく吹き出した。そして意図せぬ噴射のせいで、私の体は後方に吹き飛ばされる。そのまま地面に叩きつけられ、まずい!っと思つた瞬間、四肢に激痛が走つた。負けるわけには…そんな思いとは裏腹に私の意識は白い闇に呑み込まれた。



「……良いんですか、見てるだけで」

「今、これ以上近づけばまず間違いなく兄さんに気づかれる。ここだって危ないくらいなんだ」

アンジー・シリウスと兄さんの対決。それを盗み見ていたわけだけど、うん。リーナさんですね、あの金髪は。

「戦略級魔法師なのは知ってたけど未成年だし公表されてないのかと思つてたら、リーナがアンジー・シリウスだったなんて」

「……そこまで知ってたなら気がつきましようよ。アンジー、で大体分かるでしょ」

「いや、ぼくの中のリーナはポンコツなイメージしかなくて…シリウスって総隊長でしょ?無理だと思ふなーUSNAの上層部は何を考えているんだろうね」

リーナは優しい。その優しさは戦闘において大きな隙を生む。兄さんは、どうしても必要であれば昨日までの友人を躊躇いなく殺せる

だろう。兄さんの優しさは切り替えられる優しさだ。戦いに優しさを持ち出さない。

今回の戦い、兄さんは完全アウエーだった。戦力だけを考えればリーナをこうもあっさり気絶させることはできなかっただろう。いくら兄さんとはいえ、本気のリーナ相手では苦戦を免れなかったはずだ。

リーナの小さな優しさ、兄さんをなるべく傷つけずに生かそうとする優しさが、少しずつ戦いの歯車を狂わせこの結果を作り出した。

リーナは優しすぎる。

「スターズの総隊長、ね」

向いているとは、思えない。

「怖い顔してますよ、まあ可愛いだけです」

「水波ちゃん、今ぼく割と真面目なこと考えてたからね!?滅多にないことだからね!」

水波ちゃんのせいで台無しだ。返せ、ぼくの真面目な空気を返せ。

「馬鹿なこと言っていないでどうするんですか、達也様どこかに行っちゃいましたけど」

「撤回しよう、たぶん兄さんがリーナを拾いに来るだろうから。これからそのための準備に行ったんじゃないかな」

「また、怖い顔してますよ。もしかして…怒ってます?」

「…行こう、ぼくの魔法を使っても兄さんなら気がつくかもしれない」

水波ちゃんに指摘されて自分が怒っているんだってことに気がついた。

そうだ、ぼくは今、怒ってる。

兄さんがリーナを攻撃したのは仕方のないことだった。仕掛けたのはリーナの方だし、リーナ相手に無抵抗でいられるほど兄さんに余裕があるわけでもない。

だから、たぶん、それに対してではない。いや、それもあるけど、もつと大きな理由がある。

―助けて

リーナがそう言っているような気がした。泣いているような気がした。

実際に言ったわけじゃない、泣いたわけじゃない。心が訴えている。

―助けて

「……まずいな、水波ちゃん早く帰ろう」

「……どうしました？トイレですか？」

「いや、殺したくって仕方ないんだよ。うん、八つ当たりでもなんでも、リーナにあんな顔させるスターズとかいう中二軍のお偉いさんを、さ」

シリウスであるリーナに命令を出せるくらいの奴を片っ端から殺していったらこの気持ちは晴れるだろうか。

いや、たぶん、無理だろう。

だって今までリーナに何もしてやれなかった自分にもキレてるんだから。

番外編 シールズ家の日常①

雪花の朝は意外と早い。

毎朝七時に家政婦の沙世によって起こされるからだ。その後、用意された着替えに眠い目を擦りながら着替える。この時、どんなに眠くてもしっかりと着替えを確認しないと酷いことになる。たまに女の子用の服が用意されている時があるからだ。

そして着替えが終わると、朝食。

シールズ家の朝食は基本的に七時半。食堂に一家全員が集まって食べる。といっても雪花、リーナ、リーナの父である弾の三人だけなのだが。雪花は失礼にも最初、弾をヒモか、と思っていたものの、そんなわけではない。単に家の中で出来る仕事というだけだ。妻でありリーナの母である女性が中々家に帰れないほど忙しくしており、家に両親が中々帰ってこないのでは娘が可哀想だ、という理由で今の職を選んだという。元々は魔法師であつたらしい。

朝食を終えた後、学校に行くリーナを見送った後、雪花には夕飯までやることがない。逃亡中の身であるため、家の敷地内から出る事が出来ないとはいえ、元々がインドア趣味の雪花には苦ではなかった。

性根がニートなのだ。

そして、能力のあるニートというのは質が悪い。魂に記憶する特殊な方法で擬似的に完全記憶能力を得ている雪花は暇潰しにあらゆる言語を習得したり、かけ算を1×1からひたすら暗記するという作業をしてみたり、勉強と言えりようなものもしてはいるのだが、大体が刹那的な発想による遊びだ。そしてそれを周りも止めない。雪花は完全に甘やかされていた。日中、弾は仕事場にこもるため、雪花の相手をするのは沙世か、シールズ家のメイドのだが…彼女達は小動物を愛でるかのように温かい目で見守るのである。そして雪花が何かやれば称賛し、よいしよする。猫可愛がりである。

結果、雪花は調子に乗る。

「よし、今日は裁縫やろう」

斜め上の発想。ちなみに昨日まではペーパークラフトにハマっていた。彼は一体どこを指しているのだろうか。まあ、まず間違いなく何も考えていないのだろう。

「道具は一式、部屋に揃えました！雪花様！」

「良いですよね裁縫！」

「男の娘で裁縫が出来るなんてポイント高いですよ！」

シールズ家のメイドが何も考えずに発言した雪花をひたすら持ち上げる。さらには一瞬で道具やら材料やら用意してしまう。雪花はモテるニートだ。

そうして甲斐甲斐しくメイドに世話をされながら趣味を満喫するのが雪花の日常である。

「ただいまー」

夕方になると、リーナが学校から帰ってくる。

「……雪花、今度は裁縫？ペーパークラフトは？」

「ペーパークラフトはもう良いや、それより見てよコレ！ジャーソン！」

始め、布に埋もれている雪花に呆れたように言ったりリーナであるが、雪花が作ったらしい服を見せられると目を丸くした。リーナは知るよしもないが、その服は百年前には良く見られた女子制服。ブレザーにリボン、スカート、と一式揃っている。全て雪花の手作りである。既製品ではあるが、勿論？ニートも揃っている。

「日本の女の子の憧れ、制服！スカートとニーソックスの生み出す絶対領域は芸術とまで言われているんだよ！リーナに合わせて作ったから着てみてよ」

言われるがままに制服を持って着替えにくくリーナ。サイズはぴったりだった。雪花がメイドからリーナのスリーサイズを聞き出したのだから当然である。後日これがバレて追いかけて回されることになるわけだが。

「着てきたわよ」

「おーすっごい似合ってるよ！可愛い」

「そ、そう？」

似合ってる、可愛いと言われ頬を染めるリーナ。くるっと回転してみたりもする。

「いやー八時間も頑張ったかいがあったよ！それはリーナにプレゼントするからたまに着てね」

「うん、大切にする」

実際はただ、金髪ツインテールの制服姿を見たかっただけだったりするのだが、リーナは私のために雪花が頑張って作ってくれた、とはしゃいでいる。数年後、その制服のせいで起きる悲劇も知らずに。

「よし、明日は編み物だ！マフラー作ろう」

雪花がそう言って拳を突き上げれば、後ろに控えていたメイドがすぐに反応する。

「編み物！素晴らしい考えです！雪花様！」

「男の娘なら出来た方が良いでしょう！」

「私、使う物買ってきます！」

雪花が今の残念な感じに仕上がってしまったのはきっと彼女達にも原因があるだろう。雪花には毒舌なくらいのメイドの方が丁度良いのだ。

ピクシー④

翌日の朝。

USNA海軍所属の小型戦艦が日本の領海を航海中、機関トラブルにより漂流していたところを防衛海軍に保護された、というニュースがメディアを賑わした。

当然、兄さんが無関係なわけもない。もっと詳しく知りたいニュースがではあったのだけど、そんな余裕はぼくにはなかった。寝てない。昨日から一睡もしていない。

ピクシーにお願いされていた機能を開発していたからだ。朝までかけて作ったべく、マジ頑張ったと思う。誰か褒めて！

『雪花たん、クンカクンカ』

こんな奴のために一睡もせず、新機能開発という無茶をやり遂げ、朝早くからこうして学校に来て、改造を行っているぼくを誰か褒めて！

『雪花たんモフモフ！このサイズ、この柔らかさ、この可愛さ……愛でるために生まれてきたのか、雪花たんは……なんてこった。神はとんでもないものを生み出しおったで』

その通りですね！なんでこんな変態を生んじやったんでしょうね！そしてその関西弁は何!?

相手にしても疲れるだけなので内心でツツコミをしておく。あつ雪花たん呼びについてはもう諦めました。うん、もういいよそれで…。

「はい、たぶんこれで声は大丈夫だと思う」

「あー、あー、おお！話せる！話せるぞ！さすが雪花たん！私たちにできないう事を平然とやってのけるツ！そこにシビれる！あこがれるウ

！」

ピクシーの声はとてもロボットとは思えない自然な感じに仕上がっている。変声機能もつけたので声は自由に変えられる無駄ハイスペックとなっている。

「そして、表情も」

「こいつ…動くぞ！表情が動く！」

うん、良い仕上がりだ。実に自然な表情、ただ顔パーツのほとんどを付け替えることになったため、車一台買えそうなくらいの費用はかかった。

うん、喜んでいるのは良いんだけど、悪化してるよね、ピクシーの変態性。考えないようにしてたんだけどね、もう目を反らせないくらいの壊れっぷりだからどうしようもなかった。

「ピクシーさん、ピクシーさん、ぼく昨日から一睡もしてないからそのハイテンションちよっと着いていけない」

「奇遇ですね、私も昨日はスリープモードに入ってます」

「なんで？」

「ちよっと動画投稿サイトにハマって見てたら夜が明けてました」

はいアウト！いやぼくもシールズ家にいたころなんかはやったことあるけどさ！影響を受け過ぎだよ！もうぼくじゃ庇いきれないよ！庇う気もなかったけど！

「雪花たんはお友だちだからこんな感じで話しているだけです。達也様の前ではしっかり猫を被ります」

お友だち、と言われれば悪い気はしない。うん、兄さんの前でしっかりしているなら良いんじゃないかな。ぼくもそれなら怒られない

し。

「さて、ピクシー、ぼくもう行くよ。授業が始まっちゃうし、今日は一時間目から体育なんだ」

「素朴な疑問なんですけど、雪花たんは男子、女子、どっちの更衣室で着替えるんですか？」

「えっ？男子更衣室に決まってるじゃん」

でも何でか、ぼくが着替えようとする、皆更衣室の外に出るんだよね。紳士がどうか言って。いじめ？いじめなの？

ぼくがそのことをピクシーに相談すると、器用にも、困り笑顔を作って言った。

「……その、同じクラスの男子生徒は苦勞が多そうですね」

意味が分からなかった。

教えてピクシー①

放課後、兄さんとぼく、姉さんは実験棟の空き部屋にピクシーを連れ込んだ。尋問のためである。ツツキー経由で美術部から借りた人形画のモデル用の制服に着替えさせて校内を移動させたので特に騒ぎにはならなかった。はふ、達也様に見られながら着替えるの…良い！なんて呟く変態がいただけだった。猫被れてないよ！

「犠牲者の血が失われていたのはパラサイトの仕業か？」

「はい」

「…何故、人の生き血が必要だった？」

「失血は意図したものではありません。増殖に失敗した副作用です」

「…詳しく説明し」「お兄様！その前に聞かなければならないことがございませんか!?!」

姉さんが兄さんの言葉を遮るなんて事態はそうそうない。つまり今はそれだけの事態が発生しているということだ。

「何故か、ピクシーの声が私の声と同じに聞こえるんですが私だけでしょうか!?!」

「いや、俺にもそう聞こえている」

そう、ピクシーの声が姉さんなのである。

「お兄様、今日の私は妹モードなんですよ」

この台詞はピクシーだ。どうやら妹モードというのはぼくが設定したお兄ちゃん大好き!というような妹ではなく姉さん、司波深雪をモデルとしたものようだ。うん、お兄様大好き!な妹モードだね。

「あーいやそもそもピクシーはここまでスムーズに話せなかったはず

だし、声を変えることも出来なかったはずだ。それにテレパシーなしで表情を変えられるようだしな」

！
止めて、こっちは見ないで！そうだよ！ぼくだよ！ぼくがやりました

「ピクシー、その声は止めろ。サイキックの使用も許可しているんだ、無理ならテレパシーで良い」

「分かりました。デフォルトの声で話します」

デフォルトの声に戻ったピクシーにどこか安心した様子姉さん。まあ、あのピクシー、どんな変態発言するか分からないからね。自分の声で、それも兄さんの前では絶対されたくはなかったのだろう。あのピクシーは怪しい、と着いてきた姉さんは正解だったようだ。

「先程のぐ質問にお答えしますが、我々の増殖プログラムはまず、自分の一部を切り離し『宿主となる可能性を認めた人体』に送り込むことから始まります。」

分解体は血液中の想子サイオンと霊子プシオンを吸収しながら血管に沿って広がり、自分自身と血液を置き換えることでレシピエントの肉体に浸透していきます。

置き換わった血液は同化に伴う肉体の変容に使用され、同化に失敗すると、分離体と共に生氣としてレシピエントの体外に排出されます」

あのピクシーが真面目に話している…だと!?何の前触れ!?と考えるのは失礼だろうか、いや正しい。

「肉体への浸透が完了すれば、その情報体である幽体も掌握でき、幽体は精神体への通路でもあります。幽体を経てレシピエントの精神体にアクセスし、これと一体化できれば増殖は成功です。しかし残念な

がら、成功例はありませんでした…あつそろそろ真面目モード無理かも」

耐えて！頑張つて！応援してるから！確かにぼくも真面目な空気がって長くもたないけど！ぼくにだけ聞こえるように小さく呟いたピクシーを目で応援する。

「理由は？」

「不明です。私もそれを知りたかった…まあ今はどうでも良いですけど。もつと妄想^{考え}なくちゃいけないことが沢山あります…むふっ」

それはきつと考えなくて良いことだよ！妄想と書いて考えるとは読まないんだよ！

心の中で声を上げながら、その後も続く尋問をぼくはハラハラとしながら見守る。

「…仲間はどの国に何体いる？」

「この身体に宿る直前の時点で七体、自分を含めて八体でした」

「パラサイト同士で交信は可能か？」

「出来ます」

「交信が可能な範囲は？」

「国境の内側であれば交信可能です」

「他のパラサイト現在位置は？」

「仲間との接続が切れているので、不明です」

尋問の成果は大きい。分からなかったことが次々と明らかになっていく。恐らくUSNA軍も掴んでいないような情報ばかりだ。色々使えそう。

「はう…そろそろ無理っぽ」

情報は有益なんだけど、ピクシーさんが限界だ。そろそろ変態が顔

を出してしまおう。

尋問はまだまだ続くというのに。

教えてピクシー②

「達也くん、チョツといい？」

「話を聞くのは構わないから、そう殺気立たないでくれ」

ハリネズミですか、というような刺々しい気配を纏ったエーちゃんがいい感じのタイミングで入ってきた。ピクシーが危なかったので助かった。

「あつゴメンなさい」

本人は意識していなかったようで、兄さんの指摘を受け、恥ずかしそうに顔を赤らめている。きつとこれから話そうとしていることに意識が占められていたんだろう。そんなエーちゃんに兄さんは苦笑いを無理矢理押し止めたみたいで微妙な顔をして、ピクシーにドアの鍵を閉めさせる。椅子から立ち上がって待機しているピクシーの横に姉さんが移動したのは見張りのためだろう。変な発言をさせないための。うん、正解だ。

「話っているのは…昨日の晩、ウチの兄が醜態を晒した件よ。相手は誰なの？」

良く話が理解できないけど、昨日、エーちゃんの兄が何やら、やらかしたらしい。どっちの兄さんかは分からない。何かエーちゃんって姉さんと同じ匂いがするよね、こうお兄様大好き！って感じ。まあエーちゃんはツンデレさんだから、兄上のことなんて好きじゃないんだからねっ！勘違いしないでよねっ！って感じか。

「USNA軍、スターズ総隊長、アンジー・シリウス」

兄さんの端的で、あっさりとした回答はどこか、他人事として聞いて

ていたぼくを一気に覚醒させた。えっリーナさん何してんの。いや任務だったんだろうけど。

「で、それを聞いてどうするんだ？」

「そんなの……決まってるじゃない」

「どう決まっているのか、大体分かる気はするが……止めておけ、エリカ」

「あたしじゃ無理だって言いたいなの？」

怒気、意識的に放出したであろうエーちゃんのそれは武人なだけあって迫力がある。けど、兄さんは眉一つ動かさずに受け止めた。

「無理だな、実力的にじゃなくて、結果的に」

「……どういうこと？」

エーちゃんの怒気は訝しさに変わった。ただ顔は怖い。女の子がそんな顔しちやいけません！

「今朝のニュース、USNAの小型戦艦が漂流していたニュースは見ただか？」

「アレね……まさかっ？」

「おそらく『シリウス』も、もう出てこない。ほじくり返しても、お互いに良いことは無いと思うぞ」

兄さんのアドバイスにエーちゃんはマジマジと化物でも見るような目で兄さんを見詰めた。

…何か後ろの方で『私、完全放置…放置プレイ…良い！深雪様もそう思いませんか？』『静かにしてください！ロボットに言うことではないかもしれませんが、少しは空気を読んでください！』『そんな機能はありません、キリッ』というような会話が聞こえた気がしたけど無視だ。このシリウスな場面でそんな会話が聞こえてくるわけが

ない。幻聴か。疲れてるな。

「貴方……何者なの……？あんな事、少なくともウチには……千葉には、無理だわ……いえ、ウチだけじゃない。五十里だって、千代田だって、十三束だって、きつと無理。何をどうしたのか知らないけど、あんな結果が出せるのは十師族の、それも……特に力を持っている一族、首都圏を地盤にしているか、地域に関係なく活動出来る家」

「エリカ、もう止せ」

「北陸が地盤の一条は除くとして……七草か、十文字。あるいは……四葉。達也くん、貴方まさか」

「止せと言った」

「っ！」

声を荒げたわけじゃない。声の調子や大きさではなく、そこに込められた意思が、エーちゃんに沈黙を強制した。

『きゃー格好良い！声に込められた意思が私に向けられていたらと思うと……ゾクゾクします……濡れま『雪花！ちよつとこっちに来てコレをどうにかしてください！』』

何も聞こえなかった。けど、そつと魔法でこちらに声が届かないようにしておく。これで兄さん達のシリアスは保たれるだろう。いや何も聞こえなかったけどね？

「それ以上は、お互いにとって不愉快なことになる」

「……ゴメン」

「分かってくれれば良いさ」

越えてはいけない境界線。ぼくですら四葉と関わり合いになるまでは知らないふりをしていた真実。それを口にしてしまえば、今の関係はなくなる。エーちゃんも悟ったはずだ。真実に気がついたなら、

自分が今、いかに危うかったのかを。

「エリカ、シリウスが誰かなんて詮索しても、もう誰も特をしなない。だから、その件は御仕舞いにしよう」

「……そうね」

兄さんが話をすり替えたのはエーちゃんのためだろう。それが分かったからエーちゃんは提案に抗わず領いた。

その後、エーちゃんはパラサイトの残党について、話し、隠し事な
しで協力する旨を伝えるとエーちゃんは部屋を出ていった。
さして。

「あつ、ぼくエーちゃんに伝えることあったんだつたよ。ちよつと
行ってくるね」

ぼくにピクシーを指差して何やら口をパクパクさせている姉さん
をスルーして、ぼくは部屋を出た。何も聞こえなかつたから仕方な
い。



「エーちゃん、ちよつと良い?」

ぼくの声に一瞬、ビクツと背中を震わせたが、振り返ったエーちゃ
んはいつも通りに見えた。

「…あんたも知ってたの?」

「知ってたよ、と言ってもぼくにそつちの血は入ってない。兄さん達
とは血が半分しか繋がっていないからね」

ぼくの答えにエーちゃんは唾然としていた。思えばこの事実を知

る人間は身内以外いかなかっただろう。四葉によって巧妙に隠されているのだから当然か、USNAでさえ暴けなかったようだし。

「まっそつちの話はお互いに不利益しかないからこれ以上止めとくよ。それにぼくはエーちゃんに用があったから追いかけてきたわけだし」

「用？」

速さ、という面でぼくがエーちゃんに優っているわけがない。そもそもぼくに武術の心得はない。ハゲの所で修行させられそうになつたときもパレードまで使つて脱走したくらいだ、当然、鍛練なんてしていない。

「……どういうつもり？」

それでも、ぼくはエーちゃんの喉元に小刀に変形したCADを突きつけていた。エーちゃんの手には武装一体型CADである警棒っぽいものが握られているがそれだけだ。ぼくがエーちゃんに近づき、CADを突きつけられるまでにエーちゃんはCADを取り出すことしか出来なかった。幻想眼で完全な隙を突いて、魔法で加速した結果だ。まあ、エーちゃんの精神状態が正常だったら無理だったかもしれないけど。

「ただの警告だよ。無いとは思うけど…アンジー・シリウスを、害するようなことはしちや駄目だよ」

「なんで…それをあんたが？」

「エーちゃん、君は気にせず頷いてくれれば良いんだ。じゃないと……ぼくはとっても悲しい思いをすることになる…だから、ね？」

にっこりとぼくが笑うと、エーちゃんは頷いた。

「…あんだ、本当にそっちの血は入ってないの？」

エーちゃんが怒っているというか、呆れているというか、そんな微妙な顔で言った。

「入ってたら、こんな良い子に育たないよ」

ぼくは飛びきりの笑顔でそう答えた。

作戦開始

パラサイトには指揮命令関係は存在しない。

じゃあどうやって、組織的な行動を維持していたのかというと、そもそもパラサイトは厳密に言うとな人一人が完全に独立した個体ではないらしいのだ。個別の思考能力を持ちながら、意識を共有していた。

ただ、生命体を宿主とした場合、その最も根源的な欲求に影響を受けることは避けられず、生き延び、仲間を増やすという共通する意識の中で統合され、行動を決定づけていた。生命体として最も優先させる欲求に従い、生存と自己複製を目的として行動していたのだ。

重要なのはピクシーにパラサイトが宿った、現・斉藤。ピクシーは非生命体に宿ったがためにその共通の目的から外れた異端な存在であるということだ。

そして兄さんはその上でこう考えた。

『パラサイトはピクシーを放っておかない』

兄さんの推測では、意識を共有したパーツのリンクが突然切れれば、それを回復しようとするはず、そのために何らかの形で接触をしてくるというのだ。

というわけで、午後七時。

既に生徒は全員下校し、教職員もごく一部が残っているだけのこの時間、ぼくは兄さん、姉さんと共に学校に来ていた。ピクシーを餌にパラサイトを1体でも倒そう、という作戦のようなんだけど、正直ぼくは早く帰りたい。

「エーちゃんとミツキーにサポートを依頼したなら、ぼくいらんないじゃん、^{かえり}帰りたいー」

「……お前にはピクシーを任せる」

「嫌だよ！兄さんがなんとかしてよ！」

どうやらぼくはピクシーのお守りとして連れてこられたらしい。まあ、兄さんは他の目的もあってぼくを連れてきたんだろうけど。ピクシーはついで、だろう。だがついでが辛すぎる。

どうにか帰ろうとしていると、ほののんが到着、けどまさかの制服だった。制服だちょっと不都合だし、アクシデントも予想されるのでピクシーを拾ったらほののんの家に寄ることになった。ほののんが嬉しそうだ。

そうして、ピクシーを拾うためにやってきたロボ研のガレージ。当然、鍵が掛かっているので中からピクシーに開けてもらう。カチャリ、と鍵の開けられた扉を兄さんが開け――

「おかえりなさい、アナタ。お風呂にする？ご飯にする？それとも……ワ・タ・シ？」

――すぐ閉めた。

「雪花、 出番だ」

「実家に帰らせていただきます」

そんな風に断ってみるも首根っこを捕まれロボ研のガレージに放り込まれた。酷い。

当然、放り込まれた先にはピクシーがいる。何やら顔を赤くしてクネクネしていた。

「全く達也様は照れ屋さんですね、まあそういうところも可愛いわけですが」

「違うよ！全力の拒否だよ！」

「ああ、ツンデレですね、分かります」

「ツン百パーセントだけどね！」

「最高のご褒美ですね、むふ」

「兄さーん！助けて！帰らせてー！」

ガレージから出ようとしますが、まさかの開かない。

外側から扉を押さえられているようで、ドンドン叩いてみてもピクともしないのだ。鬼か！

「なんですかー雪花たんまでツンデレですかーこのーモフモフしちゃうぞー！」

「うわ、来るな変態！ちよっ…イヤー！」

「この柔らかさ、頭の撫で心地、何度モフっても飽きませんね、最高ですよー！雪花たんクンカクンカ！」

もうやだこのピクシー。ぼくが遊び尽くされ、ピクシーが落ち着いたころ、兄さん達は入ってきた。兄さんは無表情、姉さんはピクシーとアイコンタクトして分かるわーみたいな感じで頷いており、ぼくのことを心配そうに見てくれているのはほののんだけだった。優しさが染みる。

「ピクシー、これに着替えてくれ」

夜中にメイド服のピクシーを連れて歩くわけにはいかない、というわけで着替えさせるのだ。同じ理由でほののんの制服もNGというわけだ。

「お兄様っ？何を平然と見ておられるのですか！」

「そうだ、そうだー」

「キヤー！達也さんのエッチ！」

嬉々として服を脱ぎ出したピクシーをぼーっと見ていた兄さんに

姉さんからお叱りの言葉。ぼくも便乗しておく。ピクシーの言動はスルーの方針だ。でも一つ言わせてもらおうと、ぼくも男の子だよ？誰からも何も言われなかったので自主的に後ろを向いた。ちよつと寂しい。

「何でも似合う、自分が怖い…!」

着替え終わって馬鹿なことを言っているピクシー。うん、それはピクシーのデザイナーさんが頑張っただけだよ。

「ピクシー、ついてこい」

そう言いながら、ぼくに目配せをする兄さん。はいはい、ピクシーの相手はぼくですね、グレて良いですか。

奴隷のように命令されると……はう、なんて言っているピクシーに頭をポンポンされながら、ぼくはため息を吐いた。

忠告

着替えのため、一旦ほののんの借りている賃貸マンションによってから、ぼくたちはキャビネットに乗り込んだ。

「お兄様、これからどちらへ向かわれるのですか？」

「青山霊園だ」

ほののんが顔を引きつらせた。こんな時間に霊園に行くとなれば女の子として当然の反応だろう。うん、そんなほののんのためにぼくは言わなければならぬ。

「よし、帰ろう」

「却下だ」

「兄さん、この時間じゃもう閉園しているんだよ、行くだけ無駄なんだよ」

「中には入れないだろうな、だがそれならそれで構わないんだ。近くにいれば向こうから出てくる。そのためにピクシーを連れていくんだから」

ピクシーを訊問した兄さんは、他のパラサイトは今のピクシーの在り方を許容しないだろうと考えている。それはピクシーが変態だからというわけではなく、生命体として歩調を合わせている他の個体にとって、自己増殖の欲求を失ったピクシーは外れてしまった存在だからだ。自己防衛と種族維持、この二つの基本衝動に支配されており個体数が極めて少数のパラサイトは、ロボットの中にいる仲間を取り戻そうとするだろう。

「雪花…もしかして怖いのか？」

「ああ、そういえば雪花はこういうのが苦手だったな」

「ちやつちやうわー！別にビビってなし？お化けとか全然大丈夫だし」

「？むしろ食べちゃうし？」

「そうか、なら問題ないな」

嘘です。超苦手です。だってぼく自身が転生というものを経験している以上、そういうのがいてもおかしくないじゃん！絶対いるよ幽霊！幻想眼でも見えないけど、それが余計に怖い。嫌だよー行きたくないよー。

「ピクシーは怖くないの？」

「キヤー怖い、と言いながら達也様に抱きつく所までは妄想しました」

全然怖くないんですね、分かります。

でも今回は頼りになるので良しとする。ツツコミはなしだ。

「着いたらさ、手…繋いでも良い？本当はぼく、怖い」

兄さん達には怖くないと宣言した手前、頼めないのてこっそりピクシーに頼んだ。今から恐くてちよつと涙目である。

「ぐはっ！雪花たんが私を萌え殺しにくる件について」

「ピクシー？」

「あつ繋いでも良いですよ、大歓迎です」

ピクシーの意味不明な言動も今は気にならない。来るなら来いよ、幽霊！この変態を前にどこまでやれるかな！到着までの間、もしも幽霊が出てきた時のためにピクシーを盾にするイメトレをすることにした。



夜もすっかり更けた、人が急に訪問してくるには些か遅い時間、バ

ランス大佐が滞在している大使館が用意した週契約家具付き賃貸マンションに面会を求めて訪れたのは四葉家のエージェントだった。バランスがここに滞在していることは秘密にされており、部外者がここに会いに来るということは、USNA軍の情報封鎖を突破したということであり、バランスは多少の緊張に身を強ばらせたが、ドアホンのモニター映像を見て完全にリリースした。そこに映っていたのはクラシックなドレス姿の、可憐な少女だったからだ。ボディガードを二人、連れているようだが、おそらくはミドルティーンの少女がこの場にいるという状況に、現実感が侵食されていくのを止められない。

日本の、四葉。

魔法に関わる者にとって、特に魔法の軍事利用に関わっている者にもって、ある種の不可侵領域^{アンタツチャブル}。

その四葉からのお願いはシンプルに一つ。

日本の非公開戦略級魔法師に関する調査とその確保、または無効化作戦を中止すること。

遠慮のない要求にバランスは了承した。

提示されたアメはそれほど美味しいものだったのである。ムチと
いう名の脅しが痛かったのもあるが、決めてはそれだろう。

四葉との個人的なコネクション。

軍内部で強力な武器となるアメにバランスは了承へと踏み切った。

「最後に一つ、四葉家当主から貴女へ伝言を預かっております」

黒羽亜夜子と名乗った少女が契約書にサインを終えたバランスに言う。

バランスは四葉家当主、という言葉に身を固くし、心なし姿勢を正した。

「アンジー・シリウスを軍から遠ざけ、今後一切干渉を避けることをおすすめます…とのことです」

「どういう…ことだ？シリウスはスターズの最大戦力、手放せるわけがない」

「さあ？私はただのメッセンジャーですから、当主様の心の内は分かりません…ただ」

婉然と亜夜子は微笑む。

「当主様は何か起きると確信を持っているようでしたよ？珍しいくらいの上機嫌でしたし」

亜夜子の言葉を聞いたところでバランスの意思は変わらなかった。アンジー・シリウスを手放すわけにはいかない。それは当然の考えだったのかもしれない。

しかし、この時がバランスにとって最後のチャンスだった。

その事をバランスが知るのは少し後のことである。

ピクシーの意思

ほののんが怖い。

「達也さん、私達を見張っていた人たちには、全員寝てもらいました」
「ご苦労様」

あの兄さんが、得意気に告げるほののんを前に、顔を引きつらせている。

青山の高架駅から地上第一層の歩道に降りた途端に感じた監視の目。徐々に近づいてくる異質な気配、パラサイトの相手をするのに人間の監視者は邪魔だ、と兄さんは考えたはずだ。しかし、今さらではあるが街中で勝手に魔法を使うのは違法行為であり、魔法を撃ち合っている姿を見られるのは都合が悪い。だから兄さんはぼくたちに監視者の存在を伝えたのだ。監視者の目を振り切るまで不用意に魔法を使わないように。言われなくても分かることだし、兄さんはそれを言葉にしようとしていた。けど、それよりほののんの行動は早かった。

ほののんの得意魔法は光波振動系。簡単に言うとうと光を操るのが得意なのだ。兄さんから監視者の配置を聞き出し、自分でも光を利用して位置を確認すると、ほののんはいきなり、相手の目の前に、激しく点滅する光の塊を作り出した。

これがとんでもない魔法なのだ。兄さんが焦るくらいだし、ぼくもフアツ!? ってなったからね。

洗脳用魔法、『邪眼』の光。それがほののんの魔法だった。暗示効果は「眠らせる」だけだったけど、万が一本物の警官に捕まったら確か実刑だったはず。

それをほののんは躊躇いなく使った。実はこの面子で一番思い切りが良いのはほののんかもしれない。いや、単に舞い上がっているだけかもしれないけど。

取り合えずぼくはほののんを怒らせないようにしようと決めた。



「達也様、「パラサイト」三体が接近中です」

ピクシーの報告に兄さんは足を止め、携帯端末でナビゲーションシステムから取得した現在位置を、エーちゃんとミッキーのもとに送った。二人は千葉家の手勢を引き連れてすぐにこの場に向かってくるだろう。予定では彼らが配置についてから、パラサイトの捕縛へ移ることになっている。まあ相手の出方次第では、このまま戦闘に入ることもあるだろうけど。

「司波達也、話がしたい」

パラサイトに憑依された男はマルテ、と名乗り話し合いを求めた。

「我々デーモンは、君たち日本の魔法師に対して、今後、敵対行動をとるつもりはない」

どうやらパラサイトは自分たちのことをデーモンと呼称するらしい。横で「可愛くない」なんて言ってる例外もいるが皆で相談して決めたのだろう。パラサイト、よりは強そうな呼び方だと思う。

「その変わり、そのロボットを我々に引き渡してもらいたい。君たちがどう考えているのかは知らないが、我々は生物だ。そして我々相互の繋がりには君たち人間よりずっと強い。生物でありながら生命のない器に囚われている同胞を解き放ち、取り戻したいのだ」

言っていることは至極まともだ。ロボットに囚われた仲間を助け

たいつてことなんだから。でもそこに本人の意志がなければそれは偽善でしかない。まあ、ぼくは偽善であれ囚われた仲間は無理矢理にでも助けるけどね。それが家族であったなら、一国を相手にしても。

「しかし、どうやって」

「機体を破壊する。現在の宿主を失えば、我々は新たな宿主に移動することができる」

「…ということらしいぞ、ピクシー。お前はそこから解放されることを望むか？」

「なるほど、確かに生物でありながら生命のない器に宿ることはいけないかもしれない。仲間を救いたしたいという気持ち、素晴らしい」

ピクシーは真剣な顔、真剣な表情で力いっぱい言った。

「だが断る！」

言い終わったピクシーは満足気な顔で得意気に理由を語り始める。シリアスな雰囲気なのでツツコミは自粛した。

「私が元々どのような存在で、私の核を成すこの願いが何処から得られたものかなんて、ぶっちゃけどうでも良いことです。私は知ってしまった、萌えの素晴らしさと愛の偉大さに。故に私が私でなくなるのは、嫌です」

ピクシーの言葉を、兄さんだけでなく、三体のパラサイトだけでなく、ほののんも、姉さんも、そしてぼくも、聞いた。聞いた上で全員が微妙な顔をしている。おい、パラサイト、正直もうこいついらね、みたいな顔を止める！得意気だったピクシーが拗ねてるだろ！構ってやれよ！そして兄さん！一瞬、あげちゃってもいいかなって思ったで

しよ!?

そんな皆の反応にピクシーはぼくの所に来た。本気で落ち込んでいるようなので慰めておく。よしよし、これを反省して今後は立派なロボットを目指すんだよ。

「…交渉は決裂だ…武器を捨てて大人しく投降しろ。そうすれば痛い目を見なくて済む。幸せな実験動物としての待遇を保証するぞ」
「ほざけっ—」

起動式の展開もなく、魔法発動の兆候が現れる。パラサイトは、魔法を使うのに起動式や呪文の類を必要としないらしい。なんてチート! あつぼくもか。

そして、この場にはもう一人、公式チートがいるわけです。

パラサイトの魔法が発動するより早く、兄さんの「分解」が事象の改変するための情報体を破壊する。情報体の直接分解、グラム・デイスパーション『術式解体』だ。

思い掛けず魔法をキャンセルされたマルテは予想外の事態に立ち竦んでしまったのだろう。その隙を見逃す兄さんではない。四肢の付け根を撃ち抜き、マルテを路上に転がした。

だが、問題はこれからだ。体を破壊しても別の宿主を求めて飛び去っていくだけ、凍らせても自爆され結果は同じだ。自爆する可能性が大いにある以上、拘束は出来ず、そもそも倒したところで別の宿主に宿るだけ。捕獲しようにも手がないということに、今気がついた。ミツキーが古式魔法の封印術とか使えるならそれを待たないと。けどそれは余計な心配だったようだ。

兄さんの左手から凝縮された想子の砲弾サイオンが発射され、パラサイトの胸を打った。

瞬間、マルテは身体を激しく痙攣させのたうち回った。ぼくの眼には憑依されたパラサイトが派手に動き回っているのが見える。

「お兄様！」

こんな隠し球を持っていたとは流石ですお兄様！と感心している余裕はなかった。姉さんの切羽詰まった声に振り返ってみれば、服を凍らせて動きを封じて、相手の魔法を領域干渉で抑え込んでいるマジ女王様な姉さんと、その向こう側で武装デバイスに翻弄されるほんのと、それを、守るピクシーの姿。

「ほのか！」

「大丈夫です！」

大丈夫、とほののんが強い口調で応えるが、今日のほののんは何をするか分からないのでCADを準備しておく。ホワイト・ナイトメア白い悪夢（兄さんたちがそう呼んでいるのが気に入ったのでスノー仮面から改名、水波ちゃんからは不評）に変装したとき専用のCADも作ったので安心してスノー・ホワイトを使える。

が、やらかしたのはピクシーだった。

ほののんから足手まといにはなるまい、とする強い気持ちが見え、それは瞳に光を与えた。サイオン想子波の急激な高まり、瞳と、そして水晶の髪飾りからだ。

直後、強力なサイキックがピクシーから放たれた。

ほぼ制御されていない荒々しい事象改変の力。それは姉さんの構築していた干渉力の力場すらも揺らがした。それに合わせて兄さんは抜け目なく、姉さんが相手していたパラサイトへ想子の塊を撃ち込んだ。マルテ同様、のたうち回るパラサイト。大変申しわけないのだが実験のためにもう一発、ぼくからも想子の塊をプレゼントした。兄さんを見てたら出来るような気がしたので使ってみたかったのだ。ぼくの追い打ちにピクピクと身体を跳ねらせ、泡を吹いているパラサイトだが、もうぼくの関心はそちらに向いていなかった。

ピクシーのサイキック、『サイコキネシス』が放出された、その場。いきなり強力な想子波サイオンに曝されて、漫画のように目を回しているもののんと、ドヤ顔のピクシーの姿。
二人と相対していたパラサイトは、視界の外へ吹き飛ばされていた。

ヤバイ、ピクシーが格好いい。

呼び出し

パラサイトを三体確保してすぐエーちゃんとミツキー、それにレオぼんの三人がやってきた。リハビリがてら着いてきたようだけど、なんだか久しぶりな気がする。

「じゃあここは、あたしとミキと、ついでにレオで引き受けた。達也くんたちは先に帰った方が良いでしょう」

派手に魔力を撒き散らしてしまい、ぼくら以外のパラサイトを追う勢力が寄ってくるのは明白。急いで対処しなくてはならない。けど、ここは三人に任せることにする。ほののんの着ていたハーフコートに斬新なスリットが複数追加されていたり、ピクシーの服が裂けていたりするからだ。どうやらミツキーの家の倉に運ぶことが決まっているようだし、ぼくたちは大人しく先に帰ることにしたのだ。吉田家にわざわざ運ぶということはパラサイトの魔法を封じて拘束する準備が出来ているということなのだろうから。

というわけで情報端末で呼び出した、自動運転のコミュニターに乗り込み駅からキャビネットに乗り換えた。ほののんの住むマンションが自動運転の範囲から外れてしまっているからだ。奇抜なファッションになってしまっているほののんを一人で帰すわけにはいかない。

それにほののんとピクシーの関係も説明して置かなくてはいけないし。といっても説明するのは兄さんで、ぼくは気がついていない振りをするわけだけだ。

ほののんに説明する兄さんの言葉にひたすら頷くという作業だ。

ピクシーが念動を放つ直前、ほののんからピクシーに想子が供給されていた。まるで起動式を展開するために、CADへ想子を注入するように。ほののんとピクシーの間に繋がったパス、から察するに恐らくその媒体は髪飾り、というかその水晶。

兄さんの見解もぼくとほぼ同じもので、それを聞いたほののんは怯えたり、驚いたり、大忙しだ。

ピクシーは珍しく大人しいと思ったら、自分の必殺技名を考えていたらしい。ないとは思うけど、パスのせいでほののんが汚染されないことを願わずにはいられない。



ほののんを家へ送り、ピクシーを元のガレージに置いてきて、ぼくが家に着いたのはギリギリ日付は変わっていないものの、真夜中と言って良い時間帯だった。そんな時間ではあるけど、ぼくの両親は二人とも帰ってきていなかった。恐らく職場に泊まるのだろう。最近忙しいのか良くあることだった。

といっても、沙世さんと水波ちゃんがいるため、ぼくが一人になることはない。

ぼくを待つていてくれたのだろう、沙世さんと水波ちゃんはまだ起きていた。二人の間には完全に上下関係が出来上がっているようで、水波ちゃんは沙世さんには従順だ。うん、沙世さんなら兄さんにも勝てるんじゃないかな。そんな馬鹿なことを考えていたぼくだけど、二人が妙に深刻そうな顔をしており、何かあったのかと不安になつてくる。

「何かあったの？」

「…四葉から呼び出しです。前回の件は水に流すが、今回の呼び出しに応じなければ、それ相応の対応をする」と

完全に予想外の報告に二、三秒フリーズする。

水波ちゃんを五輪の養子にし、ぼくはそれが出来るくらい五輪と仲が良いんだぞ、というアピールをし、七草の家へ行き、沙世さんの手引きもあり、協力者となる人員を得て、七草との繋がりもアピールした。これ以上四葉がぼくに手を出してくるようなら、本気で戦うこと

を考えなくてならないわけだけど。

「こちらを害する意思はないように思いますが」

水に流すと言っている以上、戦闘はない…はずだけど罨…にしては直接的過ぎる気がする。

「行くうか。ただ、もしもの時を考えて沙世さんはここに残って。その日の内に戻ってくるつもりだけど、ぼくらが離れている隙に誰か親しい人間が襲われるかもしれない。牽制の意味も込めて一人は残しておくべきだからね」

考えてもどうせリスクは無くならない。なら、リターンだけを考えよう。ただ呼び出しに応じれば四葉家を半壊させたことをチャラに出来るのだ。美味しいと思わざるを得ない。

「水波ちゃんも残って良いんだよ？牽制はいくらいても良いし、水波ちゃんなら安心して任せられるからね」

「一人で山梨まで行けるんですか？四葉本家は山の中で地図にも書かれていないので、方向音痴の雪花様じゃ遭難してもおかしくないですけど」

「う、言い返せない」

「はあ、雪花様を一人にしたのでは心配で夜も眠れませんよ、だから私も行きますよ。全く、駄目な兄です」

四葉に水波ちゃんを、連れて行くのは酷だろうと思ったけど杞憂だったらしい。優秀な妹を持つと兄は大変である。

「水波ちゃんは最高の妹だね」

「…前言撤回です。ちよつと駄目な兄、です」

恥ずかしそうにそっぽを向く水波ちゃんは耳まで真っ赤で中々可愛かった。

沙世さんがニヤニヤしながらこつちを見ているのに気がついて、さらに赤くなったのがよりグツドだ。

明日、何があっても水波ちゃんだけは守る。

ぼくはそれを見ながら、そつと心の中で誓った。

悪魔の誘い

ぼくが半壊させたからか、前より少し大きくなった気がする四葉本家。相変わらずの重い空気はこの場だけ重力が違うんじゃないか、と疑いたくなるくらいだ。

「今夜、アンジー・シリウスが処刑を行うわ。防諜第三課のスパイ収容施設を襲うのよ」

前回同様、謁見室と通称されているらしい大応接室にて、四葉真夜と対面する。どういうわけか、四葉真夜は一对一での対話を望んできたため、水波ちゃんは別の部屋で待機だ。水波ちゃんに何かあったときのために、緊急連絡手段は用意してある。一对一はこちらも臨むところだ。

とはいえ、最初に飛んできた話題がアンジー・シリウスの処刑について話だったのは予想外だった。

実は朝、パラサイトを国防軍情報部防諜第三課に奪われたらしい、という連絡を兄さんから受けていた。パラサイトの中に脱走魔法師が含まれていたのなら、その可能性は十分にある。ただ、防諜第三課のスパイ収容施設とかいう場所にパラサイトが拘束されていることをUSNA軍が知れたのなら、だ。これまでの動きを見るに日本での諜報能力はさほど高くない。昨日の今日で情報を得られるとは思えない。

それに、このアンジー・シリウスの任務をぼくに四葉が伝える意味が分からない。

「何故、私がこのことを貴方に話したのか不思議かしら？」

「不思議ですね、そもそもアンジー・シリウスが今夜、襲撃するというのが不思議です。USNA軍にそこまでの諜報能力はない、と考えていますから」

「アンジー・シリウスが今夜襲撃するのは間違いないわ。だって、パラ

サイトの情報を与えたのは私ですから」

妖艶な笑み。

まるでこちらの動きを全て操っているかのような態度。その黒幕然とした態度がぼくは嫌いだ。

「USNA軍を…アンジー・シリウスを利用するんですか」

「ふふっ、もう一つの貴方の疑問に答えておきましょう。貴方にこの情報を与えたのは、きつと貴方が貰って良かった、と思う情報だったからよ。シリウスと貴方の関係なら、ね」

「シリウスに手を出せば…」

「貴方と敵対する気はないわよ、それどころが貴方の願いは大概叶えてあげるわよ?」

全く四葉真夜の意図が分からない。

敵意どころがやけに好意的だ。万年独身!とか言っても許されそうだ。

「何か言ったかしら?」

「いえ」

流石に無理だった。ごめんなさい。

「さて、実は貴方を呼び出したのは、情報を与えるためというより、こうして、また直接顔を見たかったからなのよ。ふふっやっぱり画面越しで見るより可愛いわね、部屋に飾っておきたいくらいだわ」

ゾゾツてなった!えっ、ぼくが思ったのと違う!もっとうお互いに腹の探り合いをする的な展開を予想していたわけなんですけど!

「冗談はさておき、直接顔を見ておきたかったのは本当よ。前はこうしてゆっくりお話をする時間はなかったことですしね」

本当に冗談なら、そのねっとりした視線を向けるのを止めて欲しい。

意外と良く話す四葉真夜と、その後一時間ほど話した。大体、向こうが話題が振ってきてぼくがそれに答えるという感じだ。

「あら、そろそろ時間ね、私はこれで中々に忙しい身の上なのよ、折角の機会なのだけど、これまでのようです」

話したことは本当に他愛もないことばかりだったが、四葉真夜としては満足だったのだろう。残念そうな顔をしつつも、どこか上機嫌だ。

「最後に一つ、貴方に言っておくわ。貴方が願うのなら大概のことは叶えてあげる。だからもし、困ったことがあれば、ここへいらっしやい」

謁見室を出るときに、四葉真夜はそうぼくに言った。それはまるで悪魔の誘いのようではあったが、何故か悪意は感じなかった。

だからぼくは素直に頷いて、今度こそ部屋を出た。

疑問の残る対面ではあったが、それを気にしている余裕はない。

すぐに帰って準備しなくては。

アンジー・シリウス、リーナを止めるための準備を。

奥の奥の言葉

アンジェリーナ・クドウ・シールズは自分の魔法技能に絶対の自信を持っている。体術で、操縦で、知識で、他の何で負けても魔法でだけは負けたことがなかった：ただ一人を除いて。彼女の幼馴染みであり、家族であり、兄であり、弟であり、友人である、雪花を除いては。

雪花は天才だった。否、化物だった、人外だった。

リーナが何度も訓練し、苦勞して得た魔法を、雪花は見ただけで覚えた。それも、かなりの精度で。

雪花は収束系魔法と精神干渉系の魔法に大きな適正を持っていたが、「魔法使いっぽいから」という理由で本人は派手な魔法を好んだ。自分が得意気に見せた魔法を次の瞬間にはさらに高い精度で真似されるなんてこともあつて、幼きリーナはへこんだりした。

嫉妬したこともある。それが妬みから恨みに変わらなかつたのは相手が雪花だったからなのだろう。リーナは雪花の才能がまるで自分のことのように嬉しかった。そしてそれに追い付こうと、努力を重ねた。

努力の末に辿り着いた、『シリウス』という地位。

スターズの総隊長にして、世界最強の実戦魔法師という肩書き。

当然、USNAにおいて、こと魔法に関しては決して負けなかつた。最強だったのだ。

この、日本に来るまでは。司波兄妹に出会うまでは。

深雪との一騎打ち、不利な条件だったとはいえ正面から戦った。そして敗北し、雪辱を誓い、闘志を燃やした。自分より上がいることは知っていた。同年代で自分より上がいることも。それでもなお、敗北というものがリーナにもたらしたものは大きい。自分を見つめ直し、魔法技能のさらなる向上をもたらしたことだろう。

司波兄弟の弟が雪花だということを知らないまままでいたのなら。

揺らいだ、迷った。

それでも全てを断ち切って、アンジー・シリウスとして任務を遂行することを選んだ。戦術魔法兵器ブリオネイクまで使用して、一对一の状況に引きずり込んで、有利な状況での戦いだった。

負けるわけがなかった、負けるはずがなかった、負けてはいけなかった。なのに、結果は完敗。

負けた、それはつまりリーナが達也よりも弱いということだ。少なくともリーナはそう考えた。

達也は自分より強く、深雪も自分より強い。そんな二人に庇護されている雪花に私は必要なのだろうか。

アンジー・シリウスの存在意義を揺るがす程の敗北も、アンジェリーナ・クドウ・シールズにとって優先される思いはそれだった。

シリウスの看板は、最強の肩書きは、リーナが力を求めた結果、ついてきたものに過ぎない。

そして、彼女が力を求めたのはただ一人を守りたかったからだ。が、そのただ一人は既に自分より強い者に守られている。幸せを掴んでいる。

自分はただ、それを壊そうとしただけ。

全て、無意味だった。

アンジェリーナ・クドウ・シールズが積み上げてきたものは全て、既に雪花は必要としていなかった。

もうどうでも良くなった。

自分に残ったのは、ガタガタのシリウスの称号と、処刑任務を達成する度に大きくなっていく胸を締め付ける痛みと、こうして、それでも処刑を繰り返さなくてはならない、義務だけだった。

頭に響く警報。

立ち塞がった兵士を行動不能にする。

目の前には複雑な紋様がビツシリと刻まれた扉。

大ぶりのナイフを四度振るうと、扉は廊下へ向かって倒れた。

扉の向こうは小さな部屋。

そこに今回の任務の対象、パラサイトに犯された元USNA軍所属の魔法師がいるはずだった。そこでまた、一つの任務を終え、空つぱのアンジー・シリウスは、罪の痛みを忘れ、色のない、空虚な朝を迎えるはずだった。

『残念ながら、パラサイトは既にここから運び出した』

何も無い部屋にいつか見た白い仮装をした人間がいた。

『ホワイト・ナイトメア白い悪夢』と呼ばれる、目的も素性も分からない謎の人物。

『ある人物の話をしよう。その人物はとてがんばり屋で優しくて明るくて、星のように輝く笑顔でこっちまで笑顔にしてしまうような、そんな少女だった』

ここに対象がいないと分かった時点で、対象の情報を知っているであろうこの人物から情報を聞き出すべく、行動不能にするか、その場で尋問するか、それが困難なら撤退をするべき状況。

リーナはしかし、その場を動けなかった。力なく握った自動拳銃を下ろしたまま、立ち尽くす。

『はたしてその少女が、自分の持つ力に怯え、涙を流す、そんな少女が、今、銃を持ち、人の命を奪うことに何の躊躇いもなく、また、何の感情もなく、苦しまず悲しまず、その引き金を引けるのだろうか？』

ズキズキと、どこの誰とも知らない人間の言葉に胸が痛む。

『そんなわけがない。苦しい、悲しい、辛い。』

あつたはずだ、そんな感情に押し潰されそうになって、それでも涙を堪えた日が、自分を責めて罪を課して傷ついた日が、その少女には……キミにはあつたはずだ』

『ホワイト・ナイトメア白い悪夢』が白い仮面に手をかける。

リーナは動けない。それどころが、仮装行列を解き、その素顔を小さな仮面で覆い隠すだけでほとんど晒していた。

「頑張った。凄く頑張った。世界中の何人が、誰が、否定しようと、君自身が否定しようと、ぼくが肯定する。だから、もう—自分を許してあげよう」

雪花がいた。

ぎゅっと抱き締められ言葉を聞くと、頬を涙が伝った。自分より小さいそれは、心を包み込んで癒し、溜め込んでいた涙を、吐き出させる。

決して、心の中でさえ、言葉にすることのなかった、思っではいけないと、考えてはいけないと、仕舞い込んで、押し込んで、鍵をかけていた、そんな言葉が、少女の口から、紡がれた。

「…助けて」

「任せろ」

一人の少年は、ただ一人の少女のために、

躊躇いも、恐れもなく、ただ、湧き出る感情のままに、

一国を敵に回した。

かつて、ただ一人の少女の復讐のために、
一族のように、
一国を滅ぼした、とある

誘拐

ヴァージニア・バランス大佐は焦っていた。

侵入さえ成功してしまえば、後は引き金を引くだけの任務。何せターゲットは既に拘束されており、身動きが取れない格好の獲物なのだから。

だというのに、アンジー・シリウスが消息を絶った。

日本での任務では、失態が続いたとはいえ、『シリウス』は伊達や酔狂で得られる称号コードではない。

アンジー・シリウスには間違いなく、世界最強の実戦魔法師を名乗れるだけの力があるのだ。

そのアンジー・シリウスから既に十分の間応答がないという不測の事態。この十分間の間、バランスは何もしていなかったわけではない。

「駄目です、何も映りません！恐らく全てのカメラが破壊されています！」

少しでも中の様子を知ろうと、防諜第三課のスパイ收容施設にリスクを犯してハッキングを仕掛けていた。防諜第三課は決して無能ではない。スターズであっても侵入には相当の、それこそアンジー・シリウスだからこそ破れた程の、警備態勢が築かれていた。そこにハッキングを仕掛けるというのは当然のごとく大きなリスクを伴い、通常時であれば十分でハッキングすることなど不可能である。

「向こうも混乱している……というわけか」

侵入者、アンジー・シリウスを捕らえたというのなら既に混乱はある程度収まっているはずだ。しかし、実際は今だ混乱の渦の中にある。

「一体何が起きているというのだ」

分からないことが多すぎる。想定外、そう言うにはそもそも前提が覆っている。まるで、チエックメイト寸前のチエス盤をひっくり返されたかのように、バランスの中で組み立てていたものがバラバラに崩れ、散らばる。作戦は失敗。撤退しようにも最重要であるアンジー・シリウスがどうなったかも分からない事態でそれをすべきかは、未だ判断に迷うところであった。

『今夜は綺麗な月ですよ?』

―天井が無くなった。

バランスら、シリウスのバックアップチームが乗り込んでいたワゴン車の天井が唐突に、消え去ったのである。直後、何か重い金属が地面に叩きつけられた音が響く。

『さーて、悪夢の始まりだ』

遮るものが無くなり、月の光が注ぐ車内に、白い怪人が降り立った。キラキラと光る白いローブに、真っ白な自身の背丈程もある杖も持つ姿は、どこか魔法使い然としているものがあつたが、頭に被る白いフルフェイスのヘルメットがそれを近代的なイメージで塗り潰す。

チグハグな魔法使い。

しかし、それは確かに魔法師であつた。

バランス以外のメンバーが一斉に血飛沫を上げて、倒れる。正しく悪夢。悪い夢だと現実を逃避したくなる光景。

『全員殺してないよ、たぶん。まあすぐに治療しないと死んじゃうかもだけどね』

何故、全員を生かしたのか。その中でどうして自分だけが無傷なのか。この状況で尚、頭が回るのはバランスが優秀であることに他ならない。

『全員無事なのは、殺しちやって良いのか分からなかったから。君を残したのはこの中で一番偉かったから』

まるで、心を読んだかのようにバランスの疑問に答える白い怪人。まさか、本当に心を読まれているとは思っていないバランスであったが次の瞬間、心臓を掴まれたかのような錯覚に囚われた。

『嫌だなー別に心を読んでるわけじゃないよー』

心を読まれている。そう確信し、動揺を隠そうとするが、流石のフランスも無理だったのか驚きが目を見開くという形になって表れる。

『ただ単に貴女のことを調べて、貴女ならどう思考するかを考えているだけだよ』

実際はそれだけでなく、『幻想眼』によって得た情報、身体から溢れている感情の色を見て考え、さらに、相手の思考をある程度誘導しているというだけだ。心を読んでいるのではなく、読めるように誘導しているのだ。『幻想眼』で感情を見ても細かい思考までは読むことが出来ないのだから。わざわざ派手な登場をしたのも、バランスを動揺させ、思考を狭ませるための一手。

『さて、私から貴女への要求は一つだけだ』

杖型の武装一体型CAD、『ラスター・ホワイト』をバランスへ向ける。

『アンジー・シリウス、いや。アンジェリーナ・クドウ・シールズは戦死した。そういうことにして貰えませんか』

シリウスの正体を知られていたことに驚きはない。既にシリウスが敗北し拘束されているのだとしたら、その顔を見ているということになる。日本へ堂々と留学生として来ているリーナの素性を調べることは容易いだろう。むしろバランスはほっとしたくらいだった。白い怪人の質問から、まだリーナが生きている可能性が相当に高いことを感じ取ったからだ。

「断る。シリウスに敗北はない。そして、私がお前の言いなりになることもない」

『えー、何人が殺したら気が変わったりしない？』

「馬鹿なことを。ここにいる時点で皆、死を覚悟している。勿論私もな。脅しにもならんよ」

『…ですか』

白い怪人、雪花は『幻想眼』によって見える、覚悟や使命感といった感情から、何をしたところで、このバランス大佐が自分の思い通りには動かないであろうことを悟った。

『はあ……仕方ない。あー嫌だな、結局、全部黒幕さんの思い通り、か』

仮面をつけ、声も加工されているというのに、心底嫌そうにしているのが分かる、そんな言葉をバランスが聞いた瞬間、意識が途切れた。無系統魔法『共鳴』によって気絶させられたのだ。

そうして、白い怪人は気絶したバランスを抱え、夜の闇へと消えた。

アンジエリーナ・クドウ・シールズの恋心

ベッドにうつ伏せに転がって、枕に顔をうずめ、足をバタバタとさせる。そうすることで、この恥ずかしさを吹っ飛ばせるような気がした。

『任せろ』

脳裏に真剣な雪花の表情が過って、また、足をバタつかせる。顔は間違いなく真っ赤だろう。それどころが今にもオーバーヒートしてしまいそうな程、熱い。

雪花に抱き締められることなんて、沢山あった。

雪花に励まされることも、沢山あった。

なのにどうしてか、今回はそれを思い出す度に恥ずかしさやら、照れくささやらで、顔は真っ赤になり、足が勝手に動く。

雪花は昨日私をこのホテルに置いて、どこかへ行っただけど、私は泣きつかれたからか、安心したからか、すぐに寝てしまった。もし二人きりだったら、目も合わせられなかったかもしれない。

これはおかしい。

久しぶりに再会した時だって、こんなことにはならなかった。

「はう…やっぱりそうなのかな」

今までずっと我慢して、塞ぎ込んできたものを全部吐き出した。辛かった、苦しかった、悲しかった、全部を吐き出した。そうして、全部を吐き出して、最後に残った温かい気持ち。私がこの数年間を耐えることが出来たのはまず間違いなくこの気持ちがあったからだ。

「好き…なのかな…」

つまり、その…俗に言うところの…恋…みたいなの！そんな奴

が、それなんじゃないかなーっと。

確かに、雪花のことは好きだし、大事に思ってるけど、それとこれとは話が別というか！

あんな女の子の子供した男の娘……確かに、何度告白されても彼氏を作ろうとしない私に百合疑惑が持ち上がったことがあるのは認める。でも雪花はあれで中々格好良いところもあつたりする……って違うでしょ私！

顔をうずめていた枕を胸に抱えてベッドの上をゴロゴロ転がる。

うん、どうやら私は雪花のことが好きだったみたいだ。異性的な意味で。

一度そう認識すると、恥ずかしさは倍増である。もう恥ずかし死ぬんじゃないだろうかというくらいだ。

「うう……いつからだろう」

考えると、最初に浮かんできたのは初めて雪花に出会ったときの顔だった。予め男の子だと教えられていなければ、なんて可愛らしい子なんだろうと、嫉妬の一つも覚えたかもしれない人形のような容姿。でも、私を感じたのは、なんて悲しい顔をするんだろう、だった。儂くで、消えそうで、泣きそうなその顔をどうしたら笑顔に出来るんだろうと、それから毎日雪花のところに通ったのだ。

あれ？これは一目惚れという奴なのだろうか。今まで近すぎて気がつかなかったのかもかもしれない。離れていても、毎日雪花のことが頭を過った。うん、気がつけ私。なんとという鈍感。一目惚れだしたら十年以上初恋を続けているというのに。

「雪花はどうだろう」

雪花の周りには可愛い女の子が多い。この前雪花の家に集まったメンバーはまず間違いないで雪花に好意を抱いているはずだ。五輪漕

さんはそのベクトルが少し違うかもしれないけど。それに深雪。あんな姉がいてはそこの女性は霞んでしまうだろう。なんせ極度のブラコン以外弱点や欠点というものが見つかからない。

うう、これは中々厳しいのではないだろうか。

雪花があんなにモテるとは知らなかった。確かにメイドさんにはモテてたけど、愛でられてる感じだったし。なんだか私のことは妹くらいに思っている気がする。私の方が誕生日早いのに自分でも否定できないのが悲しい。

モヤモヤする。その辺にヘビィ・メタル・バーストをぶっばなして回りたい。

枕を投げてみたり、ベッドの上をゴロゴロしてみたりして遊んでみるがこのモヤモヤは晴れない。

そんなことをしている内にいつの間にか夕方になっていた。雪花から自分が帰ってくるまでこの部屋を出ないと言われていたけど、出る余裕はなかった。一日中ベッドでゴロゴロしていたのだ。まるで雪花である。

そう、雪花のことを考えていたからか、丁度良く雪花が帰ってきた。最後に別れてから十数時間は経っているというのに、その姿を見るとまたあの時のことを思い出してしまい、顔が赤くなってしまう。

が、そんな乙女チックな思考に溺れていられたのは、ほんの一瞬だけだった。

雪花が初めて会ったときの雪花に戻っていた。

儂くて、消えそうで、泣きそうな、顔に戻っていた。

だから、私は――

「大丈夫だよ、私がいる」

—ただ、ぎゅつと抱き締めた。
雪花が壊れてしまわないように、消えてしまわないように、ただ
ぎゅつと抱き締めた。

婚約と当主

アンジェリーナ・クドウ・シールズがアンジー・シリウスであった、という事実を無かったことにした。そう四葉真夜は言った。どういう手段を使ったのかは知らないが、ぼくの目的が達成されているのなら問題はない。

USNAには、リーナの他にも公表されていない戦略級魔法師が存在し、ただ、今まではその魔法師達が功績があったり、権力のある家の者だったりして扱いは良かったため、一番利用しやすい、若く、功績も権力もない、リーナをシリウスにしたらしい。だから、リーナが居なくなっただとしても、戦略級魔法師を失うという事態にはならないそうだ。

「アンジェリーナさんには学校も続けて行って貰うわ。彼女が日本に残るのは、表向き、日本の魔法学校を気に入ったからってことにしているから」

リーナをUSNAに帰すわけにはいかなかった。軍が一枚岩ではない以上、こちらとの交渉を無視して、ちよっかいをかけようとする連中が現れてもおかしくはないからだ。今度はリーナが日本で逃亡生活というわけだ。

「九島が働きかけたのでしようけど、アンジェリーナさんは日本国籍を手にしたわ。アンジェリーナ・九島・シールズね。これで日本にいれば、ほぼUSNAは手を出せないわ。日本国民となった上、九島と四葉、二家の保護下に置かれている人間に手を出すリスクを向こうは理解しているでしょうから」

九島烈にも思うところはあったのだろうか。今までは、ちよつと便利でうざい年寄りくらいに思っていたが、近所のおじいちゃんレベルには親しみを持ってあげようではないか。

「それで、本当にアレは貰って良いのかしら？」

「良いよ、ぼくもういらぬし」

アレというのは。パラサイトのことである。

ぼくが防諜第三課のスパイ収容施設からちやつかりパクってきたやつである。今は特殊な部屋で拘束しているが、無傷で確保したのだ。

「ついでに何とか中佐もあげるよ、何かに使えるかと思って連れてきたけど、そつちで解決したならいらぬし」

「バランス大佐ね、別に私もいらぬわ。返してきなさい」

「はい」

面倒だからその辺に捨てておこう。大丈夫、彼女もエリート軍人なんだ、自力で何とかするさ。例え手足を縛られて、目隠し、耳栓、お口はガムテープの状態でも。

まあ、そんなどうでも良いことはさておき、問題はこの対応の早さである。ぼくが四葉に来たのは昨日の夜中。それから半日と経たずにこの成果はいくら四葉でもありえない。

「どれだけ前から準備してたの？この対応の早さは流石におかしいでしょ」

「あら、素直に喜んでいてくれれば良かったのに。そうね、アンジェリーナさんが留学してくると分かった時点である程度準備は始めていたわよ」

ぼくが海外に逃亡している間も四葉の監視はついていた。当然、ぼくとリーナが幼馴染みであることも把握していたはずだ。そして、リーナがアンジー・シリウスであるということを知っていたか、予想していたのなら、ぼくがリーナをどうにかしようとするのは簡単に分

かる。

「全部貴女の掌の上ってことね」

これで四葉は、パラサイトを三体手にした上に、リーナに恩を売れ、ぼくからの好感度も爆上げだ。

「そうでもないわよ。正直に言えば最初は貴方とアンジェリーナさんは会わせないようにしようと考えていたもの。そのために態々貴方を怒らせて逃げ回らせたのだし。屋敷を半壊させられるとは思っていなかったけど。…下着もね」

「それは素直にごめんなさい」

下着事件に関しては本当に申し訳ないことをしたと思っているので素直に謝しておく。

「けど、色々新しいことが分かって事情が変わったから、貴方とアンジェリーナさんを引き合わせることにしたの。嬉しい誤算だったのが貴方とアンジェリーナさんが予想以上に親密だったことね。その時よ、私が前から準備していたものを実際に使おうと思ったのは」

四葉真夜にどうゆう思惑があったのかは知らないが運が良かったと思うことにする。そのおかげでリーナを引っ張り出せたのだから。

「その時期、とても素晴らしいことがあったから私の機嫌も良かったのよ」

それは知らないよ！そんな嬉しそうな顔で言われてもどう反応して良いか分からないよ！

「それで、その話を今日しようと思うの」

なんで機嫌が良かったかなんて、話されても困るよ！

「まあ、それは後にして、大事なことを伝えるのを忘れていたわ。実はアンジェリーナさんと貴方は婚約したの」

へーリーナ婚約したんだ、おめでとう……って違うよ！えっ、何それ！

「九島と繋がりを作れる良い機会だもの。向こうも喜んで了承してくれたわ。実はこんなにも早く対応出来たのは九島の協力もあつたからなのよ」

前言撤回！九島烈何してんの!? やけにすんなり婚約を破棄してくれたと思ったらコレだよ！

「ぼくにはあーたんという人が既に……」

「大丈夫よ、十師族の当主ともなれば愛人の一人や二人、いたところで問題にもならないわ。一番家格の高い者を正妻にすれば良いのよ」

「そんな無茶苦茶な」

「あら、意外ね。てつきり貴方はアンジェリーナさんも好きなのかと思っていたわ」

「それは……」

その後の言葉が出てこなかった。

リーナの顔と、あーたんの顔が浮かんでは消える。あれ？何を迷ってるんだ。言えば良い。ぼくには心に決めた相手がいるので、いくら十師族の当主でも愛人は作らない！と……ん？あれれ？ぼく、十師族の当主でしたっけ？

「ああ、そういえば言っていなかったわね。四葉家の次期当主は貴方

に決めたの」

四葉真夜は笑顔で言った。

いつもの妖艶な、人を惑わす、笑みとは違う。

感情が溢れてしまったような純粹な笑顔で。

崩壊

雪花にとって真夜の言葉は到底、受け入れられるものではなかった。

「な、何を言ってるんだか：四葉の次期当主、最有力は姉さんだろ。それにぼくには四葉の血が流れていない。ぼくが当主だなんて、そんなの、ありえない」

「そう、ならまづは少しお話をしましょうか」

雪花の困惑とは対照的にゆったりと落ち着いて、それどころがどこか楽しそうに四葉真夜は語りだす。

「貴方と初めて会話をしたとき、画面越しだったけれど貴方は『情報』による交渉を持ちかけた」

雪花と真夜のファーストコンタクト。

それは剣呑な空気の中で行われた。当時、こうしてゆっくり話す機会があるなど、雪花は考えもしていなかった。

「それを私は了承したわけだけど、その本当の理由は、貴方がオペレーターなのではないかと疑ったからよ。オペレーターというのはフリズスキャルヴのアクセス権を手に入れた七人のこと。「七賢人」とでも言えば分かるかしら？」

フリズスキャルヴとは、エシエロンⅢの追加拡張システムの一つ。

エシエロンⅢのバックドアを利用し、エシエロンⅢのメインシステムを上回る効率で世界中から情報を集め、オペレーターの検索にヒットする情報をもたらしてくれるが、ヒットした情報を外部ストレージに保存できないようシステムの的にガードが掛かっており、その選出はシステムそれ自体が行っているため、法則性がなく、見かけ上アトラ

ンダム。

その後、真夜からフリズスキャルヴについての詳しい説明を聞いても、勿論雪花に心当たりはない。そもそも七賢人というのも、名前くらいしか聞いたことがない。「良く分からないけどすごい組織」くらいの認識なのだから。

「だから私は貴方のことを調べ直した。何時貴方がフリズスキャルヴのアクセス権を手に入れたのかを調べるために。そこで色々なことが分かったわ。こんな逸材だったのなら、あの時、もっと本気で貴方を手にいれておけば良かったと思えるほどにね」

あの時、というのはどう考えても、雪花がUSNAに逃亡した時だろう。真夜のねっとりとした視線に雪花は本気で当時逃げ切れたことに感謝した。

「でも貴方はオペレーターではなかった。さて、そうなると貴方はどうやってあんなに機密度の高い情報を詳しく知れたのでしょうか。元々アンジェリーナさんと引き合わせないようにと考えていた私は、貴方を呼び出すことにしたわ。直接会ってみたくなかったよ」

雪花の情報源はどうやって調べてようがない。それはオペレーターたる真夜であってもだ。なにせ、この世にあってはならない、未来予知にも等しい情報、つまり原作知識は雪花の頭の中だけに存在しているのだから。

「そこで貴方を見た私は確信したわ。貴方には四葉の血が流れている」

グラリと、揺れた気がした。

こいつは何を言っているんだと、そう頭の中で考えるのは裏腹に何故かこの先を聞いてはいけないという声が無意識化で響く。

そんな雪花の様子を知ってか知らずか、真夜は一度優雅な動作で紅茶を飲むことで、一旦話を区切る。

「ここで一つ貴方の知らない話をしましょう。」

私の双子の姉、深夜は精神構造干渉魔法の過剰な行使を繰り返し、二十歳になる前に身体を壊した。その後、入退院を繰り返す療養生活は十年にも及んだ…これは貴方も知っていることでしょうか？」

何故ここでその話をするのかは、分からなかったが、雪花はそのことを知っていた。原作知識としても、父や兄から聞いた話としても。

「でも、それは全て捏造よ」

それゆえの衝撃。

雪花の行動によって原作が変わることがあっても、過去は変わらない。そのはずなのだ。

しかし、なら、過去の改変がありえないというのなら、そもそも雪花が生まれたこと自体、既に原作の過去、雪花が生まれる前の改変となりえる。例えば雪花が生まれる仮定で、その母体は妊娠をするだろう。そして体に気を使うかもしれない。仕事も長期的に休むだろう。それは明確な原作改変だ。本来なかったはずのものだ。

つまり、雪花という存在が、ここにこうして存在している時点で過去に何らかの改変があった可能性は極めて高い。雪花という存在が生まれる未来のために、何らかの改変があった可能性は。

「これは私もつい最近知ったこと。ある人物から聞くまでは疑いもなかった。事実、深夜は身体を壊していたのだから」

身体が震えている。衝動的に耳を塞ぎたくなった。

「深夜が身体を壊したのはとある人体実験を行っていたから」
「止めろ」

聞きたくない。聞いちゃいけない。
知ってはいけない。知りたくない。

頭の中をぐるぐると駆ける言葉を押さえつけるように、右手で頭を押さえながら、真夜の言葉を制止する。

「その人体実験とは、四葉真夜、つまり私の遺伝子を受け継いだ子供を産む実験。これは実験の性質上双子の姉である深夜は最高の実験体だった」

「止めろって言ってるだろー！」

それでも止めようとしないう真夜に声を荒げる雪花だが、その顔は今にも泣きそうな、すがるような顔だった。

「そして、その結果は最高のものだった。実験は成功したのよ。それも、私と深夜、二人の遺伝子を、才能を、受け継ぐという最高の形」
が、真実は語られる。

妖艶に、しかし慈愛に満ちた笑顔で、四葉真夜はその事実を口にした。

「それが貴方よ。貴方は深雪さんの双子の弟なの」

雪花の中に積み上がっていた『何か』が、音もなく、消えるように、

崩れた。

赤子と二人

死産だった。

医者からは覚悟するように言われてはいたが、絶望が小百合を襲った。初めての出産。一度は諦めかけた愛する人との間に出来た、子供。

龍郎から結婚すると知らされた時よりも、その絶望は深く暗い。

そんな時だった。

その少女は現れた。

名倉沙世と名乗ったその十八才くらいの少女は、一人の赤子を抱えていた。

その少女は言う。

この赤子は、龍郎と深夜の子供だと。

才能に溢れた未来ある子供だと。

深夜は考えたという。

もし、このままこの赤子が四葉にいれば必ず危険な目に合うだろう、と。四葉とはそういう血筋で、そうであろうとする血筋だと。

だからこの子供を貴女に託したい、と。

小百合は恐れた。

子を産めなかった自分を龍郎は見放すのではないかと。三人の子供を産んだ深夜に心まで奪われてしまうのではないかと。

このとき小百合は冷静ではなかったのかもしれない。絶望の中にいて正常な判断が出来なかったのかもしれない。

小百合は死産した子供の代わりにその赤子を引き取った。双子の姉である深雪から「雪」の字を、自分の名前、小百合から「花」の字を、それぞれ取って「雪花」と名付けたその子供を。

泣かない子供だった。不思議なくらい泣かないし騒がない。仕事で忙しい小百合の代わりに世話をしていたのは深夜が家政婦として付けた沙世だったが、怖いくらいに手間がかからない子供だという。

小百合も精一杯の愛を注いでいるつもりだったが、深夜のことが頭に浮かび、雪花との関係に線引きしてしまっている自分がいた。

それが変わったのは雪花の母となって三年が経ったころ。突然、雪花が父親はどうしているのか、と訊ねてきたのだ。小百合は思った。そうだ、この子と龍郎の間にはたしかに血が繋がっているのだ、自分がある時、この子を引き取らなければ、本当の母親と、本当の父親の間で暮らせたことだろう。四葉という環境がどのようなものなのかは知らないが、深夜の話が本当なら雪花の才能は群を抜いている。ひどい目にあうようなことはないだろうことは予想できる。丁重に大事に育てられたことだろう。

その未来を潰したのは自分だった。

他の誰でもない、自分が、この子の未来を決定させた。

「ごめんなさいね、あなたのお父さんには会えないのよ」

子供が生まれてからというものの、龍郎は深夜のところにいる。あと二、三年はここにくることもないだろう。

声に出したただけでなく、心の中で何度も謝った。自分の選択が正しかった自信なんて微塵もなかった。もしかしたら深夜の言うように危険な目にあったかもしれない。それでも本当の母親と本当の父親と幸せに暮らすことだってきつと出来たはずなのだ。

その未来を摘み取った自分にこの子を愛する資格があるのか——いや、だからこそ、愛するのだ。この子は私の息子だ。紛れもなく、今、この瞬間、母は私なのだ。

本当の母親がなんだ。

私こそが雪花の母なのだ。

涙を流した後の小百合から、雪花への線引きは無くなっていった。本当の意味で母親になれた瞬間だった。



少女は孤児だった。

本当の親の顔も、本当の自分の名前も知らない。物心つくころには四葉にいたし、それに関してどうこう思うこともなかった。『No. 34』という名前を与えられ、ただ言われるがままに技能を修得し、機械のように日々を過ごした。

そんなある日。

少女が十六才になった頃、四葉本家からの使者に連れられて、少女は初めて訓練施設を出た。いや、これまでも検査やら野外訓練やらで外へ出たことはあるものの、『街』というものに直接出たのは初めてだった。人間が沢山いた。建物が沢山あった。全部どうでも良かった。

訪れたのは病院だった。

医療の知識も詰め込んでいる少女にはこの病院がかなり良い病院であることが分かった。国内どころが世界的に見ても中々ないレベルの病院だ。

その一室。嚴重に、しかし巧妙に隠されて、警備されていたその部屋には一人の女性がいた。

四葉深夜。

「今日から私が貴女の主よ」マスター

「はい」

何も考えずに頷いた。

自分はただ、四葉の名前に従っていればいい。そう教えられていたし、それが少女の生き方で、その生き方しか知らなかった。

「最初の命令よ、その男を殺しなさい」

最初の命令は、少女をここまで連れてきた四葉の使者を殺すことだった。返事をするともなく、素手でその使者の首を捻切った。

「合格よ」

「ありがとうございます」

「これで、貴女と私の接触を知る者はいなくなつた」

それから深夜より「No. 34だから沙世³」と適当な名前を貰い（後に沙世は雪花のネーミングセンスは遺伝だと確信する）、少女、沙世は名倉三郎の養女となつた。

群体制御の魔法を学んだが、それ自体の腕はそれなり、中の上と云つたところだろう。しかし、沙世の本質はそこではなかつた。魔法師としての腕より、それを生かす技量が彼女にはあつた。それこそ深夜が認める程に。

「貴女をこの子のガーディアンに任命します。如何なることがあつてもこの子だけを優先し、守りなさい」

名倉三郎の元で魔法を学ぶことおよそ二年。深夜からの二年ぶりの命令にして最後の命令がそれだつた。

何もなかつた沙世に初めて守るものが出来た。

深夜の指示通り、赤子を小百合に預けた後、任務を遂行するため、司波家の家政婦となつた。そこでも沙世はただ機械のように生きると思つていた。でも違つた。

一緒に暮らす内に、世話をする内に、この子を守りたいと思うようになった。任務とか命令とかそんなものは関係なく、そう思つた。

初めて芽生えた自分の意思だつた。

『そういえば沙世さんって何歳なの？』

『十三才ですよ、雪花様と同じです』

『えー嘘だー』

『嘘じゃないですよ、雪花様が生まれてくれたから、私は生まれたんです』

その時から沙世は人間になった。

『だから、生まれてきてくれてありがとうございます』

生きていることを、笑顔で感謝できるようになった。

二人の夜とため息

何もなくなつた。

真っ白な白紙。

今までの全部が嘘だつた。

自分は小百合の死産した子供の代わり。

沙世は深夜が付けたガーディアン。

淡々と自分の生い立ちが語られ、知らなかつた事実に関心が空っぽになつた。

―四葉に来なさい、そうすれば貴方はきつと、望むもの全てを手に入れられる。

返答は何時でもいいわよ、と真夜に送り出された後の記憶がない。どうやってここにたどり着いたのか、どうしてここにいるのか、何も分からなかつた。

気がついたら温かくて、目の前にリーナがいた。

「大丈夫だよ、私がいる」

その言葉に安心できた。

リーナがいてくれる。何もなくなつても、リーナは、いてくれる。そんな確信があつた。

「……じゃあリーナはずつとぼくのそばに居てくれる？」

弱く脆い言葉。すぎるような言葉。

それはいつだったか、リーナが雪花にした質問だつた。

リーナはより強く雪花を抱き締める。今、この時のために、きつと

自分は日本に来たのだと、そう思った。

「ずっとそばにいる。セツカがどうしても辛くなる前に、涙が溢れそうになる前に、必ずそばにいて、私がいるって教えてあげる。そしてこうして抱き締めてまた優しく明るい、私の大好きなセツカに戻ってもらう」

本気だった。

心からの言葉。

だからこそ、今の雪花にリーナの答えは劇薬だった。

体が熱くなる。なのに心は寒かった。人の温もりが欲しい。自分一人ではないことをもつと実感したかった。

まるで世界に自分一人だけになってしまったかのような喪失感と孤独感。その二つを抱えていた雪花をリーナの言葉は、行動は、確かに埋めていった。

それでも足りない。埋まらない。

雪花はまだ満たされない。

「…リーナ、全部ちょうだい」

「いいよ、私の全部をあげる」

二人は抱き合ったままベッドに倒れこんだ。



七賢人の一人だという少年、レイモンド・セイジ・クラークの情報提供により、第一高校裏手の野外演習場に誘導された活動中のパラサイトの内、二体の封印に成功し、残りは粉々に砕けて虚空へと散った。封印したパラサイトは四葉と九島にそれぞれ回収されてしまったものの、元々封印した後のことは対して考えてもいなかったため、達

也にとつてはどうでも良かった。

それより問題なのはレイモンド・セイジ・クラークから与えられたもう一つの情報だった。

—アンジー・シリウスとバランス大佐が行方不明。

バランス大佐という名前には聞き覚えがなかったが、レイモンドからある程度の説明があつたため、日本にいるスターズを実質的に率いている人物だということが分かった。シリウスもバランス大佐も重要なポストの人間だということだ。

その二人が同時に行方を眩ます。これはかなりの非常事態である。

アンジー・シリウスが最後に目撃されたであろう防諜第三課にハッキングして見た映像には、大ぶりのナイフでパラサイトが囚われていたのであろう部屋に侵入したところまでしか記録されておらず、レイモンドの話ではこの後、アンジー・シリウスは跡形もなく消えてしまったという。

実際、レイモンドから野外演習場にパラサイトを誘導する、という情報が与えられていたにも関わらず、シリウスはおろか、スターズの誰も現れることはなかった。

一体何が起こっているのか。

パラサイトの駆逐、封印を終えた達也の頭を悩ませているこの問題は家に帰ってみれば簡単に解決した。

『これはバランス大佐が行方を眩ませた直前に、瀕死まで追い込まれた兵士の内の何人もが証言していることなんだけど…白い怪人に襲われたらしいよ。正体不明の怪人…ワクワクするよね』

一方的に向こうから送られてきた映像。

子供っぽい表情で楽しいそうに話す金髪碧眼の少年を尻目に達也は深いため息を吐いた。

「…やはり面倒だからと放置しておいたのは不味かったな…本当にア

イツは俺の予想を越えてくる」

達也はまた、ため息を吐いた。

ため息を吐くと幸せが逃げるといふのは本当なのかもしれない、と自嘲気味に考えながら。

その後すぐに四葉から連絡があり、また、ため息を吐くことになるのだが。

精神世界

火の灯った燭台を握った彫像が、壁に浮き彫りにされており、長い廊下にどこまでも続いている。

弱々しい蠟燭の灯りだけに照らされた廊下は暗く、真冬の夜のよう
に冷たく、寒い。

その廊下をどれだけ歩いたのだろうか。

数分間か、あるいは数日間か、はたまた、もうずっとここを歩いているような気もする。

不思議と疲れはない。冷えきっているはずの体も、今は気にならなかった。

突然、蠟燭の灯が消える。

真つ暗になった廊下に不気味な風の音だけが響く。

しばらくして、また、蠟燭の灯が灯った。

永遠と続くだけだったはずの廊下、その前方に扉が出現していた。
両開きの大きな扉。

その扉を静かに開く。

その先には部屋があった。

広い、という表現では不十分な程に広大な途方もなく大きな部屋。
部屋には数十メートルは下らない高さの本棚が、先が見えないほど
に並べられ、隙間なく本が収められている。まるで図書館のような空
間、しかし空中には巨大な鏡がいくつも浮いており、異彩を放ってい
た。

「良い部屋でしょ？一人で過ごすには些か広すぎるのだけどね」

アンティーク調の机と椅子がワンセット。

ぽつかりと空いたその空間で、優雅に紅茶を飲みながら読書をして

いたのは、美しい女性だった。艶やかな黒髪と右目の下の泣きぼくろが彼女を妖艶に引き立てる。

「さ、座って。お話ししましょ」

彼女がそう言うと、椅子が一つどこからともかく現れる。それと同時に、テーブルの上にはティーカップが一つ現れ、彼女はそこに紅茶を注ぐ。

「この部屋は貴方の精神世界…夢の中の様なものね…それを私が好みにアレンジしたものよ。本来の精神世界は今、『廊下』になっているみたいね」

彼女がすつとテーブルの上スレスレを手で撫でると、そこに一冊の本が出現する。どうやらこの部屋の中では彼女の望んだ物を自由自在に出現させることが出来るようだ。

「私はこの部屋で貴方の人生を見てきたわ。生まれてから、今まで、ずつとね」

出現した本を開くと、そこには少女と見紛うばかりの少年と、金髪の少女が仲睦まじく遊んでいる挿絵が印刷されている。

さらに空中に浮いている鏡には、挿絵と同じ少年と、顔を赤くした童顔の少女が手を繋いでいる姿、少年がメイド服を着た少女に叩き起こされている姿が映し出されている。

「生まれてきたばかりの貴方に私という人格をコピーしてみたのよ、成功するとは思っていなかったけど、赤子ならもしかしたら、と思っただのよね。まあ、どうやらそのせいで、いえ、おかげでというべきでしょうね…どういうわけか貴方は『前世の記憶』を手に入れたようだけど。私もこの部屋にいる間、貴方の記憶にある漫画やライトノベル

は楽しませてもらったわ。素晴らしい文化ね」

彼女の後ろに漫画やライトノベルが几帳面に並べられた本棚が出現し、何冊かの本が空中で踊っている。

「所謂、『オタトーク』というものもしてみたいのだけど、残念なことにあまり時間はないのよね、大事なことだけを伝えておくわ」

彼女が目を瞑ると一瞬で部屋が変わる。

先程までの図書館の様な部屋から、床にはクッションが敷き詰められ、天井で星が瞬き、部屋の中央に大きな天蓋付きのベッドが置かれた寝室の様な部屋に変わったのだ。

「どうやら貴方は酷く精神を消耗してしまったみたいなの、真夜が散々追い込んだせいね。まあ、そのおかげでこうしてコンタクトが取れているわけだけど……ああ話が逸れてしまったわね、それで酷く精神を消耗した貴方は眠りにつくわ。普通の眠りではない『精神的な眠り』……とでも言うべきかしら」

グニヤグニヤと部屋が歪んでいる。

それだけではない。部屋の中を霧のようなものが充満していた。

「あら、もう眠くなってしまったのね。安心して、しばらく眠れば自然と目覚められる」

やがて部屋は真っ暗になり、星の光すらもなくなる。

「最後に一つ、私はリーナ推しよ……それじゃあお休みなさい、可愛い私の子」

彼女の声を最後に、音すらも消えてなくなり……………。

◆
「あつセツカ起きた……もう、あの状況で普通、寝る?……は、始まるのかと思つて色々覚悟したのに」

とあるホテルの一室。そのベッドで目覚めた雪花にリーナは顔を赤くしながら、後半はボソボソ小さな声で言う。

「…ああそうだったわね、ちようど良い所で限界が来てしまったのだったわ、リーナ推しの私としては最高の展開だったのだけど」
「セツカ?ちよつとどうしちやつたのよ。寝惚けてるの?」

体を起こし、口許に左手を当て独り言を話す雪花に、リーナは呆れ顔をしながらも仕方ないなーといった態度だ。

「ふふっなんだか初めて会った気がしないのだけど、実際に話すのは初めてなのよね」

「あなた…誰?セツカじゃ…ない?」

明らかに反応のおかしい雪花にリーナは懐に手を入れCADを取りだし、完全に臨戦態勢。対する雪花は普段とは違う、慈しむような笑みを浮かべたままだ。

「その通りよ、私は雪花ではないわ、まあ雪花と言えないこともないけど、貴女の言う雪花ではないわね」

ベッドから降り、立ち上がった雪花はその長い髪をさらりと軽く手で払う。その動作は女性的で、いくら女の子っぽいとはいえ、雪花が

するような動作ではなかった。

「そうね、貴女に分かりやすいように言うならば、私は『司波 深夜』、
ああ、貴女にはこちらの方でないと伝わらないわね。」

— 『四葉 深夜』、それが私よ」

ダブルスノー編

雪花の中身はお母様？①

「そうね、貴女に分かりやすいように言うならば、私は『司波 深夜』、ああ、貴女にはこちらの方でないと伝わらないわね。

—『四葉 深夜』、それが私よ」

「へ？シバ？ヨツバ？司波は雪花と深雪と達也のファミリネームで、えっ？四葉は？というか四葉深夜って『忘却の川の支配者』!?」

雪花の発言にリーナは警戒も忘れて目を白黒させた。それに雪花は微笑むと携帯端末を取りだしどこかに電話をかけ始める。

「あっ兄さん？あーうん、そのことについても話すからさ、ちよつと来て欲しい場所があるんだよ、うん、姉さんも一緒に。場所は後から送るから」

雪花は電話を終え、携帯端末を何やら操作し満足気な顔をして右手を払う動作をする。

「ああ、ここは現実だったわね、望むだけで物が出現するというのが癖になっっているわ……リーナ、紅茶をいれてくれないかしら」

「あ、うん……て、それどころじゃないわよ！こっちは何も理解できてないし、大体貴女は何なの！」

「だから、四葉深夜という人格のコピーよ、まあ今となっては記憶を受け継いだだけの別物とも言えるかもしれないけど……その辺の詳しい事情は深雪さんと達也が来てから話すわ」

もう何なのよ……この状況、と呟きながらも渋々と紅茶を用意するリーナ。相手が見た目雪花だけに無下にも出来ないというのと、我

が子を見守るかのような微笑みにいたたまれなくなったからである。

「リーナ、料理は駄目だけど、紅茶をいれるのはそう下手ではないわね、美味しいわ」

「……料理は駄目って何よ」

若干不貞腐れながらも、頭を撫でられ大人しくしている。完全に飼いや慣らされた犬状態のリーナであったが、部屋に備え付けられているインターフォンの音で我に返ると顔を赤くし、慌ててドアを開けた。

「や、やあタツヤ、ミュキ、なんだか久しぶりね」

「久しぶり、という程ではないと思うわよ？……まあ、その短い期間でまさかリーナが義妹になるとは思わなかったけど」

「う、何があったのかはちゃんと話すわよ、それより今は……」

リーナが言葉を切り、視線で雪花を指す。

「随分早かったわね、大体十五分といったところかしら。さあ、いつまでもそんなところに立っていないで座りなさい。リーナは意外と紅茶をいれるのが上手なのよ？」

意外とは余計よ、とか、何で私がやることになってるの、とか文句は言いつつも紅茶をいれにくリーナ。褒められれば無下には出来ないタイプなのだ。

「えっ？雪花……よね？どうしたの？リーナの料理でも食べた？」

「ちよつとー聞こえてるわよミュキ！」

リーナの怒声に深雪は一切の反応を示さない。達也は深雪の隣で呆れ顔だ。

その様子を見た雪花は口許を上品に手で隠しふふつと笑いを漏ら

した。

「深雪さん、あまりリーナをいじめては駄目よ、リーナは少しポンコツなところがチャームポイントなの」

「はい、お母様……………え？お母様？」

極自然に雪花にお母様と言ってしまった自分に驚きを隠せない深雪、達也も雪花を凝視している。

「そうよ、私は『司波深夜』。と言ってもコピーなのだけどね」



「…つまりです。貴女は十五年前の『司波深夜』という人格のコピー…………『司波深夜』の記憶や思考を限りなく再現した雪花の別人格であるが、雪花の精神世界で十五年の月日を過ごしたことにより、俺たちの知っている『司波深夜』とは全くの別人である、と？」

「そういうことね、あくまでも私は『雪花』であって、貴方達が『雪花』と認識している人格とはまた違う人格、……………そうね、雪花と深夜で『ゆきよ雪夜』とでも呼んでちょうだい。呼び捨てでいいわよ？」

「どうやら自分で考えた名前を中々気に入ったようで雪夜はドヤ顔だ。」

達也、深雪、リーナはアレどうする？とばかりにアイコンタクトを取り、まあいつか本人満足そうだし、という結論に至る。そのまんまなネーミングは深夜にしる雪花にしる恐らく変わることはなかったであろう。

「それでお母さ……………雪夜。」

雪花は私と双子であり、自分の母親が小百合さんではないことを知らされ、精神に多大なダメージを受けたからこそ、眠っているのです。

たよね？それならば、目覚めるのはどれくらい先のことになるのでしょうか？」

「確実に目覚めはするでしょうけど……分らないわ、雪花が眠るのは初めてのことから。」

前に眠りそうになった時は、無理矢理起こしたもの。まあ、その反動で雪花が脱け殻みたいになってしまったからもうやらないけど」

雪夜がリーナ推しを明言するのは、このときのことが大きく関わっている。脱け殻のようになってしまった雪花を救ったのはリーナだったからだ。

「では、雪夜がこうして表に出てくるのは初めてなのですね」

「そうね、雪花を通して表の世界を覗いてはいたけど、実際に出てくるのは初めてね。…元々はこの体を乗っ取ろうとしていたのだけど、それも止めたし」

「なっ!? どういうことよ!」

何気ない雪夜の物騒な呟きに真っ先に反応したのはリーナだった。

「元々私は司波深夜が死んだ後のバックアップとしてコピーされた人格なのだから、何もおかしいことはないでしょ。……ただ自分の死期すら予想していた司波深夜も結局のところ自分の心は予想できなかったみたいね。いつの間にか私は四葉ではなく雪花を優先するようになっていた……今だって私、怒っているのよ? 真夜にはお仕置きしてやらないと気が済まないわ」

安心した様子のリーナの傍らで達也と深雪はやつと本当の意味で、この人格が深夜とは別人であることを理解した。

四葉を切り捨て、子を取る。

それをコピーとはいえ司波深夜がしたというのなら、雪花への愛は確かなものであり、二人にはそれが少し羨ましかった。

「さて、大方説明も終わったのだし、達也と深雪さんの家へ移動しましょうか。……そろそろお昼だし、娘の手料理が食べてみたいわ」

「はい！お任せください！」

雪夜の言葉に深雪はパアツと顔を綻ばせ、気合い充分とばかりに返事をした。

「ふふっ期待しているわ」

微笑む雪夜、嬉々として料理のメニューを兄に相談する深雪、そんな雪夜と深雪の様子に肩の力を抜いて特に美味しかった料理を挙げていく達也。

そんな三人を見ながらリーナは――

「……女言葉の雪花……違和感ないわね」

――どうでも良いことを考えていた。

雪花の中身はお母様？②

「さて、美味しい昼食を頂いたことですし、今後のことを話し合いますでしょうか」

「今後のこと、ですか？」

「ええ、まず私には帰る場所がない、ということ。恐らく、真夜に雪花のことを密告したのは小百合さんと沙世、もしくは沙世の独断、意図としてはリーナのために一國を敵に回そうとしている雪花には強力な味方が必要だと思ったから、といったところね。恐らく味方だろうとは思うのだけど、暫く接触は避けるわ。私、雪夜のことをどう思うかなんて分かりきっているもの」

「それが良いでしょう。この家には元々雪花の部屋もありますから、そこを自由に使ってください」

達也は沙世について、深夜が秘密裏に付けた雪花のガーディアン、ということしか知らず、あまり会ったこともなかったが、十数年雪花に仕えている人間、それも訓練を受けている人間に、雪夜が演技をしたところでバレてしまいうることは分かった。事情を説明する気がないのなら、その方が良いだろうと考えるのは自然なことだった。

「ごめんなさいね、正直、私も小百合さんや龍郎さんと住むのは気まずいのよ」

雪夜の言葉に達也と深雪は微妙な顔をするしかなかった。自分達も同じ気持ちであるし、雪夜と小百合が仲良くしている光景が浮かばなかったからだ。

リーナは、雪花が私のため……なんて顔を赤くして溶けており別の世界にトリップしている。なんかもうすっかり駄目な子である。

「それと、水波ちゃんを呼んでもいいかしら、一日放置しているし状況も分かっていないと思うから」

「構いませんよ、信用できる味方は多い方が良いでしょう。情報も共有しておいた方が良い」

達也は特に考えることもせずそう答えた。

雪夜が水波を信用し、事情を説明するというのなら、構わないと思っただからだ。

それが達也と深雪に、悲しい現実を教えることになるとは思ってもみなかったのである。



「ああ、生水波ちゃんだわ！可愛い、可愛いわ！」

「え？え？なんですか？どういうことですか!?私の時代ですか!？」

「この年相応の発展途上の胸がまた良いわね！」

「ひゃ、ちよつなな何ですか!？」

呼び出されてほんの十五分足らずで現れた水波が暴走した雪夜に抱きつかれ、胸を揉まれ、混乱している傍らで、達也と深雪も相当に混乱していた。彼らの知っている深夜はこんなことをする人物では絶対になかったからだ。

「お、おおお母様？一体どうなされたのですか!？」

「どうもこうもないわよ、生水波ちゃんよ？愛でないとー！それと、私は雪夜、深夜ではないわ」

キリツと効果音が付きそうなキメ顔でそんなことを言う雪夜だが、やっていることは只のセクハラである。

「それに、深夜はガチガチの百合だったから、きっと同じようにしたん

じゃないかしら？穂波とは百合な関係だったしね。深雪さんのことだって大きくなったら食べようと思っていたし」

ササツと雪夜から距離を取った深雪の判断は正しい。そして、その深雪を守るように前に立った達也はガーディアンとしてきつと満点だ。

「嫌ね、冗談よ。娘を食べようだなんて流石に考えてなかったわよ。精々愛でるくらい………勿論ベッドでね」

「何も解決しておりません！それに穂波さんの方は否定なされないのですか！」

「そつちは本当だもの」

深雪は色々昔の思い出を思い浮かべながら、泣きたくなくなった。二人は四六時中一緒ではあったが、そんな関係だったと誰が思うだろうか。いや、自分の母親が同性愛者なのでは？と疑うことはそうそうないのだから、当然ではあるが。

「真夜のことがあったから、男はどうも苦手なの、だから龍郎さんとは殆ど一緒にいたことなんてないのよ。貴方達が生まれたのは奇跡ね」

そんなことを聞かされてどうすれば良いのか分からない二人だが、よくよく考えてみると思い当たる節があるらしく、どんどん雪夜から距離を取っていく。

「女の子は柔らかいし、良い匂いだし、可愛いし、最高よ。ちなみに水波ちゃんは私の嫁だから、手を出しては駄目よ？」

「出しません！」

涙目になりながらも、なんとか返事を返した深雪、頭を抱える達也、トリップしたまま一向に帰ってこないリーナ。

そして。

「あの……そろそろ誰か助け、ひゃー！ふあ……力があ……やめ……てえ……」
「ふふっ水波ちゃんの弱点は分かっているのよ、さあ、可愛く悶えなさい！」

悪の大魔王のような邪悪な表情でセクハラをする雪夜と、弄ばれ色々限界な水波。

日曜の昼下がりに、一般家庭よりは少し広い程度の司波家のリビング。抜け出せないカオスがそこにはあった。

雪花の中身はお母様？③

「水波ちゃんに関して一つ問題があるわ」

水波を一通り堪能し、落ち着きを取り戻した雪世は水波に今の状況と今後の予定を告げた後、そう切り出した。雪夜とリーナ、テーブルを挟んで達也、深雪、水波というような席順である理由は考えるまでもないだろう。

「雪花の計画では、水波ちゃんを五輪家の養子とし、自らも高校を卒業したら五輪家の養子になるはずだった。いくら四葉でも十師族の養子となれば手を出さないと考えたのでしよう。」

そのための準備もしてきたし、私もそれで良いと思っていた。五輪家はほとんど五輪滯一人の力で十師族足り得ているのだから、その庇護を受けている雪花が無下にされることはないでしょうし、雪花の力なら実質的に乗っ取ることも出来たでしょうから」

「そんなことになっていたとは、知りませんでした。俺のところには一切話がきていなかったのよ」

乗っ取るなどと物騒な言葉はスルーする。達也は雪夜の言葉をあがる程度スルーする技術を身につけつつあった。

「雪花もあれで色々考えている……わけではなく、単に面倒くさかったから伝えなかっただけね」

雪夜の回答は達也の予想通りのものであったが、頭を抱えずにはいられない。雪花が起きた後に聞いたところで、あれ？言っただけだったっけ？と惚けたことを言うに決まっているからだ。

「問題は、五輪家の養子になる、なんてことはもう不可能だと言うことよ。真夜が雪花を当主に選んだ時点で、既に真夜によって手が回され

ていることでしょう。五輪が四葉に睨まれる危険を犯してまで雪花を養子にとは考えないでしょうから」

「すいません、俺には『雪花を当主に選んだ』という言葉が聞こえたのですが」

流石にスルー出来なかった達也が珍しく狼狽した様子で、恐る恐る訊ねてきたことに雪夜はクスクスと笑いを漏らし、答える。

「あら、言っただけでなかったかしら、真夜は雪花を次期当主に選んだのよ。自分の『力』を受け継いでいる雪花をね」
「なっ!?!」

達也だけでなく、この場にいる全員が硬直し、言葉を失った。四葉家の当主という地位がどれだけのものかはリーナでさえ、理解していたからである。

そんな達也たちを置いてけぼりにして、雪夜は何やら携帯端末を操作し、リビングに設置された大型モニターの前に立つ。

達也たちが驚きから立ち直ると、モニターには四葉家の現当主、四葉真夜が映し出されていた。

『連絡をくれたということは、四葉家の当主になることを決めてくれたということではないのかしら?』

「何を格好つけてるの、良い歳して少女漫画読んでるくせに」

『なっ、どうしてそれを!?!葉山さんですら知らないはずなのに!』

小馬鹿にしたように言う雪夜に、真夜は顔を赤くして、声を上げた。

「あら、本当にまだ読んでいたの? 鎌をかけてみただけなのに」

「まだ読んでいた?.....私がこっそり少女漫画を読んでいることを知っているのは.....まさか!」

「そのまさか、ではないのよね。私は深夜ではないし、雪花でもない。

今は雪夜と名乗っているわ。十五年前の深夜という人格のコピーよ」

唾然とした様子で黙り込んでしまった真夜に、雪夜は笑みを浮かべて、言う。

「人格のコピーについては沙夜から伝えられていなかったのかしら？」

「……聞いていないわね」

今の会話から、雪花の秘密を四葉へ流したのが沙夜であることが確定した。小百合と共謀している可能性はあるものの、第三者が雪花の秘密を知っており、それを四葉に流したという可能性が潰れ、雪夜としては、予想通りであった。

「まあ、そんなことはどうでも良いのよ。今はもっと重要なことがあるわ」

「そうね、貴女という存在が一体どういうものなのか……」

「水波ちゃんを五輪から奪還するというね！」

「そう、水波ちゃんを……って一体何を言っているのかしら？」

雪夜は急に自分の名前が出てきたことに困惑気味、というより、そもそも現状に追い付いていない様子の水波をモニターの前に引張ってくると、ビシッとモニターの前に映る真夜を指差す。

「私の嫁を取り戻すのよ！何としてもね！そうしないと、雪花は四葉には関わらせないし、それでも手を出すというのなら私が全力で四葉を潰すわ」

「えっ、ちよつと深ー」

「じゃあそういうことだから、よろしく」

真夜の言葉を遮って、そう言うのと通信を切って電源を落とす。汗を拭うかのような動作をして、にっこりと微笑む。

「問題は解決したわ」

「……むしろ増えたと思いますが」

これなら雪花の方がマシだった、と達也は社会に疲れきったサラリーマンのような心情で、ため息を吐いた。

監視

「……これ、雪花が知ったらしばらく立ち直れないんじゃない？」

日曜日ということもあっていつも以上の賑わいを見せる街中をとんでもなく目立つ集団が歩いていった。

神に愛されているとしか思えない稀有な黒髪の美少女、それに匹敵する金髪の美少女、黒いドレスを着た愛くるしい国宝級の人形のような美少女、その人形のような美少女と手を繋いだメイド服の美少女。

「何を言っているの、可愛い子が可愛い服を着るのは義務なのよ、私は義務をはたしているに過ぎないわ」

ヒラツヒラの黒いドレスを着てドヤ顔をする雪夜に全員苦笑いするしかない。雪花にとっては残念なことにドレスはとても似合っており、雪花の時とは違う妖艶な笑みも合わさって、凶悪なまでの魅力を引き出していた。メイド服の水波が横にすることで、正にお嬢様といった感じだ。

「ふふっ達也良かったわね、ハーレムよハーレム」

「妹、弟、弟の婚約者、弟の義妹（仮）で構成されたハーレムですか？視線がつらいだけですよ」

他人から見れば今の達也は、美少女を四人も引き連れたハーレム野郎だ。周囲の男供から、これでもかという嫉妬や怒りの視線を浴びていた。今すぐにでも帰りたいところではあるが、隣をほとんど密着するように歩く妹の輝く笑顔を見ると、そういうわけにもいかないのだ。

「……達也、視てるわね？」

そして何より、態々目立つように歩いているのは理由あつてのこと。仕方がないと諦めるしかない。

「勿論です、監視者は三人：と一人。この一人は沙夜さんですね、後の三人が恐らく四葉からの監視でしょう」

達也たちに視線が集まれば、達也が周囲の視線を気にする素振りを見せたところで不思議には思わないだろう。

「そう、なら現状は放置でいいわ。四葉と沙夜以外の監視を見つけたら報告して」

「分かりました」



雪夜と達也にどのような思惑があるうとも、それは他の三人には関係のないことで。

「流石にこれは雪花が可愛そうなのだけど」

「分かってください雪夜、こんなチャンスは滅多にないんです！」

「雪花様は女装を嫌がりますからね、可愛いのに」

「そうなの！子供の時だって頼んでもやってくれなかったんだから！」

雪夜が三人から押し付けられているのは水着だった。勿論？女性用水着だ。ドレスと同色の黒いビキニタイプの水着はパレオがあるとはいえ、女装というにはレベルが高すぎるものだった。

「……貴女達の熱意に私は今とても引いているわ」

「雪花が眠っている今が千載一遇のチャンスなんです！海にいった時だって全力で回避していたんですから！」

「そこまでして雪花の回避したかったものを私が勝手に承諾するわけにはいかないわよ、それ以前に態々この時期に水着を買う必要性を感じないし」

「それを着てくれたら、今日三人で添い寝してあげますから！」
「任せなさい」

説得から三分、深雪の一言で雪夜は簡単に承諾し、鼻唄を歌いながら試着室へと入っていった。

「達也、自然な形で監視者の死角に入ったわ。報告をお願い」

雪夜は達也に監視者が増えたり、何らかの変化があった場合、携帯端末に着信を入れ、こちらからかけ直すのを待つよう指示していた。

『自然な形で、ですか……はあ……報告する必要がなかったかもしれないが、何故か中条先輩が後ろを着いてきています。』

俺が店の前にいるからか、今は遠くからこちらを見えています」

「ふふっそう、面白くなって来たわね。気がついていないふりをして放置していいわ」

雪夜は達也の返事を待たずに電話を切ると、雪花に心の中で軽く謝り、水着に着替えた。そして、試着室を出ると、百合だと明言している雪夜でさえ、引いてしまうくらいの勢いで三人がやってきた。水波に至ってはどこにしまっていたのか、カメラまで持っている。

「三人とも満足したら次は私に付き合ってちょうだいね、そもそも私の生活に必要なものを買いに来ているのだから」

「今日はバッチリメイクも決めてるからいつも以上に可愛いのよね！」

「ガラスケースに飾って私だけのものにしたいくらいだわ」

「独り占めは駄目ですよ」

「……全く聞いていないわね」

結局、四人がこの店を出たのは雪夜が着替えてから一時間以上後だった。

「うう、店から出てこない……一体中で何が行われてるんでしょう」

その一時間、とある少女のクルクルと変化する表情のおかげで、達也が退屈せずに済んだことを少女本人は知る由もない。

あずさと達也①

中条あずさがその光景を目撃したのは偶然以外の何物でもない。

日曜日、クラスの友人と街へ出ることはそう珍しいことではなく、部活をやっている友人の都合でお昼過ぎには解散し、その後一人で街を少し散策するのはいつものパターンだった。

「なんで女装？可愛い……じゃなくてっ！なんで水波さんやリーナさんも一緒に……！」

人の視線をこれでもかと集めていたその集団の中に、結婚を約束した少年を見つけたものの、その少年は化粧までして女装しており、他の女と手を繋ぎながら歩いていた。

「うう、出てこない……中で一体何が……っ」

それを見つけた時点で堂々と出て行って事情聴取をすればそれで済んだ。が、小心者であるあずさにそんなことができるわけがなく、こそそと後をつけることに。その結果、女性用水着の店に入った雪花たちを、店の外で待っている達也を警戒して、遠くから悶々と眺める苦行を行うことになってしまったのである。

―なってしまったのであるが。

(……一体どうしてこんなことに)

(……何故こんな状況に)

―現状、それ以上の異常事態が発生していた。

「達也、貴女中条あずさとデートしてきなさい」

「はっ。」

全ては雪夜のこの一言から始まった。



女性用水着を主に扱っている店を出た一行はそれからも様々な店を見て回った。楽しそうに話ながら、あれじゃないこれじゃないと、服やら小物やらを購入していく女性陣を眺めながら、達也は一つ疑問を覚えた。どういうわけか、雪夜がやけにリーナや水波に密着しているのだ。それは雪夜の性癖がどうこうというわけではなく、何かに見せつけているようで……そこまで考えたところでちらりと、あずさの姿が視界の端に写る。それと一緒にニヤニヤしている雪夜の顔が見え……どうやらあずさが遊ばれているらしいということに思い至った。全くあの人は……と呆れはしたものの自分が首を突っ込むことでもないだろうとスルーした。スルーしてしまった。

「そろそろかしらね」

「何がですか？」

昼食を挟んで一時間程したころ、雪夜が小さく呟いた。達也は妙に嫌な予感がして、それに反応した。実際、達也の予感は的中した。

「達也、貴方中条あずさとデートしてきなさい」

「は？」

雪夜が耳元で囁いた言葉の意味が分からなかった。そもそも何故そんなことをする必要があるのか、という至極まともな疑問が高い壁となっていたからだ。

「実はね、雪花と中条あずさ婚約しているのよ」

達也はどうか声を上げずにポーカーフェイスに徹することの出来た自分を褒め称えたいくらいだった。それくらいの衝撃がその言葉にはあった。

弟と自分の学校の生徒会長が付き合っているを通り越して婚約しているなどと突然知らされればその衝撃はとてつもないものだろう。

「それが私は気に入らないの。中条あずさは愛でる分には可愛いけど、雪花の隣に立つには向いてない」

愛でる、の部分はともかく、雪花の隣に立つには向いていないというのは達也も概ね同意だった。不本意ながら自分が少々厄介事に巻き込まれやすいと自覚している達也ではあるが、雪花はそれに増して酷いと思う。そういう人物だからこそ、隣に立つ者はそれ相応に力のある者の方が良いだろう。その点、婚約者となったリーナは百点に近い。雪花と同年代でリーナよりも質の良い魔法師を探そうとしてもそう見つかるものではない。

「それに折角雪花がリーナへの恋心を自覚してきているのに、中条あずさがいたのでは、雪花はそれを認めないもの。だから、どうにかして、中条あずさに雪花を諦めさせるの」

「俺に二人の仲を引き裂けと？」

「引き裂くことにはならないわよ、雪花はリーナに付くわ」

「……それはまた随分な物言いですね」

「所詮、中条あずさはリーナの代用品に過ぎなかったということよ」

雪夜の冷たい反応に達也は眉を潜めた。

「貴方は雪花がどれだけ酷い状態だったのかを知らないからそういう考えなのよ。リーナのおかげで今の雪花がある。だから私はあの娘に雪花と一緒にしてもらいたい。リーナのいない間に雪花を横

「からかつさらおうなんて許すわけがないわ」

無意識であろうが、駄々をこねる子供のように手をぶんぶんと振る雪夜に達也は肩の力を抜きつつ、過去を振り返ってみる。

確かに達也は雪花の幼少期を知らない。存在すら知らなかったのだから当然といえば当然であるが、今思うとそういう話になったとき、雪花が自分から話を逸らしていたような気もする。

「それにね、雪花は無意識にリーナのことを忘れようとしていた。だから貴方たちにもリーナのことを話すことはなかった。リーナは雪花を救ったわ。だからこそ雪花はリーナを忘れようとしたのよ。思い出したくない過去を思い出してしまおうから」

雪夜はリーナを娘のように思っていた。

成長を雪花の中から見守り、いつか二人が一緒になることを夢見ていた。それが雪花が日本に来てからというものの、徐々にリーナの記憶が薄くなっていくだけでなく、別の女と婚約までしていた。それをイライラと見守るしかなかった雪夜であったが雪花がリーナと再会したことによってそれが変わりつつあることに気がついた。揺れている雪花の心、その天秤を雪花の寝ている間に傾けてしまおうというのが雪夜の考えである。

「それがリーナと再会したことで変わりはじめた。雪花がなかったことにしていた気持ち徐々に戻ってきた。あと少して雪花はリーナへの恋心を取り戻すはずだった。なのに……あーなんだかまた真夜への怒りが振り返ってきたわ。適当に恥ずかしい過去をネットに拡散しておきましょう」

わなわなと勝手に怒りだした雪夜に達也は心の中で真夜に黙禱を捧げ、きつぱり断ることにする。

「だからといって、俺が中条先輩とデートする理由にはなりませんよ」

「理由ならあるわよ?」

雪夜はニヤリと何かを企むような、イタズラをする子供のような、とりあえず、達也にとってあまり良いことは起きないであろう笑顔で言う。

「面白そうじゃない」

瞬間、達也の意識は遠くなり――

「中条先輩、俺とデートしませんか?」

――爽やかな笑顔であずさをデートに誘っていた。

あずさと達也②

『アブソリュート・ソード・ワード
「言ノ葉ノ剣」』。

精神干渉魔法の応用。

雪花の幻想眼と精神干渉魔法を組み合わせることで新たに雪夜が生み出した魔法。

相手の精神の隙間に干渉し、言葉の剣^命によって意のままに操る。相手の精神力に加え、命令が相手にとって拒否したいものである程難易度が上がり、複雑な命令であつても難易度が上がる。

『中条あずさをデートに誘う』

今回、雪夜の言葉の剣^命はシンプルであり、達也にとってさほど強情に拒否しなくてはならない理由もない、危険度の少ない命令であつたため、達也すらも操られてしまったのだ。

「中条先輩、俺とデートしませんか？」

その結果、達也は爽やかな笑顔を浮かべ、あずさに手を差しのべていた。

「えーつと……」

達也たちから隠れているあずさとしては急に達也が現れただけでも大混乱なのだが、そこにデートのお誘いである。それも達也が一度もしたことがないような爽やかな笑顔で。

「お兄様？ 一体、何をなされているのでしょうか？」

当然、こんな状況で超絶ブラコンの妹様がお怒りになられないわけがなく、あずさは思考のフリーズと共に物理的にフリーズさせられて

しまう危険に身をガクガクと震わせた。

このままでは命が危ない！

実際、命まで危険になることはないのだが、それほどの威圧感を感じたあずさは達也のお誘いを断ろうとした。状況も何もかも分かってはいなかったが、そうすることが最善であるとあずさの小動物的危险察知能力が告げていたのである。

「はい！達也くん、そんなヤンデレ妹は置いてデートに行きましよう！」

しかし、口から出てきたのはそんな言葉だった。さらに言えば、がっしりと達也の腕に抱きついている。

「達也くん？ヤンデレ妹？……どうやら中条先輩は私とお話があるようですね」

「へ？あれっ!?どうして!?」

思ってもない言葉と行動。一瞬、意識が途切れ、気がつけば自分は達也の腕に抱きついており、目の前には本格的にぶちギレモードに入した深雪。

あずさは涙目で違うんですっ!?と誤解を解こうとするが、また意識が一瞬途切れ、

「お話している暇はないのです！それでは達也くん、愛の逃避行と行きましようか！」

気がつけば達也の手を掴み全力で深雪から逃走していた。

「なっ!?」

「駄目よ深雪さん、これからが面白いところなのだから」

あずさと達也が走り去るのを深雪は見ていることしかできなかつた。どういうわけか金縛りにあつたように体がピクリとも動かないからだ。

「……一体何を為さつたのですか？」

「ちよつとした手品よ、そんなことより水波ちゃん。私たちもデートしましょう」

雪夜が深雪にかけて魔法を解除し、水波を引き連れ人混みへと消える。

「あれ？皆どこ行つたの？」

「リーナ、何を惚けたことを言っているの！お兄様達を追うわよ！」

「えつちよつと深雪!? もー何がどうなつてるのよ!？」

何をぼけつとしていたのか何も状況が分かっていないリーナは深雪に引きずられるようにして達也を追いかけるはめになり、若干涙目になりながら声を上げた。



達也にとって今もつとも考えるべきは、自分が何をされたのかも分からないということだった。

あずさの言動を操っていた様子から自由度の高い精神干涉魔法であると推測をしたものの、CADの操作すら必要としていないであろうその魔法は恐らく達也でも防ぐことはできない。実際のところ、達也相手ではそれほど大それた命令は出来ないのであるが魔法の正体すら掴めていない達也が知るよしもなく、雪夜の魔法に冷や汗を流す

ばかりだった。

「うう、どうしてこんなことに……。思ってもないこと言っちゃうし、いつの間にか司波くんとかんところにいるし」

対するあずさはといえば、達也以上の混乱の中にいた。事情を全く知らないあずさからすれば今の状況は後輩から突然デートに誘われ、断ろうと思ったのにいつの間にか了承し、後輩の妹に喧嘩を売って逃走する、という自分の頭を疑うレベルの異常事態なのだから。

「達也く……。じゃなかった、司波くん、何が起こったのかは分かりませんが取り合えず戻りましょう」

「いえ……。それはやめておきましょう。今戻っても同じ状況かもっと酷い状況になるだけです。少し二人でいれば彼女も満足するでしょうからしばらくはこのままでいましょう」

「彼女？」

あずさの疑問に達也は少し考える素振りを見せると、あずさを近くのカフェへと誘った。

「少し長くなりますが……。中条先輩には知る権利がある」

達也の言葉にあずさは何か良くないことが起こっていることを悟った。



『じゃあ、セツカはずっと私のそばにいてくれる？』

その言葉に雪花が頷かなかったのは無意識にリーナと離れたいと思っていたからだと言夜は考えている。

リーナが好きだ、一緒にいたい、そんな気持ちと、もう忘れた過去を思い出したくないという無意識がせめぎあい、結局雪花はリーナを妹とすることで意識の外に追いやったのだと。

実際、雪花はリーナをリーナとして見ていなかったのかもしれない。

思い出したくない過去から逃避するために。

だから、日本に来て雪花は変わった。

子供らしくなった、というよりそれが本来の雪花だったのだろう。

その自分を守るために徐々にリーナという存在はさらに外へと追いやられる。

やがて雪花は恋をした。

好きだと思った。他とは違うと思った。

そして、さらにリーナは外へ外へと押しやられ、あるうことが雪花はリーナとの約束の指輪さえも簡単に人へ預けた。理由はあった、考えもあった。

だとしてもそれはリーナを想っているのならあるはずのない行為。

そのまま雪花はリーナと共にいらぬ過去を捨て、好きな人と一緒にになる。

でもそれは、その恋は、いやその恋も――

ああ、ぼくには好きな人がいる。

ぼくは恋をしたから、だから、リーナのことを忘れてしまっても仕方がない。

――逃避のためでないとうして言いきれぬのだろう。

端へ端へと追いやった少女への罪悪感が雪花を蝕んでいないとうして言いきれぬのだろうか。

リーナが雪花を想うたび、雪花もまたリーナを想い、そしてそれを

忘れることが、雪花にいくらも、なにも、なんの感情も湧かせないと、そんなことがはたしてあり得るのだろうか。

「おはよう、雪花、良い夢は見れたかしら？」

「良い夢？……そんなの一度も見たことないよ」

きつとその答えが、雪花の頬を流れる涙の中にあるはずだった。

押し付け

黒いゴシックドレスのお嬢様と、いかにもなメイドさん。街中のベンチでそんな二人が座っていれば当然視線は集まる。水波はそんな視線を煩わしく思いながらも、自分がそんな二人組を見かけたらまず二度見するだろう、と思い納得する。とはいえ、あまり気持ちのいいものではない。その辺を今の状態だと男か女か微妙なラインの女装野郎はどう思っているのだろうかとそんなことを考えれば、どうにも雪夜の様子がそわそわしているような気がした。

「どうかしましたか？」

「……いいえ、なんでもないわ」

そう答える雪夜は一見、本当になんでもないようだがどこか不自然さを拭えない。

水波はそんな雪夜に小さく首を傾げるが、この人が何を考えているのか分からないのは雪花の時も一緒か、と意識の外に丸投げした。諦めと適度な無関心、それは雪花と長く付き合うために必須のスキルだった。勿論、それは雪夜にも使えるもので……だからこそ、水波は雪夜の呟きを聞き逃してしまっただのである。

「……雪花は一体、何日で表に戻ってこられるかしらね」

雪夜は妖しく微笑むと買ったばかりのコーヒーを口に運ぶ……がすぐに目を見開くとカップからコーヒーが溢れてしまうことも気にせず、両手をぱたぱたと振りだした。

「——ッ！な、なんなのこれ！一体何が入ってるというの!？」

涙目でそう訴える雪夜に水波は良いものを見れたと、ほのぼのとした気持ち、穏やかな口調で告げる。

「雪花様、苦いものが大の苦手なんですよ。ピーマンですら涙目で食べますからね、そんな雪花様の体でブラックのコーヒーを飲めばそうなりますよ」

「うう、それは知ってたけど味覚は私に依存するかと思ったのよお……雪花の中では普通に飲めたんだもの」

「可愛いかったですよ?」

「水波ちゃん!」

意外とこのデートを楽しんでいる二人だった。



「つまり、雪花くんは二重人格…?」

中条先輩には知る権利がある(キリツ)なんてことを言っておきながら達也があずさに話したのは、雪花にはもう一つの人格があり、それを雪夜と呼んでいること。今、表に出ているのは雪夜の方であり雪花は眠っていること。その雪夜は精神干渉魔法を得意とし、達也とあずさの言動を操作されていたこと。主にその三つだった。達也曰く、嘘は吐いていない、ただ言っていないだけ、な説明ではあるがあずさは深刻な様子であった。

「ええ、完全なる別人格である、と認識してください。事実、記憶も共有していないようですし……会ってみれば中条先輩の知っている雪花とは全く違うとすぐに分かりますよ。……あーただ中条先輩は雪夜に心底嫌われているようですからあまり関わらない方が良いかもしれません」

「なんでですか!?!私会ったこともないのに……」

「一方的に見られていたんでしようね。雪花と記憶は共有していない

くとも、雪花が見ているものを見ることはできたようですから」「うう、だとしてもですよ…」

あずさはもはや涙目を通り越して半泣きだった。

なんで嫌われているのかを考えれば、ネガティブな思考に陥り、自分の悪いところばかりがあれこれと頭に浮かぶ。

「正直言っただけの彼女の考えていることは俺にも分かりません。まあ、何も考えずに行動する雪花よりは読みやすいかもしれませんが」

達也なりにあずさを気遣ったのだろう。少々のユーモアを混ぜてみたものの、達也にその手の才能はなかったのか、あずさは相変わらずのどんよりだった。

「そう落ち込むこともありませんよ。雪花が目覚めればそれで終わることですから」

達也の言葉にあずさは小さく頷くだけだった。



水波と雪夜がデートを楽しみ、達也とあずさが真剣な話をしているころ、深雪とリーナは男女問わず視線を釘付けにしながら街を歩いていた。

「ミユキ、私あのアイスが食べてみたいんだけど」

「リーナ、今はそんな場合ではないの、お兄様を探さない」と
「……アイス」

男なら誰もが憧れ、女なら誰もが羨む美貌を持つ二人の美少女。

「リーナ、どうして貴女はそう残念なのかしら」
「なっ！スーパーブラコンのミユキに言われたくないわよ！」

だが実際は、ブラコンを拗らせた深雪とポンコツのリーナ。二人が美少女であり、才女であり、優秀な魔法師であることは間違いないのだが、どことなく残念なこともまた間違えようのない事実ではあった。

「そこまで言われては私も黙っているわけにはいかないわね、リーナ、いつかの決着をここで着けましょうか」

「いいわね、やりましょう。あの時の私と同じと思わないことね」

一触即発。

何をとち狂ったのか、二人の美少女はここで魔法戦争を開始する気であるらしい。

だがそれも仕方のないことではあった。

実はこの二人、既に雪夜によって魔法をかけられている。雪夜が『アプソリコート・ソードワード言ノ葉ノ剣』によって与えた命令は二つ、『心で思ったことを躊躇わずに口にする』と『後のことは考えない』だ。

これによって二人は歯止めがきかなくなり、街中で決闘などと、とても女子高生の思考とは思えない事態に発展してしまったのだ。断じて、操られてなくてもこういうことになったなんてことはありえない。

その証拠に――

「貴女達、私の予想を斜め上に越えてくるわね」

――パチン、と雪夜が一つ指を鳴らせば、二人は我に返ったように現状を把握し、握りしめたCADをしまった。

「喧嘩にはなるかもしれないとは思ったけど、まさかCADまで出し

てくるとは思わなかったわ」

呆れ顔の雪夜ではあるが、そもそもの原因は彼女であり、これには流石の二人も反論するしかない。

「貴女がやったんじゃない！」

「そうですよ！少しは自重してください！」

「あら、ごめんなさい。元スターズのアンジー・シリウス様と元四葉の次期当主様がこの程度の『手品』に引っ掛かるなんて思わなかったんですもの」

ニヤニヤしながらそんなことを言つて二人を煽る雪夜。当然ぶちギレ寸前の二人なわけだが、後ろでは水波が早く終わんないかなー、とばかりにぼーっと立っており、雪夜を挟んで中々の温度差が出来上がっていた。

「雪夜、二人を煽るのは止めてください。深雪、落ち着け。リーナ、お前もだ」

達也が仲裁に入れば深雪はすぐに矛を収めた。そうなるとリーナとしては自分だけがこれ以上突っかかるのもどうかと考え一先ずムスツとした顔でタツヤを睨んだ。

睨まれた達也は、なぜ仲裁に入っただけの自分が睨まれなくてはならないのかと文句の一つでも言つてやりたくなつたが、自分はどういう役回りなのだと思既に理解してしまつたがゆえに、それを口にするとはなかった。

「あら達也、そちらは済んだのかしら」

「ええ、しっかりと貴女の思惑通りに。全く、押し付けるは止めてください」

「良いじゃない、私より貴方の方が適任でしょう」

今回の騒動、雪夜が『言ノ葉ノ剣』によって引き起こした騒動は全て達也にあずさを任せ、事情を説明させるためのものだった。

多分に雪夜の『遊び』が混じっているのはご愛敬だろう。

「どういうことですか？お兄様」

「雪夜はな、中条先輩に事情を説明するのが面倒だから俺に押し付けたんだよ」

達也の言葉に深雪がじとつとした眼で雪夜を見れば、雪夜は不満げに口を尖らせ言い訳を始める。

「だって私が話すのではまともに会話も出来なさそうじゃない。中条あずさがあわあわと大混乱して、それに私が悶えながらもイライラしている図がありありと思ひ浮かぶわ」

「……イライラしているのに悶えはするんだ…」

リーナのツツコミに何故か胸を張る雪夜。別に褒めても、称賛してもいないのだが、雪夜としては誇るべき言葉だったらしい。

「はあ、まあ押し付けるのは構いませんが、遊びで振り回すのは止めてください」

「うう、分かったわよ」

達也に叱られた？雪夜は小さくなって頷く。まるで雪花である。

「さて、用が済んだなら帰ろうか。少しやり過ぎたみたいでな……注目を集めてる」

とんでもないレベルの美少女同士が大喧嘩し、そこに黒いゴシックドレスの美少女と美少女のメイドまでもが現れるというカオス。そ

してその中心には達也だ。さぞ好奇の視線が集まっていることだろう。達也に限らずこの視線の中では流石に居心地が悪い。

一行はしずしずと帰宅の路についたのだった。

「添い寝、楽しみだわー」

「……………」

そして彼女達の戦いはこれからである。

お母様学校へ①

「水波ちゃん、あーん」

「えっ、嫌ですけど」

「……深雪さん、あーん」

「遠慮させていただきませぬ」

「……良いわよ、自分で食べるわよ……」

「ちよつと！なんで私には聞かないのよ！」

いつもなら、静かで優雅な食事風景である司波家の朝食ではあるが、人数が増えれば賑やかなものだった。

あーんで食べさせてもらおうと奮闘するも諦める雪夜と、自分には頼まなかったことに騒ぎ立てるリーナ。

「リーナは食べさせてもらうより食べさせてあげたくなるのよね。この辺は雪花の影響……なのかしら？やっぱり妹って感じがするのよ」「うう過去を思い浮かべるとそれも仕方のないような気もしてくる」

しよぼーん、と落ち込むリーナをよしよしと慰める雪夜。

「二人とも冷たいわ」

「当たり前です。誰のせいで昨日全然眠れなかったと思っているんですか」

「私は全く覚えてないもの」

昨夜、深雪、水波、リーナは約束通り雪夜と添い寝したのだが、それはもう酷い有り様だった。

雪夜が触ってこようとするのをなんとか阻止し、雪夜を寝かしつけ、これで安心して眠れると思ったのも束の間、とてつもない寝相で、抱きつく、舐める、触ってくる、とても眠れるような状態ではなかった。眠ったら最後、雪夜の餌食になっていただろう。

「それより、今日のことです。本当に学校へ行くんですか？」

「当たり前じゃない。雪花の出席日数はギリギリなのよ？休んだりしたら進級できなくなってしまうじゃない」

「それはそうなんですが……」

正直、達也は雪夜に学校へ来てもらいたくなかった。まず、間違いない問題が起きるといふ確信があるからだ。

雪花の留年というのは確かに一大事ではあるのだが、その大部分は自業自得であり、現状山積みの問題にさらに上乗せが確定することと天秤に掛ければ、まあ留年してもいいやと諦めにも似た思いがある。

「留年……雪夜、学校へ行くの止めましょう。私がデートしてあげますから。そしたらあーんもしてあげます」

「なんですって!?!……い、一年くらい留年しても別に大丈夫よね……だって雪花にはトーラスも四葉もあるのだから正直学歴とか関係ないし……」

水波が留年という言葉に反応し、雪夜に提案すれば、それは必殺の一撃となつて雪夜を揺らす。そして、雪夜の思考は、雪花には留年してもらおう、私と水波ちゃんのデートのために！で可決しそうなるわけだが、そこに待ったをかけたのが深雪であった。

「雪夜、学校へ行きましょうか？」

眩しいくらいの笑顔のはずなのに目が全く笑っていない女王様の笑み。

「そ、そうね！行かないとね！雪花が留年してしまうものね！」

その笑顔の恐怖を、雪花の体は覚えていた。逆らったらどうなるか

分からない。雪夜にそう思わせる力がそこにはあった。

「私より深雪さんの言うことを聞くんですね……悲しいです」

ところが、深雪の言葉に従おうとすれば水波が拗ねた。ジトツとした責めるような目がつらい。

「ど、どうしろと言うのよ!? 達也、どうにか上手くまとめようだわ!」

結局こうなりますか、とは諦めの境地に達した達也の言葉だ。

「雪花は留年しないに越したことはないでしょう。意見が割れたのなら利のある方を取ればいいのではないですか?」

「……水波ちゃんとデート」

達也が意見を言えば、雪夜が小さな声で抗議してくる。達也からしてみれば、下らないにも程がある抗議なため適当に投げやりな意見を返す。

「放課後にすればいいでしょう」

「それだわ!」

「えっ!?!」

水波が、雪花が留年すれば来年同級生になれる!と考えるあんな提案をしたことは分かっていた達也ではあるが、水波には犠牲になつてもらうことにした。

雪花を留年させないためであつて、妹の笑顔が怖かったからでは断じてない。



「貴女本当に雪夜?」

昼休み。

適当にいつものメンバーに理由をつけ、集まったのは雪花、達也、深雪、リーナ。

そこでリーナは集まるなり、唐突にそう質問した。

「えっ？何が？」

それに雪夜はキョトンとした表情で首を傾げる。

「何って、貴女の言動よ。いつもの貴女じゃないし、話し方や癖なんかも雪花のまんまって感じじゃない」

リーナは雪夜が心配で仕方がなく、休み時間の度にC組を訪れては、雪夜の様子を観察していた。そこで見たのはリーナの思い描く雪花そのもの。机にダラリと両手を伸ばして伏せた姿なんかは、完璧に雪花であった。

「リーナは相変わらずポンコツだなあ。いつもの調子で話していたらすぐにバレちゃうじゃん」

「それよ！話し方だけじゃなくて、なんかこう、表情というか仕草というか、とにかく雪花なのー！」

リーナの言わんとしていることは、達也と深雪も感じていたことだった。

演技というには、あまりに雪花そのままなのだ。人格が変われば趣向も変わることは今朝までの雪夜を見ていれば分かる。何気ない日常の中で完璧に、身内にさえ悟られないレベルの演技ともなれば、それはいかなる魔法かと疑いたくなるようなものだ。

「ふふっ、種明かしすると演技ではなく魔法よ」

そして、実際、それは魔法であった。

「たぶんあなた達の誰にも教えていない雪花の魔法、その応用よ。というより無駄遣いかしら？本来の用途とはかけ離れた使い方なもの」「魔法って、もしかして全校生徒の認識を書き換えているの!？」
「可能ではあるけれど、こここの生徒は魔法師の卵ばかり、それも優秀な、ね。そんなことをしたらきつとバレてしまうでしょうね。あなた達だって、私の魔法にかかったということには気がついたでしょ？」

雪花は四葉家現当主の四葉真夜と、司波兄妹の實の母にして真夜の姉、四葉深夜の才能を受け継いでいる。故に雪夜は『言ノ葉ノ剣』アプソリユート・ソード・ワードなどという無茶苦茶な魔法を行使できるのであれば、それは『忘却の川の支配者』レテ・ミスト・レスと呼ばれた四葉深夜の全盛期以上の力を発揮できるということだ。リーナの言う全校生徒の認識の改竄などという無茶をも可能にできるだけの力があつた。

「んー、これは雪花があなた達に伝えていない以上黙っていようと思っていたのだけど……これからのことを考えると教えておいた方が良さそうね」

雪夜は楽しそうに笑う。

まるで、お気に入りの、とっておきのおもちゃを見せびらかす子供のように。

お母様学校へ②

「雪花には異能とも言うべき力があるわ。達也、貴方と同系統の力よ」「やはりそうでしたか」

「ふふ、貴方ならある程度は予想できていたでしょうね。雪花は隠すのがあまり上手ではなかったから」

雪花は他人とは違うものを見ているような時があった。まるで他の人間には見えない何かを見ているように。

不自然な視線の動き方から視界を起点にした知覚系の異能である、と達也は珍しく勘と穴だらけの推理で予想を立ててはいた。

やはり、というのが一番の感想だった。

「でもきつと、貴方の予想を遥かに越えるものよ。雪花の『幻想眼』ファンタジー・サイトは」

雪夜によつて語られる雪花の異能。

それは、達也の予想通りのものであり、しかし、その遥か延長線上にあるものであった。



この世に存在する実体のない曖昧なものをその瞳で捉えることができる異能。それは魔法式であったりサイオンであったり精霊であったり、はたまた、気配であったり感情であったり。

達也の理解の外にある異能。

それが雪花の『幻想眼』ファンタジー・サイトだった。

「そんなの、私にも教えてくれなかった……」

「仕方がないわよ、雪花は誰にもこの力のことは……あつ、水波ちゃんには話してたわね」

雪夜の言葉に得意気な顔で胸を張る水波。それが悔しいのか、リーナと深雪が不穏なオーラを出しはじめる。

しかしそれも、雪夜の話が続けられると、なくなっていくた。そんなことを気にしていられないほど破格の力だったからである。

「その幻想眼なのだけど、雪花はそれを応用することで凶悪なまでの力を手にいれたわ」

雪夜の言葉に達也の頭には幻想眼の応用の仕方が何通りも浮かぶ。隣の芝生は青いというが、達也には精霊眼よりも汎用性が高いように思えた。

「四葉の秘伝、フラッシュキャスト。リーナは知らなくて当然だけど、水波ちゃんは話くらいは聞いたことがあるのではないかしら？」

「洗脳技術の応用だということくらいで、あまり詳しいことは。ただ村には洗脳装置のノウハウを利用して必要な知識を本人の意思に依らず記憶させる装置がありました」

「……まさか、水波ちゃん。真夜にそれ使わされたりしていないわよね？」

雪夜もその装置の存在は知っていたが、あれは神経を酷く消耗するもので、体に相当の負担をかけるものだ。深夜の亡き今も、現役で使用されているとは思っても見なかった。

「……雪花様の専属になる前に少し。一週間程寝込むはめになりましたが」

「……真夜は泣くまでお仕置きコースね」

唐突に決まった当主の哀れな末路に顔をひきつらせながらも、達也は先を促す。

達也としては、四葉家の秘伝であるフラッシュキャストの情報が、

雪花の婚約者とはいえ外部の人間であるリーナに漏れてしまうことはどうでも良かった。それに、リーナが雪花の不利になるようなことはしないだろうという確信もあった。

「まあ、真夜をどうするかは後々考えるとして……雪花の幻想眼、その応用の一つはフラッシュキャストを応用したものよ」

記憶領域に起動式をイメージ記憶として刻み付け、記憶領域から起動式を読み出し、起動式の展開、読み込み時間を省略する技術であり、達也に至っては、魔法式構築の時間すら省略する。

人道上の問題はあるものの、魔法師ならば誰もが欲するであろう技術だ。

実際、この話を聞いたリーナは達也をジトつとした眼で非難した。当の達也は涼しい顔で無視を決め込んだわけだが。

「雪花は、幻想眼とフラッシュキャストを組み合わせて、一度見た魔法をCADもなしに万全の状態で複写することができるの」「なっ!?!」

「勿論、この技術、ソウルキャストにも制限がないわけではないわよ？ 特殊過ぎる、使い手を選ぶ魔法は雪花でも複写できないし、何より負担が大きい」

まるで原理が分からない、どうすればフラッシュキャストを応用してそのようなことができるのか。疑問の絶えない達也ではあるが、その部分を雪夜が隠していることは明白、聞いたところではぐらかされることになるだろう。

「ふふっ驚いているわね。でもこれだけではないのよ?」

楽しそうに笑う雪夜だが他三人はとても楽しめるような心境では

なかった。

「もう一つの応用、その名もフルキャスト。幻想眼で見た人間の『動き』をそのまま複写することで自分のものにする技術よ」
「『動き』……ですか？」

雪夜の曖昧な表現では今一雪花の技術の詳細が分からない。それは達也以外も共通のようで、三人とも首を傾げていた。

「動きというのが雪花の認識、解釈なのだけど、実際には技術というベキかしらね。雪花は何十年も経験を積むことでやっと得られるような技術も、血の滲むような特訓の末に会得できる奥義も、一度見るだけで複写できる」

「そんな馬鹿な!?いくらなんでも荒唐無稽過ぎる!」

「可能なのよ。勿論、一度見るだけとは言ったけど、複写するには雪花に合わせた調整が必要。それに、人間には不可能な動きはできない。言うならば雪花はゲームのキャラクターみたいなものよ。複写したものの通りドにその体を動かす、幻想眼と、私の、深夜の、才能を受け継いだ雪花にマなら十分可能」

圧倒的。

もはや死角などない完成された魔法師。

四葉の狂気が生み出した最強。

それが雪花なのだ。

「と、言っても今の雪花ではフルキャストは十全には使えない。体に負担のかかりすぎる動きは再現できないし、身体能力が追い付かないわ」

雪夜の言葉は半場、達也達の耳を素通りする。

「ちなみに、私が雪花のふりをするために使ったのもこのフルキヤスト。雪花の動き、癖や言動を複製しているの」

そもそも、雪花の能力解説はこの説明のために始まったものだったのだが、達也達にとってはもうそんなことは気にしていられない。

「深夜と真夜、二人の才能を受け継いだ最強にして最高の魔法師を作る、深夜に実験の話を持ち込んだ科学者がそう言っていたわ」

最強にして最高。

正に雪花はそうだろう。

「雪花は最強にして最高の魔法師、それにこの場には戦略級魔法師が二人に、その二人に匹敵する力を持つ深雪さんがいる」

立ち上がった雪夜がやけに演技がかった身振りで語る。

「それに四葉の内情にも詳しい」

雪夜は知らせる。

「ねえ、私たちで四葉を引っくり返せると思わない？」

反逆の時が来たのだと。

自由を、自分を、全てを、取り返す時が来たのだと。

「真夜に特大のお仕置きをしてやりましょう」

歴史が動く、その瞬間はここから始まった。

お母様学校へ③

今はまだ力が足りないと思っていた。

四葉真夜の『夜』に対して達也の『分解』は相性の良い魔法だ。一対一ならば倒すことも可能だろう。

が、事態はそう簡単なものではない。武力だけでは解決できない。四葉を屈服させるためにはそれでは不十分。だから、今は従うしかない。

そう、思っていた。

しかし、現状四葉を屈服させることが可能なのではないのだろうか。

あまりに強大な力を前にして考えすらしなかったが、それだけの力が今はあるように思えた。

達也、深雪、リーナ。

それに雪花が加われれば武力としては申し分ない。四葉が相手だとしても、負けるわけがない磐石の布陣。

そこに、四葉の内情を知り尽くした雪夜が加われれば、四葉を屈服させることは現実的といえる。

「そう深く考えないで……というのは無理でしょうけど、あくまで選肢肢の一つとして考えて頂戴。雪花が当主におさまればそれで四葉に反旗を翻す意味はなくなるのだから」

昼休みも終わりが近いということで、解散した一行であったが、達也は一人残り思考を巡らせていた。

そこにふらつと舞い戻ってきた雪夜はまるで心を読んでいるかのように優しい口調で達也に言う。

「貴女の存在を知った上でも雪花を当主にするとお思いですか？」

「真夜なら操れない人形はいらない、と考えるでしょうけど……それは四葉家の当主としての真夜。安心なさい。真夜は意見を変えない

わ

「そうは思えませんが……」

「ふふっ、そうね、貴方はそう思うでしょう。でも、貴方が知っている真夜は四葉家の当主の真夜。真夜のことは私が一番良く理解しているのよ?」

ウィンクを一つして立ち去る雪夜の姿に、どうしてか妹である深雪の姿が重なった。

「一番良く理解している……か」

そうだ。

兄弟、姉妹とはもつとも良く理解し合い、お互いを尊重しあえる存在であるべきなのだ。

四葉の姉妹にも、それがあるといふのなら……いや、そうなのだろう。

きっと二人の愛は歪であつても歪んでいても、間違つてはいなかった。

深くお互いを愛し合える、『家族』であつたはずなのだ。

「雪花……俺はお前のことをどれくらい理解していたんだろうか……」

達也の呟きに答えられる者はいなかった。



昼休みが終わったあと、雪夜は教室に戻ることはせず、校内を探索していた。

雪花は授業をサボることが多々あり、午後から授業に出ていなかったところでそれを騒ぎ立てる人間もいない。

しかしそれは雪花であるからこそ、悪い意味で当たり前になってるのであって普通、生徒が理由もなしに午後から授業を休みましたなんてことになればそれなりに不審に思われるものだ。

「いいのかしら、貴女がサボりなんて」

「……一回くらい大丈夫……なはずです」

「雪花の影響かしら……だとしたらごめんなさい」

ましてや、それが生徒会長という生徒の模範となるべき者であり、授業時間をきっかり守る真面目過ぎるくらいに真面目な生徒であったのなら。

「本当に雪花くんではないんですね……」

「ええ、でも安心して。雪花が死んだわけではないし……そうね、私の見立てでは後3日後くらいには目覚めているんじゃないかしら」

あずさは驚いたでもなく、怒るでもなく、ただ雪花がいないという事実に気持ちを沈ませた。

もう随分と会っていないような気がした。
だからだろうか。

教室からちらりと見えた雪夜の姿を追って昼休みの終わるギリギリに教室を出て、こうして授業をサボってしまったのは。

あずさが学校の授業をサボったのは小学校も含めて初めてのことであった。小心者で臆病なあずさに授業をサボるという行為はハードルが高く、考えすらしたかことがなかった。

雪花のもう一つの人格。

雪花が今、自分の知っている雪花でないことは知っていたはずなのに。

なのに気持ちが沈む。

こんな気持ちに自分になるなんて思いもしなかった。

少し会えないだけでこんなにも不安になってしまふ人ができるなんて、その人のことになるとまるで自分じゃないみたいになつてしまふなんて。

その人が今はいない。

目の前にいるのに違うんだと、一目みて分かった。でも追つてきた。

もしかしたら、とそんな想いもあった。

雪花が元に戻っているんじゃないだろうかという希望的観測。

でも一番は、やっぱり理屈じゃないんだろう。

ただ会いたかった。

達也に話を聞かされて不安になつていたのでだろう。

雪花は危うい。

すごく絶妙なバランスの上で雪花という人間が成り立っているというのを、あずさは分かつていた。

そしてそれを分かつていながら、あずさはどうすることも出来なかった。

だから何も聞かない。

疑問に思うことは沢山ある。

トールラスシルバーや平河小春の事、突然学校に来なくなった事、謎の二人組に襲われた理由、リーナの事……他にも色々ある。

聞かない、聞けない。

それを聞いても、きつと中条あずさにはどうしようもないことで、何より、今のままの自分では押し潰されてしまふそう。

ああ、こんな自分が嫌になる。

ネガティブの無限ループ。

中条あずさが良く陥る現象だ。

「良く自分のことを分かっているみたいね」

雪夜はまるであずさの心を読んだかのように、そう告げた。

「それが、貴女の限界よ。貴女には見守ることしかできない」

見透かされている。

自分の全てを理解されている。

弱くて、卑怯な自分の全てを。

「雪花は普通には生きられない。だからそのパートナーには雪花の全てを一緒に背負える人間になつて欲しい」

雪夜はだからこそリーナを推す。

リーナには雪花への強い想いも、それに足る力もあつた。

彼女なら雪花の全てを背負える、雪花の何もかもを理解し、例えどんな困難があつたとしても、これから待ち受けているであろう最大の困難でさえも、共に乗り越え、歩んでいける。

そんな確信が雪夜にはあつた。

「だから貴女の想いを全て知つた上で、理解した上で、言わせてもらわね。」

——貴女では雪花のパートナーは任せられない」

そしてそれが、あずさにはないことも。

あずさでは潰れてしまう。

雪花の背負っているものは、これから待ち受けているであろう未来はそう軽いものではない。

「……私では駄目ですか……？私は弱いから……」

「貴女は弱くなんてない、貴女の強さをちゃんと持っている。でもそれは常人の域を出ない」

異端でなければ、異常でなければ、きつとこの先雪花には着いていけない。

厳しく突き放すのは、あずさが優秀であるからだ。優秀であるがゆえに、ある程度は雪花に着いていけてしまう。

ここで気がつかせなくてはならない。

そうしなくては、あずさも雪花も不幸になるだけだ。

「雪花が背負っているものは貴女を簡単に潰すわ」

もう、何も言うことはない。

雪夜は身を翻し、背中ですう語るとそのままあずさの視界から消えていった。

あずさは、ただそこに立ち尽くし授業の終わる鐘の音を呆然と聞いている他なかった。

雪花帰還①

リーナは日本国籍を得ると同時に雪花と婚約した。そしてリーナがUSNAから何をされるでもなく、こうしてのうのうと過ごせるのは四葉と九島の力があるからだ。この二家の名は海外でも広く知られており、いかにUSNAとはいえ多大なリスクを背負うことになる上、スターズの件で既に日本には大きな借りができてしまっているため、そうそう手が出せないのだ。

さて、つまりリーナが日本にいられるのは雪花と婚約したからということになるわけだが……。

「義妹、義妹ってタツヤ達が冗談で言ってるわけじゃ無かったの!?!」
「……その辺の事情は既に話されていると思っただけですが……」

放課後、達也ら一行は司波家のリビングに集まり、これからのことを考えていた。

そこで、リーナが照れたように「義妹、義妹言うの止めてよ、雪花は幼なじみっただけで付き合っているわけじゃ……」なんて言うものだから、問題が一つ発生した。

そう、何故かリーナは雪花と婚約したことを知らなかったようなのだ。

「……生リーナが可愛かったものだからつい愛でるのに夢中で忘れてたわ……」

やはり原因はこの色ボケ雪夜だったらしい。

呆れてものも言えないとはこのことだろう。達也はもはや苦言を呈することさえする気がなくなっていた。言うだけ無駄であると確信してしまったからだ。

「()()() 婚約?! 私と雪花が?! えっ?! 嬉しいけど! えっ?!」

「大混乱していますね」

百面相しながらバタバタと慌てているリーナ。
深雪が苦笑い気味に指摘して尚、何事か一人で眩きながら慌てている。

「リーナ、君はそれを知らなかったというなら自分がこうしてここにいられることを何も疑問に思わなかったのか？」

リーナは九島と四葉の力で無理矢理USNAから奪ったと言ってもいい。それほど強引に事は行われた。そうしなくてはスターズの総隊長であり、多少なりともUSNAの機密を知っているリーナが野放しになるわけがない。

達也がやっと落ち着いてきたリーナにそのことを質問すれば顔を赤くしたリーナが小さな声で。

「うう、雪花がなんとかしてくれたのかなって……」

これにはこの場の全員が呆れるを通り越して啞然としてしまった。自分の人生の一大事を全て『雪花がなんとかしてくれた』と信じ込みのうのうと生活していたというのだから当然だろう。

「どうやらUSNAという国は俺が思っているよりずっと魔法師不足のようだね」

「どういう意味よー！」

「そのままの意味だ」

リーナに元々軍人の適正はないと思っていた達也であったがここまで『残念』なものであるとは思ってもみなかった。いや、リーナが軍人であったころはここまで酷くはなかったのだから雪花のせいと言えないこともない。

「貴女はそのままでもいいのよ、そういうところが可愛いのだから」

「私はポンコツじゃなーい！」

「誰もポンコツとは言っていないんだが……」

達也の言葉にリーナは顔を真っ赤にする。

何せ今のリーナの発言は自分がポンコツである、と少なからず自覚しているということなのだから。

ポカポカと達也を割と痛い程度の力で叩くリーナと、顔をしかめるながらも宥めようとする達也、兄に乱暴を働くリーナを止めようとする深雪、それらの光景を楽しそうに眺める水波。

「そう、きっとリーナはそのままの方がいい……真実を知ったとき辛い思いをしなくて済むから」

その騒がしさの中、雪夜は誰に聞かせるでもなく、静かにそう呟いた。

それは、今ある日常を終わらせる引き金だったのかもしれない。

「いや、もう二度とリーナに辛い思いはさせない……ぼくが全てを懸けてでもね」

呟くように、雪花が言った一言は騒がしかった喧騒の中でも響くような、重さと決意に溢れていた。

その声によって、一瞬のうちに静まり返る部屋。

目の前に立つ《彼》が誰であるのか、皆、ただの一言で理解したからである。

「やあやあ、ただいま。雪花さんのご帰還だ」

この瞬間、物語は走り出す。

ある者は、覚悟を胸に抱いて再び立ち上がり。

「ただ貴方の側に……そのためなら私は……」

ある者は、力を求めて深く沈んでいく。

「そろそろ始めようじゃないか、僕の……彼女の夢のために……物語の破壊を」

そして、物語は残酷な真実を語るだろう。

雪花帰還②

「いや、もう二度とリーナに辛い思いはさせない……ぼくが全てを懸けてでもね」

ぼくはついに、表に出ることができた。

ここに至るまで、長く辛い物語があるのだけど……まず、一言言わせてもらいたい。

なんでぼくは女装しているの!?

明らかに高そうな黒いドレスを着ているんですけど!?!というか下着も女物だよね!?

これはもう色々終わってるね!ぼく、起きてそうそう心が折れそうだよ!

『何を騒いでいるのかしら、可愛い娘が可愛い服を着るのは当たり前でしょ』

『うるさいよー!』

男の子が女物の服や下着を着るのは当たり前じゃないんだよ!』

ぼくの頭に直接声が響く。

これはぼくに書き込まれた司波深夜の人格のコピーである雪夜だ。こいつのせいでぼくは散々な目にあつた。

どうやらぼくは精神に強いショックを受けると深い眠りにつくという中二設定があるらしい。

さらに。ぼくが眠っている間、雪夜は表に出ることが出来る。

『それで、出てきたということは、課題はクリアしたのかしら?』

そして、ぼくは目覚めた後もこの雪夜によって精神の世界に閉じ込

められていた。

雪夜は、ぼくには自分を見つめ直す時間が必要だと、確固たる自分というものを見つけることが必要だというのだ。

『ぼくは……』

ぼくは弱くて、たぶん、そう重いものは背負えない。

生まれも、力も、友達も、好きな人も、全部を飲み込んで前に進むなんてきつとできないだろう。

でも前に進めなくても良い。

今はただ、今あるものを守りたい。

自分の出自なんてもう終わったことをいつまでも考えるのは止めた。

力はあるんだ。

どんな形であつても誰にも負けないと自信を持てるくらいには。

だつたら出来るはずだ。

これから訪れるどんな困難だつて、きつと乗り越えられる。

だつて気がついたから。

ぼくは一人じゃなかつたつて。

何もないように感じた真っ白な世界には、ぼくを想ってくれる沢山の人がいて。

そんな人たちが待っていてくれるのなら、一緒にいてくれるなら、こんなぼくでもいつか……全てを飲み込んで、全部背負つて、前に進める時がくるんじゃないかって。

そう思えたなら、後は何も怖くなかつた。

閉じこもる必要のないくらい、ぼくの世界は優しいから。

『そう……もう大丈夫そうね』

ふざけてるやつだと思う。

司波深夜の人格をコピーしたとは思えないくらいおかしい発言はするし、端的に言つて変態だ。

でも、ぼくを心配して、ぼくのために色々やってくれているのは感謝してる。

きつと彼女もまたぼくのことを想ってくれる人の一人なんだ。

『なら、リーナに中条あずさとのこと話しましょうか？二人の女の子と婚約するなんて羨ましいわ』

どうやらぼくのことを想ってくれる人は沢山いてくれるけど、ぼくのことをいじめる人もそれと同じくらいいるらしい。

いや、ぼくが悪いんだけどね！



『じゃあセツカはずっと私のそばに居てくれる？』

頷いてあげることが出来なかった。

リーナが辛くて、どうしようもなくて、それでぼくを頼ってくれたのに、ぼくは……。

ただ頷くだけでリーナはきつと救われた。ただ一緒にいてくれる人間がいるだけでどれだけ救われるかを、ぼくは他でもないリーナから教えてもらったのに、ぼくは背負うことが出来なくて結局頷けなかったのかもしれない。

『大丈夫だよ、私がいる』

その言葉に安心できた。

リーナはぼくが辛いとき、いつもそばにいてくれた。何もなくなっても、リーナは、いてくれた。

『……じゃあリーナはずっとぼくのそばに居てくれる？』

『ずっとそばにいる。セツカがどうしても辛くなる前に、涙が溢れそうになる前に、必ずそばにいて、私がいるって教えてあげる。そしてこうして抱き締めてまた優しく明るい、私の大好きなセツカに戻ってもらう』

リーナはぼくを強く抱き締めて、そう言った。

ぼくが頷けなかったもの。

彼女は心からぼくを、何年もずっと慕っていてくれたのだ。弱くて、臆病、良いところなんてないぼくをずっと。

正直に言おう。

リーナたんマジ天使。

つまり惚れました……。。

でも待って欲しい。

ぼくには将来を約束した彼女が、あーたんがいるのだ。

そして、ぼくはあーたんも好きという。

……二人の女の子に恋をするってなしですか？

いや、ぼくは今の日本の一夫一妻はあまり良くないと思うんだよね、やつぱり、男の夢的なものもあるし、そうすれば結婚できない未婚の女性とか減って良いことがいっぱいあるんじゃないかなと思う次第なんですけど。

『素直に認めなさい、貴方は最低よ』

素敵な人と他人より多く出会っちゃっただけじゃん！どっちも本
当に好きなの！

『まあ、仕方がないといえば仕方がないのよね。雪花は実験によつて
作られた魔法師だから色々副作用が出ているのだし』

『副作用!?!初耳なんですが!?!』

『深夜の力と真夜の力を継がせようとした結果、ホルモンバランスと
か色々アレで、些か以上に女の子みたいな可愛い容姿になってくれ
たし』

『色々アレって何!?!ねえ、何なの!?!』

『大丈夫よ、性別は確かに男だし、今後性転換するようなことにはなら
ないから……たぶん』

『たぶん!?!詳しく!?!その辺詳しく!』

『うるさいわね……良いからさっさとリーナに言いなさいよ!』

『逆ギレ!?!』

後程、雪夜には詳しく聞くことにして、今は確かに優先すべきこと
がある。

ぼくがあんまり黙っているから、啞然としてしまっているし。

ぼくが雪花であるかどうか皆判断できないでいるんだろう。

「やあやあ、ただいま。雪花さんのご帰還だ」

魔法が飛んできた。

雪花帰還③

飛んできた魔法は精々相手を気絶させるくらいのそう威力のない無系統魔法だった。

とはいえ、痛いし起きてそうそう気絶なんてしたくないから、当然避ける。咄嗟のこととはいえ、幻想眼を持つぼくにはそう難しいことではなかった。

「ふむ、『アブソリュート・ソードワード言ノ葉ノ剣』を使わなかったところを見るに本当に雪花のようだな」

「バカじゃないの!? 確かめるためだけに魔法ぶつぱとか正気の沙汰じゃないよ!」

「お前なら避けられると信じていたのさ」

「目を逸らしながら言われてもね! 説得力皆無だよ!」

いきなり魔法をお見舞いしてきたのは、兄さんだった。

弟が可愛くないのか! と疑いたくなるような扱いである。可愛さだけならカンストしている(都合の良いときは認める)ぼくにこんなことして、それでも主人公か!

「セツカああああー!!」

そして、兄さんの魔法の後には、リーナの物理的な砲撃が待っていた。具体的にはものすごい勢いでぼくに突っ込んできたのである。

当然、貧弱を絵に描いたようなぼくはリーナにがちりホールドされつつ吹っ飛んだ。

「帰ってきたら変だし! 寝ちゃうし! 起きたらセツカじゃないし! もうどうしようかと……心配したんだから!」

「…………ごめん」

若干、というかかなり幼児退行している上、支離滅裂で何を言っているのか良く分からなかったけど、ぼくをすごく心配してくれていたのだけは分かる。

だからぼくはいつかのように、リーナの頭を優しく撫でた。今はもう、ぼくより背の高いリーナだけど、やっぱりリーナはリーナのままなのだ。

「……もう離れないから」

少しむすつとした顔で、そう小さく漏らしたリーナは確かに一生取れないのではないかと思うくらいすごい力でぼくをホールドしており……うん、正直、気絶しそうですね……。

「リーナ、雪花が青い顔してるわよ!」

「へ?……あ!セツカ!?セツカ大丈夫!」

「大丈夫だから揺らすの止めて!」

このポンコツぶりは相変わらずだけど、いつかこのポンコツのせいで殺されやしないかとちよつと不安になってきた。手が滑ったとか言つてヘビィ・メタル・バースト飛んできそうだし。

「雪花様大丈夫ですか?」

「うん、ありがとう水波ちゃん」

気絶寸前まで追い込まれたぼくに水波ちゃんが駆け寄ってきて、水をくれた。持つべきものは優しき義妹ですね!

「じゃあとりあえず私からも一発」

とか思ってたぼくの思考は、言葉になって表れる前に、鳩尾への重い一撃によってかき消された。

「私も心配していなかったこともないんですよ?」

それなんてツンデレ……鳩尾に一発食らわしてから恥じらわれても……皆、わざとやってるの? いじめなの!?

「まあ、当然の報いだな」

「雪夜から一番被害にあっていたのは水波ちゃんだものね」

くっ、雪花さんの駄目な方、雪夜のせいでぼくはこんなことになっているのか。

魔法が飛んできて、強烈なボディーホールドで気絶寸前まで追い込まれ、鳩尾に一撃。

本当にあの人何したの……。

「それで、雪花。もう大丈夫なのか?」

大丈夫なのか? というのは、ぼくが雪夜と入れ替わった原因を知っているからだろう。

母は、司波小百合はぼくの本当の母親ではなかった。

吹っ切れた、というわけじゃない。

ぼくが母さんの、司波小百合の息子ではないということは信じたくないし、認めたくない。

きつと今までだって目を反らしてきたことだ。

だって、ぼくと姉さんはあまりに似ている。

四葉深夜の血を色濃く引き継いでいる姉さんと、血が半分しか繋がっていないはずのぼくが。

この場合、兄さんではなく姉さんに似ているというのがぼくの悲しいところではあるのだけど……。

と、とにかくぼくは四葉の血が入っていない、なんてことはありえないのだと、どこかで悟っていたのだ。悟った上で、目を反らして、耳

を塞いで、現実から逃げ出していた。

ぼくはいつでもそうだ。

命の恩人で、家族で、友人で、妹で、何重にも大切なはずのリーナを嫌な記憶と一緒に消そうとする、弱くてずるい奴だ。

誰かに依存しないと強くいられない、一人じゃ何もできない。

逃げて、逃げて、逃げて、逃げて、逃げて、逃避し続けることですかぼくはぼくでいられなかった。

でもそれじゃダメなんだ。

いつか、前に進むために、今を信じる。

確かに、司波小百合はぼくの本当の母親ではなかったのかもしれない。

けど、ぼくは母親だと思ってる。

それが『真実』でなくても、ぼくがそう思うなら、ぼくにとってはそれが『事実』になる。

ぼくの母は司波小百合だ。

それは変わらないし、変えさせない。

「大丈夫だよ、大丈夫。だから伝えるよ、ぼくの考えを、想いを、母さんに」

「そうか……それが良いだろう」

兄さんは優しく微笑んでぼくの頭に手を置いた。

この人はこういうことをするからズルいのだ。視界の端で姉さんが顔を赤くして、褒めちぎっているのは別として。

『なんだかいい話っぽくしようとしているけど、貴方まだリーナに言っていないわよね？』

声だけしか聞こえないのに、ジトツとした視線さえ感じる。分かってる、分かってるんだよ！でもやっぱタイミングとかさ！あるじゃん！

『ヘータレ、ヘタレー』

『別に良いよヘタレで！ヘタレ雪花さんだよ！』

『わー……』

『ドン引きは止めてね!?!』

本気で雪夜から蔑むようなオーラを感じるし、こういうことは早く言っておかないと後々に影響を及ぼすし、何よりリーナに悪いし。

よし、決心した。

言うぞ、言つてやるぞ。

「あのさ、リーナ、ちょーつと話があるんだけど」

「……なに？」

………無理だよ、言えないよ、だってリーナが涙目でぼくを見上げてくるんだよ！

まるで子犬のように穢れのない純粋な好意の視線をぶつけてくるんだよ！

そんなリーナに、「実はもう一人婚約者がいてー、指輪貸してますテヘペロ」なんて言った暁には、ヘビィ・メタル・バーストコース確定だ。

慎重に、タイミングを選んで……いや、言つても良い雰囲気を持ち込むんだ！

言つてもリーナが許してくれる、そんな雰囲気！

「リーナとは、もう長い付き合いになる」

「そうね、セツカと出会ってから十年になるもの」

「その間に色々なことがあった」

「……色々あったわね……でも今はこうしてセツカと一緒にいられるから、それでいいの」

……はい、言えない！

そんなこと言われちゃったら無理だよ！

「じゃあ、雪花。リーナはその様子だし、しばらく一緒にいてやれ」

兄さんは空気を読める男だ。

ぼくが何かをリーナに話そうとしているのを察したのだろう。

姉さんと水波ちゃんを引き連れて部屋を出ていこうとする。

そして、姉さんと水波ちゃんが部屋を出たのを確認してから自分も部屋を出て、扉を閉めるその瞬間。

兄さんは、「そういうえば」とでもいうような、軽い口調で一言。

「リーナ、言い忘れていたんだが雪花は中条先輩とも婚約しているらしいぞ」

爆弾を落としてから扉を閉めた。

ぼくの中でも何かの扉が閉まった気がした。雪夜が視界共有を拒否したのだろう。

「セツカ、お話ししましょうか？」

語尾にハートが付くような満面の笑顔でそう言うリーナを前にして、ぼくは思った。

あ、これダメなヤツだ。

予期せぬ訪問者

「終わったか？」

兄さんが壊れた家具を直しながら部屋に入ってくると、ドン引きした様子で、姉さんと水波ちゃんが入ってきた。

そりゃ、この部屋、台風の後みたいになってるしね。引くよね。

「少しはスッキリしたかな」

呂剛虎にすら無傷で勝利したこのぼくがチビリそうになるくらい怖かった。

リーナのお話とはOHANASIだったわけで、ぼくの話聞きながら、「ふーん、それで？」なんて言って、近くの家具を破壊、終始ニコニコしながら迫ってくるリーナはヤバイ。

「セツカ、しっかり力入れてね」

なんてとびきりの笑顔で言った後、拳を鳩尾に叩き込まれて許されただけ。

なんでぼくの周りの女子は皆パーじゃなくて、グーなんだろう……。

「信じられないわ、あの指輪を貸しちゃうなんて」

リーナが全く口を聞いてくれず、怒りが収まらないのか、今は姉さんに愚痴をこぼしている。

姉さんのぼくを見る目がどんどん冷たくなっているんだけど……ぼく死なないよね？

「最低の雪花様、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないよ！今の一言でね！」

水波ちゃんが冷たいを通り越して蔑むような目で見ながら言うてくるから、自分のクズさというのを再確認させられた。

「あれはかなり怒ってますよ、嫌われちゃったんじゃないですか？」

「うう、あんまり不吉なことを言わないでよ……」

「捨てないでー、とすがっている雪花様の姿が簡単に想像できますね」

「酷い！水波ちゃん、ぼくをいじめて楽しいの!？」

「楽しいに決まってるじゃないですか」

なんだかしばらく見ないうちに水波ちゃんがドSになっちゃってしまっているんですけど……あんな恍惚の表情浮かべてぼくをいじめてくる水波ちゃんなんて見たこと……いや、やつぱり前からだったかも。ぼくわりといじめられていたかも。

「でも、まあ、もし、リーナさんにも、中条さんにも捨てられちゃったら、その時は……私が貰ってあげますよ」

水波ちゃんはそれだけ言ってリーナと姉さんの『ぼくデイス大会』に混ざっていった。

リーナにもあーたんにも捨てられるとか最悪過ぎて考えたくないよ！

水波ちゃんはもうちよつとぼくに優しくても良いと思うんだ。

女子三人の『ぼくデイス大会』と、兄さんが家具を魔法で直しているのを眺めながら、一人落ち込んでいると、インターホンが鳴ったのである『ピンポーン』という独特の音が響く。

一斉に、ぼくに向けられる視線。

はいはい、ぼくが出ますよ。

この空間において、完全に立場が一番低いのはぼくなので、仕方なく玄関に向かう。あそこにいるのも辛かったし、ちようど良かった。

「はいはい、出ますよー」

再び鳴った催促のインターホンを聞きながら、ぼくはゆっくりと玄関を開けた。

「お久しぶりです、雪花様」

そこには、沙世さんがいた。



「母さんがいなくなった!？」

アンジー・シリウス、アンジェリーナ・クドウ・シールズは雪花の弱点となる。

それは幼少から雪花を見てきた沙世にはすぐにでも分かることだ。それゆえに、雪花がアンジー・シリウスとアンジェリーナ・クドウ・シールズである、と確信した時点で、四葉に雪花出生の秘密を明かしたのである。

四葉と九島の手によってリーナをアンジー・シリウスからただのリーナにし、USNAから奪うことは不可能ではないだろう。世界に名を轟かせる、『九島烈』の九島と『触^アれ^ンて^タは^ッな^ラない^者たち^ル』の四葉にはそれだけの力があり、やると言えば必ずやる実行力もあった。

沙世が問題視したのは、リーナが雪花を縛ってしまう可能性だ。

四葉と九島、二家の力によってリーナを奪還した場合、雪花はリーナが存在する限り、その二家に弱味を握られ続けることになるからだ。

リーナの安全はその二家あつてのものであり、雪花は二家にとって

欲しい人材なのだから、当然の成り行きと言うものだろう。

その、問題を解決する手段が、雪花の出生を語ることだったのだ。雪花が四葉の血を、それも、現当主であり、子を作ることでできない四葉真夜の力を受け継ぎ、その双子の姉である司波深夜の実子だというのなら話は変わる。

まず四葉は雪花を手厚く保護するだろう。そして策略のための利用などせず、大事に次期当主として育てる。

四葉真夜は自身の息子(?)のように雪花を大切にし、他には向けることのない愛情を持って接するに違いない。四葉とは元々肉親への愛が強い一族であり、それを向ける相手のいなかった真夜ならばそうするだろう。

そして九島にも大きなメリットがある。

雪花が四葉の人間ならば、リーナと結婚させることで、四葉と強い繋がりを持つことができるのだ。

そうなれば、雪花が二家から利用されることは無くなる。

四葉真夜の寵愛を受ける雪花を利用しようとすれば、いかに九島といえ、ただではすまないことは一目瞭然。なにもしなければ四葉と良い関係が築けるというのにわざわざそんなことはしないだろう。

つまり、沙世の目的は、雪花の出生の秘密を四葉に明かすことで、四葉と九島、二家にとって雪花を傷つけることのできない重要人物として押し上げ、雪花を守ることだった。

リーナを救い、雪花を守る。

紗世の選択した最良の道。

しかしそこに、小百合の気持ちは入っていない。

あくまで沙世が守るのは雪花であり、そのための計算に小百合の気持ちという余分なものが入る余地がないのだ。

だから、雪花の出生の秘密を四葉に明かしてしまえば、四葉が雪花

を養子にするであろうことも、それによって小百合は雪花から引き離されてしまうであろうことも全部分かっていた。

故に、小百合が突如として消えたことも誤差の範囲だった。

『雪夜』の存在は想定外でしたが、雪花様とアンジェリーナ様の婚約、二家の反応、概ね私の計画通りです。いなくなった小百合様の居場所も把握しております」

「計画通りって……」

「私は雪花様のガーディアンとして現状できる最適な判断をしたまです」

沙世にとっては雪花が全てだった。だから今まで雪花の生きる道を矯正し続けてきたのだ。

雪花に後ろ楯を与えるために十師族であり、力の強すぎない、『五輪』に所縁のある者と結婚し、雪花と相性の良さそうな五輪濤を通して雪花と五輪の間に強い関係を持たせた。

そして様々な根回しを行い、養子になるという話にまで発展させたのである。

そして、状況が変われば、ルートの変更もする。

五輪家に養子に入るより、四葉に入った方が現状では良かった。

ただそれだけのこと。

「四葉家は才能ある者にとっては、それほど悪い家ではありませんよ。力もあり、情報を秘匿する能力もある。四葉の養子となり、アンジェリーナ様と結婚すれば、未来は約束されたものになるのですから」

雪花の特異な力は、魔法師というものを根本から覆しかねない程の力だ。

秘匿すべき魔法を、あっさりで見抜き、会得し、改良する。

その力を欲する者は山ほどおり、その利用方法もまた同様にあるのだ。

四葉や九島という大きな力を持つ家に守られていなくては、常にそういう危険と隣り合わせになってしまう。

沙世は逆に今の状況を良いものであるとさえ考えているのだ。

「沙世さんがぼくを守りたいって気持ちは嬉しいよ、沙世さんはいつだってぼくの側にいてくれたし、いつだってぼくの味方でいてくれた。沙世さんのことは信じてるし、だから、きっと沙世さんの言っていることは正しいんだと思う」

雪花が生まれてから今まで、沙世はずっと雪花を見守ってきた。雪花もそれは理解しているし感謝している。

沙世がいたから、雪花は今まで、何時だって一人ではなかった。沙世は雪花にとって一番長く共に時間を過ごしているもつとも信頼できる人物なのだ。

「それでも、四葉の養子にはならない」

その沙世の提案を雪花は一考もすることなく、拒否した。

「五輪の時とは話が違う。ぼくが四葉に入るということは、それは、母さんの存在を否定してしまうことなる……いや、母さんが否定されたと感じてしまう」

雪花が真実を知ってしまったことを小百合は知っている。だから小百合は逃げ出したのだから。

雪花に会わせる顔がないと、雪花にはもう会えないと、自身への戒めとして。

それだけ、責任を感じている小百合が、雪花が四葉の養子になったと知れば、あのときの自分の選択は間違いだっただと、思い詰めてしまう。

「ぼくの母さんは司波小百合ただ一人だけだ。そして母さんを悲しませるわけにはいかない」

涙を見たくないと思った。

母を悲しませないと決めた。

自分を、司波深夜の子だって知っていながら、本当の息子のように育ててくれた母に、負い目を感じさせるようなことはあってはならない。

だから――

「そのために、ぼくは沙世さんを裏切るよ。沙世さんがやってくれたことを全部無駄にして、ぼくの思うままに進む」

――だから、進もう。

自身のための沙世の全てを捨てて、約束された成功も、確約された未来も、関係ない。

思うままに、ただ進もう。

沙世は雪花の意思を確かに感じていた。

雪花のことは一番良く分かっているつもりだった。一緒にいなかったことなどそうありはしない。

少しだけ、そう、ほんの少しだけ、離れている間に、随分と変わった。

――強くなった。

「……子離れ出来ない親の気持ちというのはこういうものなのでしょうか……寂しいものですね、子が成長していくのは」

「ぼくの母さんは一人だけだよ」

「そうでしたね」

朗らかに微笑む沙世は少し寂しそうで、なのに嬉しそうで。

「なら、私は今まで通り見守りましょう。これも、母の役目でしょうけど、それくらいの役目は私が貰っても構わないですよね」

「うん、よろしく沙世さん」

雪花が見たことないくらい、綺麗だった。

悪魔との取引

——貴女では雪花のパートナーは任せられない。

そんな言葉に反論の一つも出来ないで、そうかもしれない、なんて思ってしまう自分に強さなんてあるはずがなかった。

雪花が何を抱えているのかは知らない。

でも、雪花が大きなものを背負っていて、それに雪花が人知れず苦しんで、心の奥底に隠しているのも知っていた。

分かっていたのに……見えてないふりをしたのだ。

どうしようもない自分、見守るだけしかできない、弱くてずるい自分。

ぐるぐる、ぐるぐる、と頭を巡るネガティブな思考。

きつとそれも自分の悪いところだ。

午後一発目の授業をサボってしまったことで、クラスメイトから随分と心配され、下校時も一緒に帰る？なんて友人から聞かれ、苦笑しながら断りを入れて、一人で歩く帰り道。

かつてないほど負のオーラを撒き散らしながら歩くあずさの前に、ふとその男は現れた。

「こんにちわ、お嬢さん」

白い白衣に黒い髪。流暢な日本語を話すが、その顔立ち、体格は日本人のそれではない。青い瞳は透き通るように透明で、浮かべた笑みは優しげ。

どこか不思議でチグハグな印象を受ける男だった。

「……貴方は……？」

「私はしがない科学者さ、でも魔法使いでもある」

あずさは小心者だ。それは警戒心が強いということであり、危険を察知する能力が高いということなのだが、その彼女が何故か彼には警戒することもなく、むしろ、旧知の中であるかのように親しみすら覚えていた。

「科学と魔法は表裏一体、だからこそ私は科学者であり、魔法使いでもある」

魔法使いではなく魔法師ではないのか、と疑問を抱きはしたが、彼は自分を魔法師ではなく、科学者であると名乗った。ならば魔法使いという言い回しは、何かの例えなのだろうと推測する。

そしてあずさのその推測は間違いではなく、実際、魔法使いという言葉が指しているのは魔法師のことではない。

「そして科学者であり、魔法使いでもある私はお嬢さんを導くためにこうして馳せ参じたというわけだ」

そう言つて恭しく英国式の礼をする男。

その姿は魔法使いというよりも奇術師のよう。

「貴女には才能がある」

唐突に男は話をはじめ。そしてあずさもそれを疑問に思うことなく、話に耳を傾けた。

「もつと自分に自信を持つべきだ。貴女は誰にも代えられない唯一無二の存在であるべきなのだ。路頭の石のような者たちとは違う、名を持った舞台の役者の一人なのだ」

自分に多大な期待を抱くことはしない。そうすれば落胆も小さく、

諦めもつくから。

自分程度の人間は沢山いるし、自分より上にはもつと凄い人たちが沢山いる。

だから、だから、だから、だから。

言い訳を、逃げ道を。積み上げて、重ねて、重ねて。そうやって生きてきた。

自分は弱い人間だ。

傷つくことはしたくなくて、小さく縮こまって、仕方がないと諦めて。

分かっているながらそれを改善する勇気もない。

「そもそも貴女は一校にトップで入学したはずではないですか。それはこの国の中でも随一の才能を持っているということに他ならない。そして生徒会長という任に就いた。何事でも長の立場に選ばれるものにはそれなり以上の人望が必要だ。さて、はたして貴女は何をもつて自分は弱いなどと思うのでしょうか？」

思い出されるのは論文コンペ、横浜での出来事。自分は生徒会長だというのに、何も出来ずにただ見守り、守られているだけしか出来なかった。そののなんて弱いことか。守るべき、守りたいものを一つとして自分の力では守れない。そののなんて辛いことか。

清水の舞台から飛び降りるかのような気持ちで受験した一校。そこにトップで入学しようとも、生徒会長に任命されようとも、結局自分は弱くてずるい中条あずさのまま。

泣きたくなるくらい辛いのに、苦しいのに、結局は、ああ、仕方ない、と思ってしまう自分が嫌。

けど、そんな自分を好きだと言ってくれる人がいて。

その人のことがどうしようもないくらい好きなのに、それさえも諦めようとしていることがもつと嫌で、そんな自分がもつと嫌い。

強く、強くなりたい。

もう嫌だった。

守られるだけなのも、諦めるのも。

「ええ、分かっていますとも。貴女が何を思い、何を欲しているのかは。ならば私はただ授けるだけ。貴女に授けましょう。最強の魔法を」

貴方の側にいたい。側にいると伝えたい。

ちっぽけな私でもそれができるといふのなら。

貴方と一緒に歩んでいけるといふのなら。

きつと私は――

翌日、中条あずさ失踪のニュースが学園を揺るがした。